

2022（令和4）年度 人間発達環境学研究科  
年 次 報 告 書

神戸大学大学院人間発達環境学研究科

## はじめに

本年次報告書は、人間発達環境学研究科における令和4(2022)年度の教育・研究・社会貢献等の活動の記録や取り組み内容が記載されたものであり、研究科の強み・特色を示した集積となっている。

令和4年度は、新型コロナウイルス感染が人々の生活に大きな影響を及ぼした後、大学として対面による授業が通常となり、研究活動の環境も新型コロナウイルス感染の拡大前に戻り、通常の大学生活を取り戻した年度であった。しかし、新型コロナウイルス感染がゼロになった訳ではなく、感染対策の継続、遠隔授業の併用、また、研究科内での会議も遠隔が中心であった。

このような状況でも、これまで本研究科が取り組んできた多様な活動を継続・発展させることもおろそかにはできず、研究科として解決しなければならない組織、研究、教育等に関する課題、すなわち、研究科の規模に応じた学際研究・文理融合研究のアウトプットの必要性、教員らが専攻をこえて協働できるための枠組みづくりの必要性、ならびに多種多様な社会的活動を展開・維持していくために不可欠な大型の外部資金獲得の必要性、及び優秀な学生の積極的獲得の必要性などの観点からの取り組み・検討を進めた。また学域制（教員組織と教育研究組織の分離）や教員人事のポイント制のもとで、教員の新規採用および昇任について人事計画を進め、教育研究組織の活性化による機能強化につとめた。

令和4年度から第4期中期目標・中期計画期間に向けて、神戸大学として各種評価指標の目標値を設定し、部局にも応分の目標設定を求められ、この評価の中で本研究科の強みを見つける作業も必要となった。また、令和4年度から神戸大学が採択された国立大学改革・研究基盤強化推進事業「異分野共創研究教育グローバル拠点」にも参画し、その中心的なデジタルバイオ&ライフサイエンスリサーチパークの一つの拠点である、健康長寿研究拠点のウェルビーイング先端研究センターを、保健学研究科とともに立ち上げ、神戸大学全体の教育研究に寄与してきている。

こうした中でも、本研究科がこれまで唱えてきた「人間の発達及びそれを支える環境を多面的に捉える」という教育研究のアイデンティティを守り、さらに発展させていく必要性を感じている。そのためには、着実に教育・研究・社会貢献に係る実績を重ね、他部局との協力のもと、学内外での研究科のプレゼンスをいっそう高めて行く施策がさらに重要になると考える。

(人間発達環境学研究科長 近藤徳彦)

**2022(令和4)年度**  
**人間発達環境学研究科 年次報告書 目次**

はじめに

目次

1. 令和4年度の取り組みの概要	1
1.1. 神戸大学の施策に関わる取り組み	1
1.1.1 神戸大学機能強化改革	1
1.2. 部局としての取り組み	2
1.2.1. 戦略「社会課題を解決する異分野共創研究の推進」	2
1.2.2. 異分野共創研究教育を推進のための組織	3
1.2.3. 第4期中期目標期間の大学評価と部局独自指標(KPI: Key Performance Indicator)	3
2. 学部・大学院運営	4
2.1. 学部・大学院運営組織	4
2.2. 管理運営	5
2.2.1. 学域人事委員会	5
2.2.2. 研究科運営委員会	7
2.2.3. 教員活動評価委員会	10
2.2.4. 中期計画推進委員会	10
2.2.5. 自己評価委員会	10
2.2.6. 安全衛生委員会	11
2.3. 予算	12
2.3.1. 予算に関する特記事項	12
2.3.2. 予算関係の審議等の状況	13
2.3.3. 外部資金獲得状況(教員及び学生)	13
2.4. 広報及び情報公開	14
2.4.1. パンフレット, ウェブサイト等	14
2.4.2. 人間発達環境学研究科 オープン・らぼ	14
2.4.3. ホームカミングデイ	15
2.5. 環境設備	15
2.5.1. 教育・学習環境の整備	15
2.5.2. 交流ルーム・アゴラ	16
2.6. 教員研修	17
2.6.1. FD	17
2.6.2. 初任者研修	17
3. 入試	18
3.1. 一般選抜入試	18
3.1.1. 入学試験委員会	18

3.1.2. 一般選抜入試に係る総括と課題	19
4. 国際交流活動	20
4.1. 学術交流協定	20
4.2. 留学生	20
4.3. ダブルディグリー	22
4.4. Innovative Asia	22
4.5. 学生・教員・職員の海外派遣	22
4.6. 海外研究者等の招聘・訪問	23
4.7. 「英語による授業の実践—ESD 研究」	23
5. 教育	24
5.1. 教育課程	24
5.1.1. 今年度の特徴	24
5.1.2. 研究科, 専攻共通科目	24
5.1.3. 教職教育	25
5.1.4. ESD サブコース	25
5.1.5. ゲストスピーカー及びティーチング・アシスタント	26
5.2. 各専攻講座の教育	26
5.2.1. 人間発達専攻	26
5.2.2. 人間環境学専攻	46
6. 進路	48
6.1. キャリア形成支援	48
6.1.1. キャリアサポートセンター	48
6.1.2. 学振特別研究員申請支援	50
6.2. 卒業・修了後の進路	51
7. 研究	51
7.1. 今年度の特長	51
7.1.1. 研究動向	51
7.1.2. 学生の受賞	52
7.2. 学術 Weeks	54
7.2.1 学術 Weeks の各事業・セミナー	54
7.3. 研究科支援プロジェクト研究	57
7.4. 高度教員養成プログラム	62
7.5. 附属中等教育学校を活用した高大接続共同研究	63
7.6. 研究推進	64
7.6.1. 研究推進委員会	64
7.6.2. 研究倫理審査委員会	64
7.6.3. 紀要編集委員会	65
7.7. 各専攻の研究	65

7.7.1. 人間発達専攻	65
7.7.2. 人間環境学専攻	127
8. 産官学共同・地域連携による教育・研究活動	147
8.1. 産官学共同プロジェクト	147
8.2. 地域連携プロジェクト	153
9. 社会的活動・震災復興支援	155
9.1. 災害地への支援活動	155
10. 附属施設	155
10.1. 発達支援インスティテュート	155
10.1.1. 発達支援インスティテュート運営委員会	155
10.1.2. 心理教育相談室	156
10.1.3. ヒューマン・コミュニティ創成研究センター	158
10.1.4. のびやかスペースあーち	168
10.1.5. サイエンスショップ	174
10.1.6. 教育連携推進室	178
10.1.7. アクティブエイジング研究センター	185
10.2. 実習観察園の運営利用状況	189

## 1. 令和4年度の取り組みの概要

### 1.1. 神戸大学の施策に関わる取り組み

#### 1.1.1 神戸大学機能強化改革

##### (1) 神戸大学ビジョンの実現に向けた戦略

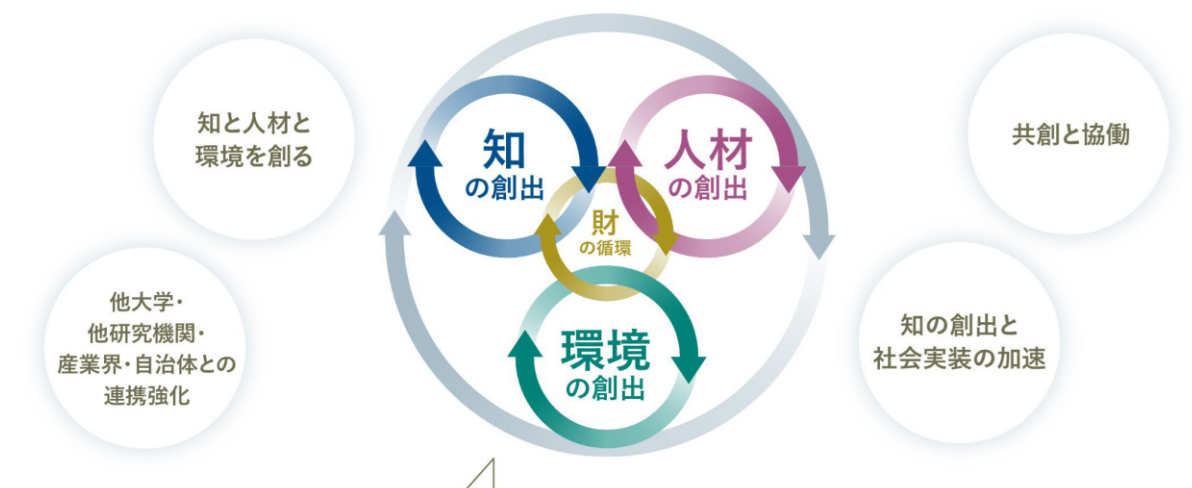
R4年度から第4期中期目標・中期計画が始まった(R9年度まで)。平成27年6月に文部科学省「国立大学経営力戦略」の3つの重点支援の枠組みの重点支援の内、神戸大学は③「海外大学と伍して、全学的に卓越した教育研究、社会実装を推進する取組を中核とする国立大学」を選択し、現在に至っている。

神戸大学は、「学理と実際の調和」を建学の理念とし、「真摯・自由・協同」の学風のもと、真理の探究と社会実装を旨として学問の継承と発展に寄与し、人々の智と徳を高め、もって社会の基盤を築き、産業・経済を活発にするとともに、様々な社会的課題解決に貢献してきた。この伝統を継承するとともに人文・人間科学系、社会科学系、自然科学系、生命医学系諸分野における強みを社会に活かし、「知と人を創る異分野共創研究教育グローバル拠点」として進化・発展し続けることを神戸大学長期ビジョンとしている(図参照, KU VISION 2030)。

## 「知と人を創る異分野共創研究教育グローバル拠点」を目指して



真理探究の基礎科学研究、地域社会と共創する応用科学研究の推進・連携により  
新たな知と人を創り、社会に貢献する異分野共創研究教育グローバル拠点をめざす



### 異分野共創研究教育 グローバル拠点へ

イノベーションエコシステムの確立

接続可能な自律的研究教育経営体

- 文理融合を越えた異分野共創による新領域研究教育事業の創出・推進
- デジタル化、ポストコロナを見据えた研究教育力における卓越性の創出と研究教育環境・体制の整備
- グローバルに活躍でき、社会の変化に対応できる卓越実践人材の育成
- 大学全体の発展に資する共通目標、卓越研究事業達成に向けた構成員の理解、入学への貢献意欲、協働意欲、コミュニケーション意識の醸成

(2) 神戸大学ビジョンを支える新たな教員組織・人事システム

平成 28 年 5 月 19 日開催の教育研究評議会において「神戸大学ビジョンを支える新たな教育組織・人事システム（案）」が承認された。この教員組織・人事システムは、教員の流動性の向上、組織間の教員配置の最適化、柔軟な改組の実現、教員数及び若手ポストの増加をねらいとし、教員の教育研究組織からの分離、ポイント制の導入及び学長裁量戦略枠の設定などを柱としたものである。

平成 28 年 10 月から教員組織と教育研究組織の分離が実施され、当研究科教員の全員が人間発達学域の所属となった。また、同時に教員人事委員会が設置され、教授人事の審査、及び採用・昇任人事に伴うポイントの管理が行われることになった。そして、平成 29 年 4 月にポイント制が正式導入され、現在に至っている。

(人間発達環境学研究科長 近藤徳彦)

1.2. 部局としての取り組み

1.2.1. 戦略「社会課題を解決する異分野共創研究の推進」

神戸大学ビジョン「知と人を創る異分野共創研究教育グローバル拠点」に向けた取り組みとして、国立大学改革・研究基盤強化推進事業が令和4年10月から採択され、これを中心に神戸大学ではビジョン実現が推進されている。中心的なデジタルバイオ&ライフサイエンスリサーチパークの一つの拠点である、健康長寿研究拠点のウェルビーイング先端研究センターを、保健学研究科とともに立ち上げ、神戸大学全体の教育研究に寄与してきている（図参照、KU VISION 2030）。

**経営成長戦略モデル**

**経営改革** **大学と社会との間で「知」「人材」「資金」が好循環する経営成長戦略モデルを確立し、「異分野共創研究教育グローバル拠点」として持続的な事業成長を実現する。**

**取組1** **社会との共創を実現し、持続的な事業成長を促進する経営体制の実現**

- ① 教育研究を促す可視化を目的とするためのロードマップ
- ② 産官学の連携強化を図る学域に属した共同・連携型オフィスの創設
- ③ 学域・産官学の連携による多様な人材による若手・次世代教育の推進とポストの確保
- ④ 経営体制の改革を促す可視化の推進と人材の育成

**取組2** **異分野共創研究による未来社会に向けた新たな課題を解決する傑出した知の創出**

- ① デジタルバイオ&ライフサイエンスリサーチパークの核となる異分野共創研究教育グローバル拠点の創設
- ② 人間・環境・社会・経済・文化・健康・福祉・生命・医学の連携による研究開発の推進
- ③ 次世代のラックシッパとなる研究拠点の育成と研究業績の創出

**取組3** **異分野共創教育による新たな価値を創造する次世代の有能人材の創出**

- ① 傑出した知の創出を促す可視化の推進と人材の育成
- ② 異分野共創教育を推進する人間・環境・社会・経済・文化・健康・福祉・生命・医学の連携
- ③ アンタレプナティブ・シッパを促す可視化の推進と人材の育成

**取組4** **社会との対話・共創に基づく社会実装・価値の創出**

- ① 産官学・自治体と連携したベンチャー（スタートアップ）創出、イノベーションプラットフォームの創設
- ② 知識・ノウハウのネットワークを構築する知のプラットフォーム
- ③ ステークホルダーとの対話と共創の推進



また、この推進のため、先端的異分野共創研究プロジェクト、『異分野共創による資源循環イノベーション』と『神戸市デジタルツインによる防災減災・社会経済シミュレーション分析：世界初「地震シナリオの網羅的シミュレーション」による異分野共創先端研究』が推進されており、いずれのプロジェクトに本研究科に教員が参加し、研究科のプレゼンスを高めるとともに、神戸大学ビジョン「知と人を創る異分野共創研究教育グローバル拠点」の推進に大きく貢献している。

さらに、異分野共創研究教育グローバル拠点のもとに推進された高等学術研究員テニュアトラック教員制に2名の教員が採択され、神戸大学の改革・研究基盤強化推進を支援している。

### 1.2.2. 異分野共創研究教育を推進のための組織

人間発達環境学研究科は、心身発達専攻、教育・学習専攻、人間行動専攻、人間表現専攻、及び人間環境学専攻の5専攻から成る研究科として平成19年4月に設置された。その後、平成25年4月に、人間それ自体の発達を対象に教育研究を担ってきた心身発達専攻、教育・学習専攻、人間行動専攻、人間表現専攻の4専攻をまとめ人間発達専攻とし、人間発達専攻と人間環境学専攻の2専攻体制で教育・研究を行っている。

平成26年4月に文部科学省が公表した本研究科のミッションの再定義には、「今後、人間の発達及びそれを支える環境を多面的に捉えるため、異なる専門分野間の連携等に取り組みについて重点的に取り組むなど、総合的な研究を組織的に推進するとともに、我が国の社会課題解決・文化の発展に貢献することを目指す。」と記されている。

これまで、本研究科はこのミッションの実現に向け、人間の発達及びそれを支える環境に関わる新たな研究課題の設定、ならびに分野横断型研究の支援等の取り組みを行っている。

平成29年および2020年度には外部評価を受けた。その結果、学際系の研究科として、教育・研究・社会的活動の成果を着実に蓄積していること、またそれらの活動は発展・深化を続けており、地域の課題に対して、その住民と連携する形で、研究と教育と社会活動を一体のものとして展開していること、及び高齢化、貧困、環境、共生社会などといったグローバルな課題に関する国際共同研究の推進やそれらの研究に学生を参画させる多様な取り組みが実施されていることなどが高く評価された。その一方で、本研究科が取り組んでいる多様な活動を将来にわたって継続・発展させていくために解決しなければならない組織、研究、教育等に関する課題も指摘された。すなわち、研究科の規模に応じた学際研究・文理融合研究のアウトプットの必要性、より多くの教員が専攻を越えて協働できるための枠組みづくりの必要性、多種多様な社会的活動を展開・維持していくために不可欠な大型の外部資金の獲得の必要性などである。

人間発達環境学研究科では、国際人間科学部の最初の卒業生が入学してくるのを機に、人間発達専攻内の4つの系講座（こころ系、表現系、からだ系、教育系）および人間環境学専攻の2つの講座（環境基礎講座、環境形成講座）をそれぞれに1講座にまとめ、各専攻を1講座で編成し、それまでの講座を教育研究分野に移行する組織再編が令和3年度に行われた。この組織再編により研究・教育活動における連携をさらに進める体制ができ、それを具体化するための施策が、今後さらに必要となる。

### 1.2.3. 第4期中期目標期間の大学評価と部局独自指標（KPI: Key Performance Indicator）

第4期中期目標期間では大学指標に基づき、各部局にも指標が設定され（部局独自指標、意欲度指



標含む), これをもとに部局運営を実施することとなった。令和4年度の各指標の評価は概ね達成できていた(特に科研費の採択率・一人あたりの金額)が, 国際共同研究に係る国際共著論文数の目標達成が十分でなかった。これは神戸大学全体でも同様傾向で, 新型コロナウイルス感染の拡大が関係していた可能性がある。一方で, どの教育研究分野での国際共同研究の推進が進んでいるか等, 次年度との比較も含め, 研究科での分析も必要がある。

(人間発達環境学研究科長 近藤徳彦)

## 2. 学部・大学院運営

### 2.1. 学部・大学院運営組織

神戸大学大学院人間発達環境学研究科及び発達科学部は, 以下の組織で運営している。

<教授会等>

人間発達環境学域会議, 神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授会, 神戸大学発達科学部教授会

以下に委員会等の組織を列記する。その際, 大学院に係る組織については, その前に付される研究科名「神戸大学大学院人間発達環境学研究科」を省略し, 学部に係る組織については, 「発達科学部」とした。

<管理運営>

学域人事委員会, 教員活動評価委員会, 研究科運営委員会, 予算委員会, 学舎検討委員会, 中期計画推進委員会, 自己評価委員会, 交流ルーム運営委員会, 安全衛生委員会, ハラスメント防止委員会, 専攻運営会議

<研究>

研究推進委員会, 研究紀要編集委員会, 研究倫理審査委員会

<教務・学生>

教務委員会, 学生委員会

<入試>

入学試験委員会, 学生委員会(編入学入学者の募集及び選考に関わる事務), オープンらぼワーキンググループ

<国際交流>

国際交流委員会, 学術 WEEKS ワーキンググループ

<広報>

情報メディア委員会, 研究科案内作成ワーキンググループ

<附属施設等>

図書委員会, 実習観察園運営委員会, キャリアサポートセンター運営委員会, 発達支援インスティテュート運営委員会, 心理教育相談室運営委員会, ヒューマン・コミュニティ創成研究センター運営委員会, のびやかスペースあーち運営委員会, サイエンスショップ運営委員会, 教育連携推進室運営委員会, アクティブエイジング研究センター運営委員会

(人間発達環境学研究科長 近藤徳彦)

## 2.2. 管理運営

### 2.2.1. 学域人事委員会

学域人事委員会は、教員の採用及び昇任等、ポイントの管理・運用及び教育研究組織への配置に関して、学域会議に発議する原案を審議する委員会である。学域人事委員会の構成は、学域長、副学域長、人間発達環境学研究科専攻長、国際人間科学部学科長（グローバル文化学科長を除く）に、その他委員会が必要と認めた者として発達科学部学科長を加えた体制であり、令和4年度の委員は近藤徳彦学域長（委員長）、吉田圭吾副学域長、佐藤春実副学域長、木下孝司人間発達専攻長・国際人間科学部子ども教育学科長、近江戸伸子人間環境学専攻長、岸本吉弘国際人間科学部発達コミュニティ学科長、太田和宏国際人間科学部環境共生学科長、並びに長ヶ原誠発達科学部人間行動学科長の8名である。また、春名正基事務部長、藤村さとみ総務係長も出席した。また、国際人間科学部に大きく関わる案件の審議にあたっては、梅宮弘光国際人間科学部副学部長の陪席を求めた。

学域人事委員会の開催日及び検討事項については、以下に記す。

	検討事項
第1回（4月4日）	1. 委員会が必要と認める委員について 2. 令和4年度人間発達環境学域人事方針について 3. ポイントについて
第2回（5月6日）	1. 助教採用人事に係る人事選考委員会の設置について 2. 外部資金により雇用する特命助教の任期更新について 3. 第4期中期目標期間の人事について
第3回（6月3日）	1. 第4期中期目標期間の人事について
第4回（7月1日）	1. 教員の退職について 2. 第4期中期目標期間の人事について
臨時：7月29日	1. 准教授採用人事に係る専門分野について
臨時：8月4日	1. 教授昇任候補者について 2. 准教授採用人事に係る専門分野について
第5回（9月2日）	1. 助教採用人事について 2. 公募を行わない採用人事について 3. 教授昇任候補者について 4. 准教授採用人事に係る専門分野について 5. 高等学術研究院卓越准教授・教授の推薦について 6. ウェルビーイング先端研究センター設置に伴うセンター構成員構想について 7. 高大接続卓越グローバル人材育成センターからの教員の配置依頼について
第6回（10月14日）	1. 教員の早期退職について 2. 公募を行わない採用人事について 3. 新規採用教員の配置教育研究分野等とメンター教員について

	<ul style="list-style-type: none"> <li>4. 准教授等採用人事の公募について</li> <li>5. 教授昇任候補者について</li> <li>6. 高等学術研究院卓越准教授・教授の推薦について</li> <li>7. 高大接続卓越グローバル人材育成センターへの教員の配置期間の変更について</li> </ul>
第7回（11月4日）	<ul style="list-style-type: none"> <li>1. 新規採用助教のメンター教員について</li> <li>2. 教授昇任候補者について</li> <li>3. 高等学術研究院テニュアトラック教員制度（仮称）について</li> </ul>
臨時：11月18日	<ul style="list-style-type: none"> <li>1. 高等学術研究院テニュアトラック教員（B制度）の推薦について</li> </ul>
第8回（12月2日）	<ul style="list-style-type: none"> <li>1. 外部資金による特命助教の採用人事について</li> <li>2. 教授昇任人事に係る学域教員人事方針申請書について</li> <li>3. 高等学術研究院テニュアトラック教員（A制度）採用人事に係る専門分野、公募及び人事選考委員会の設置について</li> <li>4. 分子フォトセンターからの教員の配置依頼について</li> <li>5. （その他） <ul style="list-style-type: none"> <li>(1) 高等学術研究院テニュアトラック教員（B制度）の推薦について</li> <li>(2) 高等学術研究院卓越教授の推薦について</li> <li>(3) 高等学術研究院テニュアトラック教員（A制度）テニュア審査基準の検討について</li> </ul> </li> </ul>
臨時：12月16日	<ul style="list-style-type: none"> <li>1. GSP オフィス教員の採用について</li> <li>2. 高等学術研究院テニュアトラック教員（B制度）の推薦について</li> <li>3. （その他） <ul style="list-style-type: none"> <li>(1) 准教授採用人事に係る専門分野（教育相談を中心とした臨床心理学的研究）について</li> </ul> </li> </ul>
第9回（1月6日）	<ul style="list-style-type: none"> <li>1. 専門分野「教育相談を中心とした臨床心理学的研究」に係る採用人事の職名について</li> <li>2. 教授昇任人事について</li> <li>3. 高等学術研究院卓越教授・テニュアトラック教員支援制度（A・B）について</li> <li>4. 助教に係る今後のテニュア審査等の手続きについて</li> </ul>
臨時：1月13日	<ul style="list-style-type: none"> <li>1. 教授昇任人事について</li> </ul>
第10回（2月3日）	<ul style="list-style-type: none"> <li>1. 今後の教授人事について</li> <li>2. 教授昇任人事に係る人事選考委員会の設置について</li> <li>3. 高等学術研究院卓越教授制度に係る教授昇任人事の学域教員人事方針申請書について</li> <li>4. 教授等採用人事の公募について</li> <li>5. 高等学術研究院テニュアトラック教員（A制度）の採用人事に</li> </ul>

	<p>ついて</p> <p>6. 外部資金により雇用する特命教員の任期更新について</p>
臨時：2月10日	<p>1. 高等学術研究院テニユアトラック教員（A制度）に係る助教採用人事について</p> <p>2. ウェルビーイング先端研究センターへの配置について</p> <p>3. 教授昇任人事に係る人事選考委員会の設置について</p> <p>4. 人事委員会規則の一部改正について</p>
第11回（3月3日）	<p>1. 高等学術研究院卓越教員制度を利用した教授昇任人事に係る人事選考委員会の設置について</p> <p>2. 准教授等採用人事に係る人事選考委員会の設置について</p> <p>3. 教授昇任人事に係る学域教員人事方針申請書について</p> <p>4. 高等学術研究院テニユアトラック教員（A制度）の配置教育研究分野等，メンター教及び任期の定めのない助教とするための審査基準について</p> <p>5. 教員の退職について</p> <p>6. 神戸大学人間発達環境学域人事委員会規則の一部改正について</p> <p>7. テニユア審査の実施について</p> <p>8. (その他)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・教授昇任人事の基準について</li> <li>・教授昇任に係る選考過程でのセミナー実施について</li> </ul>

(人事委員会委員長 近藤徳彦)

### 2.2.2. 研究科運営委員会

研究科運営委員会は、研究科長，副研究科長，専攻長（2名，ただし1名は学科長を兼ねる），発達科学部学科長（3名）の8名体制で，研究科等の管理を円滑に行うために組織及び運営に関し包括的な事項を扱ってきた。なお，国際人間科学部に大きく関わる案件の審議にあたっては，梅宮弘光国際人間科学部副学部長の陪席を求めた。検討事項は，以下のとおりである。

	検討事項
第1回（4月4日）	<p>1. 委員会が必要と認める委員</p> <p>2. 事務の本委員会への参加</p> <p>3. 新型コロナウイルス対策</p> <p>4. 国際人間科学部関係</p> <p>5. 研究科運営課議題</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・令和4年度評価指標の目標値</li> <li>・研究科組織等</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>6. 予備審査委員会委員候補者</li> <li>7. 人文・人間科学系関係</li> <li>8. (その他) 奨学寄附金</li> </ul>
第2回 (5月6日)	<ul style="list-style-type: none"> <li>1. 新型コロナウイルス対策</li> <li>2. 助教の委員会負担等</li> <li>3. 教員の海外渡航</li> <li>4. 退職教員の研究室</li> <li>5. 学会等での研究科施設利用</li> <li>6. 予備審査委員会委員候補者</li> <li>7. 国際人間科学部関係</li> <li>8. (その他) <ul style="list-style-type: none"> <li>・奨学寄附金</li> <li>・神戸大学の第4期中期目標</li> </ul> </li> </ul>
第3回 (6月3日)	<ul style="list-style-type: none"> <li>1. 新型コロナウイルス対策</li> <li>2. 全学センター (仮称: ウェルビーイング先端研究センター)</li> <li>3. 現況分析 (教育・研究)</li> <li>4. 国際人間科学部関係</li> </ul>
第4回 (7月1日)	<ul style="list-style-type: none"> <li>1. 全学センター</li> <li>2. 博士学位論文審査委員候補者</li> <li>3. 国際人間科学部関係</li> <li>4. (その他) <ul style="list-style-type: none"> <li>・令和5年度サバティカル</li> <li>・将来検討委員会</li> </ul> </li> </ul>
第5回 (9月2日)	<ul style="list-style-type: none"> <li>1. 新型コロナウイルス関連</li> <li>2. 全学センター・ウェルビーイング推進本部</li> <li>3. 国立大学経営改革推進事業</li> <li>4. 部屋の管理等</li> <li>5. 国際人間科学部関係</li> </ul>
第6回 (10月14日)	<ul style="list-style-type: none"> <li>1. 部局長会議関係</li> <li>2. 予算再編成</li> <li>3. 国立大学経営改革推進事業</li> <li>4. 発達支援インスティテュート</li> <li>5. 令和5年度事業計画 (予算)</li> <li>6. 教育未来創造会議他</li> <li>7. 国際人間科学部関係</li> <li>8. (その他) <ul style="list-style-type: none"> <li>・神戸大学120年史部局史委員会の設置</li> <li>・研究推進委員会のあり方</li> </ul> </li> </ul>

第7回 (11月4日)	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 評価 (意欲度評価含む総合評価指標の構成)</li> <li>2. R5 事業計画</li> </ol>
第8回 (12月2日)	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. R5 事業計画</li> <li>2. 現況分析に関する報告書</li> <li>3. 国際人間科学部関係</li> </ol>
第9回 (1月6日)	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 新年交歓会</li> <li>2. 経営改革予算</li> <li>3. ウェルビーイング先端研究センターキックオフシンポジウム</li> <li>4. 発達支援インスティテュート (大学附属共同施設等)</li> <li>5. 国際共同研究強化事業C型 (1/18 締切)</li> <li>6. 補正予算・国際共同研究 (先端国際共同研究推進, 国際共同研究加速基金: 国際先導研究)</li> <li>7. 研究科ヒアリング</li> <li>8. 国際人間科学部関係</li> <li>9. 来年度各種委員会委員 (委員長)</li> <li>10. 令和4年度3月修了予定者に係る博士学位論文審査委員候補者</li> <li>11. (その他) 資料の電子化について</li> </ol>
第10回 (2月3日)	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 神戸大学大学院人間発達環境学研究科運営委員会規則等一部改正等</li> <li>2. 研究科ヒアリング</li> <li>3. 成長分野における即戦力人材輩出に向けたリカレント教育推進事業</li> <li>4. Erasmus Mundus Joint Master 《SpaceMed》</li> <li>5. 社会教育主事</li> <li>6. 将来検討委員会</li> <li>7. 国際人間科学部関係</li> </ol>
第11回 (3月3日)	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 将来検討委員会</li> <li>2. 神戸大学大学院人間発達環境学研究科における客員協力研究協力研究員の受入れ等に関する申し合わせ</li> <li>3. 国際人間科学部関係</li> <li>4. (その他) <ul style="list-style-type: none"> <li>・神戸大学 WPI 構想</li> <li>・各種委員会委員長</li> <li>・行動系の教育研究分野代表</li> <li>・ホームカミングデイ・鶴甲会 (教員OB会) 合同開催</li> <li>・2021年度日本政府 (文部科学省) 奨学金留学生 (教員研修留学生)</li> </ul> </li> </ol>

(研究科運営委員会委員長 近藤徳彦)

### 2.2.3. 教員活動評価委員会

神戸大学教員活動評価が実施されて9年目となる。昨年度と同様、教員活動評価委員会内規第3条に基づき、研究科長、副研究科長、専攻長に、その他研究科長が必要と認めた者として発達科学部学科長及び国際人間科学部学科長（グローバル文化学科長を除く）を加えた8名体制で臨んだ。

また、昨年度合意した評価の方法や基準等を基本的に踏襲しつつ、その都度問題がないか慎重に判断しながら、手続を進めた。「教員活動評価結果通知書」配布後「意見の申出」はなかった。

教員活動評価委員会は、6月3日、7月1日、8月4日、2月10日、3月3日に開催した。

(教員活動評価委員会委員長 近藤徳彦)

### 2.2.4. 中期計画推進委員会

令和4年度は、研究科長（委員長・近藤徳彦）、副研究科長（吉田圭吾、佐藤春実）、研究推進委員会委員長（近藤徳彦）、教務委員会委員長（高見泰興）、学生委員会委員長（山下晃一）、国際交流委員会委員長（野中哲士）、入学試験委員会委員長（吉田圭吾）、キャリアサポートセンター長（澤宗則）、情報メディア委員会委員長（宮田任寿）、自己評価委員会委員長（江原靖人）、事務部長（春名正基）の構成員に加え、総務係長（藤村さとみ）が出席し、月1回の定例会議を開催した（計11回）。

「中期目標の遂行、見直しに関する事項」を所掌する本委員会では、毎回、研究科長から部局年次計画に関わる全体的な状況が説明された。その後、各委員会等からそれぞれの活動内容が報告され、年次計画の進捗状況を確認し合うとともに、各委員会における計画実施の促進、ならびに委員会相互の情報の共有と連携可能性について検討した。

また、「中期目標・中期計画管理表」における令和4年度実績について各委員会に対し回答を求め、それらを踏まえたうえで本研究科の年次計画管理表の再確認を行った。

(人間発達環境学研究科長 近藤徳彦)

### 2.2.5. 自己評価委員会

本年度は、副研究科長（吉田圭吾、佐藤春実）、委員長（江原靖人）、副委員長（山口悦司）、委員（相澤直樹、大田美佐子、木村哲也、田畑智博）、事務課長の9名の構成員ならびに総務係長（藤村さとみ）が出席した。4回の委員会の開催、1回のメール会議の実施によって、以下の事項について取り組んだ。

#### (1) ファカルティ・ディベロップメント

##### ・授業のピアレビュー

大学院の授業を対象にピアレビューを実施している。各専攻から選定された授業の参観および授業担当者と参観者との意見交換が行われ、2科目の授業を対象に2名の教員が参加した。次年度の授業改善に向けて強化できる点がピアレビューレポートとして報告された。

##### ・ファカルティ・ディベロップメント講演会

大学教員としての能力開発を目的として、4回のファカルティ・ディベロップメントを実施した。参加者の延べ人数は、322名（教員297・職員等25）であった。今年度のテーマは、科研費の獲得に向けたもの、高大連携に関するもの、輸出管理強化に関するものであった。

#### (2) Voice Box（「学生の声」投稿箱）への対応

本年度投稿はなかった。

(3) 各種アンケートの実施と検討

学部、研究科前期課程について、学修の記録、入学・進学時アンケート、授業振返りアンケート、卒業・修了時アンケートを実施し、結果の分析を行った。また来年度に向け、研究科独自の質問項目を設定するかどうかについて検討を行った。

(4) 令和4年度学生・教職員による教育懇談会

研究科から2名の学生が出席し、教職員との教育懇談会が実施された。懇談会での意見は実施報告にまとめられ、教育環境の改善において利用される予定である。

(5) 教育の内部質保証に関する自己点検・評価

令和3年度「教育の内部質保証に関する自己点検・評価」に関する一次点検・評価を行い、報告書を作成した。

(6) 令和4年度、「年次報告書」、「現況分析に関する報告書」の担当

令和4年度の本学部・研究科における教育・研究活動を集約した「年次報告書」の執筆依頼をするとともに、「現況分析に関する報告書」の一部を取り纏めた。

(自己評価委員会委員長 江原靖人)

## 2.2.6. 安全衛生委員会

1) 令和4年度委員

委員長(古谷真樹)、委員(安達友紀、田畑暁生、原田和弘、谷 篤史、原 将也)、春名正基(事務部長)、藤村さとみ(総務係長)、浅野志織、山中康弘(会計係長)、篠原千亜紀(人間科学図書館情報サービス係長)

2) 委員会の開催

3回開催した(5月10日(対面)、9月28日(オンライン)、3月15日(オンライン))。

3) 委員会の業務

- ・点検事項報告とその対策の検討
- ・その他改善を要する点の検討
- ・全学安全衛生委員会の報告
- ・その他

4) 定期点検

委員による学舎内共用部点検を月に一回実施し、各委員が担当場所の点検報告。

5) 本年度の実施事項

- ・衛生管理者による巡視の実施とその対応について
  - ・C棟の衛生管理者巡視結果について全学安全衛生委員会で報告した。
  - ・安全衛生コーディネータによる指導を受け、指摘事項に関わる対応を行った。



- ・衛生管理者巡視について、改善確認のために再巡視を行うことが委員会で決定され、巡視結果報告書の形式が改訂された。
- ・C棟の再巡視を行った結果、改善点を教授会で全体共有し、要改善点は個別に再依頼した。
- ・定期点検について
  - ・巡視（放置物の撤去）について協力依頼を行い、改善が見られなかった場合は物品の撤去を行った。
- ・廃試薬処理および化学物質の管理等について
  - ・廃試薬処理にかかる費用を委員会負担ではなく研究室負担にすることが委員会で決定された。
  - ・2023年4月1日から、がん原生物質を取り扱った際の記録と保管が義務化されることについて周知し、記録と保管を依頼した。
  - ・化学物質の管理等の相談は安全衛生委員会を相談窓口とすることが委員会で承認された。

## 6) 課題

- ・共有スペースにおける放置物の撤去依頼を継続する。
- ・什器等についての転倒、落下防止措置についての注意喚起を継続する。
- ・化学物質は清掃用も含めて管理を徹底するよう注意喚起をする必要がある。
- ・化学物質の管理等に関する相談窓口として周知をしていく必要がある。

（安全衛生委員会委員長 古谷真樹）

## 2.3. 予算

### 2.3.1. 予算に関する特記事項

#### (1) 令和3年度（2021）決算について

令和3年10月教授会で承認いただいた研究推進支援事業、教育支援推進事業、ポストコロナ教育研究支援事業への追加預け入れは財務部に一部認められなかった。認められなかった預け入れ金は教員控室のメールボックスの更新、B棟教室のマイク設備更新、A棟1階スロープの設置、A棟北側のり面転落防止柵の設置、A棟2階西側手すり落下防止ネットの設置、A棟駐車区画のライン引き直し、守衛室・環境整備員室のトイレ改修工事等といった共通備品の購入や建物修繕費に充てた。

#### (2) 令和4年度（2022）当初予算配分再編成（5月）について

学生当経費について5月1日現在の学部生（発達科学部）及び大学院生の員数確定及び博士実験系の申請に基づき再編成を行った。

#### (3) 令和4年度（2022）当初予算配分再編成（10月）について

学生当経費の研究生の人数が確定したことによる再編成を行った。10月時点の余剰金は年度当初に減額調整したESDサブコース、附属施設経費、委員会経費への追加配分に充てた。また、研究経費の重点配分として300万円を充てた。さらに、学生・教職員への福利厚生サービスの拡充のため学内資金の預り・貸付制度を利用して食堂リノベーション事業に1,000万円の預入を行った。

(5) 令和 5 年度 (2023) 当初予算配分について

収入予算総額は対前年度比で実質 30 万 4,147 円の減となった。  
支出予算では電気料金単価とガス料金単価の高騰から管理運営経費が対前年度比で約 800 万円の増額となった。収入予算減と支出予算増を受け、研究費を減額調整し、一人当たり 20 万円とした。  
(予算委員会委員長 源利文)

### 2.3.2. 予算関係の審議等の状況

(1) 令和 3 年度 (2021) 決算について

令和 4 年 5 月 16 日の予算委員会で審議し、令和 4 年 5 月 20 日の教授会において審議・承認された。

(2) 令和 4 年度 (2022) 当初予算配分再編成 (5 月) について

令和 4 年 5 月 16 日の予算委員会で審議し、令和 4 年 5 月 20 日の教授会において審議・承認された。

(3) 令和 4 年度 (2022) 当初予算配分再編成 (10 月) について

令和 4 年 10 月 11 日の予算委員会で審議し、令和 4 年 10 月 21 日の教授会において審議・承認された。

(5) 令和 5 年度 (2023) 当初予算配分について

令和 5 年 3 月 14 日の予算委員会で審議し、令和 5 年 3 月 17 日の教授会において審議・承認された。  
(予算委員会委員長 源利文)

### 2.3.3. 外部資金獲得状況(教員及び学生)

外部資金の獲得状況については、その詳細を資料編 (特に「11-3-1~5」参照) に掲載しているため、ここでは特徴的な点を指摘するにとどめる。

令和 4 年度科学研究費補助金の獲得は、70 件 (新規:13 件)、総額 148,800 千円であった。内訳は、基盤研究(A):2 件 (新規:1 件)、基盤研究(B):20 件 (新規:4 件)、基盤研究(C):21 件 (新規:2 件)、挑戦的研究(萌芽):8 件 (新規:3 件)、若手研究:12 件 (新規2 件)、研究活動スタート支援:2 件 (新規:1 件)、国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B)):3 件、学術変革領域研究(A)公募研究:2 件となっている。新規 1 件の基盤研究(A)をはじめ基盤研究(B)(C)の採択数の堅調な増加が特徴的である。

今後、研究推進委員会等において、科研費制度改革の留意点を再考しながら、次年度以降の科学研究費補助金の獲得に向けての検討が必要と思われる。

日本学術振興会特別研究員について、令和 4 年度は DC1 5 名 (新規:1 名)、DC2 7 名 (新規:4 名) および RPD 継続 1 名が採用された。DC1 および DC2 で例年に較べて多数が採択された。10 年以上にわたって毎年開催している学生委員会主催の申請に係る説明会に加えて、学術研究推進機構学術研究推進室 (UR A 室) の支援を得て、計画調書 (申請書) の書き方セミナーや推敲のためのワークショップの開催により、申請数の増加につながった。

受託研究について、令和 4 年度は 14 件、総額 8,049 万円 (令和 3 年度 15 件、総額 7,872 万円)、共同研究については、11 件、総額 852 万円 (令和 3 年度 11 件、総額 1,103 万円) となった。

(人間発達環境学研究科長 近藤徳彦)

## 2.4. 広報及び情報公開

### 2.4.1. パンフレット、ウェブサイト等

#### (1) 研究科案内（パンフレット）

2024年4月入学者向け研究科案内（研究科案内2024）を作成した（発行は2023年4月1日予定）。研究科案内2021は24ページで構成され、研究科の教育、研究、国際学術交流、社会貢献、各専攻に関する特色について掲載した。

#### (2) 研究科ウェブサイト

研究科ウェブサイト（<http://www.h.kobe-u.ac.jp>）は、2021年度に最新のCMS（コンテンツ管理システム）用に作成したデザインテンプレートを導入し、全面改装を行っている。研究科案内の情報に基づいた最新情報や入試情報を掲載した。また、研究科における様々なニュースや在学生向けの教務情報や学生生活に関わる情報を掲載した。

（情報メディア委員会委員長 宮田任寿）

### 2.4.2. 人間発達環境学研究科 オープン・らぼ

平成28年度に始まった人間発達環境学研究科主催の「オープン・らぼ」は、「オープンらぼウィークス」という研究室訪問期間を設け、参加希望者が予め個別に教員に連絡して面談の予約をとり、「オープンらぼウィークス」の期間中の任意の日時に面談を行うというものである。

令和4年度に関しては、新型コロナウイルス感染拡大の防止のため、オンライン面談の方式をとった。申込み受付期間を5月23日から6月10日、また、面談期間を6月13日から7月8日までとした。その結果、人間発達専攻での面談者は128名（昨年度は77名）、人間環境学専攻での面談者は9名（昨年度は7名）、計137名（昨年度84名）であった。

人間環境学専攻の面談者が少ないため、検討したところ、受験生の他研究科の受験が8月に多いため、6月では遅いのではないかという意見が出され、令和4年度は、秋にもオープンらぼウィークスを行い、来年度の受験生の掘り起こしをすることにした。

令和4年度の秋に、オープンらぼウィークス秋シーズンをを行い、申込み受付期間を10月24日から11月11日、また、面談期間を11月14日から12月9日までとした。その結果、人間発達専攻での面談者は17名、人間環境学専攻での面談者は3名、計20名であった。

今年の秋シーズンは、初年度でもあり、広報も不十分であった。令和5年度の春シーズンのオープン・らぼで、秋シーズンの宣伝も行い、SNSでも春シーズン・秋シーズンともに宣伝することにより、面談者の増加を図ることが必要である。

「オープン・らぼ」開催の目的は、人間発達環境学研究科の理念や特徴、養成しようとする人材像等を広く発信するとともに、ひいては大学院の受験生を増加させる点にある。人間発達専攻では、面談者が多い。面談者が増えることは、本専攻の発展を反映・促進するとみられる。一方、人間環境学専攻では、面談者数は、一桁にとどまったままであった。この専攻の存在と特徴をより広く発信していく必要が指摘される。

（人間発達環境学研究科 オープン・らぼWG主査 吉田圭吾）

### 2.4.3. ホームカミングデイ

(1) 2022年度第16回(国際人間科学部:旧発達科学部)ホームカミングデイの開催

ホームカミングデイは、一昨年中止、昨年はオンデマンド形式で実施されたが、本年度のホームカミングデイ(学部企画)は対面及びネット中継併用で行われた。

(2) 学部企画

今年度の参加者は、名誉教授4名、現役教員2名、卒業生33名であった。

1) 学内探検ツアー

高田実行委員長の案内で玄関での記念撮影に始まり、C棟(音楽棟)、F棟、プール、体育館、A棟(エレベーターで最上階へ)を回り学内探検ツアーを行った。C棟や体育館では教員免許取得のために苦労した日々を思い出すことが出来たとの声があり、参加者同士の思い出話で盛り上がった。また、A棟最上階へはほとんどの卒業生が在学中に来られたことは無く、ここから見る神戸の風景が、多くの参加者の気持ちを癒やした。

2) 学部長、紫陽会会長の挨拶

学部長挨拶では、近藤学部長より紫陽会からの学部支援金に対するお礼に始まり、国際人間科学部の現状、コロナ禍での授業の工夫等の説明があった。青木紫陽会会長からは参加者への御礼と、紫陽会の活動の現状と今後の方針について説明があった。

3) 紫陽会賞授賞式

今年は、教育学部最後の年代である「ウォーリー木下さん」が受賞され、表彰式が行われた。木下さんは2021年に行われた2020年東京パラリンピックの開会式のディレクターを務められた。

4) 卒業生企画

今年の卒業生企画は、紫陽会賞受賞者の「ウォーリー木下さん」の受賞記念講演会として行われた。学生時代に劇団を立ち上げられ活動されたこと。震災で生き埋めになり近所の皆さんに助け出され九死に一生を得たこと。パラリンピック開会式の参加者は公募で集められたことなど氏の半生を赤裸々に語って頂いた。また、参加者からも多くの質問があり一つひとつに丁寧に答えて頂いた。

5) 今後の課題と反省

参加者の多くが教育学部卒業生にもかかわらず、案内状には(国際人間科学部:旧発達科学部)と教育学部の記載が無く、参加者や卒業生から不満の声があった。現役学生、紫陽会を物心共に支えてくださる多くの卒業生に配慮を欠いたことは反省しなければならない。来年度以降はこのようなことが無いように修正をお願いした。

また、来年度は神戸大学発達科学部鶴甲会との共催案が出ており、多くの旧教員の参加が見込めるので受け入れ側も体制を整えて卒業生・現役学生の参加者を増やしていけるようにしたい。

(第16回発達科学部ホームカミングデイ実行委員長 高田義弘)

## 2.5. 環境設備

### 2.5.1. 教育・学習環境の整備

(1) 各種施設・設備

学生の教育環境を充実させるため、B棟教室の窓に断熱・遮熱ガラスフィルム施工を行った。

(事務課長 春名正基)

## (2) キャンパス内ネットワーク環境整備

本研究科で利用できる無線 LAN は、2021 年度に、神戸大学情報基盤センターが管理する全学用無線 LAN 用のアクセスポイントを合計 13 箇所（A 棟に 1 台、B 棟に 5 台、C 棟に 1 台、F 棟に 5 台、G 棟に 1 台）を増設しており、本年度は増設を行っていない。

本研究科では、学生向けメーリングリストの運用を行っている。メーリングリストは学生が所属する公式組織（コースなど）単位で構成され、教務、学生生活、キャリアサポートに関する情報などが配信された。また、部局内の 3 箇所に設置されている電子掲示板の運用も行っている。

（情報メディア委員会委員長 宮田任寿）

## (3) 図書館運営・整備

新型コロナウイルス感染拡大に伴い、昨年度までに引き続き、本年度においても、全学の附属図書館運営委員会はオンライン会議、人間科学図書館図書委員会はオンライン会議とメール回議であった。

人間科学図書館の予算収入は、昨年度から 118,000 円減額の、7,340,000 円であった。学生用図書の選定結果については、継続図書、検定教科書の減額分は学生希望図書を増額し、より学生の希望に沿った資料収集を行った（前年 58 冊→78 冊）。全体の選定数については、検定教科書の収集対象が中学校のため件数が少なかったことから、減少となった（前年 1,116 冊→957 冊）。貸出統計による評価（選定区分ごと）については、本年度は対面授業の機会が増え、入館者数はコロナ前の 4 割まで戻ってきているが、貸出率については例年と同水準に戻っている。また、前年に続き回転率は大幅に上昇している（回転率：コロナ禍以前の 3 年間平均 140%→221%）。貸出更新が回数制限なく可能になったことから、長期利用が増えていると考えられる。貸出統計による評価（分類ごと）については、分野ごとの増減はあるが、全体の貸出率・回転率はともに直近 5 年間で最も高くなっている。貸出統計による評価（利用者区分ごと）については、本年度は学部学生の貸出率が例年の水準に戻り、回転率は上昇している。その他の区分（大学院生、教員、職員、その他）は例年と同水準となった。蔵書構成率と購入構成率による評価については、各分野とも蔵書構成率と購入構成率は近似しており、例年通り万遍なく購入されている。

今後の課題は、次の 3 点にまとめられる。(1) 電子書籍の整備：今後も禁帯出資料の利用頻度や、貸出回転率を参考に、予算の可能な限り電子書籍の整備を行う必要がある、(2) 教員推薦図書の募集方法：授業との連携や、資料提供までの期間短縮のため、今後も学科ごとの配分、募集方法、購入方法ともに検討していく必要がある、(3) 図書館利用の提案：今後は電子図書を含めて、利用者への提案機会をさらに増やしていく必要がある。

（図書委員会委員長 山口悦司）

### 2.5.2. 交流ルーム・アゴラ

今年も引き続き新型コロナウイルスの感染の影響があったものの、感染対策を万全にして、平日 12 時～16 時まで運営し、食事と飲み物を提供した。10 月と 2 月から、ふたつの展覧会を開催し、どちらも好評を得た。詳細は下に記す。

体制

今年度は、2名のスタッフ（非常勤職員）および、知的障害のあるスタッフ3名で運営を行い、常時2名体制を敷くことができた。

#### 活動状況

- ・今年引き続きコロナの影響があり、授業やオープンキャンパスで利用することはなかったが、学内の専門家の助言を受けて新型コロナウイルス対策のマニュアルを策定し、メニューも限定的にしたうえで、飲料と食事を提供した。
- ・8月19日のオープンキャンパスには、スタッフ5名と学生アルバイトとボランティア3名が対応し、カレー等のテイクアウトを提供した。
- ・スタッフと実習生が、教員ボックスへの郵便物の配達を行った。

#### 展示

- ・2022年10月26日から2023年1月31日までの期間で、博物館学芸員資格の学内実習として連携し、神戸大学附属特別支援学校の生徒たちの美術作品を「ぬくもり、こだわり、とりどり。- 練り込み粘土の器展 -」として展示することができた。
- ・2023年2月7日からは、博物館学芸員資格の学内実習として連携し、パラアーティストとして受賞作品も多く、広く活躍する木下晃希さんの作品を「アトリエ KOKI 展 - JUNGLE -」として展示することができた。

#### その他

- ・新型肺炎の感染対策として、マニュアルを策定し、消毒液の設置、定期的な換気などを行った。  
(交流ルーム運営委員会委員 大田美佐子)

## 2.6. 教員研修

### 2.6.1. FD

研究科FD記録、及び神戸大学HP 大学教育推進機構「FD活動」FDカレンダーより抜粋したFDについて、以下に記す。

- (1) 4月15日 JST さきがけ、創発的研究支援事業の制度・申請にむけた説明
- (2) 5月20日 「みなし輸出」管理強化への本学対応について
- (3) 7月15日 基盤研究Bへの挑戦に向けた準備と制度の変更点について
- (4) 9月9日 高校生等を対象とした科学技術人材育成プログラム ROOT

(人間発達環境学研究科長 近藤徳彦)

### 2.6.2. 初任者研修

情報メディア委員会では、毎年、着任した教員に対して、情報セキュリティに関する研修会を開催している。今年度、着任した教員は1名のみで、2022年12月に研修会を開催した。

(情報メディア委員会委員長 宮田任寿)

### 3. 入試

#### 3.1. 一般選抜入試

##### 3.1.1. 入学試験委員会

本研究科が関係する入学試験全体を所管する入学試験委員会は、研究科長，副研究科長，専攻長，学生委員会委員長の計 6 名で構成し，令和 4 年度委員長を吉田圭吾副研究科長が務めた。なお，学部の入試試験は国際人間科学部入学試験委員会の所掌下にある。

今年度の審議概要（日程と議題）は以下のとおり。

・第 1 回（4 月 14 日）

- (1) 令和 5 年度大学院募集要項について
- (2) 令和 5 年度入学者に係る入学試験日程について
- (3) 令和 4 年度入学者状況について

・第 2 回（5 月 13 日）（持ち回り審議）

- (1) 令和 5 年度博士課程前期課程人間環境学専攻推薦入学試験実施方法について

・第 3 回（7 月 13 日）

- (1) 令和 5 年度博士課程前期課程推薦入学試験合格者の判定について
- (2) 前期課程入試における受験上の特別配慮について

・第 4 回（8 月 31 日）

- (1) 令和 5 年度博士課程後期課程（第 I 期）入学試験合格者の判定について

・第 5 回（9 月 27 日）

- (1) 令和 5 年度博士課程前期課程入学試験合格者の判定について
- (2) 令和 5 年度博士課程前期課程入試（2 次募集）募集要項について

・第 6 回（10 月 5 日）（持ち回り審議）

- (1) 人間発達専攻 1 年履修コース入学資格（出願資格）審査について

・第 7 回（10 月 26 日）（持ち回り審議）

- (1) 令和 6 年度大学院入試の入試情報の開示基準について

・第 8 回（1 月 16 日）

- (1) 令和 5 年度博士課程前期課程入学試験（第 2 次募集）合格者の判定について
- (2) 令和 5 年度博士課程前期課程 1 年履修コース入学試験合格者の判定について
- (3) 令和 6 年度博士課程前期課程人間環境学専攻推薦入学試験募集要項について

・第 9 回 (3 月 2 日)

(1) 令和 5 年度博士課程後期課程人間発達専攻, 人間環境学専攻 (第 II 期)

入学試験・進学者選考試験合格者の判定について

(入学試験委員会委員長 吉田圭吾)

### 3.1.2. 一般選抜入試に係る総括と課題

今年度の人間発達環境学研究科の一般選抜入試に関する業務は, 関係各位の尽力により大過なく遂行された。

平成 28 年度から導入された博士課程前期課程の英語外部試験は本年度も継続され, 合否判定に有効に活用された。人間発達環境学研究科博士課程前期課程の学生定員に関しては, 平成 28 年度より人間発達専攻では 52 名から 51 名に, 人間環境学専攻では 40 名から 36 名に削減され, 研究科全体の定員は, 92 名から 5 名減の 87 名となった。人間環境学専攻では, 今年度より推薦入学試験が導入された (募集人員 18 名)。

博士課程前期課程の令和 5 年度入学試験結果は, 人間発達専攻では, 募集人員 51 名に対し, 志願者数 91 名 (志願倍率 1.78 倍), 合格者数 58 名であった。人間環境学専攻では, まず推薦入学試験については, 募集人員 18 名に対し, 志願者数 17 名 (志願倍率 0.94 倍), 合格者数 16 名, それ以外の入学試験については, 募集人員 18 名, 志願者数 14 名 (志願倍率 0.78 倍), 合格者数 9 名であった。人間環境学専攻では, 合格者数が定員に達しなかったため, 募集人員を 10 名程度とする第二次募集を実施した。その結果, 志願者数 4 名, 合格者数 4 名であった。同専攻では, 第二次募集を実施しても, 合格者の総計が 34 名で, 入学定員に達しなかった。外数としている人間発達専攻 (一年履修コース) の入学定員 4 名に対しては, 志願者数 8 名, 合格者数 4 名であった。これらの入試の結果, 研究科全体では, 定員 91 名に対し, 志願者数 134 名 (志願倍率 1.47 倍), 合格者数 91 人となった。博士課程後期課程については, 人間発達専攻では, 入学定員 11 名に対し, 志願者数 17 名 (志願倍率 1.55 倍), 合格者数 14 名, 人間環境学専攻では, 定員 6 名に対し, 志願者数 7 名 (志願倍率 1.17 倍), 合格者数 7 名であった (第 I 期と第 II 期の合計)。研究科全体に関しては, 定員 17 名に対し, 志願者数 24 名 (志願倍率 1.41 倍), 合格者数 21 名となっている。

人間環境学専攻では, 博士前期課程に関し, 今年度は第三次募集を実施しなかったが定員は満たしておらず, 受験者の確保は, いっそう重要な課題となっている。受験者を増やすために, (1) 同専攻については, 2020 年度から英語での受験を可能とし, さらに, (2) 両専攻とも, 2021 年度入試から社会人特別枠における英語の配点割合を下げ, 専門科目を重視した採点を行うことで, 社会人受験生の増加を図った。これに加え, (3) 人間環境学専攻に関し, 昨年度から推薦入試を導入した。さらに, (4) 研究科の広報活動を充実し, 受験生に研究科をアピールするために, 令和 4 年 11 月から, SNS の公式アカウント (Twitter, Instagram, YouTube) を開設した。Twitter は, 研究科の教員や院生の研究成果である投稿論文や受賞のニュース, YouTube では研究科の様々な特徴 (発達支援インスティテュート, サイエンスカフェ, カフェアゴラ, アクティブエイジングセンター, 心理教育相談室等) の広報, Instagram は受験生に向けて院生が研究や大学院生活の公開をすることにした。これらの一連の制度改革がどの程度の効果をあげるのかをみていく必要がある。大学院受験生の確保のあり方を引き続き検討していきたい。



入学試験に関する詳細なデータは『資料編』に掲載する。

(入学試験委員会委員長 吉田圭吾)

#### 4. 国際交流活動

これまで新型コロナウイルス感染症の影響で国際交流事業計画は大きな影響を受けていたが、今年度は大学間協定に基づく大学院生の留学派遣申請が認められるとともに、年度の途中で諸外国の外務省の感染症危険情報レベルが多くの国においてレベル1まで下がったことから、本格的な国際交流再開の兆しが見られ、今後の国際交流活動の活性化に向けた動きがあった。

##### 4.1. 学術交流協定

###### (1) 新規

新たに以下の大学との交流協定を締結した。

- ・UC Berkeley Extension

(国際文化学研究科が締結していた協定を更新する際、新たに人間発達環境学研究科も協定に加わった)

###### (2) 更新

以下の大学との学術交流協定及び学生交換実施細則を更新した。

全学協定(タイプ1)及び全学学生交換実施細則

- ・カレル大学
- ・ロンドン大学東洋アフリカ研究院
- ・ウーロンゴン大学

(国際交流委員会委員長 野中哲士)

##### 4.2. 留学生

(1) 本年度、本研究科で学んだ留学生は88名、概要(性別・国籍別・学年別・専攻・国費/私費別)は次表の通りである。

		前期	後期	計
性別	女性	35	37	72
	男性	7	9	16
	計	42	46	88

		前期	後期	計
国籍	中国	38	41	79
	韓国	3	3	6
	コロンビア	1	1	2

	キューバ	0	1	1
	計	42	46	88

		前期	後期	計
学年	D3	7	6	13
	D2	3	3	6
	D1	1	1	2
	M2	12	12	24
	M1	9	9	18
	大学院特別聴講学生	0	0	0
	教育研修生(大学院特別研究生)	0	0	0
	大学院研究生	10	15	25
	計	42	46	88

		前期	後期	計
専攻	人間発達	23	22	45
	人間環境学	19	24	43
	計	42	46	88

		前期	後期	計
国費/私費	国費	1	3	4
	私費	41	43	84
	計	42	46	88

## (2) 留学生見学旅行

新型コロナウイルス感染のため、実施を見送った。

## (3) チューター制度

留学生の渡日直後の生活条件の整備、諸手続き遂行、また論文作成において補助を要するものに対して、チューターを配して日本社会、学生生活への円滑な適応、および論文のレベルアップを図った。

#### (4) 派遣留学生報告書の閲覧

教務学生係において、過去の交換留学生の報告書をファイルにまとめ、学生を対象に閲覧を継続している。

#### (5) メーリングリストの利用

留学生のメーリングリストを作成し、就活セミナーやイベントなどについて一斉メールで案内を送付した。

#### (6) 来年度に向けて

Erasmus+に参加できるのは非常に有益なことであるので引き続き押し進めたい。学生の派遣、受け入れが再開しつつある現状をふまえて、国際交流のさらなる活性化を目指したい。

(国際交流委員会委員長 野中哲士)

### 4.3. ダブルディグリー

新型コロナウイルス感染症の影響のため、ダブルディグリー・プログラムの新規開拓は事実上困難であったが、今後の活性化に向け、努力を継続する予定である。

(国際交流委員会委員長 野中哲士)

### 4.4. Innovative Asia

新規受入について2019年度以降は申請していない。

(国際交流委員会委員長 野中哲士)

### 4.5. 学生・教員・職員の海外派遣

#### (1) 国際交流運営資金

・学生の国際学会発表への援助事業助成

2022年8月：人間発達専攻 1名 チェコ共和国 ICOM(International Council of Museums) PRAGUE  
2022 CECA(ICOM International Committee for Education and Cultural Action)

2022年9月：人間環境学専攻 1名 オンライン(参加登録費助成) 6th Asia-Pacific Conference  
on Luminescence and Electron Spin Resonance Dating (APLED2022)

#### (2) 教員・職員派遣(研究科等の経費)

新型コロナウイルス感染症の影響により、研究科等の経費による教員・職員の海外派遣はなかった。

#### (3) 紫陽会グローバル人材育成資金

期日	担当教員氏名	授業科目等	渡航先・学生等
2022年9月1日～ 9月26日	原将也	特別研究 I	インドネシア・学生1名

(国際交流委員会委員長 野中哲士)

#### 4.6. 海外研究者等の招聘・訪問

期日	氏名	国名	所属・職名	受入者
2022年度				
2021/11/16～ 2022/10/27	SABANCI Taner	トルコ 共和国	チャンクル カラテキン大学 文学部社会学科・研究助手	片桐 恵子
2022/5/1～ 2022/6/30	西田 幸代	日本	University of New England(Australia), Lecturer	北野 幸子
2022/5/20～ 2022/7/18	AHMAD MUNIR BIN CHE MUHAMED	マレー シア	Department of Community Health, Advanced Medical and Dental Institute, ・ Science University of Malaysia・Associated Professor	近藤 徳彦
2022/9/20～ 2022/12/18	Karsten Kenklies	ドイツ	University of Strathclyde, Senior Lecturer for Education Studies (Systematic Pedagogy) Course Leader MSc Education Studies School of Education	川地 亜弥子
2023/1/25～ 2023/3/28	Potlapalli Bhanu Prakash	インド	Leibniz Institute of Plant Genetics and Crop Plant Research , Research associate	近江戸 伸子

(国際交流委員会委員長 野中哲士)

#### 4.7. 「英語による授業の実践-ESD 研究」

グローバル化に対応して英語で行われる授業を増やしていくことが期待されてきた。多様な国籍の学生が、ESD（持続可能な開発のための教育）をテーマに互いの専門性・当事者性をクロスさせることをねらいとして、2008年から大学院にESDサブコースが開設され、その授業科目のうち、「ESD研究1・2（ESD study1・2）」は、完全に英語によるコミュニケーションだけで実施・運営されている。

本研究科の教員6名（太田和宏、津田英二、清野美恵子、稲原美苗、喜屋武享、松岡広路）がチームを組んで運営・コーディネートされ、毎回、履修生が英語でショートスピーチを行いながら、英語でグループディスカッションを行う。一切日本語は使われない。2022年度の履修生は12名で、人間

発達専攻 9 名，人間環境学専攻 3 名，うち中国人留学生 3 名であった。

主なテーマは「How to think of the relationships with SDGs」で，参加者各自の問題意識・研究テーマ・方法論と持続可能な開発に関連する問題との関係が議論された。参加者からは「自分の専門の意義を英語で話す機会を得て有意義であった」「国際性を意識することができた」「持続可能な開発と自分の専門を接続させることができた」などの感想を得た。

夜間ということもあって履修院生数がやや少なかったが，持続可能な開発に関連する研究をしている院生の数は，この程度ではないはずである。次年度は，研究科内外により本授業の存在をアピールし，履修院生の拡大とともに，ESD および英語による授業の大切さを広めていく予定である。

(人間発達専攻 松岡広路)

## 5. 教育

### 5.1. 教育課程

#### 5.1.1. 今年度の特徴

令和 4 年度に新たに開始した取り組みや，本年度特記すべき事項などは以下のとおりである。

##### (1) コロナ禍における授業形態の見直し

文科省の方針を受けて，これまで遠隔を基本としてきた授業形態を，対面を基本とするものに変更した。遠隔授業によってより高い教育効果が期待される科目については，個別に検討し承認するものとした。

##### (2) 学位審査における手続きの効率化

政府による押印見直しの方針を受けて，学位審査結果の書式を再検討し，調整を行った。

##### (3) 成績評価基準の確認

秀・優の割合など，成績評価基準についての確認を行った。

(教務委員会委員長 高見泰興)

#### 5.1.2. 研究科，専攻共通科目

##### (1) グローバルリサーチ演習Ⅰ・Ⅱ

大学院学生の国際的な研究活動に対しては，研究会の開催や出席に対して経済的な支援が得られる機会を提供するなど，従来から積極的に奨励して来たところであるが，新たに専攻横断型の「グローバルリサーチ演習Ⅰ」(前期課程)と「グローバルリサーチ演習Ⅱ」(後期課程)という授業科目を開設し，国際的な研究活動の集積が所定の条件を満足する場合に単位を付与することとした。

研究の専門性を高め，その成果を広く国内外に発信する高度な実践能力を身につけることを目標として，指導教員による指導のもと海外および国内での学会・研究会への参加・発表やスタディツアーなどへの参加を積み重ねた上で，学術 WEEKS などの国際的な研究会や活動の企画を行うことを通じて実践能力を習得することを目指す。

令和 3 年度より国際人間科学部を卒業した学生の受け入れが始まったことに伴い，多数の学生が履修することを企図していたが，大変残念なことに新型コロナウイルス感染症が収束せず，令和 4 年度は履修登録者がⅠ・Ⅱ合わせて 4 名に，さらに最終的な単位取得まで達した者はⅠ・Ⅱそれぞれ 4 名にとどまった。来年度以降の新型コロナウイルスの沈静化に伴っての発展が期待される。

(教務委員会委員長 高見泰興)

## (2) ヒューマン・コミュニティ創成研究

本年度は、全面対面による講義を行なった。例年どおりさまざまな領域で研究を志す院生が受講し、知を横断する対話の創出に力点を置く授業であった。受講生各人の研究関心をテーマにした意味ある対話を展開することができた。コーディネーターは稲原美苗准教授と津田が務めた。

(ヒューマン・コミュニティ創成研究 主担当 津田英二)

### 5.1.3. 教職教育

#### (1) 教育実習

令和4年度の教育実習の履修者(単位認定者)数は、幼稚園13名、小学校39名、中等教育49名、特別支援学校14名であった。令和5年2月9日に附属校園との実習反省会(国際人間科学部)を行い、令和4年度の実習に関する反省事項や次年度以降に向けての課題について意見交換を行った。

#### (2) 教員免許取得状況

本年度の教員免許実取得人数は一種免許状が77名、専修免許状が14名であった。

(教務委員会委員長 高見泰興)

### 5.1.4. ESD サブコース

ESD (Education for Sustainable Development=持続可能な開発のための教育)をテーマとするこのコースは、学部を超えた領域横断型の全学の教育コースとして、2008年度より開講されている。2015年度より国際教養教育院にESD教育部会が設置されたものの、中核的運営は人間発達環境学研究所が担っている。全学に配置されている同コース運営委員会の委員長は、松岡広路(人間発達専攻教授)で、実務的には、総合コーディネーターの鴨谷真(学術研究員)や清野未恵子(人間発達専攻准教授)、喜屋武享(人間発達専攻助教)が、「ESDコース」の運営に当たっている。

今年度も、コロナウィルスの影響を少なからず受けたものの、「ESD基礎」「ESD論A・B」「ESDボランティア論」「ESD生涯学習論A・B」「ESD実践論」および「ESD演習I・II」を開講した。全学のESD関係教員の協力を得て、オンラインによる授業、ワークショップを中心とした授業を行った。それらの基幹にあるのは、本研究科ヒューマン・コミュニティ創成研究センターのヒューマン・ネットワークである。とりわけ、同センターが事務局を担うRCE兵庫-神戸のESD実践者らにゲストスピーカーとして登壇してもらい、現場の臨場感をできるだけ学生が触れることができるように工夫した。基礎科目群と各学部で開講されている関連科目を履修したのち、ESD演習で学びの総合化・交流を行う、という学びのシーケンスをもつESDコースは、新しいサービス・ラーニング(学校と社会サービスの連結した学習スタイル)のモデルである。

参加部局が全部局に広がり、全学部参加のコースとして本格的に動き始めてきた。SDGs(持続可能な開発目標)の推進が多領域において求められているなか、その推進を担う人材づくりの方法は、神戸大学の教育の中心的な柱の一つになることが期待されよう。それに応えられるコースを運営・維持するためには、本研究科及びヒューマン・コミュニティ創成研究センターの積極的な支援が欠かせない。次年度以後も、本研究科およびヒューマン・コミュニティ創成センターの存在意義のひとつとみ

なされるよう、関係者一同、協力し合いながらコース運営を進めていく所存である。

(ESD サブコース運営委員会委員 松岡広路)

### 5.1.5. ゲストスピーカー及びティーチング・アシスタント

#### (1) ゲストスピーカー

令和4年度は8万円(1件につき1万円)の予算配分のもとで、前期(第1, 2Q)4件、後期(第3, 4Q)4件の計8件が実施された。提出された実施報告書の点検を通じて、受講学生、招聘講師、担当教員のいずれからも良好な評価が得られており、高い教育効果を生んでいることが確認できた。

#### (2) ティーチング・アシスタント

優秀な大学院学生及び学部学生に対し、教育的配慮のもと教育補助業務を行わせ、学部教育におけるきめ細かい指導の実現や、学生に将来教員・研究者等の職に就くためのトレーニングの機会を提供し、これに対する手当支給により、学生の処遇の改善の一助とするためにティーチング・アシスタント制度を設けている。学部学生をスチューデント・アシスタント(SA-時給980円)、大学院生をティーチング・アシスタント(TA-前期課程:時給1200円、後期課程:1400円)、同後期課程学生をシニア・ティーチング・アシスタント(STA-時給1500円)とし、従事可能な業務内容につき差別化を行ったうえで任用した。実施報告書(学生用・教員用)からは、担当教員・学生のどちらからも高い評価を得ていることが確認できた。任用学生数は以下のとおりである。

前期 SA 0名 TA 1名 STA 0名 計 1名

後期 SA 0名 TA 0名 STA 0名 計 0名

(教務委員会委員長 高見泰興)

## 5.2. 各専攻講座の教育

### 5.2.1. 人間発達専攻

#### (1) 運営

各教員は、4つの教育研究分野(心理系、表現系、行動系、教育系)に所属している。専攻の運営は、基本的に各教育研究分野を中心に行われている。運営にあたっては、専攻長と各教育研究分野代表により構成された人間発達専攻運営会議を組織し、年間10回の運営会議のほか、適宜臨時の会議やメール審議により、専攻に関わる重要案件(人事、予算、入試等)の審議等を行った。教員人事は、ポイント制のもと、全学的な人事方針との関係で学域人事委員会が策定した方針に基づいて進められている。この方針を受けて、専攻運営会議では、各教育研究分野の採用人事計画を議論し、今年度は2件の採用人事を開始した。

#### (2) 予算

予算は、専攻に配分されたものを従来通り各教育研究分野に振り分けた。共通経費は設定していない。専攻所有の大型プリンタ運用経費については、専攻共通必修科目としての人間発達関連研究等が

廃止されたため、徴収していない。当面、インクや用紙など消耗品が残っている間、専攻の教員が管理場所の鍵を会計係で借りて利用し、院生が使用する場合は指導教員が立ち会うこととした。その後の運用については、継続審議する予定である。

### (3) 入学試験

博士課程前期課程入試について、受験区分による差異はあるが、志願者 91 名であり、一定の受験者を確保できている。合格者のうち他大学院への進学などの理由で辞退した者もいて、最終的には定員通りの入学者となった。さらに本専攻の各分野の魅力を発信しつつ、特に本学部からの進学者を増やす努力をしていきたい。後期課程入試では、進学者、入学者とも多く 17 名の志願者があり、定員を若干上回る合格者となった。博士後期課程入学後、コンスタントに学位取得者を出しており、今後も専攻の理念を実現すべく研究者養成を進めていきたい。

### (4) 教育

以下、教育研究分野別に内容を学生の実績を中心に列挙する。

#### ●心理系

心理系では、心理学を総合した観点から、心身の発達や健康、その促進・阻害要因の探究と複雑な相互関係の把握に努め、広い視野と深い専門性をもって人間発達の様相を追究している。また臨床心理士・公認心理師の養成も行っており、心理臨床の専門職として高度な知識とスキルを獲得することをめざし教育を展開している。このような教育体制を受け、学生の研究発表についても、国内で優れた学会発表や学術論文に関する報告がされた他、国際学会でも複数の発表が行われた。

#### (1) 学生の論文

##### 査読付き論文

生田邦紘（2022）我が子が発達障害かもしれないと心配する母親の心理面接～自分自身の不安の問題に気づきを得るまで～ 神戸大学発達支援インスティテュート心理教育相談室紀要, 12, 3-11.

古村真帆（印刷中）保育・幼児教育における新型コロナウイルス感染症に関わる研究の動向 神戸大学発達・臨床心理学研究

馬場大樹・呉 文慧（2022）教師と ICT 教材の関係性を再考する：ポスト現象学における「ハイブリッドな志向性」に基づいて 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 16 (1), 47-58.

呉 文慧（印刷中）教師はどのように ASD のある生徒と社会的相互作用を成立させているのか —授業の「不調」場面に焦点を当てた現象学的探究— 質的心理学研究, 22

呉 文慧（印刷中）ASD のある子どもに対する教師の実践の類型化：社会的相互作用に着目して 神



戸大学発達・臨床心理学研究.

鈴木田英里・山根隆宏 (印刷中). ABCX モデルに基づく発達障害児をもつ親の心理的危機に家族レジリエンス及び認知的評価が与える影響の検討 自閉症スペクトラム研究, 20, 1-8.

鈴木田英里・山根隆宏 (印刷中). 発達障害及び知的発達症児・者をもつ家族の家族レジリエンスにはどのような要素がみられるか—Walsh の家族レジリエンス理論に基づく演繹的検討— 神戸大学発達・臨床心理学研究, 22, 32-41.

劉娟・山根隆宏. 中国の自閉スペクトラム症児における応用行動分析に基づいたペアレントトレーニングの現状と課題 神戸大学発達・臨床心理学研究, 21, 22-31.

野上慶子・山根隆宏 (印刷中). 発達障害児の不安症状と母親の精神的健康の改善を目的としたオンラインによる家族認知行動療法プログラムの開発と効果検証. 自閉スペクトラム症研究, 20(2).

中園佐恵子・相澤直樹 (印刷中) 自伝的推論が自己のストーリーを構成する過程の検討. 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 16(2), 19-27.

王 一然・加藤佳子 大学生の健康な食生活における自己制御尺度の信頼性と妥当性の検討 応用心理学研究, 48(2), 34-35.

査読無し論文

古村真帆 (2022) 特別なニーズのある子に, どう主体的な授業参加を促すか 授業力・学級経営力 61(1), 60-63.

鈴木田英里・嶋田梨沙・榊原久直・山根隆宏 (2022). 「駅名カード」を用いた活動の展開による変化が教室内外でみられた年中男児の感覚運動指導教室における支援 育ちゆく子ども—療育指導事業 (発達クリニック) の実践と研究X—, 84-94.

鈴木田英里 (印刷中). 娘のことよりも自分自身のこれからについて考えたい母親との面接 神戸大学大学院人間発達環境学研究科発達支援インスティテュート心理教育相談室紀要, 13, 3-14.

野上慶子・山根隆宏・松本有貴 (2022). 発達障害児の不安症改善を目的とした遠隔による家族認知行動療法(FCBT)プログラムの開発—母親の不安症状にも注目して— 明治安田こころの健康財団 研究助成論文集 (2020年度) 56, 74-83.

(2) 学生の学会発表

国際会議

Maho Komura (2022) A Study of the Frequency of Individual Support for the Pupils with

Developmental Disabilities or Suspected Developmental Disabilities in Regular Japanese School Classes – From a questionnaire survey of teachers, Inclusive and Special Education Conference, October 27, 2022

Suzukida, E. & Yamane, T. Differences in parenting stressors, family resilience, cognitive appraisals, and perceptions of psychological crisis among and within parents of children with developmental disabilities. The International Meeting for Autism Research, 2022, May, Online.

Suzukida, E. & Yamane, T. An examination of the process of family resilience in families of children with developmental disabilities. International Academy of Family Psychology, 2022, October, Online.

Nogami K. & Yamane, T. Maternal Factors Influencing Anxiety in Children with Developmental Disorders Compared to Children with Typical Development in Japan. International Society for Autism Research, Austin, Texas, USA, 2022, May, Online.

#### 国内学会

ガン デル・谷 冬彦 (2022). 進路選択による自己明確化とアイデンティティの関連性について 日本心理学会第 86 回大会, ポスター発表, 2022 年 9 月, 日本大学文理学部

生田邦紘・赤木和重 (2022) 特別支援学校教師は、軽度知的障害のある青年の障害受容をどのように捉えているか 日本特殊教育学会第 60 回大会, ポスター発表, 2022 年 9 月

生田邦紘 (2022) 軽度知的障害のある青年の障害受容 青年・家族・教師の対話の分析から 日本質的心理学会第 19 回大会, ポスター発表, 2022 年 10 月

生田邦紘 (2023) 軽度知的障害の障害受容における親子の変容プロセス 日本発達心理学会第 34 回大会, ポスター発表, 2023 年 3 月

古村真帆 (2022) 個別支援に対する級友の反応と友人関係との関連 —小学校教員対象の質問紙調査より— 日本特別ニーズ教育学会第 28 回大会, 2022 年 10 月

古村真帆 (2022) 小学生はクラスメートに実施される個別支援をどのように捉えるか —学級適応感に着目して— 日本教育心理学会第 64 回総会, 2022 年 8 月

古村真帆 (2023) 小学生は級友に実施される個別支援をどう捉えるか：仮想場面における自由記述の質的検討— 日本発達心理学会第 34 回大会, 2023 年 3 月

呉文慧 (2022) 特別支援学校の教師は ASD のある児童・生徒とどのような相互作用を成立させているのか —現象学／ポスト現象学的アプローチを用いた実践知の探求— 日本特別ニーズ教育学会第 28 回大会, 2022 年 10 月

横田慧 (2022) 自閉症に関わる「社会的な障害」の探求—相互作用はどのような状況のもとに成り立っているのか— 日本特別ニーズ教育学会 2022 年度中間集会「若手チャレンジ研究会」6 月

鈴木田英里・野上慶子・劉娟・山根隆宏「日本版幼児用遊び行動尺度の開発 (1): 翻訳過程及び因子構造の検討」日本心理学会第 86 回大会, 2022 年 9 月, 日本大学文理学部

山根隆宏・劉娟・野上慶子・鈴木田英里「日本版幼児用遊び行動尺度の開発 (2): 構成概念妥当性の検」日本心理学会第 86 回大会, 2022 年 9 月, 日本大学文理学部

原田新・山根隆宏・石本雄真・日潟淳子・田仲由佳・王松・野上慶子「Miville-Guzman Universality-Diversity Scale-Short Form (M-GUDS-S) 邦訳」日本心理学会第 86 回大会, 2022 年 9 月, 日本大学文理学部

奥村沙矢・加藤佳子 (2022). 大学生の新型コロナウイルス感染症流行時の態度 日本心理学会第 86 回大会, ポスター発表, 2022 年 9 月, 日本大学文理学部

(3) 特別研究員, 外部資金獲得など

古村真帆: 日本学術振興会特別研究員 DC2 (2021 年度~2022 年度)

生田邦紘: 日本学術振興会特別研究員 DC1 (2022 年度~2024 年度)

呉 文慧: 公益財団法人倶進会 研究助成 (2022 年度)

野上慶子 独立行政法人日本学術振興会 特別研究員 (DC2) 2022 年 4 月~2024 年 3 月予定

鈴木田英里「発達障害児をもつ父母間の子どもの障害に対する認識の相違が家族レジリエンスに与える影響の検討」一般社団法人日本心理臨床学会研究推進事業研究助成 2021 年 9 月-2022 年 11 月

鈴木田英里「発達障害児をもつ家族の家族レジリエンスを促進する支援方法に関する検討」国立研究開発法人科学技術振興機構次世代研究者挑戦的研究プロジェクト研究奨励費, 2021 年 11 月-2024 年 3 月予定

劉 娟「発達障害を持つ在日中国人児童生徒の早期発見及び支援に関する検討」異分野共創による次世代卓越博士人材育成プログラム, 2022 年 4 月~2025 年 3 月予定

野上慶子「発達障害児の不安軽減に向けた家族参加型 CBT の受容性と有効性」日本生命財団 研究・地域活動助成 児童・少年の健全育成助成 2021 年 8 月-2022 年 7 月

野上慶子「高い不安症状のある発達障害児のための母親焦点化型 FCBT プログラムの開発」日本学術振興会科学研究費助成事業 特別研究員奨励費 2022 年 4 月-2024 年 3 月予定

#### (4) 学生の受賞

古村真帆：2022 年度日本特別ニーズ教育学会奨励賞

受賞論文：古村真帆（2021）通常の学級における知的障害特別支援学級在籍児童の授業参加：『学び合い』・自由進度学習を取り入れる学級の事例研究— SNE ジャーナル, 27

古村真帆：2022 年度 BEST PRESENTATION AWARD

（ ICISE 2022: XVI. International Conference on Inclusive and Special Education）

#### ●表現系

表現系の教育では例年と比べて大きな変化はないが、新規採用された 3 名の助教が戦力として加わり、例えば修士論文審査会、修士論文中間発表会など、様々な場面で院生たちに新たな刺激となり、それが良い効果をもたらしつつあることが実感される。

#### (1) 学生の論文

査読付き論文（WoS 収録論文はその旨記入）

Kasuya, J. & Nonaka, T. (2023). When do toddlers point during mealtime?: Pointing in the second year of life in everyday situations. *Frontiers in Psychology*, <https://www.frontiersin.org/articles/10.3389/fpsyg.2023.1050975>

加須屋潤（博士前期課程 2 年）

五十棲亘「洋裁文化におけるファッションデザイン批評の展開とその問題—雑誌『装苑』の言説を中心に」『デザイン理論』第 81 号、1-15 頁。

鈴木彩希「戦後における着物の改良と「新しいキモノ」の潮流：雑誌『美しいキモノ』の分析から」『デザイン理論』80 号、意匠学会、2022 年、39-53 頁。

工藤源也「松浦武四郎のヴィンテージ・ファッション — 好古、ヴィンテージ趣味と「正統性」の/による構築」『vanitas』No. 008、アダチプレス、2023 年 3 月、186-195 頁。

#### (2) 学生の学会発表

国内学会

野中ゼミ

日本発達心理学会第34回大会学会企画シンポジウム  
発達カスケードの示唆：変化と経験の関係の非自明性  
話題提供者：青井郁美（博士後期課程1年）

日本発達心理学会第34回大会 ポスター発表  
保育園乳幼児クラスにおける音楽・リズムの特徴と機能  
朝比奈茉穂（博士前期課程2年）

岡崎ゼミ

（D2 学生）本郷みか：発達支援における「ことば」を育てる音楽活動について—音楽の臨床的作用を活かしたプログラムの考案，第53回日本音楽教育学会，2022年11月6日

（M2 学生）八木絵里子：中学校音楽科指導に音楽療法的視点を取り入れた授業実践—授業構造と関係性に焦点をあてて—，第53回日本音楽教育学会，2022年11月6日

共同研究発表：和泉裕子（NPO 法人あんだんて KOBE），（M1 学生）橋澤慧，（M2 学生）山下実里，（D2 学生）本郷みか：コミュニティ音楽療法における「ラップ」の効果—参加型コンサートでの実践から—，第22回日本音楽療法学会学術大会，2022年9月17日

平芳ゼミ

五十棲亘「戦後日本における洋裁教育としての批評とその形式主義的側面—雑誌『装苑』をもとに—」  
意匠学会 研究例会、京都精華大学、2022年5月7日。

(3) 特別研究員、外部資金獲得など

日本学術振興会特別研究員 DC2・科研費（特別研究員奨励費）  
青井郁美（博士後期課程1年）

(4) 学生の受賞

なし

(5) その他の執筆

鈴木彩希「第3部 文献で読み解くファッションスタディーズ 4. ファッション史・服飾史」『クリティカル・ワード ファッションスタディーズ 私と社会と衣服の関係』蘆田裕史・藤嶋陽子・宮脇千絵編、フィルムアート社、2022年、242-247頁。

五十棲亘「装いの名品」『京都新聞』（2023年1月19日～3月31日までの各日連載）。

五十棲亘「学芸員の虫眼鏡 「No.1 扇」」『服をめぐる』京都服飾文化研究財団、第20号。

五十棲亘「学芸員の虫眼鏡 「No.2 ボタン」」『服をめぐる』京都服飾文化研究財団、第21号。

鈴木彩希「「新しい身体」をつくりだすこと—近代日本における着物の改良をめぐる—」『FASHION TECH

NEWS』(webメディア)、2022年11月。

五十棲亘「ファッション研究者、就活の服装に悩む」『FASHION TECH NEWS』(webメディア)2022年2月。

大西健太 Paolo Volonte 『Fat Fashion: The Thin Ideal and the Segregation of Plus-Size Bodies』(Bloomsbury Publishing, 2021) ファット・ファッション: 瘦身理想とプラスサイズボディ差別 『vanitas』No.008、アダチプレス、2023年3月、140-141頁。

(6) ゲストスピーカーの招へいなど

講師: 瀬戸口高史 (進行: Kobe International Art 代表/バレエダンサー), リプコ・オレクサンドル&リプコ・スヴァトスラフ (お話と実演: ウクライナから避難中の双子のバレエダンサー), 斎藤慶子 (通訳: 大阪公立大学特任講師/日露バレエ交流史研究)

題目: 特別ゲスト授業「ウクライナのバレエダンサーとの交流会: お話と実演」

日程: 2022年7月12日

実施授業: 「舞踊表現特論 I-2」「身体表現論 2」合同 (担当: 関典子)

講師: 花岡麻里名 (ダンサー/ミュージカル俳優)

題目: 「言葉から身体表現〜リリカルダンス〜」

日程: 2022年10月18日

実施授業: 「舞踊表現特論演習 1」「コンテンポラリーダンス 1」合同 (担当: 関典子)

講師: 宮永英典氏、大江那青氏 (株式会社スクウェア・エニックス サウンドデザイナー)

題目: ゲーム音楽制作について

日時: 2023年2月1日 (水)

実施授業: 音楽作品研究 2/音楽・音響デザイン特論演習 2(担当: 余田有希子)

学術 Weeks シンポジウム

アーティストグループ「Videokaffe」の女たち

【日程】8月29日(月) 18:00~20:00 【参加者】40名

【概要】2011年に生まれた、アート・テクノロジー・クラフトマンシップを横断するクリエイターのグループ「Videokaffe」。彼らは、製作活動のための物理的な拠点を持たず、テクノロジーを用いてダイナミックな活動を続けている。そのグループのメンバーのうち、女性3名を登壇者とし、アーティストとしてのキャリアや、芸術の分野で活動するための方法、アイデア、インスピレーションについてレクチャーが行われた。レクチャーはフィンランドのトゥルクとアメリカのシカゴ、神戸を結んでリアルタイムでつなぎ、神戸からはC.A.P (芸術と計画会議)の山村祥子氏と、神戸大学の学生が参加し、海外と日本の女性アーティストの違いや、多文化的な背景を持つ人々の共同制作についてなど、活発なディスカッションが行われた。

美術家・飯川雄大によるワークショップ「0人もしくは1人以上の観客に向けて」

【日程】1月28日（土）、29日（日）9:00～16:00 【参加者】12名

【概要】現代美術作家飯川雄大氏を招き、参加者が日常的な空間を普段とはまったく異なる視点でとらえ、作品を制作するワークショップを行った。普段は目的のための動線を辿るだけの校内が、動線から解放されて自由に歩き回ることによって、新たな様相を帯びていくことを参加者は体感した。作品を制作したあと、飯川氏と参加者全員で作品を観てまわり、参加者同士で経験を共有した。

## ●行動系

行動系は自然科学から人文・社会科学分野までの多岐にわたる学問分野を含んでおり、これらの学際的観点から解析する方法や枠組みを習得し、課題解決のための柔軟な思考能力や洞察力を涵養することを目的に、大学院生それぞれの分野の学会での発表することのみならず、学内での各種発表会・研究会などの実質的な計画・準備・運営に参画し、積極的参加を推奨している。しかし、今年度は昨年度から引き続き、新型コロナウイルス感染症拡大により、各種の学会大会や研究会、シンポジウム等が中止となったり、WEB または誌上開催となったこと、また、学内での実験調査の制限や、学外調査が実施できなくなったために、十分な研究活動を行うことができなかった。しかしそのような状況下でも、国内外での学会等で研究発表を行い、積極的な研究活動を展開している。今後の課題としては、国際誌への論文掲載成果と共に、国際学会での発表活動が望まれる。

## 1. 学生の論文

### 1) 査読付き論文

安里知陽, 片桐恵子 (2022). 介護施設における生きがい就労の効果と課題: 3 か月の体験就労による変化, 老年社会科学 44(3) 256-268

Kim Nahyun・片桐恵子・市井吉興(2023). 趣味と社会貢献を実施する囲碁グループの参加者の活動継続による変化, レジャー・レクリエーション研究 99, 39-52. (印刷中)

Kim Nahyun・片桐恵子 (2023). 高齢期における社会的ネットワークの多様性と心理的ウェルビーイングとの関連 —JGSS-2018 データを用いた分析—, 日本版総合的社会調査共同研究拠点 研究論文集 [21] (印刷中)

太田幸志, 原田和弘, 増本康平, 岡田修一. (2022). 他者との運動実施が高齢者の運動継続に及ぼす影響 —基本属性および外向性との交互作用の検証—. 理学療法学. 49(4): 265-274

鈴木峻太・前田正登. (2022) バasketボールのショットにおけるショット位置からリングまでの距離とリリースパラメータの関係: 体育学研究 第67巻, pp. 591-603.

喜多政天・前田正登 (2023) スプリント走におけるスレッド重量が加速局面の疾走動作に与える影響: トレーニング科学, 印刷中.

岩佐貫汰・前田正登 (2023) 大学長距離選手における異なる走速度での着地様式と脚動作の関係：トレーニング科学, 印刷中.

Junki Inui, Makoto Chogahara, Kei Hikoji, Megumi Tani, Daichi Sonoda, Yuki Matsumura, Masaki Aoyama, Jun Matsuzaki, Keita Miura, Kohei Yamashita (2022).

International Journal of Sport and Health Science. 20:208-223.

乾順紀, 長ヶ原誠, 彦次佳, 谷めぐみ, 菌田大地, 松村雄樹, 青山将己, 松崎淳, 三浦敬太, 下耕平 (2022) 就学期の運動部活動経験が成人層の運動・スポーツ参画状況に与える影響. 生涯スポーツ学研究. 19(1):1-12.

松崎淳・長ヶ原誠(2022)不確実な状況下での国際生涯スポーツイベントの開催判断過程の検討. 生涯スポーツ学研究. 19 (1) : 13-25.

## 2) 査読無し論文

Kim Nahyun (2023). 高齢期における社会的つながるー社会参加活動の場における弱い紐帯の形成ー, 2020年度ジェロントロジー研究報告 15, 15-15.

## 2. 学生の学会発表

### 1) 国内学会

丁同芳, 宮崎淳, 韓天放, 松田哲也, 石原暢. (2023). 若年成人の体力および心血管リスクマーカーと認知機能の関係. 学術変革領域研究 (A)「生涯学の創出ー超高齢社会における発達・加齢観の刷新」第4回領域会議.

丁同芳, 宮崎淳, 韓天放, 松田哲也, 石原暢. (2023). 若年成人の体力および心血管リスクマーカーと脳構造・機能の関係. 第37回日本体力医学会近畿地方会.

韓天放, 宮崎淳, 丁同芳, 松田哲也, 石原暢. (2023). 若年成人の睡眠習慣と脳構造の関係. 第37回日本体力医学会近畿地方会.

菊池辰哉・片桐恵子 性別役割規範と対人関係が援助要請意図に与える影響, 日本社会心理学会第63回

安里知陽・片桐恵子 社会活動は高齢者の世代性を高めるのか? 就労と社会参加の効果の検討, 日本老年社会科学会 第64回大会

Kim Nahyun・片桐恵子 (2022). 高齢者の社会的ネットワークの多様性と幸福感との関連ー日本版総合的社会調査2018(JGSS-2018)を用いた二次分析ー, 日本老年社会科学会 第64回大会

梅木 舜一, 瀧 千波, 山縣 桃子, 清野 健, 木村 哲也. “筋電図反応時間の長期記憶性に関する検



証”．計測自動制御学会ライフエンジニアリング部門シンポジウム．2022. 8. 25. 芝浦工業大学.

前角 馨，木村 哲也．“手部への軽い荷重負荷が足圧中心位置の調節課題に与える効果”．計測自動制御学会ライフエンジニアリング部門シンポジウム．2022. 8. 25. 芝浦工業大学.

田上 涼太，村田 篤哉，木村 哲也．“静的二足立位姿勢の内外側方向制御における長腓骨筋活動の貢献”．第 21 回日本電気生理運動学会．2023. 3 (演題採択)．関西医科大学.

森広 薫，西澤 憲生，前角 馨，石原 暢，木村 哲也．“認知課題中の静的立位における体性感覚フィードバックの貢献”．第 21 回日本電気生理運動学会．2023. 3 (演題採択)．関西医科大学.

喜多政天・前田正登．グラウンド表面の性状の違いが牽引走における負荷の張力に与える影響．兵庫体育・スポーツ科学学会第 33 回大会．芦屋大学．2022. 5. 28.

登賢太郎・前田正登．木製硬式野球バットにおけるグリップ部の特性に関する研究．兵庫体育・スポーツ科学学会第 33 回大会．芦屋大学．2022. 5. 28.

村田和隆・市谷浩一郎・前田正登．スマートフォン内蔵センサを利用した跳び箱運動の測定評価．日本体育・スポーツ・健康学会第 72 回大会．順天堂大学．2022. 9. 2.

市谷浩一郎・村田和隆・前田正登．バスケットボールのシュート動作における上腕部の筋活動の変化．第 28 回日本バイオメカニクス学会大会．筑波大学．2022. 11. 19.

喜多政天・前田正登．スレッド走におけるスレッド重量と抵抗負荷との関係．第 35 回トレーニング科学学会大会．国立スポーツ科学センター．2022. 12. 3.

登賢太郎・前田正登．大学野球選手におけるバット選定に関する研究－バットを握ることとバット特性の関係－．野球科学研究会 第 9 回大会．近畿大学．2022. 12. 17.

折山桂，向井響子，原田和弘，増本康平 “感情誘発画像に対する感情調整の年齢差に関する研究” 日本心理学会第 86 回大会．2022. 9. 9.

向井響子，折山桂，原田和弘，佐藤幸治，増本康平 “利他行動と対人信頼感の関連，および年齢差” 日本心理学会第 86 回大会．2022. 9. 9.

孫潤苺，増本康平 “ゲームと孤独感に関する研究” 日本心理学会第 86 回大会 2022. 9. 8.

孫潤苺，増本康平 “成人期以降のゲーム動機と精神的健康に関する研究” 日本発達心理学会第

34 回大会 2023. 3. 3.

乾 順紀・長ヶ原 誠・篠田 大輔 (2022) わが国の小学生へのフィジカルリテラシー評価適用に関する研究:日本語版動機づけ・自信領域評価尺度の作成を通じて. 兵庫体育・スポーツ科学学会第 33 回学会大会 (口頭発表), 芦屋大学, 2022. 5. 28.

三浦 敬太・谷 めぐみ・長ヶ原 誠 (2022) 市民のスポーツ参画志向の継続意欲に関する比較:2つの市民調査データを用いて. 兵庫体育・スポーツ科学学会第 33 回学会大会 (口頭発表), 芦屋大学, 2022. 5. 28.

塩川司・長ヶ原 誠 (2022) COVID-19 流行化におけるスポーツイベントマネジメント変容の検討:ワールドマスターズゲームズ 2021 関西に着目して. 兵庫体育・スポーツ科学学会第 33 回学会大会 (口頭発表), 芦屋大学, 2022. 5. 28.

三浦 敬太・長ヶ原 誠・谷 めぐみ (2022) 成人層のスポーツ参画志向に影響する要因の検討:2つの市民調査データを用いて, 日本生涯スポーツ学会第 24 回学会大会 (口頭発表), 愛知東邦大学, 2022. 10. 29-30.

本山大暉・石井千奈美・奥田遥・吉口尚樹・三浦敬太・松崎淳・長ヶ原誠 (2022) 成人層におけるスポーツへの質的関与が運動実施頻度に及ぼす影響の検討:市民調査による男女比較分析を通じて. 日本生涯スポーツ学会第 24 回学会大会 (ポスター発表), 愛知東邦大学, 2022. 10. 29-30. 【ポスター発表賞 奨励賞】

### 3. 特別研究員、外部資金獲得など

石原暢, 高岸治人, 寿秋露, 丹波夏希, 橋本紳之亮. 運動・スポーツが子どもの社会性に与える影響とその神経基盤—fNIRS ハイパースキャニング研究—. 公益財団法人明治安田厚生事業団第 38 回若手研究者のための健康科学研究助成.

### 4. 学生の受賞

竹内真純 特別研究員 (RPD)

Kim Nahyun, シニア向け SNS における弱い紐帯の形成と心理的効果: シニアのオンラインコミュニティの特徴とコミュニケーション行動, 2022 年度第 56 次 公益財団法人吉田秀雄記念事業財団研究助成 大学院生部

Kim Nahyun, 国立研究開発法人科学技術振興機構 (JST) の次世代研究者挑戦的研究プログラム (SPRING) 事業に「異分野共創による次世代卓越博士人材育成プロジェクト」神戸大学 SPRING スカラシップ研究学生 (2021 年 11 月~2024 年 3 月) 令和 4 年度「学生地域アクションプラン」採択「UR グリーンヒルズ六甲における社会的交流促進活動」採択菊池辰哉代表

受賞者：森広薫

受賞名：第 21 回日本電気生理運動学会大会・第 9 回計測自動制御学会電気生理運動学部会研究会（若手最優秀演題賞）

受賞演題：認知課題中の静的立位における体性感覚フィードバックの貢献

受賞者：本山大暉・石井千奈美・奥田遥・吉口尚樹・三浦敬太・松崎淳・長ヶ原誠（2022）

受賞名：日本生涯スポーツ学会第 24 回学会大会ポスター発表奨励賞

受賞演題：成人層におけるスポーツへの質的関与が運動実施頻度に及ぼす影響の検討ー市民調査による男女比較分析を通じてー

## ●教育系

本年度は、新型コロナウイルス感染症の蔓延に伴う制限が縮減してきたこともあり、国内外の学会での発表が積極的になされた。研究成果も査読付論文数も昨年度の 12 本から 22 本と大幅に増えている。国際的な業績も、英語論文が 4 本と、国際学会発表が 5 本、翻訳 2 本等、十分な成果がみられる。また、特別研究員、外部資金獲得も多数なされており、加えて受賞も 2 件あり、対外的にも高い評価が得られていると考える。来年度はさらに国内外の教育実践現場での実践的研究が可能となることが予測されるので、益々の研究の発展が期待される。

### (1) 学生の論文

#### 査読付き論文（WoS 収録論文はその旨記入）

星川佳加（2022）「戸田唯巳「学級というなかま」実践前史：子どもと子どもをつなげる文集づくり」『研究論叢』（28），pp. 3-11。

星川佳加（2022）「竹内常一の生活指導論における「ケア」の変遷」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』16（1），pp. 19-29。

松本圭朗（2022）「千葉良雄の教育論に関する一考察：生活技術の形成を目的とした生活教育」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』16（1），pp. 31 - 45。

Yamamoto, T., Kamiyama, S., Tanaka, T., & Yamaguchi, E. (2022). Primary school students' difficulties in writing arguments: Identifying challenges and opportunities for science teaching. *Journal of Baltic Science Education*, 21(3), 445-461. <https://doi.org/10.33225/jbse/22.21.445> 【WoS 収録論文】

Takahashi, A., Yamaguchi, E., & Inagaki, S. (2022). Designing exhibition space to support early childhood education in science museums: The ComPaSS of the National Museum of Nature and Science in Japan. In L. Gómez, A. L. Martínez & J. Lees (Eds.), *ICERI2022 Proceedings*

(pp. 1414-1417). IATED Academy.

Sakamoto, M., Yamaguchi, E., Yamamoto, T., Tamai, R., & Matano, M. (2022). Redesign and evaluation of instruction for primary students' socioscientific decision-making toward consensus building. In G. S. Carvalho, A. S. Afonso & Z. Anastacio (Eds.), *Fostering scientific citizenship in an uncertain world (Proceedings of ESERA 2021)*, Part 8 (co-ed. A. Laherto & E. Rybska), (pp. 569-577). Braga: CIEC, University of Minho.

Kobayashi, W., Aoki, R., Yago, K., Inagaki, S., Takeda, Y., Kusunoki, F., Mizoguchi, H., Sugimoto, M., Funaoi, H., & Yamaguchi, E. (2022). Satoyama forest management game: Can elementary school students learn the difference in management methods? In G. S. Carvalho, A. S. Afonso & Z. Anastacio (Eds.), *Fostering scientific citizenship in an uncertain world (Proceedings of ESERA 2021)*, Part 9 (co-ed. A. Zeyer & J. Dillon), (pp. 775-780). Braga: CIEC, University of Minho.

高橋あおい・山口悦司・稲垣成哲 (2022) 「国立科学博物館の展示室「親と子のたんけんひろばコンパス」の理念は 展示にどのように反映されたのか」『科学教育研究』第 46 巻, 第 4 号, 384-369.

俣野源晃・山口悦司・山本智一・神山真一・坂本美紀 (印刷中) 「適切かつ十分な証拠を利用するアーギュメント構成能力育成を目指した小学校理科授業デザインの開発と評価: 証拠の認識的理解に着目して」『理科教育学研究』.

小林和奏・山口悦司・青木良太・武田義明・溝口博・楠房子・舟生日出男・杉本雅則・田中達也・稲垣成哲 (印刷中) 「小学校理科授業における「里山管理ゲーム」の活用と評価」『科学教育研究』.

田中達也・山口悦司 (印刷中) 「アーギュメント自己評価能力の向上を支援するための教授方略の開発と評価」『理科教育学研究』.

永岡珠瑠 「現代アメリカ都市部における地域社会を巻き込んだ教員養成の可能性—イリノイ州立大学「地域基盤型教員養成プログラム」の事例検討—」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第 16 巻第 2 号、pp. 73-85、査読有り。

松山七織、長尾悠里、山下晃一 (2022) 「私立通信制高等学校における特別活動の意義に関する事例検討 —青年期の今日的状況と教師の役割の再定義を念頭に置いて—」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第 16 巻第 1 号、pp. 59-71、査読有り。

蓑毛智樹 (2022) 「『文検修身科』における試験委員と受験者—整備・安定期 (1897-1921) を中心に—」『研究論叢』第 28 号、pp. 13-25。

藤掛絢子・北野幸子(2023)「幼少期における自然の中での音とかかわる遊びに関する大学生の認識」、『ノートルダム清心女子大学紀要人間生活学・児童学・食品栄養学編』, 47(1), pp. 81-93.

松山聖奈・北野幸子(2022)「社会経済的背景を踏まえた子どもと家庭の支援に関する保育施設の役割—ソーシャルワーク機能に着目して—」. 保育ソーシャルワーク学研究第8号. pp. 15-28.

後藤聡美(2022) 多文化交流におけるコンヴィヴィアルな空間の意味 ～<当事者性の邂逅>に着目して～, 日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要, 39 巻, p53-66

堤拓也(2022) 学生セツルメントおよびワークキャンプに関する研究の課題と展望 —ボランティアの学びに注目して—, 神戸大学大学院人間発達環境学研究科紀要, 15(2), p39-51

堤拓也(2022) ワークキャンプにおける多層多元的な学習構造の意義 —参加者のゆらぎの生成プロセスに注目して—, 日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要, 38, p76-89

堤拓也(2022) ワークキャンプにおける複数の役割経験から生じるゆらぎの意義 —まなびほぐしのプロセスに注目して—, 日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要, 39, p114-128

井上太一、猪原風希、津田英二(2022) 障害者の文化芸術活動におけるエンパワメントの過程～「思うようにならなさ」をめぐる表現者と支援者の葛藤の共振～, 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 16(1), pp. 83-94

石黒慶太(2022) 知的障害のある成人男性の性を支援するとはどういうことか—結婚支援に関与する女性職員の語りから—, 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 16(1), pp. 1-17

## 査読無し論文

星川佳加(2022)「教職課程科目における学生の意欲とつながりの形成：2021年度A短期大学における実践報告」『研究論叢』(28), pp. 91-98。

瀬川千裕「1948-1953年における重松鷹泰の教育目標論の検討：道徳教育への示唆を得るために」『作文奈良』(64), pp. 1-10。

瀬川千裕編(2023)『ライティング(書くこと)の評価はどうあるべきか：「ループリック評価」の批判的検討』神戸大学大学院人間発達環境学研究科2022年度学術Weeksシンポジウム報告書、全71ページ。

趙セイタク・海老春香・楠房子・稲垣成哲(2022)「植物園における館内鑑賞支援のデザイン」『日本科学教育学会研究会研究報告』第37巻, 第2号, 29-32.

田中達也・内海紗恵・大西鮎美・寺田努 (2022) 「児童主体の行動選択と ICT 活用型事後学習を含む新たな避難訓練プログラムの開発」『日本科学教育学会研究会研究報告』第 37 巻, 第 4 号, 23-28.

俣野源晃・山口悦司・渡辺桜・置塩佳奈 (2022) 「アーギュメントにおける証拠の十分性に関する小学生の認知的理解の事例的検討」『日本科学教育学会研究会研究報告』第 37 巻, 第 4 号, 61-64.

江草遼平・向山翔希・楠房子・稲垣成哲 (2022) 「科学系博物館におけるキャラクターを導入した展示解説支援 4 コママンガ: 視線計測データに基づいた分析」『日本科学教育学会研究会研究報告』第 37 巻, 第 4 号, 107-112.

口羽駿平・山口悦司・俣野源晃・坂本美紀 (2022) 「アーギュメント構成能力における持続性の検討 (2)」『日本科学教育学会研究会研究報告』第 37 巻, 第 4 号, 143-146.

口羽駿平・山口悦司・坂本美紀・山本智一・原愛佳・近江戸伸子・俣野源晃・澁野哲 (2023) 「科学技術の社会問題としてのゲノム編集を題材とした小学生向け教育プログラムの開発」第 37 巻, 第 5 号, 75-78.

田中達也・山口悦司・小林和奏・青木良太・武田義明・溝口博・楠房子・舟生日出男・杉本雅則・稲垣成哲 (2023) 「「里山管理ゲーム」を活用した小学校理科授業のデザイン」『日本科学教育学会研究会研究報告』第 37 巻, 第 5 号, 103-106.

小林和奏・山口悦司・青木良太・武田義明・溝口博・楠房子・舟生日出男・杉本雅則・田中達也・稲垣成哲 (2023) 「「里山管理ゲーム」を活用した小学校理科授業の評価: シカ駆除の必要性に関する知識獲得過程の相互行為分析」『日本科学教育学会研究会研究報告』第 37 巻, 第 5 号, 107-110.

赤川峰大 (2022) 小学校段階における演繹的推論についての研究 -児童の推移律に関する理解の実態に焦点をあてて-, 日本数学教育学会第 55 回、秋期研究大会発表集録, 257-260

宇都宮由衣、澤田淳、岡部恭幸(2022)Argumentation を視点とした認識論的障害の克服について -小数の乗法を題材に-, 日本数学教育学会第 55 回秋期研究大会発表集録, 133-136

山内優果生田浩隆岡部恭幸(2022)個人的ディスコースの成長に関する研究 -小数の除法における「被除数と商の大小関係」を題材として-, 日本数学教育学会第 55 回秋期研究大会発表集録, 165-168

堤拓也(2022) ワークキャンプにおける複数の役割経験から生じる学びのプロセス -<ゆらぎ>を契機とした<まなびほぐし>に注目して, 日本福祉教育・ボランティア学習学会発表原稿集, p122-123

## (2) 学生の学会発表

### 国際会議

Takahashi, A. (2022). The possibilities of online workshops for parents and children in science museums: A case study of the National Museum of Nature and Science in Japan. Paper presented at the ICOM-CECA 2022.

Fujikake, Ayako, & Kitano, Sachiko (2022). Connecting the Early Childhood Teacher Preparation Program with Student Teaching Experiences: Focusing on Music Expression Play. 22st Pacific Early Childhood Education Research Association International Conference (PECERA), 2022.

Fujikake, Ayako, & Kitano, Sachiko (2022). A Lesson Study on Singing Play in Early Childhood Teacher Preparation: Toward the Design of a New Coursework. 22st Pacific Early Childhood Education Research Association International Conference (PECERA), 2022.

Matsuyama, Seina & Kitano, Sachiko (2022). What features of social work are needed in ECEC practices? 22st Pacific Early Childhood Education Research Association International Conference (PECERA), 2022.

井上太一・加戸友佳子「哲学対話における不和と政治性：知的障害のある青年らとの p 4 c から」第 20 回子どもの哲学国際学会 (ICPIC)、立教大学池袋キャンパス、2022 年 8 月 10 日

### 国内学会

星川佳加「ケアと対話に関する一考察：ネル・ノディングズとマルティン・ブーバーを手掛かりとして」2022 年度世界新教育学会国際教育フォーラム (関西大学), 2022 年 9 月。

瀬川千裕「戦前における今井誉次郎の生活綴方論の展開：雑誌『教育・国語教育』を中心として」関西教育学会第 74 回大会 (Web 大会), 2022 年 11 月。

高橋あおい (2022) 「科学系博物館における幼児を対象とした学習支援に関する考察：保護者支援に関する研究に焦点を当てて」『日本理科教育学会四国支部大会発表論文集』第 40 号, 6-7.

伊藤扶桑・Zheng, J.・楠房子・稲垣成哲 (2022) 「博物館における AR とクイズを用いた親子向け鑑賞支援の評価」『日本理科教育学会全国大会発表論文集』第 20 号, 208.

小林和奏・山口悦司・青木良太・武田義明・溝口博・楠房子・舟生日出男・杉本雅則・田中達也・稲垣成哲 (2022. 9) 「「里山管理ゲーム」を活用した小学校理科授業の評価：ゲームプレイ中の相互行為分析を通じた伐採の必要性に関する知識獲得過程の事例的検討」『日本科学教育学会年会論文集』第 46 号, 362-365.

俣野源晃・山口悦司・置塩佳奈・渡辺桜（2022. 9）「アーギュメントにおける証拠の十分性に関する小学生の認知的理解：理科の単元『振り子の運動』の事例」『日本科学教育学会年会論文集』第 46 号, 426-427.

口羽駿平・山口悦司・俣野源晃・坂本美紀・稲垣成哲（2022. 9）「アーギュメント構成能力の転移に関する検討：小学校理科の事例」『日本科学教育学会年会論文集』第 46 号, 428-429.

坂本美紀・山口悦司・山本梨好・内藤はる（2022. 9）「科学技術の社会問題に対する意思決定と情報検索：検索プロセスの内省から」『日本科学教育学会年会論文集』第 46 号, 490-491.

田中達也・山口悦司（2022. 9）「アーギュメント自己評価能力の向上を目指した小学校理科授業の有効性の検証」『日本科学教育学会年会論文集』第 46 号, 530-531.

小林和奏・山口悦司・青木良太・武田義明・溝口博・楠房子・舟生日出男・杉本雅則・田中達也・稲垣成哲（2022. 9）「「里山管理ゲーム」を活用した小学校理科授業の評価：里山管理に関する知識獲得」『日本理科教育学会全国大会論文集』第 20 号, 140.

田中達也・山口悦司（2022. 9）「アーギュメント自己評価能力の向上を目指した小学校理科授業のための教授方略の提案」『日本理科教育学会全国大会論文集』第 20 号, 281.

口羽駿平・山口悦司・俣野源晃・坂本美紀・稲垣成哲（2022. 9）「アーギュメント構成能力における持続性の検討」『日本理科教育学会全国大会論文集』第 20 号, 282.

俣野源晃・山口悦司・置塩佳奈・渡辺桜（2022. 9）「アーギュメントにおける証拠の十分性に関する小学生の認知的理解：単元『太陽と地面の様子』の事例」『日本理科教育学会全国大会論文集』第 20 号, 283.

坂本美紀・山口悦司・内藤はる・山本梨好（2023. 3）「科学技術の社会問題に対する意思決定と情報検索：大学生の情報検索プロセスの実態」『日本発達心理学会第 34 回大会発表論文集』385.

金聯珠（2022）「地域と連携した教育課程の再編にみる「教師エージェンシー」の変容 —韓国における教師の主体的実践に注目して—」日本教師教育学会第 32 回大会（秋田大学）2022 年 9 月。

長尾悠里（2022）「学校統廃合・存続方策の分析における「スケール」概念の有用性の検証」日本教育政策学会第 29 回大会（大東文化大学）2022 年 7 月。

長尾悠里（2022）「小規模特認校への就学における条件と背景・帰結の分析」日本教育制度学会第 29 回大会（筑波大学）2022 年 11 月。



蓑毛智樹『『文検修身科』試験問題の分析—試験委員・中島力造を中心に—』教育史学会第66回大会（埼玉大学、オンライン）、2022年9月25日。

松山聖奈・北野幸子「保育者及び社会福祉士の養成カリキュラムにおける保育ソーシャルワークの位置付けに関する検討」日本保育ソーシャルワーク学会 第8回研究大会

松山聖奈・北野幸子「領域人間関係における保育者の専門性—保育ソーシャルワークに着目して—」日本保育者養成教育学会 第7回研究大会

チョウシキ「児童虐待の社会的背景に関する実証研究：地域レベルにおけるリスクファクターに着目して」『日本家政学会家族関係学部会 第42回家族関係学セミナー』2022年10月29日、大妻女子大学、口頭発表。

後藤聡美 「当事者性の邂逅を基軸とするSDGs学習の枠組み」日本社会教育学会プロジェクト研究第5回公開研究会（オンライン）、2022年3月20日

後藤聡美 「多文化交流におけるコンヴィヴィアルな空間の意味〜＜当事者性の邂逅＞に着目して〜」日本福祉教育・ボランティア学習学会自由研究発表、神戸大学、2022年11月27日

堤拓也 コロナ禍の学生ボランティアが抱える課題 日本福祉教育・ボランティア学習学会第28回研究大会プロジェクト研究、神戸大学、2022年11月27日

堤拓也 「ワークキャンプにおける複数の役割経験から生じる学びのプロセス—＜ゆらぎ＞を契機とした＜まなびほぐし＞に注目して」日本福祉教育・ボランティア学習学会第28回研究大会自由研究発表、神戸大学、2022年11月27日

井上太一「知的障害のある青年が参加する大学教育における対話的実践を介した「マジョリティ性」の中断」日本社会教育学会第69回研究大会プロジェクト研究「障害をめぐる社会教育・生涯学習」オンライン実施、2022年9月16日

### (3) 特別研究員、外部資金獲得など

松本圭朗「勝田守一の教育学構想における教育方法論の検討」日本学術振興会科学研究費助成事業研究活動スタート支援。

高橋あおい（2022）日本学術振興会 特別研究員（DC2）

高橋あおい（2022）特別研究員奨励費「科学系博物館における幼児を対象とした学習支援を実現するための理念と展示運営の関係」（課題番号22J12376）

青木良太（2022）神戸大学・次世代研究者挑戦的研究プログラム（SPRING）

田中達也（2022）公益財団法人 KDDI 財団・2023 年度調査研究助成

藁毛智樹（2022）日本学術振興会 2023 年度特別研究員（DC2）採用内定、研究課題名「『文検修身科』の研究一戦前期における教員の学びの歴史的検討―」

藤掛絢子（2022）日本学術振興会 科学研究費助成事業，学術研究助成基金助成金（基盤研究（C）），2021 年 4 月－2025 年 3 月 「実習との往還を図った音楽表現領域における保育者養成教育プログラムと評価の開発」

後藤聡美 日本学術振興会特別研究員（RPD）2023 年度～，採用内定，研究課題名「『当事者性の邂逅』の発現可能性を高めるオルタナティブな教育実践の方法に関する研究」

井上太一 特別研究員奨励費，代替不可能に生きるための生涯学習論：障害福祉施設における就労支援の中断に着目して」

#### 【翻訳】

藤掛絢子（2022）OMEP Terminology on early childhood（OMEP 乳幼児期に関する用語解説集），2022 年 12 月，共訳

野光・山崎洋子著、加藤優汰・青井郁美・勝冶友紀子・松山聖奈訳、川地亜弥子監訳「カリキュラム改革と世界教育史―『日本における教育的進歩主義、文化的邂逅と改革』第 8 章―」。研究論叢第 28 号。pp. 115-126。（2022 年 6 月 30 日発行）

#### (4) 学生の受賞

高橋あおい（2022）神戸大学・レスポンシブル・ケア月間ポスター表彰

後藤聡美（2022）日本福祉教育・ボランティア学習学会大会第 28 回研究大会大会発表賞，11 月 27 日

#### (5) ゲストスピーカーの招へいなど

教育方法学特論演習ゲストスピーカー

富澤美千子氏（横浜芸術大学教授）「野村芳兵衛の教育思想：往相・還相としての「生命信順」と「仲間作り」2023 年 1 月 30 日（2022 年度学術講演会との共催）

#### 学術 Weeks シンポジウム

学術 Weeks シンポジウム「ライティング（書くこと）の評価はどうあるべきか：「ルーブリック評

価」の批判的検討」2022年11月19日。

学術Weeks シンポジウム「子どもの「生活」を支える教師の教育実践」2023年3月11日。

後藤聡美 堤拓也 劉裕 (M2) ナリソ (M2) 「ふく・ボラサロン」開催 日本福祉  
教育・ボランティア学習学会第28回研究大会、神戸大学、2022年11月26日  
(人間発達専攻長 木下孝司)

## 5.2.2. 人間環境学専攻

### (1) 運営

専攻に関する意思決定は、例年どおり、人間環境学専攻運営会議において行った。本運営会議は、専攻長と各コースの主任の計5名から構成される。今年度は、運営会議を7回開催し(4, 6, 7, 8, 9, 12, 2月)、予算配分、人事、入試、教務等に関わる重要案件を審議し決定した。

今年度は、若手教員採用の学域方針に沿って、助教人事に関連する人間環境学セミナーも1回開催し、研究内容の議論も行った。その結果として、助教採用人事の検討と選考を2件行なった。1名の助教を2022年12月より採用した。1名の特任助教を2023年2月に採用した。

### (2) 予算

各コースの学生の下記の所属人数に応じて配分した。(休学を0.5としてカウント)

表 博士課程前期課程ならびに後期課程の在席学生数

	博士課程前期課程	博士課程後期課程
環境自然科学	38	12
環境数理科学	3	1
生活共生科学	13	5.5
社会共生科学	6.5	2
計	60.5	20.5

### (3) 入試

前期課程入試については推薦入試(7月)、1次(9月)、2次(12月)を行った。推薦入試については、プレゼンテーション、口頭試問、書類審査、ならびに外国語科目試験を総合的に評価した。1次については、試験区分ごとに専門科目について筆記試験を行い、口頭試問、外国語科目試験とともに総合的に評価した。2次については、試験区分ごとに専門科目について口述試験を行い、外国語科目試験とともに総合的に評価した。本年度は推薦入試、2次については遠隔入試を、1次については対面入試を実施した。

後期課程入試は1次(8月)、2次(2月)に行った。後期課程入試に関しては、「受験生のプレゼンテーション、主論文等審査委員と論文等審査委員が所見を述べ、各コースから口述試験委員が採点する」という方式を引き続き採用した。本年度の1次は対面入試、2次については遠隔入試を実施した。

博士前期課程は定員を充足することができなかった。

#### (4) 教育

大学院生は修士論文、博士論文の作成を中心目標として勉学・研究を進めることから、学生に対する指導はそれぞれの指導教員に負うところが大きい。本年度は、原則的に指導は通常の対面方式に戻った。BEEF ならびに Zoom を併用することで、遠方のゲストスピーカーの依頼が可能となり、時間ならびに空間も柔軟に効率的に学生指導できるなど、コロナ禍前より多角的に教育指導を行うことができた。

#### (5) 広報

博士課程前期受験検討者に対し、オープンラボの期間が設けられ、受験相談を行った。博士課程前期ならびに後期課程オープンラボウィークス実績 自然 2 名、数理 1 名、生活 6 名、社会 3 名

#### (6) 学外研究者を招いての国際講演・シンポジウム等

Exchange research program between TU-Dresden and Kobe University 2022

日程：2022 年 11 月 21 日（月） 10：40-12：10

場所：鶴甲第 2 キャンパス F 棟 151

学術交流協定を締結しているドイツ・ドレスデン工科大学理学研究科の大学院生の Nicola Schmidt 氏と Luise Kessler 氏をスピーカーに招いての国際学術セミナーを実施した。参加者 25 名 二国間交流事業セミナー

Exchange research program between Germany and Kobe 2023

日程：2023 年 2 月 2 日（木） 10：40-12：10

場所：鶴甲第 2 キャンパス A 棟 325

ライプツィヒ植物遺伝科学研究所の Bhanu Prakash Potlapalli 氏をスピーカーに招いての国際学術セミナーを実施した。参加者 10 名 招へい外国人研究者

生物多様性国際シンポジウム「神戸からはじまる！未来へつなぐ生物多様性」

日程：2023 年 3 月 25 日（土）13:00~16:30

場所：神戸ポートピアホテル（及びオンライン配信）

久元喜造氏（神戸市長）、堀上勝氏（環境省 自然環境課長）、コートニー・ロバートソン氏（カナダ環境・気候変動省マネージャー）、マーカス・フィン氏（オーストラリア気候変動・エネルギー・環境・水資源省責任者）、武藤一巳（旭化成 部長）らの講演とパネルディスカッション。デイビッド・クーパー氏（生物多様性条約事務局長代理）はビデオ参加。参加者は約 400 名。本研究科後援。

#### (7) 学生の受賞

在学中の 2 名の大学生ならびに大学院生が以下のように受賞した。

受賞者：谷口聖太（博士課程前期課程2年，指導教員：近江戸伸子）

賞の名称：神戸市の緑に関する普及・啓発に寄与する調査・研究論文 優秀賞

受賞対象：森林植物園アジサイの遺伝資源カタログの構築

受賞年月：令和4年3月28日（前年度記載していない）

受賞理由：研究論文が優秀と評価されたため

受賞者：瀬川智明（博士前期課程2年，指導教員：佐藤春実）

賞の名称：神戸大学 研究基盤センター 若手フロンティア研究会・極低温部門賞（ポスター賞）

受賞対象：ラマン分光法を用いたPCLの海洋分解過程の観察

受賞年月：令和4年12月20日

受賞理由：発表内容が素晴らしいと評価されたため

（人間環境学専攻長 近江戸伸子）

## 6. 進路

### 6.1. キャリア形成支援

#### 6.1.1. キャリアサポートセンター

人間発達環境学研究科キャリアサポートセンター（鶴 2CSC）は、発達科学部・国際人間科学部の学部生と人間発達環境学研究科の大学院生を対象に、学生のキャリア形成を実践的にサポートする活動を行った。これらは、就職活動及びキャリア形成支援、情報発信の2つに大別される。以下、それぞれの活動に関し詳述する。

##### (1) 就職活動及びキャリア形成支援

例年通り、就職活動中の学生を対象に、下記の個別相談（カウンセリング）を行った。

- ・自己分析支援
- ・エントリーシート作成支援
- ・模擬面接
- ・就活・キャリアに関する相談
- ・大学院進学に関する相談

個別相談の総人数は431人であり、その内訳は、発達科学部：4人，人間発達環境学研究科：95人，国際人間科学部：299人，文学部：9人，理学部：8人，工学部：3人，海事科学部：1人，理学研究科：6人，人文学研究科：3人，農学研究科：2人，システム情報学研究科：1人であった。（※2月24日時点の人数です）

さらに、下記のセミナー・説明会を開催した。

- ・就職活動全般
- ・教員採用試験対策（公立、私立）
- ・自治体教育委員会による教員採用試験に関する説明会
- ・心理・福祉職に焦点を当てた公務員試験対策

セミナーのタイトルは、下記の一覧を参照されたい。セミナーの総数は39，総参加人数は195人であった。（※セミナーの総数は開催予定分を含み、総参加人数は2月24日時点の実績）

上記に加え、今年度も、発達科学部・国際人間科学部・人間発達環境学研究科のOBOG訪問の仲介を実施した。

・OBOG訪問受付件数：96

(※2月24日時点の実績です)

また、昨年度と同様、「内定者獲得紹介システム」を運用した。本紹介システムは、鶴2CSCの仲介により、就職先の内定獲得あるいは合格を果たした発達科学部・国際人間科学部・人間発達環境学研究科に在学中の学生に対し、同じ就職先を志望する学生が直接会って、当該就職先に向けての就職活動に関する情報（例えば、具体的な採用選考内容）を得ることを目的とするものである。

具体的な実績値は以下の通りである。

- ・内定獲得者の登録人数：36
- ・内定先（企業か官公庁等）の数：88
- ・内定獲得者と下級生との面談回数：3

(※2月14日時点の実績)

## (2) 情報発信

キャリア支援に関する各種情報の発信を行った。

- ・企業からの大学推薦の求人情報
- ・公立・私立の教育機関（幼稚園、保育園、小中高）からの求人情報
- ・心理・福祉系の外部機関からの求人情報
- ・他大学の大学院募集情報
- ・学内セミナー（当センター主催分と学内の他の支援組織の主催分の両方）の開催情報
- ・外部業者から入手した関連情報

上記の情報を、学生向け一斉メール（鶴2CSCニュース）、掲示板、Twitter等の媒体を使って発信した。

## 【今年度開催したセミナー一覧】※オンラインまたは対面

- |              |        |                          |
|--------------|--------|--------------------------|
| 1. 4月13日（水）  | 教員採用   | 「大阪府教育委員会説明会」            |
| 2. 4月15日（金）  | 教員採用   | 「大阪市教育委員会説明会」            |
| 3. 4月18日（月）  | 教員採用   | 「兵庫県教育委員会説明会」            |
| 4. 4月19日（火）  | 教員採用   | 「大阪府豊能地区採用選考試験説明会」       |
| 5. 4月20日（水）  | 教員採用   | 「私学教員スタートアップガイダンス」       |
| 6. 4月21日（木）  | 教員採用   | 「堺市教員採用選考試験説明会」          |
| 7. 4月25日（月）  | 教員採用   | 「学内公務員講座の個別説明会」          |
| 8. 4月26日（火）  | 教員採用   | 「京都府教育委員会説明会」            |
| 9. 4月28日（木）  | 教員採用   | 「和歌山県教育委員会説明会」           |
| 10. 5月9日（月）  | 教員採用   | 「奈良県教育委員会説明会」            |
| 11. 5月10日（火） | 教員採用   | 「大阪府福祉専門職職場説明会」          |
| 12. 5月17日（火） | 公務員    | 「兵庫県環境科学職採用試験直前相談会」      |
| 13. 5月30日（月） | 就職活動支援 | 「就職活動&インターンシップスタートアップ講座」 |
| 14. 6月2日（木）  | 教員採用   | 「私学教員への道」                |

- |               |        |                      |
|---------------|--------|----------------------|
| 15. 6月21日(火)  | 公務員    | 「60分でわかる公務員試験」       |
| 16. 6月22日(水)  | 公務員    | 「心理・福祉系公務員」          |
| 17. 7月4日(月)   | 就職活動支援 | 「GD体験講座」             |
| 18. 7月26日(火)  | 就職活動支援 | 「GD練習会」              |
| 19. 10月27日(木) | 教員採用   | 「私学教員セミナー(基本編)」      |
| 20. 11月2日(水)  | 教員採用   | 「私学教員セミナー(対策編)」      |
| 21. 11月1日(火)  | 就職活動支援 | 「GD練習会」              |
| 22. 11月8日(火)  | 教員採用   | 「神戸市福祉職説明会」          |
| 23. 11月9日(水)  | 就職活動支援 | 「GD練習会」              |
| 24. 11月10日(木) | 公務員    | 「心理福祉系公務員セミナー」       |
| 25. 11月14日(月) | 教員採用   | 「教員採用スタートアップガイダンス」   |
| 26. 11月15日(火) | 公務員    | 「行政系公務員セミナー」         |
| 27. 11月16日(水) | 就職活動支援 | 「不動産業界を知ろう!&就職相談会」   |
| 28. 11月17日(木) | 就職活動支援 | 「GD練習会」              |
| 29. 12月6日(火)  | 教員採用   | 「神戸市教育委員会説明会」        |
| 30. 12月7日(水)  | 教員採用   | 「京都市教育委員会説明会」        |
| 31. 12月8日(木)  | 教員採用   | 「大阪府豊能地区教職員人事協議会説明会」 |
| 32. 12月13日(火) | 教員採用   | 「兵庫県教育委員会説明会」        |
| 33. 12月14日(水) | 教員採用   | 「大阪府教育委員会説明会」        |
| 34. 12月15日(木) | 教員採用   | 「京都府教育委員会説明会」        |
| 35. 1月17日(火)  | 就職活動支援 | 「GD練習会」              |
| 36. 1月18日(水)  | 就職活動支援 | 「GD練習会」              |
| 37. 1月24日(火)  | 公務員    | 「行政系公務員セミナー」         |
| 38. 1月26日(木)  | 就職活動支援 | 「GD練習会」              |
| 39. 3月23日(木)  | 公務員    | 「環境科学職説明会」           |

(キャリアサポートセンター運営委員会委員長 澤 宗則)

(キャリアサポートセンター運営委員会委員長 澤宗則)

### 6.1.2. 学振特別研究員申請支援

学生委員会の主催の「学振特別研究員への応募のススメ」と題したセミナーを令和4年4月6日(水)に対面(大会議室)及びZoomによるWeb開催を併用するハイブリッド方式で実施した。

青木茂樹教授より特別研究員制度の概要についての説明、佐藤春実教授より審査委員経験を踏まえた申請書作成などに関するアドバイスがなされた。さらに、人間発達環境学研究科で採用されている特別研究員2名により、採用に至る経験談や申請や審査に関わる留意点などの紹介がなされた。

対面での参加者は18名、オンラインでの参加者は11名、合計29名の参加と、多くの参加者があった。なお、令和4年度特別研究員DC採用者は、新規で4名(DC1が2名、DC2が2名)であった。DC採用者の内3名は本セミナーの参加者であった。昨年と同様に今回も好評であった。

○「学振特別研究員への応募のススメ」

・日時:令和4年4月6日(水)11:00~12:30 対面(大会議室)とオンライン(zoom)開催の併用

- 1) 特別研究員制度の概要と本研究科の現状(青木茂樹 教授)
- 2) 審査・選考の実際-審査経験者の立場から(佐藤春実 教授)
- 3) 申請の実際-応募者の立場から(1)(人間発達専攻大学院生)
- 4) 申請の実際-応募者の立場から(2)(人間環境学専攻大学院生)

(学生委員会委員長 山下晃一)

## 6.2. 卒業・修了後の進路

令和4年度の発達科学部卒業生・国際人間科学部卒業生の就職状況は、概ね良好であった。博士課程前期課程修了生も企業や公務員への就職者数や進学者数ほぼ例年通りであった。博士課程後期課程は学部や博士課程前期課程と異なり、特に研究職の場合は公募による就職が主となるため年度ごとに様相が異なるが、常勤の大学教員および学振特別研究員(PD, RPD)が6名、公立学校教員2名、公務員1名など、専門性を活かしたキャリア選択を実現しており、就職状況は概ね良好であった。進路状況、産業別就職者数、大学院進学者数などの詳細は『資料編』に記載した。

(学生委員会委員長 山下晃一)

## 7. 研究

### 7.1. 今年度の特長

#### 7.1.1. 研究動向

##### (1) 本研究科教員の研究活動

本研究科における過去6年間の研究活動の実績は、下表のとおり、概ね順調に推移してきている。令和4年度の活動(KUIDをもとに調査)は、「論文」365件、「著書」53件となっておりここ数年の値と同等であるが、「研究発表等」については新型コロナウイルスの影響と思われるが例年に較べて低い数字が続いている。

	平成29年度	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度
論文	396	310	319	326	396	365
著書数	67	79	53	63	45	53
研究発表等	432	474	440	282	349	372

##### (2) 研究科ミッションの実現に向けた共同研究への支援

本研究科では、研究科のミッションの実現に向けた研究の推進・発展を図ることを目的として、「研究推進支援経費」を継続的に設定してきた。

すなわち、複雑・重層化する国内外の社会的課題を克服し、多世代・多様な人々の安全・安心で豊かな生活(well-being)を実現するためには、課題解決の基盤となるコミュニティにおける社会関係資本(社会的ネットワークにおける人間関係や信頼関係、社会的結束力)の構築や持続可能な環境共生社会の形成が急務である。このことを踏まえ、「研究推進支援経費」は、人間発達環境学研究科がこれまで蓄積してきた研究教育活動の成果を活かした先端的かつ独創的な研究(人間発達環境学研究科



の機能強化に資する研究)をより一層推進することを目的として、領域横断的型プロジェクト研究や文理融合型プロジェクト研究、国際共同研究に重点配分するとともに、若手教員による積極的な申請を奨励した。

令和4年度に研究推進委員会にて選定した共同研究は、以下のとおりである。

- ① 研究課題：遠隔心理支援（オンライン・カウンセリング）の問題点の克服及び限界に関する質的研究～実践者へのインタビューを通して～  
研究代表者：伊藤俊樹  
共同研究者：安達友紀，加藤佳子，津田英二，長坂耕作，山根隆宏，吉田圭吾，河崎佳子，相澤直樹  
決 定 額：600 千円
- ② 研究課題：位置測位システムを活用したリスク・マネジメントに関する実践的研究～園における保健関連データの収集と解析～  
研究代表者：北野幸子  
共同研究者：岡部恭幸，渡邊隆信，村山留美子  
決 定 額：600 千円
- ③ 研究課題：持続可能なメガシティに向けた生態環境、経済、社会の多様性と保全手法の解明  
研究代表者：内山愉太  
共同研究者：佐藤真行，丑丸敦史，源利文，清野未恵子  
決 定 額：600 千円
- ④ 研究課題：位相的データ解析を応用した客観的な分子料理の創出手法の確立  
研究代表者：ESCOLAR, Emerson Gaw  
共同研究者：湯浅正洋  
決 定 額：800 千円
- ⑤ 研究課題：創造性支援のための視覚－聴覚の結びつきに着目した映像音楽制作ワークショップの実施と定量的な効果検証  
研究代表者：余田有希子  
共同研究者：清水大地  
決 定 額：700 千円

(人間発達環境学研究科長 近藤徳彦)

### 7.1.2. 学生の受賞

令和4年度における大学院生の受賞は以下の通りである。

### 【人間発達専攻】

古村真帆：2022 年度日本特別ニーズ教育学会奨励賞

受賞論文：古村真帆（2021）通常の学級における知的障害特別支援学級在籍児童の授業参加：「学び合い」・自由進度学習を取り入れる学級の事例研究— SNE ジャーナル，27

古村真帆：2022 年度 BEST PRESENTATION AWARD

(ICISE 2022: XVI. International Conference on Inclusive and Special Education)

Kim Nahyun, シニア向け SNS における弱い紐帯の形成と心理的効果：シニアのオンラインコミュニティの特徴とコミュニケーション行動，2022 年度第 56 次 公益財団法人吉田秀雄記念事業財団研究助成 大学院生部

Kim Nahyun, 国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）の次世代研究者挑戦的研究プログラム（SPRING）事業に「異分野共創による次世代卓越博士人材育成プロジェクト」神戸大学 SPRING スカラシップ研究学生（2021 年 11 月～2024 年 3 月） 令和 4 年度「学生地域アクションプラン」採択「UR グリーンヒルズ六甲における社会的交流促進活動」採択菊池辰哉代表

受賞者：森広薫

受賞名：第 21 回日本電気生理運動学会大会・第 9 回計測自動制御学会電気生理運動学部会研究会（若手最優秀演題賞）

受賞演題：認知課題中の静的立位における体性感覚フィードバックの貢献

受賞者：本山大暉・石井千奈美・奥田遥・吉口尚樹・三浦敬太・松崎淳・長ヶ原誠（2022）

受賞名：日本生涯スポーツ学会第 24 回学会大会ポスター発表奨励賞

受賞演題：成人層におけるスポーツへの質的関与が運動実施頻度に及ぼす影響の検討—市民調査による男女比較分析を通じて—

高橋あおい（2022）神戸大学・レスポンシブル・ケア月間ポスター表彰

後藤聡美（2022）日本福祉教育・ボランティア学習学会大会第 28 回研究大会大会発表賞，11 月 27 日

### 【人間環境学専攻】

受賞者：谷口聖太（博士課程前期課程 2 年，指導教員：近江戸伸子）

賞の名称：神戸市の緑に関する普及・啓発に寄与する調査・研究論文 優秀賞

受賞対象：森林植物園アジサイの遺伝資源カタログの構築

受賞年月：令和 4 年 3 月 28 日（前年度記載していない）

受賞理由：研究論文が優秀と評価されたため

受賞者：瀬川智明(博士前期課程2年, 指導教員：佐藤春実)

賞の名称：神戸大学 研究基盤センター 若手フロンティア研究会・極低温部門賞 (ポスター賞)

受賞対象：ラマン分光法を用いたPCLの海洋分解過程の観察

受賞年月：令和4年12月20日

受賞理由：発表内容が素晴らしいと評価されたため

(学生委員会委員長 山下晃一)

## 7.2. 学術 Weeks

学術 WEEKS は「国内外の学術交流活動を通して、大学院生・学部学生の視野を広げ、研究会の企画・運営・発表などの技能習得に資すること」を目的とした本研究科独自の取り組みである。毎年、秋期を中心として海外・国内から多くの研究者を招聘し、研究集会等の学術交流を行っている。多様な研究領域を擁する本研究科の特色が存分に活かされた取り組みであり、良質な領域横断的プログラムが提供されてきた。多くの大学院生・学部生にとって、様々な分野の国際交流を通して、自分の研究を見つめ直し、研究会の企画、運営、発表などの多くのスキルを習得するための有益な機会となっている。

本年度は、新型コロナウイルスの感染状況が徐々に改善する中、申請数に若干の回復の兆しがみられるとともに、なおオンライン形式での開催が多数を占める中で、少数ではあるが対面で実施された企画もあった。企画内容としては、教育、音楽、美術、造詣等の領域を中心に、国内外の研究者・実践家との連携を通じて、人間発達をめぐる最先端の課題について大学院生、学生を交えた活発な議論や意見交換がなされるシンポジウム形式での試みや、オンライン時代の協働型アート製作を提案する試み、多文化的、文化伝承的な視点から芸術の新たな可能性を模索する試みなど、グローバルな視点での取り組みが活発に展開された。いずれも新型コロナウイルスによる世界的な混乱からの回復と、その経験を糧とする新たな人間発達研究の飛躍を予感させるものであった。個別の企画内容に関しては以下の例を参照されたい。

(学術 WEEKS2022WG 主査 相澤直樹)

### 7.2.1 学術 Weeks の各事業・セミナー

#### (1) アーティストグループ「Videokaffe」の女たち

【日程】8月29日(月) 18:00~20:00

【参加者】40名

【概要】2011年に生まれた、アート・テクノロジー・クラフトマンシップを横断するクリエイターのグループ「Videokaffe」。彼らは、製作活動のための物理的な拠点を持たず、テクノロジーを用いてダイナミックな活動を続けている。そのグループのメンバーのうち、女性3名を登壇者とし、アーティストとしてのキャリアや、芸術の分野で活動するための方法、アイデア、インスピレーションについてレクチャーが行われた。レクチャーはフィンランドのトゥルクとアメリカのシカゴ、神戸を結んでリアルタイムでつなぎ、神戸からはC.A.P(芸術と計画会議)の山村祥子氏と、神戸大学の学生が参加し、海外と日本の女性アーティストの違いや、多文化的な背景を持つ人々の共同制作について活発なディスカッションが行われた。

(人間発達専攻 野中哲士)

## (2) 美術家・飯川雄大によるワークショップ「0人もしくは1人以上の観客に向けて」

【日程】1月28日(土)、29日(日) 9:00~16:00

【参加者】12名

【概要】現代美術作家飯川雄大氏を招き、参加者が日常的な空間を普段とはまったく異なる視点でとらえ、作品を制作するワークショップを行った。普段は目的のための動線を辿るだけの校内が、動線から解放されて自由に歩き回ることによって、新たな様相を帯びていくことを参加者は体感した。作品を制作したあと、飯川氏と参加者全員で作品を観てまわり、参加者同士で経験を共有した。

(人間発達専攻 野中哲士)

## (3) ライティング(書くこと)の評価はどうあるべきか:「ループリック評価」の批判的検討

【日程】2022年11月19日(土) 13:30~16:30

【参加者】89名

【概要】本企画では、「書くこと」の評価はいかにあるべきかというテーマについて、特に「ループリック評価」という世にも不思議な言葉(なぜループリックという道具が、評価に必須であるかのよう)に全面に出てくるのだろうか?)を検討の中心においた。

登壇者は以下の通りである(所属は開催当時)。話題提供者:石田智敬氏(日本学術振興会特別研究員・京都大学大学院教育学研究科)・松下佳代氏(京都大学大学院教育学研究科)・森本和寿氏(大阪教育大学教育学部)。指定討論者:若松大輔氏(弘前大学大学院教育学研究科)・遠藤貴広氏(福井大学教育・人文社会系部門)・川地亜弥子(神戸大学大学院人間発達環境学研究科)。企画・運営は、神戸大学大学院人間発達環境学研究科人間発達専攻教育方法学研究室で行った。

大学関係者だけでなく、特別支援学校、小学校、中学校、高等学校からもご参加いただいた。開催後の討論を含めた記録冊子を発行し、KERNELで公開した。

<https://da.lib.kobe-u.ac.jp/da/kernel/0100479059/0100479059.pdf>

(人間発達専攻 川地亜弥子)

## (4) 子どもの「生活」を支える教師の教育実践

【日程】2023年3月11日(土) 13:30~15:30

【参加者】8名

【概要】本企画では、子どもの生活を支える教育実践のあり方について議論した。岩川氏には、戦前・戦後を貫く日本の教育には、教師の「応答責任」を軸とした教育実践(responsible praxis)が根づいており、そこから生まれる枠組みの問い直しこそが、子どもの生活を支える教育実践をもたらすものではないか、とのお話があった。また、それを捉えるまなざし、支える人間関係のあり方について、研究者だけでなく参加者の元教員からの語りによって深めることができた。登壇者は以下の通りである。講演者:岩川直樹氏(埼玉大学教育学部)、指定討論者:星川佳加(大阪健康福祉短期大学/博士課程後期課程)、松本圭朗(博士課程後期課程)、司会:川地亜弥子(神戸大学大学院人間発達環境学研究科)。なお、2023年3月末に報告書を発行予定であるが、オンライン公開はせず、希望

者への配布とする。

(人間発達専攻 川地亜弥子)

#### (5) 音楽のトランスボーダーをめぐる vol.6 ～りゅうりえんれんの物語～

【企画者】大田美佐子（人間発達専攻・表現系教員）/森松慶子（同 D2）宮崎萌加（同 M1）

【日程】2023年11月28日（月）

【参加者】51名（学生40名、外部者11名（研究者や劇場関係、メディアなど）

#### 【概要】

音楽文化史ゼミは、2014年から「音楽文化のトランスボーダー」と題して、ジャンルや文化圏、時代などを越境し、新たな問いを投げかける音楽文化の豊かさと可能性を、実際の舞台上演を通して紹介し、アフタートークでは「歴史の忘却」や「文化的記憶」のありかたを問う機会を設けてきた。

第6回目の今回は、シンガーソングライターであり、「ハンセン病療養所の音楽文化」に関する研究者でもある沢知恵のライフワークの一つ《りゅうりえんれんの物語》を通して、この作品が問いかける「文化的記憶」について対話し、思考を深める素晴らしい機会となった。

第二次世界大戦で忘却されてきた重要な記憶を綴った茨木のり子の詩「りゅうりえんれんの物語」を、沢知恵版ではピアノだけでひとりで弾き語る。シンプルな舞台だからこそ音響の果たす役割が際立つこの上演では、あらためて、沢と協働する音響PAの重要性も再認識した。音響PAは、沢の傑出した歌声と語り、間のあり方を十分に活かし、アコースティックな「弾き語り」に、さらにスケールの大きな「叙事演劇」としての醍醐味をもたらした。

忘れられた歴史の記憶に対して、音楽は言語よりも多層的な感情のあり方を示すことができる。沢による《りゅうりえんれんの物語》も茨木のり子の詩の解釈一つの展開として、その創造のプロセスには様々に培われた知や記憶の蓄積が作用している。安易な意味づけを避け、体験者の思考を促し、「文化的記憶」の深部に作用すると考えられる沢の《りゅうりえんれんの物語》を実際に体験し、音楽と社会のあり方への問題意識、「文化的記憶」の捉え方に音楽(劇)の視点から、新しい地平を開くことができたのではないだろうか。また、会場であるC111では舞台創造の教育も行なっているので、その点でも、本上演は、この舞台空間の新たな可能性を示唆する貴重なものになった。

アフタートークでは、茨木のり子の厳しい「告発」に、ユーモアも存在していることをはじめとして、共同企画をした学生たちによる質問に答えるかたちで、以下の点について対話した。

- ・茨木のり子詩「りゅうりえんれんの物語」を歌う契機となった話や、当初、茨木のり子がラジオドラマとして構想していたことなど。
- ・悲惨な話を「歌」にする時に、沢の「歌」にユーモアを感じる点について。
- ・演奏活動と音楽学の研究活動の「相互作用」が質の高い成果をもたらすために重要であること。
- ・(震災復興のための演奏活動で、当時者ではない演奏者との関係性にある戸惑いについての問いに対して)ハンセン病療養所での音楽文化の研究や療養所でのコンサートなど、当事者の視点とは異なる芸術活動も、当事者の「苦しみを分かち合う」という心持ちで続けてきた。

これらの話から、沢氏の創造のプロセス、研究、音楽活動のあり方について、示唆に富む話を聴くことができた。



(人間発達専攻 大田美佐子)

### (6) 感受することからはじめる子供の造形活動とは～福来四郎の指導による目の不自由な子供の粘土作品を感じよう～

【日程】2022年12月10日(土) 13時～16時 対面開催

【会場】神戸大学鶴甲第2キャンパスA棟2階 大会議室

【参加者】神戸大学学部生, 院生, 美術教育関係者, 視覚支援教育関係者, 合計54名

【概要】本会は、福来四郎(1950-1980)が取り組んだ神戸市立盲学校での図画工作・美術科, における粘土制作指導の教育実践を検討することを目的として開催した。会場には福来指導による子供たちの粘土作品を会場に設置し, 参加者がそれらの作品に触れて対話的に鑑賞をした。また, 福来四郎アートコミュニケーションプロジェクトのメンバーによる福来指導作品を活用した教育実践報告を行なった後に参加者間で福来指導作品から現在の私たちが得られる造形教育への視点や今後の美術・造形教育の展望について討議された。なお, 本会では乳幼児の託児所を設けるなど, だれでも参加しやすい環境作りにも取り組んだ。

(人間発達専攻 勅使河原君江)

## 7.3. 研究科支援プロジェクト研究

### (1) 遠隔心理支援(オンライン・カウンセリング)の問題点の克服及び限界に関する質的研究～実践者へのインタビューを通して～

#### 1. 研究目的の概要

本研究では、コロナ禍が始まって2年以上経過した現時点で、遠隔心理支援に慣れてきた心理師(士)が、先行研究で明らかになった遠隔心理支援の問題点を、どのように克服してきたのか或いはできなかったのかをインタビューによって明らかにする。そして、コロナ禍が終わった後の社会(ポストコロナ社会)において、心理支援の新たな一技法である遠隔心理支援をどのように実施したら、より効果的で意味のある支援ができるか、その独自の可能性を考えることを目的とする。

#### 2. 研究組織

① 代表者	伊藤俊樹 (人間発達専攻)	臨床心理学
② 共同研究者	安達友紀 (人間発達専攻)	臨床心理学
	加藤佳子 (人間発達専攻)	健康心理学
	津田英二 (人間発達専攻)	生涯学習論・障害共生支援
	長坂耕作 (人間環境学専攻)	数理情報環境論分野・計算機代数
	山根隆宏 (人間発達専攻)	発達障害児支援
	吉田圭吾 (人間発達専攻)	臨床心理学
	河崎佳子 (人間発達専攻)	発達臨床心理学
	相澤直樹 (人間発達専攻)	臨床心理学

### 3. 研究実績の概要

#### ① 実験計画の立案

インタビュー協力者は現時点でコロナ禍において遠隔心理支援を継続している心理師(士)12名を対象とし、半構造化面接を1人1時間行う。

本研究は、遠隔心理支援における問題点をどのように克服してきたのか、或いは克服できなかったのかをインタビュー調査を通じて実証的に検討するため、申請者ら(2022)の先行研究を参考にして以下の問いを設定する。①適切にコミュニケーションが取れているかという不安をどのように克服したか、その工夫の方法 ②C1.の状況・状態把握の難しさをどのように克服したか、その工夫の方法 ③対面では普通に感じとっていたものが感じとれない点を、どのように克服したか、その工夫の方法 ④病態水準の重たいC1.の適応の難しさをどのように克服したか、その工夫の方法 ⑤緊急事態の対応の難しさをどのように克服したか、その工夫の方法

#### ②データの分析方法

分析は、海外の質的研究ではよく用いられている質的分析法である Thematic Analysis(テーマ分析)(Braun and Clarke 2006)を用いてインタビューを分析する。データはすでに収集済みであり、新年度から分析に入る予定である。

#### ③ 研究成果発表

データの分析結果は、遠隔心理支援に関する国際会議で発表し、遠隔心理支援(telepsychology)に関わる海外ジャーナルに投稿する予定である。本研究課題に関する研究課題で科研費(基盤研究C)或いは、他の外部資金へ応募する予定である。

(担当 伊藤俊樹)

## (2) 創造性支援のための視覚-聴覚の結びつきに着目した映像音楽制作ワークショップの実施と定量的な効果検証

### 1. 研究目的の概要

映像音楽制作は、視覚と聴覚という、人々が世界を捉える際に強く依拠する知覚媒体に関し、その結びつきを主体的に問い直し、その観点を外部に表し共有する営みと考えられる。本研究は、映像音楽制作ワークショップを通して創造性の促進を図り、さらにワークショップの効果・デザインの検証を行うことで、豊かな創造力を育成する教育実践を提案することを目的とする。

なお、教育における創造性育成の重要性は、近年21世紀型教育やSTEAM教育において強く主張されており、本研究はそれらの枠組みにも貢献しうるものである。

## 2. 研究組織

- ① 代表者 余田有希子（人間発達専攻） 音楽音響制作
- ② 共同研究者 清水大地（人間発達専攻） 認知科学，教育心理学

## 3. 研究実績の概要

### ① ワークショップの計画と実施

東京大学教育学部附属中等教育学校において、高校生を対象とした映像音楽制作ワークショップを数回実施した。

### ② 研究成果発表

ワークショップで収集した参加者のデータを元に、デザイン・効果の検証を進めており、本研究成果を学術論文にまとめ関連学会誌へ投稿する予定である（例えば、「教育工学」や「認知科学」など）。更に、検証結果を元にアップデートしたワークショップを、次年度に神戸大学中等教育学校においても実施する予定である。

### ③ 研究費の申請

代表者は本研究課題に関連する研究内容で科研費（基盤研究（C））へ応募した。また共同研究者は、同じく本研究課題に関連する研究内容で平成記念研究助成へ応募し、書類審査、プレゼン映像審査を通過し、現在最終面接審査の結果通知を待っている。

（担当 余田有希子）

## (3) 位置測位システムを活用したリスク・マネジメントに関する実践的研究

### ～園における保健関連データの収集と解析～

#### 1. 研究目的の概要

令和元年から3年にわたり、文部科学省の研究事業「幼児教育の教育課題に対応した指導方法等充実調査研究：ICTや先端技術の活用などを通じた幼児教育の充実の在り方に関する調査研究」に従事した。同研究では、位置測位システムを開発し、園の各室内にロケータを設置し、発信機による子どもと教師の滞在場所、滞在時間、動線、速度・加速度を収集が可能となる設備を設置した。導入および試行的活用を3年間の研究で実施した。同研究により、登園から降園までの園生活における園児の動きを、すべての園児についてリモートで収集することが可能となった。

3年間で環境整備と試行的データの収集解析をすすめたが、昨年度5月にやっと、室内の総合的なデータ収集が可能な環境となった（これまではクラスごとのデータしか収集しできなかった）。よって、本年度は、本格稼働が可能となり、教師が不在な場面におけるケガ等の保健対応場面の解析や、教師が把握し得ないトイレ利用や手洗い等の実態のデータを取集し解析を試みることにした。本研究では、園のリスク・マネジメントに寄与する保健関連データの収集と解析を試みた。

#### 2. 研究組織



- ① 代表者：北野幸子（人間発達専攻）
- ② 共同研究者：岡部恭幸（人間発達専攻、附属学校部長）  
渡邊隆信（人間発達専攻、附属幼稚園長）  
村山留美子（人間環境学専攻）
- ④ 研究協力：神戸大学附属幼稚園

### 3. 研究実績の概要

本研究の結果、教師不在の場で起こったケガ等や、幼児へのヒアリングでは詳細が明らかにされていなかった事例が多々あることが明らかになった。また幼児の説明と実際（その場に実際に居た人物、ケガ等の起こった場所）に一致しない部分を有する事例があることも明らかになった。これらについて、位置測位システムを活用することにより、実態を正確に明らかにすることが可能となった。今日、配置基準の見直しが話題となっているが、制度の見直しに資するデータの提供が今後可能であると考えられる。

個々の保育者との情報交換により、保健データにとどまらず、教師による環境の構成と再構成と、それに関わるクラス全体の個々の幼児の関わりについてのデータも収集し解析することができた。教師の意図的環境構成と再構成により、その環境とかわる幼児の人数、回数、滞在時間が増えていることが明らかになった。保護者のニーズに応じて、トイレの利用状況やケガ等の実態を具体的に伝える上でも活用することができた。

### 4. 研究成果発表

本研究成果の一部を、日本発育発達学会、シンポジウム1「運動・スポーツ、遊びを通じた子どもの育み」において、「乳幼児のウェルビーイングと遊びを通じた育ちと学び」と題して報告した。  
(担当 北野幸子)

## (4) 位相的データ解析を応用した客観的な分子料理の創出手法の確立

### 1. 研究目的の概要

料理は料理人の主観（センスや経験）により創作されるが、1人の料理人が提案できる分子料理の数には当然限界があり、その嗜好性には偏りが生じる。一方、位相的データ解析はデータの「形」に焦点を当て、穴や枝分かれといった特徴を正確に捉える、適用範囲が広い解析手法である。本研究では、既存の料理のデータに位相的データ解析を適用することで「料理空間」の構造を数学的に解明し、その構造からヒントを得て新料理の提案ができると考えた。

### 2. 研究組織

- ①代表者： ESCOLAR, Emerson Gaw（人間環境学専攻）位相的データ解析
- ②共同研究者： 湯浅正洋（人間環境学専攻）食環境科学

### 3. 研究実績の概要

- ① 初期段階のデータ解析を終えて、本研究のアイデアを支持する示唆が得られた。

- ② 複数回のミーティングで、解析方法や解析結果の解釈などについて議論を行った。
- ③ 解析結果は十分な客観性を有していたことから、分子料理の提案と、その調製とおいしさの評価のための準備を行った。
- ④ 継続研究（5. 研究費の申請を参照）で予定している、料理人と連携したうえでの検討内容について議論した。

#### 4. 研究成果発表

研究成果については、論文にまとめて適切な査読付き学術誌に投稿する予定である。

#### 5. 研究費の申請

本研究課題に関連する研究内容で、カシオ科学振興財団第 40 回研究助成金へ応募して、採択された。

(担当 ESCOLAR, Emerson Gaw)

### (5) 持続可能なメガシティに向けた生態環境、経済、社会の多様性と保全手法の解明

#### 1. 研究目的の概要

本研究では、特に問題の集積しているメガシティを対象とし、多様な主体の関与による包摂的な環境マネジメントの基礎となる生態環境、経済、社会の多様性に着目した。特に、都市の生物多様性保全政策の促進や環境意識を向上する条件としての保全管理における多様な主体の関与について、管理行動や意識の多様度の高い場所やコミュニティの特定、そのような多様性が形成される要因の解明を目的とした。

#### 2. 研究組織

- ① 代表者 内山愉太（人間環境学専攻）都市地域環境学，地理情報科学
- ② 共同研究者 佐藤真行（人間環境学専攻）環境経済学，環境政策
- 丑丸敦史（人間環境学専攻）植物生態学，生物多様性科学
- 源 利文（人間環境学専攻）水域生態学，環境 DNA 学
- 清野未恵子（人間発達専攻）自然共生社会，野生動物管理、ESD

#### 3. 研究実績の概要

- ① 調査分析の結果、生態系の管理行動及び意識の多様度の分布が把握され、世代や経験等が異なるアクターの各生態系サービスの認知や保全活動への関与等におけるギャップが解明された。さらに、そのギャップを起因とするアクター間のミスコミュニケーションを防ぐ方策を考察し、管理行動・意識の多様性を活かした複合的アプローチによる生物・生態系保全の促進に貢献する知見を得た。
- ② 今後の国際比較研究を視野に、フィリピンやタイ等のアジア地域の研究者と連携を進め、生態系と社会の多様度に関するデータ解析を国際共同研究の枠組みで行うことを計画することができた。

#### 4. 研究成果発表

- ① Yuta Uchiyama, Green area visitation during the COVID-19 pandemic, Green Infrastructures in the 21st Century: Conversations on the Progress, People's well-being, and Pandemic, International Seminar, 2023年1月31日(招待講演)
- ② 調査分析結果については、論文として取りまとめて国際学術誌(Ecosystem Services等)に投稿する計画である。関連するレビュー論文は既に投稿し、現在査読対応中である。また今後も学会における発表を予定している。

#### 5. 研究費の申請

本研究課題に関連する研究内容で科研費(基盤研究(B)(一般))へ応募し、採択された。

(担当 内山愉太)

#### 7.4. 高度教員養成プログラム

2013年以降、開発研究部門において高度教員養成プログラムを企画・運営している。本プログラムは、グローバル化する知識基盤社会において、教育実践のアクション・リサーチを含む理論を踏まえた実践的研究に主導的に携わり、かつ、国際的にも通用する高度な教育能力および研究能力を備えた教員養成を行うことを目的とし、本学附属学校部と連携しながら実施した。

参加者は人間発達環境学研究科博士課程前期課程の大学院生であり、教員専修免許取得予定(済み)の受講希望者5名のうち4名が高度教員セミナー(詳細<https://www.h.kobe-u.ac.jp/ja/node/281>)を受講し、報告会において自らのアクション・リサーチの研究成果を報告・共有し、本学研究科と附属学校部による修了証を得た。また、参加院生には、国内外の学会等への参加発表支援を当該プログラム予算から行った。

#### 高度教員養成プログラムセミナーの内容

##### 第1回

テーマ：高度教員養成プログラムへ参加するために

講師：本学教員、本学附属学校部担当者

日時：2022年6月17日(金) 17:00~18:30

会場：遠隔(Zoom)

##### 第2回

テーマ：身体発育と運動能力発達の相互作用—発達至適時期と体育科教育—

講師：国土将平(中京大学・教授)

日時：2022年9月30日(金) 17:00~18:30

会場：F255(対面開催)

##### 第3回

テーマ：算数科授業における子どもの話し合いと認知の関連

講師：下村岳人(島根大学・講師)

日時：2022年10月21日(金) 17:00~18:30

会 場： F255（対面開催）

#### 第 4 回

テーマ：「主体的に学習に取り組む態度」の育成と評価：自己調整学習の視点から

講 師：河野麻沙美（上越教育大学・准教授）

日 時： 2022 年 11 月 18 日（金）17:00～18:30

会 場：遠隔（Zoom）

#### 第 5 回

テーマ：教育思想は教育現場において役に立つのか

講 師：平田仁胤（岡山大学・准教授）

日 時： 2022 年 12 月 16 日（金）17:00～18:30

会 場：遠隔（Zoom）

#### 第 6 回

テーマ：幼児期の社会性の育ちを支える基礎研究の役割

講 師：辻弘美（大阪樟蔭女子大学・教授）

日 時： 2023 年 1 月 20 日（金）17:00～18:30

会 場： F255（対面開催）

#### 第 7 回

テーマ：リサーチ報告会

講 師：三村真弓（エリザベト音楽大学・教授）

日 時： 2023 年 2 月 17 日（金）17:00～18:30

会 場： F255（対面開催）

（教育連携推進室長 北野幸子）

### 7.5. 附属中等教育学校を活用した高大接続共同研究

神戸大学が、「グローバルキャリア人の育成」を教育目標に掲げる附属中等教育学校を活用した高大連携・接続の在り方に関して行う研究に対し、人間発達環境学研究科の教員が積極的に協力した。具体的な連携事業としては、附属中等教育学校生徒が参加したプログラムとして、「根源を問い革新を生む国際的科学技术人材育成挑戦プログラム（ROOT プログラム）」といった人間発達環境学研究科が実施するグローバルな課題に関するプログラム等が挙げられる。さらに、附属中等教育学校のインターンシップ学習「KU トライやる」に対して、人間発達環境学研究科の教員が協力し、附属中等教育学校生徒を受け入れた。

また、附属中等教育学校生徒が卒業研究として取り組む「課題研究」に、人間発達環境学研究科のSS 研究アドバイザーなど複数の教員が、研究の進め方や分析のしかたについての助言などを行った。プログラムを実施した。また、優秀者発表会においても講評を行った。附属中等教育学校で開催された「授業研究会」及び「スーパーサイエンスハイスクール（SSH）報告会」において、人間発達環境学研究科の教員が多数指導助言を行った。また、このことは、数理・データサイエンスセンター主催「第2回中学生・高校生データサイエンスコンテスト」における附属中等教育学校生徒の「優秀発表賞」2件の受賞に繋がるきっかけとなった。

## 7.6. 研究推進

### 7.6.1. 研究推進委員会

本委員会は研究科長，副研究科長，専攻長及びその他研究科長が必要と認めた者として発達科学部学科長，国際人間科学部学科長（グローバル文化学科長を除く）を加えた8名で構成され，研究科における共同研究の推進，研究シーズの発見と育成，外部資金の獲得に向けた組織的対応等について議論を行った。

令和4年度の検討事項は以下のとおりである。

	検討事項
第1回（4月4日）	1. 研究科長が必要と認める委員 2. 令和4年度科研（新規）・特別研究員採択数 3. 学振特別研究員DCの申請支援の取り組みについて 4. 学内・部局内プロジェクト等 5. 学外プロジェクト等
第2回（5月6日）	1. SPARCと研究拠点 2. 若手賞等 3. SPRING学生研究費 4. 2021年度「研究推進支援経費」報告書について
第3回（6月3日）	1. SPARC申請 2. 若手賞等 3. 研究推進支援経費（2022年度募集、報告書）
第4回（7月1日）	1. 研究推進支援経費（2022年度）
第5回（9月2日）	1. 若手教員長期海外派遣事業 2. 外部資金（科研費、その他）
第6回（10月14日）	1. PD・DC採択状況 2. JST「戦略的創造研究推進事業（社会技術研究開発）SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム」

(研究推進委員会委員長 近藤徳彦)

### 7.6.2. 研究倫理審査委員会

本年度は140件の申請があり，53件が承認，84件が条件付承認，1件が変更の勧告，2件の非該当，取り下げ0件であった。なお，昨年度の申請件数は126件であった。よって本年度は昨年度より，さらに件数が増えた。

今年度は研究科構成員以外の委員の協力も得ることができた。

大学院博士課程前期および後期の入学者・進学者対象ガイダンスにおいて，申請にかかわる情報を提供した。特に「APRIN eラーニングプログラム（eAPRIN：イー・エイプリン）」の受講が必須となったことについて，周知徹底した。

2022年4月からは、申請フォームへの押印欄がなくなり、効率化がはかられた。

(研究倫理審査委員会委員長 北野幸子)

### 7.6.3. 紀要編集委員会

新型コロナウイルス感染拡大に伴い、昨年度までに引き続き、本年度においても、委員会会議はオンライン会議とメール回議であった。

「神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要」第16巻第1号と第2号を編集・発行した。第1号(2022年9月30日発行)は、研究論文7編、研究報告2編であった。第2号(2023年3月31日発行)は、研究論文8編、研究報告4編であった。

(研究紀要編集委員会委員長 山口悦司)

## 7.7. 各専攻の研究

### 7.7.1. 人間発達専攻

#### ●心理系

##### (1) 国際共同研究

本専攻研究者：林 創

研究課題：子どもの社会的な心の国際比較に関する発達心理学的研究

研究資金：国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(A)) (代表者：林 創)

研究概要：幼児期から児童期の子どもを対象に、社会性の発達の程度を表す指標となりうる「嘘」と「道徳判断」の発達について、普遍性と文化的独自性を検討することを目的とする。

本専攻研究者：古谷真樹

共同研究者：Rosie Gibson (Massey University), Mirjam Münch (Massey University) Mikaela Carter (Massey University), Ramil Adhikari (Massey University), Harshi Shetty (Massey University), Kenji Hall (Kobe University)

研究課題：Caring around the clock: Providing a framework for improving sleep health of family carers.

研究資金：Lotteries Health Research projects (代表：Rosie Gibson)

研究概要：COVID-19 期間中における在宅介護者の睡眠と Well-being に対する社会的・身体的影響について検討し、よりよい支援方法を提案する。

本専攻研究者：加藤佳子

共同研究者：Schwerdtfeger Andreas (Graz university), Roswith Roth (Graz university), Rominger Christian (Graz university), Yamane Takahiro (Kobe university), Fruyashik Tomohiro (Kobe university)

研究課題：心の健康の保持増進のための国際支援プログラム評価指標の開発

研究資金：国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B)) (代表者：加藤佳子)

研究概要：心の支援を行う支援関係者の心の健康の保持増進のための国際支援プログラム評価指標を

開発することを目的とする。

## (2) 国内共同研究等

科研（代表者）

本専攻研究者：山本健太

研究課題：成人自閉症者の現実場面における過去の記憶と未来思考の機能の解明

研究資金：科学研究費補助金・若手研究（代表：山本健太）

研究概要：自閉スペクトラム症者の記憶/未来思考の特徴を明らかにし、新たな支援手法の第一歩を生み出すことを目的とする。

本専攻研究者：山本健太

研究課題：自閉スペクトラム症者のエピソード記憶とモニタリングー新たな障害仮説に向けて一

研究資金：科学研究費補助金・研究成果公開促進費（学術図書）（代表：山本健太）

研究概要：これまでに自閉スペクトラム症の症状を説明する3つの心理学的仮説（心の理論障害仮説、中枢性統合障害仮説、実行機能障害仮説）に加えて、近年注目されている絵自閉症者のエピソード記憶の観点から新たな障害仮説の提案を目指す。

本専攻研究者：赤木和重

研究課題：小学生は授業スタンダードをどのようにとらえているか

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究C（代表：赤木和重）

研究概要：小学生が授業スタンダードについてどのように認識しているのかを明らかにする。

本専攻研究者：林 創

研究課題：社会性の発達を左右する認知バイアスに関する心理学的研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究(C)（代表者：林 創）

研究概要：子どもと大人を対象に、特に認知バイアスについて着目し、こうしたバイアスが社会性が発達していく上で左右することを実証的に明らかにする。

本専攻研究者：坂本美紀

共同研究者：村山留美子（本専攻）、山口悦司（本専攻）

研究課題：意思決定エージェントとしての市民を育成する変革的リスクリテラシーの指導法と評価法

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的研究（萌芽）（代表：坂本美紀）

研究概要：教育心理学とリスク学などの学際的な研究として、指導法と評価法の開発に取り組んでいる。

本専攻研究者：坂本美紀

共同研究者：山口悦司（本専攻）、伊藤真之（本専攻）、松河秀哉（東北大学）、益川弘如（聖心女子大学）

研究課題：市民の科学への参加・支援を加速化するオープンサイエンス・リテラシーの教師教育

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（B）（一般）（代表：坂本美紀）

研究概要：教育心理学と科学教育などの学際的な研究として、教師教育研究に取り組んでいる。

本専攻研究者：安達友紀

研究課題：慢性神経障害性疼痛に対する痛み焦点化催眠と催眠認知療法の効果検証

研究資金：科学研究費助成事業 若手研究（代表：安達友紀）

研究概要：慢性神経障害性疼痛患者への催眠療法と催眠認知療法の効果を検証する

本専攻研究者：伊藤俊樹

研究課題：ジャンル別の異なった芸術家の「自我のための退行」のありようの違いに関する研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（C）（代表者：伊藤俊樹）

研究概要：ジャンルが異なった芸術家がロールシャッハ法において、どのように異なった「自我のための」退行を示すのかを研究するもの

本専攻研究者：山根隆宏

研究課題：自閉症児の親におけるオンラインソーシャルサポートの実態と有効性に関する縦断的検討

研究資金：科学研究費助成事業 若手研究（代表者：山根隆宏）

研究概要：自閉症児の親におけるオンラインソーシャルサポートの利用実態と、その有効性について縦断的な調査を通して検討するものである。

本専攻研究者：山根隆宏

共同研究者：原田新（岡山大学）、江上弘晃（神戸大学附属特別支援学校）

研究課題：成人期知的障害者家族におけるウェルビーイングへの「働くこと」・余暇の態度の影響

研究資金：科学研究費助成事業 挑戦的研究（萌芽）

研究概要：本研究は知的障害者やその重要な他者（親、施設職員）を対象に、賃金労働に限らず広い意味で社会の一員として活動する「働くこと」及び余暇活動に対する態度に焦点を当て、混合研究法など多様なアプローチからウェルビーイングもたらす影響を解明する。

本専攻研究者：加藤佳子

共同研究者：黒川通典（摂南大学）、黒川浩美（大阪青山大学）、高橋路子（神戸大学附属病院）、山本育子（神戸大学附属病院）、三ヶ尻礼子（神戸大学附属病院）

研究課題：行動科学を活用する食習慣改善支援ツールの開発

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（C）（代表者：加藤佳子）

研究概要：食習慣改善を支援する専門職支援者を対象に、行動科学に基づいた食習慣改善支援に必要なスキルを明確化する。そしてその熟達度に応じたスキル獲得のためのツールを開発する。

科研（分担者）



本専攻研究者：相澤直樹

共同研究者：石橋正浩（大阪教育大学），齋藤大輔（金沢大学），内海千種（徳島大学），牧田潔（愛知学院大学），平石博敏（金沢大学）

研究課題：自己制御課題としてのロールシャッハ法の神経基盤の探求

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)（代表：石橋正浩）

研究概要：fMRI を用いてロールシャッハ法課題実施時の脳機能を自己制御課題の観点から検討する。

本専攻研究者：赤木和重

研究課題：日本・ニュージーランド・イタリアにおける保育カリキュラムの創造と評価の研究

共同研究者：塩崎美穂（東洋英和女学院大学），加藤繁美（東京家政大学），川田学（北海道大学）ほか

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究 B（代表：塩崎美穂）

研究概要：日本・ニュージーランド・イタリアにおける保育カリキュラムについて比較検討を行う。

本専攻研究者：赤木和重

研究課題：対話的事例シナリオを核とした教員養成カリキュラムの創造と評価方法の開発研究

共同研究者：山田康彦（三重大学），森脇建彦（三重大学），根津知佳子（日本女子大学）ほか

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究 C（代表：山田康彦）

研究概要：教員養成課程の大学の授業カリキュラムについて、対話的事例シナリオを用いた実証的研究を通して明らかにする。

本専攻研究者：赤木和重

研究課題：障害者の文化芸術活動の実践分析に基づくエンパワメント評価及び支援システム開発研究

共同研究者：津田英二（本専攻），稲原美苗（本専攻），松岡広路（本専攻），岡崎香奈（本専攻），大田美佐子（本専攻），清野未恵子（本専攻）

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究 B（代表：津田英二）

研究概要：障害者の文化芸術活動の実践活動に注目して、エンパワメント評価の支援方法について検討を行う。

本専攻研究者：山本健太

共同研究者：倉田誠（東京医科大学），安井眞奈美（国際日本文化研究センター），新本万里子（国立民族学博物館），風間計博（京都大学），紺谷あかり（明治学院大学）

研究課題：生涯を通じたヒト-モノの関係性の生成と変化に関する人類学的研究

研究資金：科学研究費補助金・学術変革領域研究 (A)（代表：倉田誠）

研究概要：オセアニアや日本の諸社会を対象として、主に障害者や女性に焦点をあて、人びとが生涯にわたって様々なモノとどのように関わり、そのような関わりが当該社会の生涯観の中でいかに考えられているかを検討する。

本専攻研究者：古谷真樹

共同研究者：林光緒（広島大学）、田中秀樹（広島国際大学）、笹澤吉明（琉球大学）、樋口重和（九州大学）、山本隆一郎（江戸川大学）、田村典久（広島大学）、綾部直子（岩手大学）、高田律美（人間環境大学）

研究課題：睡眠教育プログラムの教育現場における実証研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（B）（代表：岡靖哲）

研究概要：未就学児から大学生までの各年齢層において効果的な睡眠教育を検証し、睡眠の知識の普及と睡眠行動改善を通して健全な睡眠を取り戻せるよう、全年齢層を通じた継続的な睡眠教育を教育現場において実証的に検討する。

本専攻研究者：安達友紀

共同研究者：細越寛樹（関西大学）、岩佐和典（大阪府立大学）、福森崇貴（徳島大学）、高岸百合子（駿河台大学）、大江悠樹（杏林大学）、平子雪乃（明治学院大学）、横山仁史（広島大学）、柴田正彦（奈良学園大学）、伊藤正哉（国立精神・神経医療研究センター）、堀越勝（国立精神・神経医療研究センター）

研究課題：慢性痛に対する認知行動療法の無作為化比較試験による効果検証とその普及に関する研究

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究（B）（代表：細越寛樹）

研究概要：慢性疼痛に対する認知行動療法の有効性を無作為化比較試験により検証する

本専攻研究者：山根隆宏

共同研究者：石本雄真（鳥取大学）、松本有貴（徳島文理大学）

研究課題：放課後等デイサービスにおける支援機能向上に資する複層的な支援リソースの開発と検証

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究 C（代表：石本雄真）

研究概要：放課後等デイサービスで実施可能でかつ、発達障害児の不安の問題に介入できるプログラムを開発すること、および効果的な研修システムの開発とその効果検証を行うものである。

地方公共団体・神戸大学など

本専攻研究者：山本健太

連携担当者：麻田美紀（しごとサポート東部）、青木剛（しごとサポート西部）、石倉賢（神戸市障害福祉局）

研究課題：大学における障害のある人の超短時間雇用の有効性の検討ーインクルーシブシティ KOBE を目指してー

研究資金：令和4年度大学発アーバンイノベーション神戸（若手研究者の研究活動経費助成制度）（代表：山本健太）

研究概要：神戸市内における障害のある人を対象に週に1回1時間だけ研究室で雇用し月額収入や活動量、精神的健康について検討する。また、学生や附属学校園とも連携し多様な雇用スタイルの創出の第一歩を生み出す。

本専攻研究者：赤木和重

研究課題：公立小学校内における「校内フリースペース」の開発と展開

研究資金：地域中核イノベーション事業に係る地域連携事業（代表者：赤木和重）

研究概要：公立小学校における不登校などの子どもに対して、校内フリースペースを設置することで、再包摂の試みを行うとともに、学校の再定義を試みる。

本専攻研究者：伊藤俊樹

共同研究者：安達友紀，加藤佳子，津田英二，長坂耕作，山根隆宏，吉田圭吾，河崎佳子，相澤直樹

研究資金：神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究推進支援経費

研究課題：遠隔心理支援（オンライン・カウンセリング）の問題点の克服及び限界に関する質的研究

本専攻研究者：山根隆宏

共同研究者：石本雄真（鳥取大学），榎原久直（神戸松蔭女子学院大学）

研究課題：神戸市内の放課後等デイサービスの支援力向上を目的とした実践型研修プログラム開発

研究資金：令和3年度大学発アーバンイノベーション神戸（若手研究者の研究活動経費助成制度）（代表者：山根隆宏）

研究概要：神戸市内の児童発達支援事業所及び放課後等デイサービス事業所の研修ニーズを把握し、特に障害児の感情調整支援と家族支援に特化した実践型研修プログラムを開発し、その効果を検証する。

本専攻研究者：加藤佳子

協働実施者：兵庫県

プロジェクト名：健康ビッグデータを活用した県民の健康づくり事業（地域特性に応じた媒体作成、市町向け研修の実施）

プロジェクト概要：National Data Base から抽出した特定健診時のデータを用い、兵庫県の市区町ごとで、メタボリックシンドロームに関わる指標（生理指標、生活習慣等）について継時的な傾向を分析し、これに基づいた媒体を作成するためのプログラムを開発し市区町向けの研修を実施した。

民間共同研究

本専攻研究者：山本健太

研究課題：Mixed Reality（複合現実）を用いた知的障害児への手順支援

研究資金：日本特殊教育学会研究奨励助成（代表：山本健太）

研究概要：知的障害のある生徒が抱える手順理解の困難さについて、従来の紙ベースの支援とホログラムが提示される Mixed Reality を用いた支援の比較をおこない、その有効性を検討する。

本専攻研究者：山根隆宏

共同研究者：石本雄真（鳥取大学），株式会社凸凹ベース

研究課題：不安低減を目的とした発達支援プログラムの実施と効果検証

研究資金：産学共同研究（代表：山根隆宏）

研究概要：発達障害児の不安低減を目的とした発達支援プログラムを実施し，その効果検証と，効果に関わる要因について解明する。

### (3) 論文

国際共著論文

Web of Science 収録誌掲載論文 \* (10%論文にはマークを付す)

査読付き論文

Yamamoto K., & Masumoto K. (2023). Memory for actions and reality monitoring in adults with autism spectrum disorder. *Memory*, in press.

Masumoto K., Sato K., Harada K., Yamamoto, K., & Shiozaki, M. (2022). Emotional valence of self-defining memories in older adults: Longitudinal study. *Consciousness and Cognition*, 106, 103431.

Masumoto K., Tian M., & Yamamoto K. (2022). Age differences in option choice: Is the option framing effect observed among older adults? *Frontiers in Psychology*. 5947.

Furutani M., Guo T., Hall K., Zhou X. (2022). Relationship between mental health and the quality of sleep during the first self-restraint in Japanese workers: a cross-sectional survey. *Health Psychology and Behavioral Medicine*, 10 (1), 748 - 761.

Enomoto K., Adachi T., Fujino H., Kugo M., Tatsumi S., Sasaki J. (2022). Comparison of the effectiveness of cognitive behavioral therapy for insomnia, cognitive behavioral therapy for pain, and hybrid cognitive behavioral therapy for insomnia and pain in individuals with comorbid insomnia and chronic pain: A systematic review and network meta-analysis. *Sleep Medicine Reviews*, 66, 101693.

Kato Y., Kojima A., & Hu C. (2022). Relationships between IKIGAI well-being and motivation for autonomous regulation of eating and exercise for health - included the relevance between sense of coherence and social support. *International Journal of Behavioral Medicine*, Published online.

Kato Y., Nagano K. Hu C. & Furuyashiki T. (2022). Relationship between dairy product intake and sense of coherence among middle and high school students in Japan. *Plos One* 17(12) e0279232.

赤木和重・川地亜弥子・津田英二・河南 勝・佐藤知子・殿垣亮子・柴田真砂代・黒川陽司（印刷中）  
知的障害青年の大学教育プログラムはなにをもたらしたか？：教育専門職養成大学における3年間の

前岡良汰・赤木和重 (2022) 小学校教師は授業スタンダードを採用したいのか：自校児童の授業スタンダードに対する調査結果を踏まえた検討 心理科学, 43(2), 106-115.

石井正幸・赤木和重 (2022) 特別支援学校教員を対象とした協調運動の困難な知的障害児の理解と支援に関する意識調査 SNE ジャーナル, 28, 148-161.

Sakamoto, M., Yamaguchi, E., Yamamoto, T., Tamai, R., & Matano, M. (2022). Redesign and evaluation of instruction for primary students' socioscientific decision-making toward consensus building. In G. S. Carvalho, A. S. Afonso & Z. Anastacio (Eds.), *Fostering scientific citizenship in an uncertain world (Proceedings of ESERA 2021)*, Part 8 (co-ed. A. Laherto & E. Rybska), (pp.569-577). Braga: CIEC, University of Minho. ISBN 978-972-8952-82-2

Enomoto K., Adachi T., Mibu A., Tanaka K., Fukui S., Nakanishi M., Iwashita N., Sasaki J., Nishigami T. (2022). Validation of the Japanese version of the patterns of activity measure-pain in individuals with chronic pain. *BioPsychoSocial Medicine*, 16(1), 19.

伊藤俊樹・野上 慶子・清原 舞子・山根 隆宏・安達 友紀・吉田 圭吾・河崎 佳子・相澤 直樹・谷口 あや (2022) コロナ禍の遠隔心理支援の利点と問題点のインタビューによる検討 心理臨床学研究 40(2), 161-167.

Ito, T. & Osada, J. (2022) Relationship between liking the personal robot 'PaPeRo' and personality traits—Personality traits and Robot Design *Journal of Science of Design* 6(1), 85-94

Ito, T. & Osada, J. (2022) Relationship between liking the personal robot 'PaPeRo' and personality in case of elderly people—Personality traits and Robot Design— *Journal of Science of Design (Now Printing)*

石本雄真・原田新・山根隆宏・日瀨淳子・王松・田仲由佳 (印刷中) 大学生の正課外活動経験の諸側面が汎用的技能に与える影響. 日本教育工学会論文誌.

谷 冬彦 (印刷中). 自尊感情の構造に関する研究—Self-Esteem Scale における3因子構造の検証— 神戸大学発達・臨床心理学研究, 22

鈴木田英里・山根隆宏 (印刷中). ABCX モデルに基づく発達障害児をもつ親の心理的危機に家族レジリエンス及び認知的評価が与える影響の検討 自閉症スペクトラム研究, 20, 1-8.

鈴木田英里・山根隆宏 (印刷中) . 発達障害及び知的発達症児・者をもつ家族の家族レジリエンスにはどのような要素がみられるか—Walsh の家族レジリエンス理論に基づく演繹的検討— 神戸大学発達・臨床心理学研究, 22, 32-41.

劉娟・山根隆宏. 中国の自閉スペクトラム症児における応用行動分析に基づいたペアレントトレーニングの現状と課題 神戸大学発達・臨床心理学研究, 21, 22-31.

野上慶子・山根隆宏 (印刷中). 発達障害児の不安症状と母親の精神的健康の改善を目的としたオンラインによる家族認知行動療法プログラムの開発と効果検証. 自閉スペクトラム症研究, 20(2).

中園佐恵子・相澤直樹 (印刷中) 自伝的推論が自己のストーリーを構成する過程の検討. 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 16(2), 19-27.

王 一然・加藤佳子 大学生の健康な食生活における自己制御尺度の信頼性と妥当性の検討 応用心理学研究, 48(2), 34-35.

#### 査読無し論文

赤木和重 (印刷中) 指導に悩む子どもとどう楽しむか：子どもにノッて、自分をネタに 教育

赤木和重・古村真帆・瀬川千裕・川地亜弥子・木下孝司 (2022) コロナ感染拡大下における放課後等デイサービス職員のストレス状況 研究助成論文集 (公益財団法人 明治安田こころの健康財団), 56, 28-37.

伊藤俊樹 日本コラージュ療法学会第 13 回大会シンポジウム コロナ禍におけるアート支援「オンラインによるコラージュ作品のロールプレイの試み」コラージュ療法学研究 13(1), 57-60

鈴木田英里・嶋田梨沙・榊原久直・山根隆宏 (2022) . 「駅名カード」を用いた活動の展開による変化が教室内外でみられた年中男児の感覚運動指導教室における支援 育ちゆく子ども—療育指導事業 (発達クリニック) の実践と研究X—, 84-94.

鈴木田英里 (印刷中) . 娘のことよりも自分自身のこれからについて考えたい母親との面接 神戸大学大学院人間発達環境学研究科発達支援インスティテュート心理教育相談室紀要, 13, 3-14.

野上慶子・山根隆宏・松本有貴 (2022). 発達障害児の不安症改善を目的とした遠隔による家族認知行動療法 (FCBT) プログラムの開発—母親の不安症状にも注目して— 明治安田こころの健康財団 研究助成論文集 (2020 年度) 56, 74-83.

#### (4) 著書

単著

山本健太 (2022). 自閉スペクトラム症者のエピソード記憶とモニタリングー新たな障害仮説に向けてー. ナカニシヤ出版.

共編著

分担執筆

呉文慧・赤木和重 (印刷中) 竹沢清『子どもの真実に出会うとき』全障研出版部 について 田中耕治 (監修)「シリーズ学級経営」 ミネルヴァ書房

WILL 子ども知育研究所 (編・著) 赤木和重 (監修) (2022)『友だちのこまったがわかる絵本：みんなちがってみんないい』金の星社

赤木和重・呉 文慧 (2022) 発達障害の理解と支援：自閉症を中心に 応用心理学ハンドブック編集委員会 (編) 『応用心理学ハンドブック』福村出版 (pp. 252-253)

古谷真樹 (2022) 幼稚園、小学校での睡眠教育と多面的評価ー親子で眠育チャレンジー 『快眠研究と製品開発、社会実装：生体計測から睡眠教育、スリープテック、ウェルネス、地域創生まで』田中秀樹・岩城達也・白川修一郎 (監修) エヌ・ティー・エス, (pp. 418-428)

山根隆宏 (2023). 障がい理解教育といじめ予防 小倉正義 (編) 発達障害といじめー発達の多様性に応える予防と介入 学苑社

山根隆宏 (2022). 資料 渡辺弥生・小泉令三 (編著). ソーシャル・エモーショナル・ラーニング (SEL)：非認知能力を育む教育フレームワーク. 福村出版株式会社.

山根隆宏 (2022). 特別支援教育コーディネーター. 野島一彦 (2022). 臨床心理学中事典. 遠見書房.

翻訳

山根隆宏 (訳) (2022). 第3章 ADHDはどうやって治療されますか？ 辻井正次・鈴木勝昭 (監訳) 子どもが楽しく元気になるための ADHD 支援ガイドブックー親と教師が知っておきたい9つのヒント, 金剛出版.

総説・書評など

赤木和重 (2022) 書評：『発達障害等を有する非行少年と発達支援の研究』 SNE ジャーナル, 28, 162-166.

赤木和重 (2022) おわりにー表現を通して, ひとはやさしく, かしこく, おもしろくなっていくー 神戸大学・学ぶ楽しみ発見プログラム (2021 年度文部科学省委託事業「障害者の多様な学習活動を総

合的に支援するための実践研究」報告書) pp. 153-155.

赤木和重 (2022) 自閉症教育における支援プログラムとの「ほどよい」つきあいかた みんなのねがい, 676, 15-17.

赤木和重 (2023) インクルーシブ体育のハードルを下げよう 体育科教育, 71(2), 9.

赤木和重 (2023) やわらかキョウイクアタマ (第 10 回) 「合理的配慮」ではなく「合理的調整」だったら 教職研修, 605, 62.

(5) シンポジウムの開催など

伊藤俊樹 (大会長) 日本コラージュ療法学会第 13 回大会「コラージュを通して魂の『高み』と『深み』に触れる」開催

(6) 受賞

山根隆宏 令和 4 年度前乃園記念若手優秀論文賞 (Longitudinal psychometric evaluation of the developmental disorder parenting stressor index with Japanese parents of children with autism)

(7) 心理系講座の研究の総括と課題

教育, 発達, 健康, 発達支援などにおける心理に関する課題の解決に向けた研究が, 活発に行われた。これらの研究は人々の QOL(Quality of Life)の向上につながる貴重な研究である。そのため本講座で得られてきた研究成果は, 研究としてとどめ置かれることなく, きれめなく, 社会へとつながっている。2022 年度も産官学共同プロジェクトや地域連携プロジェクトなどの形として, 心理系の研究が展開していることが報告された。特に 2022 年度で顕著であったのは, 地方公共団体や民間から大変多くのファンドの提供があった点であり, 心理系への社会からの期待の高さがうかがわれた。しかしその一方で, 複数の国際共同研究の取り組みが報告されながら, 国際共著論文としてその成果が報告がされなかった点は大きな課題である。

●表現系

(1) 国際共同研究

研究代表(本専攻教員): 野中哲士

共同研究者: 中嶋浩平, 永野光, Fumiya Iida

研究資金: 国際共同研究加速基金 国際共同研究(B)

研究課題: 「探索器官としての手」の創発: 能動的探索が生み出す情報の解明

研究概要: 多様な環境に際して, 知覚すべき対象や形成すべき環境との関係に応じて, 課題特定的なかたちで「探索する手」の動作パターンが柔軟かつリアルタイムで創発する原理の理解に向けた共同研究をケンブリッジ大学工学部 Bio-Inspired Robotics 研究室と行う。



研究代表者（本専攻教員）：岡崎香奈

共同研究者：Elizabeth Coombes(イギリス), Claudia Zanini(ブラジル), Teresa Lesiuk(アメリカ), Jin Hyung Lee(韓国), Penny Warren(ニュージーランド), Francesca Rubbettino(イタリア), Juan Pedro Zambonini(アルゼンチン), Vivian Chan(香港), Baishali Mukherjee(インド)

研究課題：Moving Forward Together- Finding balance between being inclusive and upholding standards in music therapy education, training, and practice.

研究資金：個人研究費

研究概要：World Federation of Music Therapy(世界音楽療法連盟)の養成教育・資格認定委員として、Music Therapy Education and Training Guidelines 作成のワーキンググループを立ち上げ、アメリカ、イギリス、アルゼンチン、イタリア、ブラジル、インド、韓国、香港、ニュージーランドの音楽療法士計10名と研究プロジェクトを進め、22年ぶりに「Music Therapy Education and Training Guidelines」を改訂し、世界音楽療法連盟のホームページに掲載した。また、このプロセスと結果について、Congresso de Latino American Musicoterapia(ラテンアメリカ音楽療法大会 オンライン開催)にて発表した(2022.10.22)。

研究代表者（本専攻教員）：岡崎香奈

研究課題：Development of Nordoff-Robbins Music Therapy Training in Asian countries

研究資金：個人研究費

研究概要：アジアにおけるノードフ・ロビンズ音楽療法の歴史と展開、および文化的社会的背景における現状や課題などについて、韓国 Jeonju University の Department of Creative Arts Therapy, College of Medical Science の Dong Min Kim 助教授と研究プロジェクトを進めている。なお、本研究は2023年度7月にカナダバンクーバーで行われる The 17th World Congress of Music Therapy (第17回世界音楽療法大会)の研究発表に応募され、査読を通過した。

研究代表者（本専攻教員）：岡野真裕

共同研究者：河瀬諭(神戸学院大学)、Olivier Senn(Lucerne University, Switzerland)

研究課題：Experience of Groove Questionnaire: Japanese Translation and Validation

研究資金：個人研究費

研究概要：「音楽を聴いたとき身体を動かしたくなるような快い衝動」として定義される「グルーブ」をどの程度感じたかについて尋ねる「グルーブ体験質問紙」の日本語訳と標準化を進めている。

## (2) 国内共同研究等

研究代表者（本専攻教員）：岸本吉弘

共同研究者：なし

研究課題：オールオーバー絵画の萌芽期における研究—ジャクソン・ポロック「壁画」を中心に—

研究機関：2020年4月1日～2023年3月31日

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要：本研究は、アメリカ抽象表現主義の旗手であるジャクソン・ポロックの円熟期のオールオーバー絵画以前の萌芽期・形成期の作品を対象とする。なかでも 1940 年前半の代表作品「壁画」に着眼し、通史的・美学的な解釈に留まらず、技法・材料的な視点による分析を加え、その上で完成度の高い「再現制作」を試みることで制作プロセスを再現（追体験）することが大きな特徴である。国際的なパンデミックの影響から予定をしていた現地調査が困難な状況下であり、その間はポロック・クラズナー財団が所有する関係資料の閲覧を軸に文献調査と整理を行った。3 年目である本年は漸く予定していたアメリカでの現地調査が可能ともなり、年度末に渡航を予定している。尚、本研究は1年間の延長を申請している。

本専攻研究者：岸本吉弘

研究協力者：大島徹也（多摩美術大学准教授）、吉川民仁（武蔵野美術大学教授）、小川佳夫（ロゾー絵画教室主宰）小池隆英（画家）

研究課題：現代美術（絵画）における抽象表現の可能性

研究資金：構成員の個人研究費及びロゾー絵画教室（民間企業）

研究概要：現代における本格的な抽象美術（絵画）の有り様や可能性を追求すべく、研究会「Studio 138」を2019年に結成した。これは表現者や美術評論家、美術史家等で構成される研究会で、岸本はその創立メンバーである。本年度は3回の研究会を東京・神楽坂のロゾー絵画教室において開催した。また年1度の研究冊子刊行、大島徹也氏監修の展覧会も開催した。

本専攻研究者：岸本吉弘

共同研究者：石川裕敏（大阪府内公立中学校教諭）、圓城寺繁誉（大阪府内公立高校教諭）、河合美和（大手前大学講師）、善住芳枝（親和学園教諭）、真木智子（画家）、渡辺信明（京都市立芸術大学教授）、コーディネーター：尾崎信一郎（鳥取県立博物館館長）

研究課題：ペインタリネスな抽象絵画の有様について

研究資金：ギャラリー白（民間企業）

研究概要：関西近県の活動する抽象画家が集い、拠点であるギャラリー白（大阪・西天満）において大型作品の展示と同時に、トークイベントも併催し、抽象絵画における現状とその可能性を探る試みを実施した。（2022年8月～9月開催。リーフレット「PEINTERLINESS 2022」も作成し、テキスト「ペインタリネスとカラーフィールド」を尾崎信一郎が執筆し、各画家たちも自身の創作論としてのエッセイを同誌に掲載した。）

研究代表者（本専攻教員）：岡崎香奈

研究課題：日本におけるノードフ・ロビズ音楽療法士養成教育の実践と課題

研究資金：個人研究費

研究概要：昨年度に引き続き、即興を中心とした主要音楽療法アプローチでもある「ノードフ・ロビズ音楽療法士」の養成に携わり、聖徳大学、札幌大谷大学、国立音楽大学、名古屋音楽大学、同志社女子大学などの大学教育者・音楽療法研究者と共に実践的なプランを練り、臨床即興の技術がどの

ように身に付くかについて実践研究を行った。また、その成果の一部を日本臨床音楽療法学会第 16 回大会において発表した。岡崎香奈(2022)：「音楽療法における臨床的ピアノ技法のレッスンについて」福岡・久留米市 2022. 10. 30

科研（代表者）

本専攻研究者：野中哲士

研究課題：乳児の「探索する手」を起点とする発達カスケードの実証的理解

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究 B（代表者：野中哲士）

研究概要：乳児が環境を「探索する手」の自発的動作が起点となり、発達の諸相に影響が及ぶ「発達カスケード」現象の統合的な理解を目指す。

科研（代表者）

本専攻研究者：野中哲士

研究課題：モノの性質を深く知る身体動作：工芸における身体技法の現場計測による検討

研究資金：科学研究費助成事業 学術変革領域研究(A)（代表者：野中哲士）

研究概要：工芸の現場を対象とし、環境のダイナミックな変化に適応する「モノを知る動き」の特徴についての検討を通して、身体技法をめぐる新たな学際的研究領域を開拓する。

科研（代表者）

本専攻研究者：谷正人

研究課題：文化環境との関わりからみた即興演奏技能の発達—イラン音楽を事例として

研究資金：基盤研究(C)（代表者：谷正人）

研究概要：本研究課題は、イラン伝統音楽を対象として、演奏家コミュニティという集団的環境のなかで、個々人は即興演奏の技能をどのように発達させているのか——「集団が持つ多層的な社会的・文化的秩序」の網の目の中で、一個人がどのように他者との相互行為によって、即興演奏というコミュニケーション形態を発達させているのかを探るものである。

本専攻研究者：大田美佐子

研究課題：多文化共生時代の舞台芸術文化のダイナミクス — 亡命・占領・共生の視点から

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究 C（代表者：大田美佐子）

研究概要：20 世紀以降の音楽文化のグローバルな状況に着目し、1920 年代から 2020 年の一世紀にわたる長いスパンで、舞台芸術に及ぼした教育・鑑賞・批評・上演のダイナミクスを《三文オペラ》を例に実証的側面から調査し、日本の音楽劇にもたらしている社会派音楽劇の影響を「世界史的視座」から 検証することを目的とする。

科研（代表者）

本専攻研究者：平芳裕子

研究課題：思想としてのファッション-20 世紀後半の芸術における身体表象の関係から

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究 C（代表者：平芳裕子）

研究概要：現代の芸術文化におけるアートとファッションの接合について検証する

研究代表者（本専攻教員）：岡野真裕

共同研究者：紅林亘（弘前大学教育推進機構）

研究課題：合奏の個性を形作る時間的協調ダイナミクスの解明

研究資金：科学研究費助成研究 基盤研究（C）

研究概要：ヒトの動作の同期に関するタイミング調節特性の調査，タイミング調節特性に影響する因子の特定，バーチャルパートナーやHumanizerの開発を通し，合奏における「息が合う」という感覚の正体，つまり名演の背後にある時間的協調ダイナミクスについて検討する。

研究代表者（本専攻教員）：岡野真裕

共同研究者：なし

研究課題：対人間協調が運動の生理・心理・行動に及ぼす影響

研究資金：科学研究費助成研究 若手研究

研究概要：2人組や集団という環境では，ヒトは意図しない同期など，単独のときとは異なる行動特性を示す（対人間協調）。本研究では，対人間協調がヒトの運動の効率にどのような影響を与えるかについて検討する。

研究代表者（本専攻教員）：余田有希子

共同研究者：なし

研究課題：無声映画伴奏譜集にみられる楽曲構造の分析

研究資金：科学研究費助成事業 若手研究

研究概要：無声映画伴奏譜集に収録された楽譜資料をもとに，情景・感情・アクションなどがどのように音楽構造に表出されるのか，楽譜分析ソフトウェアツールを用いながら，作品・作家単位ではなくマクロな視点から通底する要素を明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：清水大地

研究課題：知覚ベースの創造性促進のメカニズムの解明とその教育的応用

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究（C）

研究概要：芸術家などの優れた創作者の創造活動に特徴的に見られる，豊かな知覚体験が創造性にもたらす影響とそのメカニズムの実験による検討

清水大地（研究代表者），岡田猛

科研（分担者）

本専攻研究者：谷正人

研究課題：中東少数派の音文化に関する研究—共有と非共有に着目して—

研究資金：日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究（B）

飯野りさ，谷正人，米山知子

研究概要：本科研は，中東の少数派の音楽に関して共通してみられる特徴とそうでない特徴（すなわち非共有）に関して，トルコ，イラン，アラブの音楽を研究してきた研究者が協同して行うものとなっている。

本専攻研究者：大田美佐子（研究分担者）

研究課題：「コロナ状況」下で育まれる芸能—危機への応答・身体性をめぐる交渉・社会との関係

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究 B（代表者：吉田ゆか子）

研究概要：新型コロナウイルスに影響されながら過ごすこの「コロナ状況」は，世界の芸能（音楽，舞踊，演劇）の上演と伝承をどのように変えているのだろうか。疫病退散のために上演される芸能もあれば，オンライン上演で生まれる新しい表現もある。また芸能は不要不急とされがちで，その社会的意義が問い直される契機も多かった。本研究は，日本を含む東アジアおよび東南アジアの具体的な事例を検討しながら，①コロナ状況の芸能への影響を明らかにするとともに，②コロナ状況のなかで変容する芸能の姿を地域・ジャンル横断的に検討することで，我々の芸能や芸能実践を行う身体についての理解を深めようとするものである。

2022年7月10日 研究発表「Covid-19 ショックとその歴史的視座 —劇場での舞台公演に関連して—」を担当。

本専攻研究者：大田美佐子（研究分担者）

研究課題：障害者の文化芸術活動の実践分析に基づくエンパワメント評価及び支援システム開発研究

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究 B（代表者：津田英二）

研究概要：2022年度 日韓交流セミナー(12月10日)でのコメンテーターを担当。

本専攻研究者：平芳裕子

研究代表者：平芳幸浩（京都工芸繊維大学）

研究課題：「ポスト身体社会」における芸術・文化経験の皮膚感覚についての横断的研究

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究 C

研究概要：デジタルメディア時代の芸術文化における皮膚感覚の変容について検証する  
地方公共団体・神戸大学など

研究分担者（本専攻教員）：関典子

研究課題：被災地芸能の動態的保存と実践的拡張

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究 (C)

研究概要：2018年より実施されている阪神虎舞の活動を参与観察し，伝承と拡張の観点にもとづく調査を実施。

研究代表者：楠本未来

共同研究者：饗庭絵里子（電気通信大学），津崎実（京都市立芸術大学），岡野真裕（本専攻教員）

研究課題：声楽教育における個人に適切な呼吸法の究明——腹式呼吸と胸式呼吸

研究資金：科学研究費助成研究 基盤研究 (C)

研究概要：歌唱に適した呼吸は腹式呼吸であるとされることが多いが、腹式呼吸が体質に合わないとして、胸式呼吸を用いていると述べる歌手がプロの中にもいる。本研究では腹囲・胸囲の伸縮，姿勢のゆらぎ，声の同時計測を通して，行われている呼吸法の実態や，個々人に適した呼吸法をどのように見極めるか等について検討する。

民間共同研究

本専攻研究者：関典子

共同研究者：青柳いづみこ（ピアニスト／文筆家／大阪音楽大学名誉教授／兵庫県養父市芸術監督），藤井快哉（大阪音楽大学教授／ピアニスト）

研究課題：「ダンスとピアノ・デュオの競演：踊る牧神」

研究資金：主催（株）The Music Center Japan

研究概要：2023年1月18日，兵庫県立芸術文化センター神戸女学院小ホールにて，最新作『パレード』および『牧神とニンフの午後』再演を実施した。関西音楽新聞，Chacott Web Magazine DANCE CUBE などにも掲載された。

本専攻研究者：関典子

共同研究者：古後奈緒子（大阪大学准教授）

研究課題：薄井憲二バレエ・コレクション第30回企画展「人形たちの饗宴Ⅱ～人形を動かす魔法とは？～」

研究資金：兵庫県立芸術文化センター

研究概要：2020年に実施した第24回企画展「人形たちの饗宴Ⅰ」の続編として，兵庫県立芸術文化センターロビー（2階）展示室ポッケにて開催（2023年1月17日～3月5日）。アンティークプリント・プログラム・台本・楽譜・写真・葉書など約50点を展示。

研究代表者（本専攻教員）：岡野真裕

共同研究者：松本茂雄，森角香奈子，樫尾一郎，高橋紗恵子（ともに株式会社USEN コンテンツプロデュース統括部）

研究課題：BGMのグルーブ感と歩行パラメータの関係および音楽グルーブの健康行動への利用可能性の検討

研究資金：株式会社USEN 共同研究費

研究概要：ウォーキング時に聴取する音楽の持つ特性が各種歩行パラメータに与える影響について，行動実験により検討する。特に，歩行速度を速くしやすい曲想と遅くしやすい曲想があるという先行研究の追試と，その結果が「グルーブ」と呼ばれる性質と関連するかについて検討する。

研究分担者（本専攻教員）：清水大地

研究課題：芸術創作領域における創造的熟達の学習過程の解明と熟達支援手法の開発

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(B)

研究概要：絵画やダンスなどの芸術表現における表現者の熟達過程に関する定量的検討とその知見に基づいた熟達支援方法の開発，効果検証

岡田猛（研究代表者），三井田盛一郎，横地早和子，清水大地

研究分担者（本専攻教員）：清水大地

研究課題：大学における芸術教育プログラムおよびその効果検証方法の構築に向けた基礎的研究

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(B)

研究概要：絵画・ダンス・音楽などの芸術表現において重要とされる知覚体験や感性，情動，身体体験などの観点を取り入れた大学教育の具体的な授業方法のデザイン・実施・効果検証

新藤浩伸（研究代表者），岡田猛，福留東土，清水大地，高木紀久子

その他

研究代表者（本専攻教員）：岡野真裕

共同研究者：伊坂忠夫（立命館大学スポーツ健康科学部），赤澤健太郎（立命館大学スポーツ健康科学部）

研究課題：ポップダンスにおける「ヒット」動作の運動制御

研究資金：立命館大学学内予算，COI 基盤形成費

研究概要：ポップダンスの基本技術である「ヒット」の運動制御についての理解を深めるため，上半身のヒット動作における筋肉の活動量と活動タイミングのばらつき，およびそれらの熟達差について明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：岡野真裕

共同研究者：伊坂忠夫（立命館大学スポーツ健康科学部），高尾憲司（株式会社ブルーミング）

研究課題：長距離走選手のコンディショニングにおけるスマートウェア活用法の探索

研究資金：立命館大学学内予算，COI 基盤形成費

研究概要：着るだけで心拍などの生体信号を計測できる「スマートウェア」を利用して，主観的コンディショニング評価および睡眠中の心拍計測を行い，これらを長距離走選手のコンディショニングに活用する方法を検討する。

研究代表者（本専攻教員）：余田有希子

共同研究者：清水大地

研究課題：創造性支援のための視覚－聴覚の結びつきに着目した映像音楽制作ワークショップの実施と定量的な効果検証

研究資金：人間発達環境学研究科「研究推進支援経費」

研究概要：映像音楽制作ワークショップを通して創造性の促進を図り，さらにその効果・デザインの検証を行うことで，人々の創造性や豊かに生きる過程に繋がる教育を提案することを目的とする。

### (3) 論文

#### 国際共著論文

Web of Science 収録誌掲載論文 \* (10%論文にはマークを付す)

Kasuya, J. & Nonaka, T. (2023). When do toddlers point during mealtime?: Pointing in the second year of life in everyday situations. *Frontiers in Psychology*,  
<https://www.frontiersin.org/articles/10.3389/fpsyg.2023.1050975>

Nonaka, T. (2022). Activation of stance by cues, or attunement to the invariants in a populated environment? *Behavioral and Brain Sciences*, 45, e263.  
<https://www.doi.org/10.1017/S0140525X22001261>

#### 査読付き論文

Hirimitsu Umemiya, The International Competition for The State Ukrainian Theater (1930)—Application Proposals from Japan

DOCOMOMO Journal. No. 67 (2022) ,DOCOMOMO International: pp.48-54

野中哲士. (2022). メディウムと知能 人工知能, 37(6), 727-734.

<https://doi.org/10.11517/jjsai.37.6.727>

関典子 (2022) 「Zoom で観るバレエ・リュス：薄井憲二バレエ・コレクションを中心に：『牧神とニンフの午後』 解題」, 『ヴィクトリア朝文化研究』 第 20 号, pp.69-90.

Yoden, Y. (in press). The Representation of East Asian Music in Silent Film Accompaniment Scores. *Music and The Moving Image*, 16(3).

石黒千晶・清水大地・清河幸子. (2022). 「創造的自己」 から創造性研究を捉え直す. 『認知科学』, 29(2), pp. 289-292.

細馬宏通・清水大地・村上久・阿部廣二・児玉謙太郎. (2022). ラップの身体性・体験性・創造性・即興性をめぐって. 『人工知能』, 37(6), 750-758.

古山宣洋・清水大地. (2023). 「空間認知・身体運動」のこれまで・これから. 『認知科学』, 30(1), pp. 289-292.

#### 査読無し論文

梅宮弘光「1960年代初頭に建設された山形県大石田町立学校の2つの円形校舎について」『日本建築学会大会学術講演梗概集(北海道)2022年』 pp.619-620, 2022年9月

田畑暁生「地域情報化政策からデジタル田園都市国家構想へ」『神戸大学大学院人間発達環境学研究



科研究紀要』 Vol. 16, No. 1, 2022

田畑暁生「スーパーシティ、その後」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』  
Vol. 16, No. 2, 2023.

岸本吉弘（印刷中）「描くこと・貼ること—コラージュ表現を通じて」『Studio 138』3号。  
2023年4月刊行

岡崎香奈（2022）：「ノードフ・ロビズ音楽療法の記録と評価」日本音楽療法学会誌 Vol.22/No1：6  
—16

岡崎香奈（2022）：「音楽療法士がクライアントと共に『音・音楽を奏でる』という行為について」臨床  
音楽療法，日本臨床音楽療法学会誌 Vol. 15：38—47

岡崎香奈（2022）：「芸術療法と私：音楽療法士としての体験から」日本芸術療法学会 Vol. 53/No1：25-32

楠本未来，饗庭 絵里子，津崎 実，岡野 真裕.（2022）. 歌唱における呼気意識型呼吸と吸気意識型  
呼吸～腹部と胸部の広がり指標とする判別方法の検討，日本音楽知覚認知学会 2022 年度秋季研究  
発表会発表資料集

岡野真裕，樫尾一郎，高橋紗恵子，森角香奈子，松本茂雄.（2022）. 音楽リズムと同期しての歩行  
の速度にBGMの性質がおよぼす影響—日本人中高年層における検討，日本音楽知覚認知学会 2022 年  
度秋季研究発表会発表資料集

#### (4) 著書

単著

田畑暁生『「平成の大合併」と地域情報化政策』北樹出版，2022.

共編著

分担執筆

岸本吉弘「ストライプの距離」『PEINTERLINESS 2022』（ギャラリー白編集）ギャラリー白発行，p. 6.

Nonaka, T. (in press). Towards an Ecology of Evolving Skills. In T. Wynn, K. A. Overmann, &  
F. Coolidge (Eds.) Oxford Handbook of Cognitive Archaeology. Oxford University Press.

大田美佐子 「関西地域のオペラ活動 2021」(『日本のオペラ年鑑 2021』所収 p. 107-113)

大田美佐子 『ハプスブルク事典』 分担執筆，「ビーダーマイアー」(pp. 490-493)，「ヨハン・シ

ユトラウス」 (pp. 508-509)

丸善出版, 2023年2月

平芳裕子「シームレスの美学 ファッションと皮膚感覚」『現代の皮膚感覚をさぐる 言葉・表象・身体』平芳幸浩編, 春風社, 107-132頁, 2023.

平芳裕子「ファッションの歴史」『「歴史総合」をつむぐ-新しい歴史実践へのいざない』歴史学研究会編, 東京大学出版会, 121-128頁, 2022.

平芳裕子「シャネルの近代 ファッションをめぐる装飾と機能」『交歓するモダン機能と装飾のポリフォニー』赤々舎, 254-258頁, 2022.

谷正人「地域ごとの音楽 (イラン)」項目『イスラーム文化事典』2023年1月 丸善

#### 翻訳

フランク・パスカーレ著, 田畑暁生訳『ブラックボックス化する社会』青土社, 2022.

マーク・クーケルバーク著, 田畑暁生訳『自己啓発の罨』青土社, 2022.

4

#### 総説・書評など

梅宮弘光「建築の川, モダニズムの荒野—川喜田煉七郎: 活動の軌跡」

『TEMPOLOGY Vision』Vol.13, 2022年12月, pp.4-5

田畑暁生 書評「スマート・イナフ・シティ」『図書新聞』2023年1月16日号

関典子, 斎藤慶子, 三浦栄里子 (2023) 「Ballets Russes にインスピレーションを得て: 薄井憲二のユニークなコレクション」, 『ロシア・サンクトペテルブルグ国立舞台芸術図書館 265周年記念 国際学術・実践会議「過去を大事にしながら未来を創り出そう」論文集』, pp.178-185. (ロシア語) (Н о р и к о С э к и, К э й к о С а й т о, Э р и к о М и у р а (2023) В д о х н о в л ё н н ы й Ballets Russes: у н и к а л ь н а я к о л л е к ц и я К э н д з и У с у и, С б е р е г а я п р о ш л о е, с о з д а е м б у д у щ е е: м а т е р и а л ы м е ж д у н а р о д н о й н а у ч н о - п р а к т и ч е с к о й к о н ф е р е н ц и и, п о с в я щ е н н о й 265-л е т и ю С а н к т - П е т е р б у р г с к о й г о с у д а р с т в е н н о й Т е а т р а л ь н о й б и б л и о т е к и. pp.178-185.)

関典子 (2022) 「セルゲイ・ディアギレフ生誕 150周年～偉大なる「バレエ・リュス」団長～」, 兵庫県立芸術文化センター「薄井憲二バレエ・コレクション」第29回企画展リーフレット, pp.1-4.

古後奈緒子, 関典子 (2023) 「人形たちの饗宴Ⅱ～人形を動かす魔法とは?～」, 兵庫県立芸術文化セ

ンター「薄井憲二バレエ・コレクション」第30回企画展リーフレット, pp. 1-4.

岸純信, 渡辺真弓, 関典子 (2022) 「《イオランタ》～オン★ステージ新聞「バレエとオペラ」関連企画X～」, 兵庫県立芸術文化センター「薄井憲二バレエ・コレクション」第90回常設展リーフレット, p. 1.

岸純信, 渡辺真弓, 関典子 (2022) 「《ラ・エスメラルダ》～オン★ステージ新聞「バレエとオペラ」関連企画XI～」, 兵庫県立芸術文化センター「薄井憲二バレエ・コレクション」第91回常設展リーフレット, p. 1.

関典子 (2022) 「《パレード》～ダンスとピアノ・デュオの競演『踊る牧神』によせて～」, 兵庫県立芸術文化センター「薄井憲二バレエ・コレクション」第92回常設展リーフレット, p. 1.

岸純信, 渡辺真弓, 関典子 (2022) 「《ギュスターヴ3世》～オン★ステージ新聞「バレエとオペラ」関連企画XII～」, 兵庫県立芸術文化センター「薄井憲二バレエ・コレクション」第93回常設展リーフレット, p. 1.

(5) 演奏会、展覧会、シンポジウムなど

### 演奏会・公演

谷正人：ソロ演奏会及び講演：「ノウルーズ・コンサート」イラン大使館および東京都港区共催 2023年3月20日港区リーブラホール

谷正人：演奏会ソロ出演：「草津宿魅力再発見 草津宿本陣サントゥールコンサート」2023年3月11日

谷正人：サウンドトラックへのサントゥール演奏音源提供「Ares Island Theme Music」『ソニックフロンティア』（Sonic Frontiers セガより2022年11月8日に発売されたゲームソフト）内のサウンドトラックに対して。

谷正人：演奏会ソロ出演【auditorium Live Series vol. 3】「交差する音楽 -イラン伝統音楽から現代音楽まで」2022年10月18日阿佐ヶ谷 ON THE ROOF plus

谷正人：ソロコンサートと講演 神戸学院大学グリーンフェスティバル「イラン音楽の世界～レクチャー・コンサート」

2022/06/25 神戸学院大学有瀬キャンパスメモリアルホール

2022/06/24 神戸学院大学ポートアイランドキャンパス ポートアイランド第2キャンパス音楽室

谷正人：科研に関するシンポジウム企画運営：『クルド音楽への誘い：レクチャーと演奏』

2023年1月30日

◇出演：セルダル・ジャーナン、通訳（トルコ語）：鈴木郁子、司会：飯野りさ（東京大学）

◇会場：神戸大学国際人間科学部 C 棟 111 教室（鶴甲第2キャンパス内）

◇主催：科研費基盤研究 (B) 「中東少数派の音文化に関する研究－共有と非共有に着目して」、共催：神戸大学谷正人研究室展覧会

関典子（ダンス）、青柳いづみこ・藤井快哉（ピアノ）、「ダンスとピアノ・デュオの競演：踊る牧神」

コンサート, ソロダンス『牧神とニンフの午後』『パレード』振付・出演, 2023年1月18日, 兵庫県立芸術文化センター神戸女学院小ホール

## 展覧会

出品者: 岸本吉弘

共同出品者: 石川裕敏, 園城寺繁誉, 河合美和, 善住芳枝, 真木智子, 渡辺信明

展覧会タイトル: PEINTERLINESS 2022

展覧会場所: ギャラリー白 (大阪)

展覧会期間: 2022年8月22日~9月3日

資金: ギャラリー白企画

概要: 関西近県の活動する抽象画家が集い, 拠点であるギャラリー白 (大阪) において大型作品の展示と同時に, トークイベントも併催し, 抽象絵画における現状とその可能性を探る試み (グループ展) を実施した (研究冊子であるリーフレットも刊行した)。

出品者: 岸本吉弘

共同出品者: なし

展覧会タイトル: 岸本吉弘 個展

展覧会場所: 数寄和 (東京)

展覧会期間: 2022年9月19日~10月1日

資金: 数寄和企画

概要: 大作である「Toys」中心とし, 計20点の新作油彩画を展示した。期間中にトークイベントも併催した。

関典子 (企画・監修), 「薄井憲二バレエ・コレクション」第29回企画展「セルゲイ・ディアギレフ 生誕150周年~偉大なる「バレエ・リュス」団長~」, 2022年7月26日~8月28日

古後奈緒子, 関典子 (企画・監修), 「薄井憲二バレエ・コレクション」第30回企画展「人形たちの饗宴II~人形を動かす魔法とは?~」, 2023年1月17日~3月5日, 兵庫県立芸術文化センター

岸純信, 渡辺真弓, 関典子 (企画・構成), 「薄井憲二バレエ・コレクション」第90回常設展「《イオランタ》~オン★ステージ新聞「バレエとオペラ」関連企画X~」2022年5月12日~8月28日, 兵庫県立芸術文化センター

岸純信, 渡辺真弓, 関典子 (企画・構成), 「薄井憲二バレエ・コレクション」第91回常設展「《ラ・エスメラルダ》~オン★ステージ新聞「バレエとオペラ」関連企画XI~」2022年9月13日~11月16日, 兵庫県立芸術文化センター

関典子 (企画・構成), 「薄井憲二バレエ・コレクション」第92回常設展「《パレード》~ダンスとピアノ・デュオの競演『踊る牧神』によせて~」, 2022年11月20日~2023年1月22日, 兵庫県立芸術文化センター

岸純信, 渡辺真弓, 関典子 (企画・構成), 「薄井憲二バレエ・コレクション」第93回常設展「《ギユスターヴ3世》~オン★ステージ新聞「バレエとオペラ」関連企画XII~」, 2023年2月7日~4月7日

日、兵庫県立芸術文化センター

関典子 (企画・構成), 「薄井憲二バレエ・コレクション」ロビー展示, 貞松・浜田バレエ団『バレエ・リュスの世界』, 2022年5月22日, あましんアルカイックホール

関典子 (薄井憲二バレエ・コレクションより資料提供), 「パリ・オペラ座～響き合う芸術の殿堂～」, 2022年11月5日～2023年2月5日, アーティゾン美術館

関典子 (薄井憲二バレエ・コレクションより資料提供), 「マリー・ローランサンとモード」, 2023年2月14日～4月9日, Bunkamura ザ・ミュージアム

## シンポジウム

登壇者: 岸本吉弘, 石川裕敏 (大阪府内公立中学校教諭), 圓城寺繁誉 (大阪府内公立高校教諭), 河合美和 (大手前大学講師), 善住芳枝 (親和学園教諭), 真木智子 (画家), 渡辺信明 (京都市立芸術大学教授), 司会: 尾崎信一郎 (鳥取県立博物館館長)

テーマ: ペインタリネスとカラーフィールド

開催場所: ギャラリー白 (大阪)

開催日: 8月27日

概要: ペインタリネスとカラーフィールドを巡り, 批評的, 創作論的な立場よりトークイベントを開催した。尚, 同企画は同ギャラリーで開催された「PEINTERLINESS 2022」展の付帯企画である。

登壇者: 岸本吉弘, 田野倉康一 (詩人), 司会: 大島徹也 (多摩美術大学准教授)

テーマ: 絵画・詩と批評を巡って

開催場所: 数寄和 (東京)

開催日: 9月24日

概要: 絵画と詩を巡り, 批評的, 創作論的な立場よりトークイベントを開催した。尚, 同企画は同ギャラリーで開催された「岸本吉弘 個展」展の付帯企画である。

日本発達心理学会第34回大会学会企画シンポジウム

発達カスケードの示唆: 変化と経験の関係の非自明性

企画: 野中哲士 (神戸大学大学院人間発達環境学研究科)

話題提供者: 新屋裕太 (東京大学大学院教育学研究科), 西尾千尋 (中京大学心理学部), 青山慶 (岩手大学教育学部), 青井郁美 (神戸大学大学院人間発達環境学研究科)

指定討論者: 麻生武 (元奈良女子大学), 野中哲士 (神戸大学大学院人間発達環境学研究科)

平芳裕子 (2022) 「距離を克服する-近代アメリカのファッション・メディア」『ファッションが産業になる: フランス・アメリカ・日本・ソ連・イタリアの過去とインドネシアの現在』東洋大学シンポジウム, 10月29日

Yukiko Yoden, “The Representation of East Asian Music in Silent Film Accompaniment Scores”, Music and the Moving Image XVIII, New York University Steinhardt Department of Music and

【招待講演・口頭発表】

田畑暁生「SNS 変える社会 社会が変える SNS」於アクリエひめじ 第1回「インターネットの歴史とプラットフォームの支配」2022年11月17日 第2回「SNS とジャーナリズムの変容」2022年12月15日 第3回「SNS とエンタテインメントの変容」2013年1月19日

Misako OHTA “ ‘The Threepenny Opera’ in Japan: The Threepenny Fever in its early days’ Asian German Studies in Music Working Group as part of the IMS Study Group “Global History of Music” Pre-IMS Seminar 2022

(9. August, 2022)

大田美佐子 「クルト・ヴァイルの世界」を捉え直す。

ラウンドテーブル「大戦期欧米の音楽へのまなざし：文化・社会史としての音楽研究の可能性」(2022年12月4日 日本音楽学会 第55回(通算406回) 西日本支部研究例会、京都女子大学) バネリスト

大田美佐子 「Covid-19 ショックとその歴史的視座 一劇場での舞台公演に関連して-」

アジアアフリカ言語文化研究所「新型コロナ感染拡大下における芸能に関する学際的研究」(2022年7月10日, オンライン)

大田美佐子 「吉原真里著『親愛なるレニー - レナード・バーンスタインと戦後日本の物語』を通じて考える「越境・対話的音楽文化史」の可能性」同志社大学フェミニスト・ジェンダー・セクシュアリティ研究センター(F.G.S.S.)公開セミナー(2023年1月26日 ハイブリッド開催)

大田美佐子「クルト・ヴァイルの音楽世界 - 『三文オペラ』の仕掛け -」(2023年1月21日 ピッコロシアター文化セミナーラボ(3))

関典子, 「踊るキュレーター：歴史的な資料と現代の創作の交点から」, 「第1回日本ダンス研究会」, 2022年4月23日, Zoom

関典子, 「舞踊創作の魅力と舞踊資料の活用について～アートとその分身：人間／人形の間：人形の精と踊る私～」, 大阪大学大学院人文学研究科・大阪大学総合学術博物館主催「中之島に馳を放つ：大学博物館と共創するアート人材育成プログラム」, 2022年12月10日, サロン・ド・ムネツグ

関典子, 「コンテンポラリーダンス、舞踏、バレエ～歴史的な資料と現代の創作の交点から～」, 令和4年西宮市生涯学習大学「宮水学園」芸術講座, 2023年2月8日, フレンテホール

Daichi Shimizu, Takeshi Okada. “Dynamics of Interaction with the Environment in Creativity: Embodied Imagination Framework”, The 44th Annual Meeting of the Cognitive Science Society, 7. 27. 2022. (オンライン参加)

Kentaro Kodama, Daichi Shimizu, Ken Fujiwara. “Influence of Visual Information on Interpersonal Coordination of Head- and Body- Movement During Dyad Conversations.” The 44th Annual Meeting of the Cognitive Science Society, 7. 27. 2021. (オンライン参加)

Shuhei Tsuchihida, Daichi Shimizu, Kanako Shibasaki, Tsutomu Terada, Masahiko Tsukamoto. “Online Dance Lesson Support System Using Flipped Classroom.” Advances in Mobile Computing and Multimedia Intelligence, 11. 21. 2022. (オンライン参加)

Ken Fujiwara, Kentaro Kodama, Daichi Shimizu. “Interactional synchrony can be distinguished from behavior matching: A study using OpenPose.” Annual Convention of SPSP 2023, 2. 26. 2023.

#### (6)受賞

受賞者：岸本吉弘

受賞名：神戸市文化賞（2022年度）

受賞理由：これまでの画家として創作・発表活動，抽象絵画の研究，アートによる地域貢献が評価されたため。

受賞者：岡野真裕

ポスター発表選奨：歌唱における呼気意識型呼吸と吸気意識型呼吸～腹部と胸部の広がり指標とする判別方法の検討 日本音楽知覚認知学会

受賞者：Yukiko Yoden

受賞名：The Winners of the Electroacoustic Works 2022

受賞作品：Mirage

受賞理由：RMN Classical 主催の Electroacoustic & Beyond 7 のコンペティションにおいて作品が評価されたため。Spotify, YouTube Music, Apple Music, Amazon Music で配信の他、大英図書館に受賞作品が収録予定。

受賞年月：2022年6月24日

#### (7) 表現系講座の研究の総括と課題

人間発達研究において表現にかかわる専門分野を相互にいかに関連させるかは、当系講座の長年にわたる課題となってきた。教育においてはその相乗作用に一定の成果をあげているが、研究においてはそれぞれの専門性の深まりにともなって、そこに一律に適用できる評価指標を見出すことは難しい。当系講座の教員は各専門分野で顕著な研究活動を展開し、すでに高い評価を得ているうえに、昨年度は新たに優秀な三人の新任教員を迎えることができた。今後も、学術・文化全体の本質でもある多様性は担保しながら、「表現」を核にした学術研究分野としての組織的フィッティングの模索が課題となるだろう。

本年度は岸本吉弘教授が、画家としての長年の創作活動が認められ、神戸市文化賞を受賞している。また余田有希子助教が作品 Mirage で Electroacoustic Works 2022 を受賞している。

### ●行動系

#### 1. 国際共同研究

研究代表者：石原 暢

共同研究者：Eric S. Drollette (University of North Carolina at Greensboro), Sebastian Ludyga (University of Basel), Charles H. Hillman (Northeastern University), Keita Kamijo (Chukyo University)

研究課題：一過性運動が認知機能に与える影響

研究概要：認知機能に対する一過性運動の効果およびその調整因子について、IPD メタ分析を用いて検討する。

研究代表者：石原 暢

共同研究者：Sebastian Ludyga (University of Basel)

研究課題：注意欠如・多動症児の身体活動と認知機能の関係

研究概要：注意欠如・多動症児の身体活動および体格指数と認知機能の関係を検討する。磁気共鳴画像法を用いて取得した脳画像データの媒介効果についても調べる。

研究代表者：石原 暢

共同研究者：Sebastian Ludyga (University of Basel), Keita Kamiyo (Chukyo University)

研究課題：社会認知機能と運動の関係

研究概要：一過性および習慣的運動と社会認知機能の関係を、自律神経系および中枢神経系機能の役割に着目して検討する。

研究代表者：石原 暢

共同研究者：Miguel Crespo (International Tennis Federation), Nicolas Robin (Université des Antilles), Takashi Naito (Hokkai-Gakuen University), Munenori Murata (National Institute of Fitness and Sports in Kanoya)

研究課題：COVID-19 の感染拡大がプロテニスプレーヤーのパフォーマンスに与えた影響

研究概要：COVID-19 の感染拡大による活動制限が、プロテニスプレーヤーのサービスおよびリターンパフォーマンスに影響を与えたのかを検討する。

研究代表者：石原 暢

共同研究者：Miguel Crespo (International Tennis Federation), Nicolas Robin (Université des Antilles)

研究課題：プロテニスプレーヤーのシーズン内のパフォーマンスのばらつきとランキングの関係

研究概要：プロテニスプレーヤーのシーズン内のパフォーマンスのばらつきとランキングの関係とその経年変化を検討する。

研究代表者：片桐 恵子

共同研究者：Soondool Chung, Vivian Lou, 竹内真純, 福沢愛

研究課題：高齢者のソーシャルサポート授受と ICT：コロナ禍での活用と有効性の東アジア比較

研究資金：国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B))

研究概要：コロナ禍での活動や人との交流の制限は高齢者の心身に大きなストレスを与えている。しかしコロナ禍において従来のようなソーシャル・サポートを得ることは難しい。ICT を活用したソーシャル・サポートが代替として想定されるが、その現状や有効性は明らかではない。デジタル化が進



み、日本に似た家族規範を持つ韓国と香港において、高齢者の ICT の利用と効果について精査し、日本での ICT 活用に有効な施策について提言する。

研究代表者：長ヶ原 誠

研究課題：ワールドマスターズゲームズ開催のホスト活性化効果とレガシー創出に関わるモニタリング指標の開発

共同研究者：Sergey Bubka, Kate Caithness, Manuela Di Centa, David Eades, Ugur Erderner, Sari Essayah, Tom Hollowell, Jens Holm, Poul-Erik Høyer, Alexander McLin, Ser Miang Ng, Petra Sorling (International Masters Games Association)

研究資金：International Masters Games Association R&D

研究概要：国際マスターズゲームズ協会管轄大会を対象とし、大会がホスト地域に及ぼす活性化効果と持続的影響を可視化するための調査指標とモニタリングシステムを開発する。

研究代表者：原田 和弘

共同研究者：Dr. Robert Walker (University of Bristol, UK)

研究課題：Determinants of exercise behavior among older adults

研究資金：日本学術振興会サマープログラム

研究概要：高齢者の運動行動は、どのような要因によって規定されるのかについて研究を進めている。

## 2. 国内共同研究など

### 1) 科研費による研究（代表者）

研究代表者：石原 暢

研究課題：身体活動が認知機能を改善・発達させる神経ネットワークの同定

研究資金：科学研究費補助金・若手研究

研究概要：身体活動が認知機能を改善，発達させる背景にある神経ネットワークの変化を明らかにする。

研究代表者：石原 暢

研究課題：習慣的運動が子どもの社会性に与える影響：実行機能とオキシトシンの役割に着目して

研究資金：科学研究費補助金・若手研究

研究概要：習慣的運動が子どもの社会性に与える影響を，実行機能と唾液オキシトシンの役割に着目して明らかにする。

研究代表者：石原 暢

研究課題：幼少期の運動習慣が中高齢期の認知機能を維持・増進させる神経機構とその個人差の解明

研究資金：科学研究費補助金・学術変革領域研究(A)

研究概要：幼少期の習慣的運動が中高齢期の認知機能と関わる背景にある脳の構造的・機能的変化を検討する。

研究代表者：片桐 恵子

共同研究者：勇上和史 菅原育子

研究課題：ポストコロナ社会の高齢者就労と社会参画：人生 100 年時代における高齢期就労の課題

研究資金：基盤研究(B)

研究概要：高齢者就労が増加しているが、未だ研究は少ない。またコロナ禍において、高齢者の就労や他の生産的活動に対する態度や行動の変化、企業側の感染リスクの高い高齢就労者への対応の変化が生じているのか等現状は明らかでない。ポストコロナ社会において、高齢就労者が高い well-being を実現するような働き方を検討することを目的として、企業と従業員に対して高齢就労者施策や、高齢就労者の会社の就労条件への評価を調べる企業調査、高齢就労者の態度や well-being の変化を調べるパネル調査、既存の縦断研究データの二次分析により検討し、ポストコロナ社会における高齢就労と well-being のモデルを構築する。

研究代表者：片桐 恵子

共同研究者：平山洋介, 安里知陽, 増本康平, 伊藤真之, 稲原美苗, 中村匡秀, 原田和弘, 木村哲也, 佐藤幸治, 石原暢, 木伏紅緒, 竹内真純, 福沢愛, Kim Nahyun

研究課題；研究開発プロジェクト「都市集合住宅高齢者の社会的孤立を予防する持続可能なコミュニティ構築」

研究資金：JST RISTEX「SDGs の達成に向けた共創的研究開発プログラム（社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築）」

研究概要：現在の日本では高齢者夫婦のみや高齢単身世帯が 6 割を超える。海外と比べて別居子との交流が少ない上に、友人を頼らない傾向があり、孤立リスクが高い。特に退職後の男性は地域社会での知り合いに乏しく、地域デビューは難しく孤立するケースが多い。近年は賃貸住宅に居住する高齢者が増加傾向にあるが、特に賃貸住宅は住民の入れ替わりが激しく、孤立や孤独死のリスクが高い。このように都市の賃貸住宅に住む高齢者は孤立に陥りやすいリスクにさらされている。よって本プロジェクトの目標は、都市の賃貸住宅居住高齢者の豊かな交流を実現し、人生 100 年時代に備えたレジリエンス・レジリエンスを発達させることである。その実現に向け、身体・認知・心理面を縦断的に測定し、同時に IoT を活用したセンサーとバーチャル・エージェントとの会話による毎日の健康チェックを併用し、多指標マルチモーダルに健康と孤立・孤独との関連を明らかにする。さらに、孤立・孤独を生まない社会の実現のため、リアルとバーチャルが融合するコミュニティの創出、楽しい体験型イベントへの参加から地域のリーダーを育成する仕組みづくり、大学リソースを活用した生涯教育（サードエイジ・ユニバーシティ）の実施、高齢者が自発的に情報を提供する仕組みを作り孤立を予想するモデルを考案、情報共有の有効性の科学的エビデンスの提供を行う。

研究代表者：木伏 紅緒

研究課題：歩行動作を構成する生体力学的サブタスク間での相互依存性

研究資金：科学研究費補助金・若手研究

研究概要：歩行動作を構成するサブタスク間での神経筋制御の相互依存性を明らかにすることを目指す。具体的には、遊脚速度を変更させるときに同期的な筋活動パターンがどのように調整されるかを

明らかにする。

研究代表者：木伏 紅緒

研究課題：心拍・運動リズム間位同期が歩行安定性に及ぼす効果の解明と応用方法の検討

研究資金：科学研究費補助金・若手研究

研究概要：歩行動作では、運動リズムと心拍リズムが整数比となる、心拍・運動リズム間位同期が生じる。位同期は生理学的利点があると報告されているものの、運動学的な意義は不明である。そこで本研究課題では、心拍・運動リズム間位同期の歩行安定化に対する効果と位同期の応用方法を特定する。

研究代表者：木村 哲也

研究課題：手で軽い荷物を持つことによるトレッドミル歩行の安定化・効率化の確立

研究資金：日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要：本研究は、手で軽い荷物を持つことによる歩行動作時のバランス安定化と機械的効率向上を、トレッドミル歩行において基礎的に確立することを目的としている。

研究代表者：佐藤 幸治

研究課題：糖尿病予防に向けた新規骨格筋糖代謝経路の解明

研究資金：日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要：骨格筋培養細胞を用いて、免疫調節に関与する遺伝子を欠損させることで、骨格筋の糖代謝亢進が行われるかを検討している。この遺伝子が糖代謝調節に関与していることが明らかとなれば、糖尿病の発症原因の解明及び、新規予防法の開発に繋がる。

研究代表者：高見 和至

研究課題：健康関連行動における運動習慣の特殊性：習慣強度の心理的プロセスからの探求

研究資金：学術研究助成基金助成金 基盤研究(C) (一般)

研究概要：定期的な身体活動の実践“運動習慣”という行動が習慣化する心理的プロセスに着目し、習慣化の程度である習慣強度(habit strength)の構造を明らかにしている。特に、運動と各種健康関連行動とを対比することで、運動習慣の特殊性に言及している。

研究代表者：長ヶ原 誠

研究課題：マスターズスポーツメガ大会の開催による地方自治体の地域活性化に関する縦断的検証

研究資金：学術研究助成基金助成金 基盤研究(C) (一般)

研究概要：ワールドマスターズゲームズ関西の開催自治体に着目し、招致期からの開催準備が及ぼす地域活性化について、ホスト圏民と共に自治体の生涯スポーツ振興事業に及ぼす波及効果をモニタリング調査から縦断的に明らかにする。

研究代表者：原田 和弘

共同研究者：村上晴香（立命館大学）

研究課題：ドーパミンシステム系遺伝子多型に基づく運動習慣のオーダーメイド支援の可能性

研究資金：科学研究費・挑戦的研究（萌芽）

研究概要：本研究では、快感情や意欲に関する遺伝特性である、ドーパミンシステム系遺伝子多型によって、感情モチベーションが運動の習慣化に及ぼす影響力の強さが異なるかを明らかにする。

研究代表者：前田 正登

研究課題：遠投におけるボールのサイズおよび重量が発達段階の子どもの投げる能力に及ぼす影響

研究資金：基盤研究(C) (一般)

研究概要：本研究では、子どもを対象に、遠投距離を目的とするボール投げにおいて、使用するボールのサイズや重量が異なることによって遠くに投げるための要因に違いが無いかを探るとともに、使用するボールの種類に関わらずに子どもにおける投げの能力を的確に評価するものである。

研究代表者：増本 康平

共同研究者：原田和弘・塩崎麻里子（近畿大学）

研究課題：高齢者の自律支援に最適化された情報提示方法の確立

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的研究（萌芽）

研究概要：高齢者の自由意志を阻害しない、かつ、高齢者が後悔しない判断を支援するための、高齢者の意思決定時の認知バイアスを考慮した情報提示のあり方を確立するのが本研究の目的である。

研究代表者：増本 康平

共同研究者：谷口隆晴・佐藤幸治・原田和弘

研究課題：感情調整と信頼の加齢変化と社会的つながりに関する縦断研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（B）

研究概要：高齢期の感情調整機能が社会的つながりに及ぼす影響を縦断データを用いて検討する。また、高齢期の感情調整が社会的つながりの基盤である「他者への信頼」に及ぼす影響を生理的要因、心理的要因をふまえた上で心理実験により明らかにする。

## 2) 科研費による研究（分担者）

研究代表者：石黒 千晶

共同研究者：石原 暢

研究課題：学校・家庭教育環境が子どもの創造性発達に与える影響の横断・縦断研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究(B)

研究概要：子どもの創造性が学校や家庭環境の中でどのように発達するかを明らかにする。

研究代表者：紙上 敬太

共同研究者：石原 暢，森田 憲輝

研究課題：体力と集中力の関係：Classroom Neuroscience の確立を目指して（研究代表者：紙上敬

太)

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的研究（萌芽）

研究概要：子どもの体力と授業中の集中力の関係を調べる。

研究代表者：権藤 恭之

共同研究者：石崎達郎 石松一真 石岡良子 西田裕紀子 神出計

研究課題：加齢に対する信念の構造と加齢プロセスに与える影響の検証

研究資金：科学研究費助成事業・基盤研究(A)

研究概要：「加齢に対する信念」は、本研究を申請するにあたって新たに提案した概念である。信念は内在化された心的表象であり、価値観を形成する最小単位であり、行動の経験と表出に影響するとされる。本研究では「加齢に対する信念」は、サクセスエイジングの達成／不達成を目標とした価値観を構成する要因と定義する。そしてその構成概念を明らかにするとともに、信念の形成に寄与する要因を明らかにすることを目的とする。

研究代表者：北村 智

共同研究者：森 玲奈

研究課題：パーソナルネットワークに着目したグレイ・デジタル・デバイドに関する実証的研究

研究資金：科学研究費助成事業・基盤研究(B)

研究代表者：山口悦司

共同研究者：杉本 雅則，望月 俊男，坂本 美紀，増本 康平，木村 哲也，佐藤 幸治

研究課題：高度情報化社会に求められる科学関連情報評価能力の育成手法と実践モデルの開発

研究資金：日本学術振興会 科学研究費助成事業 挑戦的研究(萌芽)

研究代表者：増本 康平

共同研究者：谷口 隆晴，佐藤 幸治，原田 和弘

研究課題：感情調整と信頼の加齢変化と社会的つながりに関する縦断研究

研究資金：日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究(B)

研究代表者：片桐 恵子

共同研究者：中村 匡秀，増本 康平，原田 和弘，平山 洋介，伊藤 真之，稲原 美苗，木村 哲也，佐藤 幸治，石原 暢，木伏 紅緒，竹内 真純，福沢 愛

研究課題：都市集合住宅高齢者の社会的孤立を予防する持続可能なコミュニティ構築

研究資金：JST 戦略的創造研究推進事業（社会技術研究開発）SDGs の達成に向けた共創的研究開発プログラム（RISTEX）

研究代表者：澤田享（早稲田大学）

共同研究者：井上茂（東京医科大学），岡浩一朗（早稲田大学），小熊祐子（慶応義塾大学），小野玲

(国立健康・栄養研究所), 原田和弘, 宮地元彦 (早稲田大学)

研究課題: 健康づくりのための身体活動・運動の実践に影響を及ぼす原因の解明と科学的根拠に基づく対策の推進のためのエビデンス創出

研究資金: 厚生労働科学研究費・循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業

研究概要: 身体活動推進政策を効果的に推進するための新たなエビデンスを創出し, 国民の身体活動量を増加させることを目的とした研究を進めている。

研究代表者: 原田悦子

研究分担者: 増本康平・榊美知子・須藤智・松室美紀

研究課題: 高齢者の新奇事項/事象の学習: 感情・動機づけ, 時間的展望, 熟知度との関係

研究資金: 科学研究費補助金・基盤研究 (A)

研究概要: 新奇事項事象の学習の加齢に伴う変化とその支援可能性を, 学習を支える感情基盤・動機づけ, 時間的展望の変化, 学習内容に対する熟知性が学習過程にもたらす機序等を中心に明らかにし, 認知モデルとして提案する。

研究代表者: 稲垣成哲

研究分担者: 増本康平・楠房子・小川義和・寺田努・江草遼平・石田弘明・岩崎誠司・鳥居深雪

研究課題: 科学系博物館におけるニューロダイバシティの実現: 展示手法と実践モデルの提案

研究資金: 科学研究費補助金・基盤研究 (A)

研究概要: 本研究の目的は, ニューロダイバシティ (ND) の立場から科学系博物館における発達障害 (ASD, LD, ADHD 等) のある来館者向けの展示学習保障ガイドラインの体系化とその展示手法の開発, さらに具体例としての実践モデルを提案することである。

研究代表者: 山口悦司

共同研究者: 杉本雅則・望月俊男・坂本美紀・増本康平・木村哲也・佐藤幸治

研究課題: 高度情報化社会に求められる科学関連情報評価能力の育成手法と実践モデルの開発研究

資金: 科学研究費補助金・挑戦的研究 (萌芽)

研究概要: 高度情報化社会に求められる科学関連情報評価能力の育成手法と実践モデルの開発。

研究代表者: 衣笠智子

共同研究者: 増本康平・安田公治・羽森 茂之・勇上和史

研究課題: 新型コロナウイルス流行の寿命予測と貯蓄行動に対する影響

研究資金: 科学研究費補助金・挑戦的研究 (萌芽)

研究概要: 新型コロナウイルス流行で寿命や死亡率に関する意識がどう変化したか, また, その変化が貯蓄行動にどう影響したかを明らかにする。

### 3) 地方公共団体・神戸大学など

研究代表者: 石原 暢

研究課題：生活習慣が認知機能に与える影響とその神経科学的・分子生物学的メカニズムの解明

研究資金：高等学術研究院テニュアトラック教員（B 制度）

研究概要：塩基配列を変化させずに遺伝子発現を制御する後天的な仕組みの 1 つである DNA メチル化に着目し、生活習慣が認知機能や脳の解剖学的・機能的特徴を後天的に修飾する分子生物学的メカニズムを調べる。

研究代表者：石原 暢

共同研究者：高岸治人，寿秋露，丹波夏希，橋本紳之亮

研究課題：運動・スポーツが子どもの社会性に与える影響とその神経基盤—fNIRS ハイパースキャンニング研究—

研究資金：公益財団法人明治安田厚生事業団 第 38 回若手研究者のための健康科学研究助成

研究概要：運動・スポーツが子どもの社会性の発達に与える影響とその神経基盤を検討する。

研究代表者：石原 暢

共同研究者：高岸治人，松田哲也

研究課題：子どものライフスタイルと向社会性の関係

研究資金：文部科学省共同利用・共同研究拠点 玉川大学脳科学研究所「社会神経科学研究拠点」

研究概要：子どものライフスタイルと向社会性の縦断的關係を調べる。

研究代表者：木伏紅緒

研究課題：歩行中の心拍・運動リズム間位相同期を促進するシステムの開発

研究資金：公益財団法人カインズデジタルイノベーション財団

研究概要：心拍・運動リズム間位相同期の歩行安定化に対する効果と位相同期の応用方法を特定する。

研究代表者：木伏紅緒

研究課題：歩行動作の安定化に対する心拍・運動リズム間位相同期の貢献

研究資金：神戸大学「令和 5 年度科研費」早期支援プログラム（インセンティブ付支援制度）・ステップアップ挑戦型

研究概要：若手研究に応募した内容と同様であり、心拍・運動リズム間位相同期の歩行安定化に対する効果と位相同期の応用方法を特定する。

研究代表者：寺田昌弘（京都大学）

共同研究者：相羽達弥（JAXA），神崎素樹（京都大学），石岡憲昭（JAXA 宇宙科学研究所），山田深（杏林大学），田辺弘子（名古屋大学），木伏紅緒（神戸大学）

研究課題：「きぼう」利用（宇宙医学）テーマ「宇宙滞在における筋シナジー制御機構の解明」

研究概要：宇宙飛行士が宇宙空間に滞在する前後（飛行前、飛行直後、飛行半年、1 年後）での、姿勢制御やロコモーション（歩行，障害物回避，ステップなど）の変化を筋シナジーの側面から解明する。

研究代表者：玉川雅章（九州工業大学）

共同研究者：橘武史（北九州工業高等専門学校）、山本洋司（北九州工業高等専門学校）、木村哲也（本専攻教員）

研究課題：遠隔医療/看護ロボットに搭載できるビデオカメラの目とジェット流のデバイスを用いたハイブリッド型高精度血圧連続計測システムの開発

研究資金：北九州産業学術推進機構令和4年度研究開発プロジェクト支援事業

研究概要：本研究は高精度血圧連続計測システムの開発を目指すものである。

研究代表者：増本康平

共同研究者：谷口隆晴・原田和弘・近藤徳彦

研究課題：ウェルビーイングの実現に資する社会的つながりの新たな推定・評価方法の確立に関する研究

研究資金：大学発アーバンイノベーション神戸・大学研究者提案型（複合領域・民間企業連携区分）

研究概要：社会的つながりを定量的に評価する手法を開発する。

#### 4) 民間共同研究

研究代表者：木伏紅緒

研究課題：着圧ソックス・パンツ・サポーター等の商品開発

研究資金：コア・テクノロジー株式会社、丸紅インテックス株式会社、河村繊維株式会社

研究概要：着圧ソックス・パンツ・サポーター等の効果を筋活動の側面から評価する。

研究代表者：佐藤 幸治

共同研究者：京都グレインシステム株式会社

研究課題：ジオスゲニンを含有するトゲドコロ芋の最適加工条件の検討

研究概要：トゲドコロ芋の商品化に向けて現在、最適な粉末化加工を行っていただき、企業（食品・製薬等）に販売促進を行っている最中である。

研究代表者：原田和弘

共同研究者：増本康平

研究課題：遊歩道へのアクセスが都市在住高齢者の健康変化へ及ぼす影響

研究資金：公益財団法人大林財団・研究助成

研究概要：遊歩道へのアクセスが良好であることは、高齢者の健康変化に望ましい影響を及ぼしているのかを明らかにする。

研究代表者：増本康平

共同研究者：岡田修一・近藤徳彦・原田和弘・石原暢

研究課題：地域コミュニティを対象としたeスポーツの展開

研究資金：西日本電信電話株式会社



研究概要:地域コミュニティの住民を対象としたスポーツ体験がコミュニケーション活性や気分に及ぼす影響を明らかにする。

### 3. 論文

#### 1) 国際共著論文

Robin, N., Ishihara, T., Guillet-Descas, E., & Crespo, M. (2023). Performance Optimization in Racket Sports: the Influence of Psychological Techniques, Factors, and Strategies. *Frontiers in Psychology*, 14:321.

Chen, C., Yau, S. Y., Clemente, F. M., & Ishihara, T. (2022). Editorial: The effects of physical activity and exercise on cognitive and affective wellbeing. *Frontiers in Behavioral Neuroscience*, 16. <https://doi.org/10.3389/fnbeh.2022.1047758>.

Ludyga, S., & Ishihara, T. (2022). Brain structural changes and the development of interference control in children with ADHD: The predictive value of physical activity and body mass index. *NeuroImage: Clinical*, 103141.

Ishihara, T., Robin, N., Naito, T., Murata, M., & Crespo, M. (2022). Effects of the COVID-19 pandemic on professional tennis players' match statistics: A large-scale population-based study. *Scandinavian Journal of Medicine & Science in Sports*, 32(10):1516-1518.

Ludyga, S., Ishihara, T., & Kamiyo, K. (2022). The nervous system as a pathway for exercise to improve social cognition. *Exercise and Sport Sciences Reviews*, 50(4), 203-212.

Walker R, Harada K. (2022). The Development of the Psychological Determinants of Exercise Questionnaire for Japanese Older Adults: A Questionnaire Based Upon the Theoretical Domains Framework. *Journal of Aging and Physical Activity*. 30(5): 857-871.

#### 2) Web of Science 収録誌掲載論文

Kuroda, Y., Ishihara, T., & Mizuno, M. (2023). Association between perceived exertion and executive functions with serve accuracy among male university tennis players: A pilot study. *Frontiers in Psychology*, 14:121.

Ishihara, T., Miyazaki, A., Tanaka, H., & Matsuda, T. (2022). Association of cardiovascular risk markers and fitness with task-related neural activity during animacy perception. *Medicine & Science in Sports & Exercise*, 54(10):1738-1750.

Junki Inui, Makoto Chogahara, Kei Hikoji, Megumi Tani, Daichi Sonoda, Yuki Matsumura, Masaki

- Aoyama, Jun Matsuzaki, Keita Miura, Kohei Yamashita (2022). International Journal of Sport and Health Science. 20:208-223.
- Morita, N., Ishihara, T., Yamamoto, R., Sato, T., Shide, N., & Okuda, T. (2022). Content validity and reliability of an enjoyable multicomponent agility test for boys: The N-Challenge test. *Journal of Sports Sciences*, 40(9):976-983.
- Kibushi, B., Martian, T., & Kouzaki, M. (2022). Modular control of muscle coordination patterns during various stride time and stride length combinations. *Gait & posture*, 94:230-235.
- Kibushi, B., & Okada, J. (2022). Auditory sEMG biofeedback for reducing muscle co-contraction during pedaling. *Physiological reports*, 10(10):e15288.
- Hagio, S., Ishihara, A., Terada, M., Tanabe, H., Kibushi, B., Higashibata, A., Yamada, S., Furukawa, S., Mukai, C., Ishioka, N., & Kouzaki, M. (2022). Muscle synergies of multidirectional postural control in astronauts on Earth after a long-term stay in space. *Journal of neurophysiology*, 127(5):1230-1239.
- Yamagata M, Okada S, Tsujioka Y, Takayama A, Shiozawa N, Kimura T. (2022). Effects of subthreshold electrical stimulation with white noise, pink noise, and chaotic signals on postural control during quiet standing. *Gait & Posture*, 94:39-44.
- Takayama A, Okada S, Kimura T, Wang T, Taki C, Yamagata M, Shiozawa N, Makikawa M. (2022). Postural sway reduction by weak electrical noise into the wrist median nerve using portable stimulator. *Journal of Biomechanics*, 137, 111080.
- Yamagata M, Kobayashi T, Maekaku K, Tanoue R, Shimizu K, Kimura T. (2023). Subthreshold electrical stimulation with pink noise enhances feedback control as evaluated by scaling exponent of postural sway. *Neuroscience Letters*, 799:137102.
- Tajima T, Harada K, Oguma Y, Sawada SS. (2023). Does health literacy moderate the psychological pathways of physical activity from guideline awareness to behavior? A multi-group structural equation modeling. *BMC Public Health*. 23:e106.
- Masumoto K, Sato K, Harada K, Yamamoto K, Shiozaki M. (2022). Emotional valence of self-defining memories in older adults: A longitudinal study. *Consciousness and Cognition*. 106:3103431.
- Harada K, Masumoto K, Kikumasa Y, Okada S. (2022). Hilly environment and frequency of going out - of - home among older adults: Examining moderating effect of driving status. *Geriatrics*

and Gerontology International. 22(11):961-967.

Harada K. (2022). Effectiveness, Moderators and Mediators of Self-regulation Intervention on Older Adults' Exercise Behavior: a Randomized, Controlled Crossover Trial. International Journal of Behavioral Medicine. 29(5):659-675.

Masumoto K, Harada K, Shiozaki M. (2022). Effect of Emotion Regulation on Mental Health of Couples in Long-Term Marriages: One-Year Follow-up Study. Japanese Psychological Research. 64(3):360-368.

Yamamoto, K. & Masumoto, K. (2023). Memory for actions and reality monitoring in adults with autism spectrum disorder. Memory, <https://doi.org/10.1080/09658211.2023.2171064>

Masumoto, K., Sato, K., Harada, K., Yamamoto, K., & Shiozaki, M. (2022). Emotional valence of self-defining memories in older adults: A longitudinal study. Consciousness and Cognition, 106, 103431. <https://doi.org/10.1016/j.concog.2022.103431>

Masumoto, K., Tian, M., & Yamamoto, K. (2022). Age differences in option choice: Is the option framing effect observed among older adults? Frontiers in psychology, 13, 998577. <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2022.998577>

### 3) 査読付き論文

安里知陽, 片桐恵子 (2022). 介護施設における生きがい就労の効果と課題: 3か月の体験就労による変化、老年社会科学 44(3) 256-268 2022年

Kim Nahyun・片桐恵子・市井吉興(2023). 趣味と社会貢献を実施する囲碁グループの参加者の活動継続による変化, レジャー・レクリエーション研究 99, 39-52. (印刷中)

Koji Sato, Kaori Seto. (2022). The effect of Dioscorea esculenta powder on prostaglandin E2 and cytochrome c oxidase subunit 2 levels, menstrual pain, and premenstrual syndrome in young women: A randomized double-blind controlled trial. Nutrition and Health, 2601060221130889.

Kouhei Masumoto, Koji Sato, Kazuhiro Harada, Kenta Yamamoto, Mariko Shiozaki. (2022). Emotional valence of self-defining memories in older adults: A longitudinal study. Consciousness and Cognition 106 103431-103431.

高見和至 (2023) 日本語版自己報告式習慣指標 (SRHI-J) の開発. 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要. 16(2):29-39.

乾順紀, 長ヶ原誠, 彦次佳, 谷めぐみ, 藺田大地, 松村雄樹, 青山将己, 松崎淳, 三浦敬太, 下耕平 (2022) 就学期の運動部活動経験が成人層の運動・スポーツ参画状況に与える影響. 生涯スポーツ学研究. 19(1):1-12.

松崎淳・長ヶ原誠 (2022) 不確実な状況下での国際生涯スポーツイベントの開催判断過程の検討. 生涯スポーツ学研究. 19 (1) : 13-25.

田島敬之, 原田和弘, 小熊祐子, 澤田亨 (2022) 健康づくりのための身体活動指針の認知・知識・信念・行動意図の現状と身体活動・座位行動の関連. 日本公衆衛生雑誌. 69(10): 790-804.

原田和弘, 井澤修平, 中村菜々子, 吉川徹, 赤松利恵, 池田大樹, 久保智英 (2022) 労働者における他の人で行う運動とストレス反応およびメンタルヘルス不調との関連. 体力科学. 71(5):417-429

太田幸志, 原田和弘, 増本康平, 岡田修一 (2022) 他者との運動実施が高齢者の運動継続に及ぼす影響 -基本属性および外向性との交互作用の検証-. 理学療法学. 49(4):265-274

松下宗洋, 鎌田真光, 笹井浩行, 原田和弘, 門間陽樹, 井上茂, 中田由夫, 小熊祐子 (2022) 身体活動・運動疫学研究における重要論文 20 本 (2009~2018) . 運動疫学研究. 24(1):19-33.

福沢愛, 田中嵐, 原田和弘, 増本康平 (2022) 相互作用場面での被受容感と相手との元々の親しさの関連 -大学生・高齢者集団における検討-. 心理学研究. 93(2):89-99.

原田和弘, 田島敬之, 小熊祐子, 澤田亨 (2022) アクティブガイドの認知, 身体活動およびヘルスリテラシー-横断デザインによる全国インターネット調査データより-. 日本健康教育学会誌. 30(2):103-114.

#### 4. 著書

##### 1) 分担執筆

秋元忍 鶴木千加子, 「第 5 章 大衆消費社会と生活の文化化 第 3 節 スポーツ振興と障害者スポーツの基盤形成」, 兵庫県史編纂委員会編, 『兵庫県 150 周年記念 兵庫県史~この 50 年の歩み 第 1 編 高度経済成長とひずみ【昭和 42 (1967) 年~昭和 54 (1979) 年】』, 兵庫県, 2023 年 3 月, pp. 557-570

秋元忍, 鶴木千加子, 「第 4 章 社会の変容とこころ豊かな県民生活の創造 第 4 節 スポーツの裾野の広がり」, 兵庫県史編纂委員会編, 『兵庫県 150 周年記念 兵庫県史~この 50 年の歩み 第 2 編 経済優先から生活文化重視へ【昭和 55 (1980) 年~平成 6 (1994) 年】』, 兵庫県, 2023 年 3 月, pp. 490-506

##### 2) 総説・書評など

(特集記事)

木伏紅緒 (2022) 筋電図バイオフィードバックによる筋共収縮改善の試み. 地域ケアリング 24(6) 38-41.

木伏紅緒 (2022) 特集の遠望 特集【日常生活におけるよい動き】. トレーニング科学 34(4) 293.

木伏紅緒 (2023) 特集の遠望 特集【スポーツ動作における巧みな動き】. トレーニング科学 印刷中.

増本康平 (2022) 特集「老いと喪失」記憶の衰えと付き合うために. 中央公論 136(6):64-70.

増本康平 (2022) 特別読切「高齢期の記憶力低下に対処する目からウロコの実践法」. 週刊新潮 7月7日号, 36-39.

## 5. シンポジウム開催など

学会名：第72回 日本体育・スポーツ・健康学会

シンポジウムタイトル：健康福祉研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／運動から認知へ，認知から運動へ

開催日：2022年9月1日

演者等：木伏紅緒（神戸大学・コーディネーター），岩沼聡一郎（帝京科学大学・指定討論者），辻大士（筑波大学・演者），古和久朋（神戸大学大学院保健学研究科・演者），田中美吏（武庫川女子大学・演者）

大会名称：第77回日本体力医学会大会

テーマ：新時代の体力医学～人々の健康と未来を守るために～

会期：2022年9月21日（水）～23日（金・祝）

シンポジウム9 筋における糖代謝と運動の役割：故 中谷昭先生を偲んで

開催日・時間・場所：

9月21日（水） 14：50～16：20 B会場（オンライン）

座長 吉川 貴仁（大阪公立大学医学部） 田畑 泉（立命館大学スポーツ健康科学部）

演者：

Dr. Holloszy ラボの糖代謝研究と中谷 昭先生

樋口 満（早稲田大学）

糖質制限食が骨格筋機能と運動パフォーマンスに及ぼす影響

東田 一彦（滋賀県立大学 人間文化学部 生活栄養学科）

長期間の回転ケージ運動は2型糖尿病ラットの握力低下を防ぐ

高田 義弘（神戸大学大学院人間発達環境学研究科）

増本康平 「長寿の未来フォーラム」記憶の見方が変わる ～高齢者心理と認知症医療からひも解く～ 2022年9月25日 NHK 厚生文化事業団・NHK エンタープライズ主催

## 6. 受賞

受賞者：安里知陽，片桐恵子

優秀ポスター賞 社会活動は高齢者の「世代性」を高めるのか？ 日本老年社会科学会

受賞者：木伏紅緒

受賞名：計測自動制御学会 ライフエンジニアリング部門シンポジウム 2022 研究奨励賞

受賞理由：口頭発表演題「筋電図バイオフィードバックによる歩行中の身体重心加速度の低減」が優れていると認められたため。

受賞者：木伏紅緒

受賞名：2022 年度計測自動制御学会 学術奨励賞（研究奨励賞）

受賞理由：これまでの研究成果と研究発表会（ライフエンジニアリング部門シンポジウム 2022）の研究報告が優れていると認められたため。2022 年度は学会全体で 190 件の応募があり，そのうち 10 件が学術奨励賞（研究奨励賞）として選出された。

受賞者：篠田大輔（(株) シンク），廣井 悠（東京大学大学院），長ヶ原 誠

受賞名：第 4 回日本オープンイノベーション大賞・スポーツ庁長官賞

受賞理由：「防災スポーツ」プロジェクトが，ロールモデルとなる先導的又は独創的な取組の中で，スポーツ分野における科学技術・学術の振興の視点から，特に顕著な取組が認められると評価されたため。

受賞者：原田和弘

受賞名：第 24 回（2022 年度）日本運動疫学会学術総会最終優秀演題賞

受賞理由：第 24 回日本運動疫学会学術総会における一般発表において優秀な発表と認定されたため。

受賞者：原田和弘

受賞名：2022 年度日本運動疫学会優秀査読者賞

受賞理由：日本運動疫学会誌「運動疫学研究」の査読に尽力しその発展に貢献したため。

受賞者：塩崎麻里子，増本康平

受賞名：日本老年社会科学会第 64 回大会優秀ポスター賞

受賞理由：人生受容に影響を及ぼす要因の検討 - 加齢と文化多様性の観点からの国際比較 - 日本老年社会科学会

## その他

### 招待講演

石原暢. 「身体的健康と脳の健康、社会性」. 日本社会心理学会第 63 回大会ワークショップ「学際的な社会心理学の構築を目指して—若手研究者のための教育講演—」. 2022 年 9 月 15 日.

石原暢. 「幼少期の運動経験と将来の認知機能」. 第30回日本運動生理学会大会シンポジウムⅢ「子どもの身体活動と認知/非認知能力」. 2022年8月25日.

石原暢. 「身体活動と認知機能：マルチモーダル脳画像指標を用いた検討」. 電気通信大学脳・医工学研究センターセミナー. 2023年3月22日.

#### 行動系の総括と課題

新型コロナウイルス感染拡大が続く状況下ではあったが、国内外で活動的な研究活動を教員各自が展開し、本年度も研究資金獲得を伴う研究の進展とその成果は着実に挙げられている。国際共同研究もこれまでの継続に加え、新規研究が拡大しており、来年度以降はそれらの成果と発展が表れてくることが期待できる。今後は各研究分野における更なる研究の進展とともに、外部資金の獲得にも注力しつつ、国際的な共同研究をさらに推進したい。課題としては、研究成果の発信や理論化により著書出版の増加や、各研究室の大学院生の研究活動への研究指導と支援による研究成果を本行動系より発信していくことが挙げられる。

#### ●教育系

##### (1) 国際共同研究

研究代表：山口悦司

共同研究者（海外）：Clark Chinn (Rutgers University), Eowyn Winchester (Rutgers University)

共同研究者：望月俊男（専修大学）、大浦弘樹（東京理科大学）

研究課題：高度情報化社会に求められる科学関連情報評価能力の育成手法と実践モデルの開発（課題番号 20K20829）

研究資金：2020～2022年度・挑戦的研究（萌芽）

研究概要：高度情報化社会に求められる科学関連情報評価能力の育成手法と実践モデルに関する基礎研究を行っている。

本専攻研究者：北野幸子（共同研究者）

研究代表者：榊原洋一（CRN 所長、お茶の水女子大学名誉教授）

共同研究者（海外）；Prof. Aminah binti Ayob (Sultan Idris Education University, Malaysia), Dr. Christine Chen (Association for Early Childhood Educators, Singapore), Prof. Sasilak Khayankij (Chulalongkorn University, Thailand), Dr. Poh Tin Tan (Tan Specialist Child and Family Clinic, Malaysia), Dean Dr. Sofia Hartati (State University of Jakarta, Indonesia), Fasli Jalal (Professor, State University of Jakarta, Indonesia), Dr. Thelma Rabago Mingoa (De La Salle University, Philippine), Dr. Lee-Fong Wong (National Taipei University of Education, Taiwan), Dr. Felix Hung (National Taipei University of Education, Taiwan) Mazlina Che Mustafa (Sultan Idris Education University, Malaysia), Dr. Sirithida Chinsangthip (Chulalongkorn University, Thailand), Dr. Anita Chu (National Taipei University of Education, Taiwan), Sri Indah Pujiastuti (State University of Jakarta, Indonesia), Dr. Jiaxiong Zhu (East China Normal

University, China) , Dr. Nianli Zhou (East China Normal University, China)

共同研究者 (国内) : 星三和子 (十文字女子大学), 佐藤朝美 (愛知淑徳大学), 深見俊崇 (島根大学)

研究課題: Exploring Factors Nourishing Happy and Resilient Children among Asian Countries

研究資金: Child Research Net Asia、ベネッセ教育研究所研究資金

研究概要: 本研究では、コロナ禍での子どものウェルビーイングについて 2021 年に 8 か国の 5 歳児、7 歳児の子どもの対象に調査した。その結果の比較分析を続けている。本年度は、8 か国共通で、コロナ禍という困難な状況の中で、子どものウェルビーイングに「レジリエンス」の育成が重要であることが明らかになった。日本を含む複数の国で、レジリエンスの向上に「母親の養育態度」や「園 (保育者) のサポート」などが関連していることも明らかになった。

## (2) 国内共同研究等

### 科研 (代表者)

本専攻研究者: 川地亜弥子, 赤木和重, 勅使河原君江, 中谷奈津子

研究代表者: 川地亜弥子 (神戸大学)

研究課題: 英国の初等教育におけるオーラシー育成: 教育目標・評価, 指導の実際, 環境デザイン

研究資金: 基盤研究 (C) (一般) (課題番号 20K02516)

研究概要: 英国初等教育におけるオーラシー (話す・聞くことによって育つ力) の教育について、文献収集・分析を行った。

本専攻研究者: 山口悦司, 坂本美紀, 増本康平, 木村哲也, 佐藤幸治

研究代表者: 山口悦司

研究課題: 高度情報化社会に求められる科学関連情報評価能力の育成手法と実践モデルの開発 (課題番号 20K20829)

研究資金: 2020~2022 年度・挑戦的研究 (萌芽)

研究概要: 高度情報化社会に求められる科学関連情報評価能力の育成手法と実践モデルに関する基礎研究を行っている。

本専攻研究者: 山下晃一

研究代表者: 山下晃一 (神戸大学)

研究課題: 分権型教員人事の存立要件に関する日・米・英比較研究: 教員集団への影響に着目して

研究資金: 科学研究費助成事業 基盤研究 (B)

研究概要: 本研究は、公立小学校を主たる対象に絞りながら、各々異なる分権化の度合い・質を持つ米国・英国・日本の現状を比較調査し、分権型の教員人事が教員集団へ与える影響に着目した上で、その存立要件の解明を目的とするものである。

本専攻研究者: ラッシラ エルッキ・T

研究代表者: ラッシラ エルッキ・T (神戸大学)



研究課題：On educating the teachers of the gifted in Japan

研究資金：2022年度 研究活動スタート支援（課題番号 22K20247）

研究概要：日本人教師の才能児に対する考え方を探り、教師教育のモデルと実践を開発することを目指す。

本専攻研究者：勅使河原君江

研究代表者：勅使河原君江（神戸大学）

研究課題：戦後関西における子どもと教師の学びの循環 - 西田秀雄による絵日記指導を中心に -

研究資金：基盤研究（C）（一般）（課題番号 19K02397）

研究概要：1950年代に京都市立小学校教諭 西田秀雄の絵日記指導によって作成された絵日記の資料収集とその分析を行い、その成果を学会において発表した。

本専攻研究者：中谷奈津子

研究代表：中谷奈津子

共同研究者：関川芳孝（大坂公立大学）・鶴宏史（武庫川女子大学）・木曾陽子（大坂公立大学）・吉田直哉（大坂公立大学）

研究課題：保育所等における生活困難家庭に対する組織的支援と実践理論の構築

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究（B）（課題番号 19H01651）

研究概要：保育所等における生活困難家庭に対する組織的支援の実際を明らかにし、実践理論を構築する。

本専攻研究者：目黒強

研究代表者：目黒強（神戸大学）

研究課題：近代日本における通俗教育にみる課外読み物の選書に関する基盤的研究

研究資金：基盤研究（C）（一般）（課題番号 21K00282）

研究概要：1910年代から1920年代にかけての課外読み物の統制について検証を行い、成果を発表した。

本専攻研究者：木下孝司

研究代表者：木下孝司

研究課題：文化伝達に着眼した幼児期の「集団の育ち」に関する評価

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究（C）

研究概要：幼児期の保育において、「集団の育ち」と言われるものを、文化進化論的観点から文化伝達に着眼して検討して、保育者の集団づくりを分析する研究。

本専攻研究者：稲原美苗，松岡廣路，津田英二

研究代表者：稲原美苗

研究課題：哲学プラクティスと当事者研究の融合：マイノリティ当事者のための対話と支援の考察

研究資金： 基盤研究(B) (一般) (課題番号 19H01185)

研究概要：本研究は、哲学・倫理学、当事者研究、ジェンダー学、社会教育学、環境リスク学などの領域の知見をも取り入れ、対話実践を支援に繋げることを目的とする。各分野の知見を総合し、その成果を教育・医療・福祉の現場にフィードバックする。

本専攻研究者：喜屋武享

研究代表者：喜屋武享 (神戸大学)

研究課題：身体活動・学力の同時的改善を可能にするアクティブ・レッスン・プログラムの開発

研究資金：若手研究 (課題番号 20K13966)

研究概要：教科学習中の学習を伴う身体活動 (アクティブ・レッスン・プログラム) の開発とそれによる学力への影響をはじめとする効果を検討する。

本専攻研究者：津田英二・稲原美苗・清野未恵子・赤木和重・岡崎香奈・大田美佐子・松岡広路

研究代表：津田英二

共同研究者 (海外)：J. W. Kim, J. H. WOO

共同研究者 (本学教員)：稲原美苗・清野未恵子・赤木和重・岡崎香奈・大田美佐子・松岡広路

研究課題：障害者の文化芸術活動の実践分析に基づくエンパワメント評価及び支援システム開発研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤 (B)

研究概要：障害者の文化芸術活動を対象として、1)それらがどのような効果をもたらえるものであるのか、2)その効果を把握する現実的な評価方法はいかなるものであるべきか、3)多様に展開されている障害者の文化芸術活動を社会や行政はいかに支援しえるか、という3点を明らかにする共同研究であり、韓国ナザレ大学及び劇団ラハプとの共催でオンラインシンポジウムを行っている。

## 科研 (分担者)

本専攻研究者：川地亜弥子

研究代表者：植田健男 (花園大学)

研究課題：「学習指導要領体制」の構造的変容に関する総合的研究

研究資金：基盤研究 (A) (一般) (課題番号 20H00103)

研究概要：戦後初期の学習指導要領 (1947, 1951 年版) の意義と内容について、その到達点を現代的観点から分析した。

本専攻研究者：川地亜弥子

研究代表者：浅野慎一 (摂南大学)

研究課題：戦後日本の夜間中学にみる公共圏の史的変遷：ポスト・コロニアリズムの視座から

研究資金：基盤研究(B) (一般) (課題番号 21H00818)

研究概要：全国夜間中学校研究協議会の史資料を精査し、生徒作文等の要約を行い、資料集刊行に向けて準備を進めている。

本専攻研究者：坂本美紀，山口悦司

研究代表者：坂本美紀

研究課題：市民の科学への参加・支援を加速化するオープンサイエンス・リテラシー教育モデル開発  
(課題番号：18K18646)

研究資金：平成 30～2022 年度 挑戦的研究 (萌芽)

研究概要：市民の科学への参加・支援を加速化するオープンサイエンス・リテラシー教育モデルを開発している。

本専攻研究者：山口悦司

研究代表者：武田義明 (神戸大学)

研究課題：生物多様性の実感的学習を可能とする SDGs を志向した里山環境保全教育プログラム (課題番号：19H01734)

研究資金：2019～2022 年度 基盤研究 (B) (一般)

研究概要：生物多様性の実感的学習を可能とする SDGs を志向した里山環境保全教育プログラムを開発している。

本専攻研究者：坂本美紀，山口悦司

研究代表者：坂本美紀

研究課題：市民の科学への参加・支援を加速化するオープンサイエンス・リテラシーの教師教育 (課題番号：20H01744)

研究資金：2020～2022 年度 基盤研究 (B) (一般)

研究概要：市民の科学への参加・支援を加速化するオープンサイエンス・リテラシーの教師教育プログラムを開発している。

本専攻研究者：山口悦司

研究代表者：望月俊男 (専修大学)

研究課題：一見矛盾する事実から真実を導き出す能力を育む協調学習環境の開発と実践的評価 (課題番号：20H01729)

研究資金：2020～2022 年度・基盤研究 (B) (一般)

研究概要：一見矛盾する事実から真実を導き出す能力を育む協調学習環境の開発と実践的評価に取り組んでいる。

本専攻研究者：山口悦司

研究代表者：稲垣成哲 (立教大学)

研究課題：科学系博物館におけるユニバーサルデザイン手法の開発と実践モデルの提案 (課題番号：18H03660)

研究資金：2018～2022 年度 基盤研究 (A) (一般)

研究概要：科学系博物館におけるユニバーサルデザイン手法の開発と実践モデルの提案に取り組んで

いる。

本専攻研究者：坂本美紀，山口悦司

研究代表者：坂本美紀

研究課題：意思決定エージェントとしての市民を育成する変革的リスクリテラシーの指導法と評価法  
(課題番号：22K18625)

研究資金：2022～2024 年度 挑戦的研究 (萌芽)

研究概要：意思決定エージェントとしての市民を育成する変革的リスクリテラシーの指導法と評価法の開発に取り組んでいる。

本専攻研究者：山下晃一

研究代表者：浜田博文 (筑波大学)

研究課題：校長のリーダーシップ発揮を促進する制度的・組織的条件の解明と日本の改革デザイン

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究 (A)

研究概要：本研究は、校長のリーダーシップ発揮の促進要因を、校長職をとりまく制度的・組織的条件に焦点づけて実証的に解明し、とりわけ制度的・組織的条件の解明と整備＝システムアプローチの観点から日本における改革デザインを提示することを目的とする。

本専攻研究者：山下晃一

研究代表者：元兼正浩 (九州大学)

研究課題：学校経営コンサルティング型組織開発—リアリティを追究する教育実践研究の再構築

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究 (B)

研究概要：本研究は、学校経営コンサルテーション (対話型プロセスを重視した組織開発) とその実証を通じて、教職員自身の自己治癒力と研究者のコンサルテーション力を目指し、内発的な学校改革を支援する教育経営学研究の新たな可能性を提示する。

共同研究者：ラッシラ エルッキ・T

研究課題：サステナビリティ・コンピテンシーを培う幼児向け STEAM プログラムの開発と評価 (研究代表者：大貫麻美)

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究 (B)

研究概要：幼児期における Steam 教育のアクションリサーチ。

本専攻研究者：渡邊隆信

研究代表者：宮本健市郎 (関西学院大学)

研究課題：新教育運動期における自然保護運動の昂揚と環境教育の起源に関する比較史的研究

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究 (C)

研究概要：本研究の目的は、新教育を主張した人物の思想、または新教育を実施した学校において、自然保護のための教育がどのような形で構想され、実施されたのかを確認し、それが人間中心 (子ども)

も中心) の教育を超える視点があったかどうかを考察する。

本専攻研究者：北野幸子

研究代表者：三村真弓（広島大学）

研究課題：音楽科固有の資質・能力の基礎となる音楽的感覚及び音楽能力育成カリキュラムと指導法

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要：音楽的感覚及び音楽能力育成カリキュラムと指導法について開発した。

本専攻研究者：北野幸子

研究代表者：寺見陽子（神戸松蔭女子学院大学）

研究課題：家庭養育と乳児保育の質の向上を促す家庭と乳児保育の連携プログラムの開発

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要：0-3 歳児を中心とした家庭と園の連携に関するプログラムの国内外の実態調査を行った。

本専攻研究者：北野幸子

研究代表者：藤掛絢子（ノートルダム清心女子大学）

研究課題：実習との往還を図った音楽表現領域における保育者養成教育プログラムと評価の開発

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要：保育領域「表現」の特に音楽表現に関して、学内の講義・演習と園での実習との往還的養成教育のプログラム開発とその評価方法の開発を行った。

本専攻研究者：中谷奈津子

研究代表：亀崎美沙子（十文字学園女子大学）

共同研究者：鶴宏史（武庫川女子大学）

研究課題：保育における倫理的意思決定モデルに関する基礎研究

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究 (C) (課題番号 21K02333)

研究概要：本研究では、国内外の倫理的ジレンマの収集・分析を行い、保育における倫理的意思決定モデルの構築を行う。

本専攻研究者：中谷奈津子

研究代表：川地亜弥子（神戸大学）

共同研究者：赤木和重（神戸大学）・勅使河原君江（神戸大学）

研究課題：英国の初等教育におけるオーラシー育成:教育目標・評価、指導の実際、環境デザイン

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究 (C) (課題番号 20K02516)

研究概要：英国の初等教育の場におけるオーラシー育成に関する目標と評価、教育実践、環境、評価について明らかにする。

本専攻研究者：目黒強

研究代表者：土居安子（大阪国際児童文学振興財団）

研究課題：明治・大正期における児童文学・児童文化史の研究—巖谷小波未発表資料の検討を通して

研究資金：基盤研究（C）（一般）（課題番号：20K00335）

研究概要：巖谷小波の通俗教育活動について検証を行い、成果を発表した。

本専攻研究者：稲原美苗

研究代表者：村山留美子

研究課題：COVID-19 流行は市民のリスク観をどのように変えるのか？：合意形成の観点から

研究資金：基盤研究(B)（一般）（課題番号 21H00770）

研究概要：本研究の目的は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）について、そのリスクに対する市民の認知とその構造を明らかにするとともに、その世界的流行が、日本社会全体の「リスク観」に与えた影響を明らかにすることである。

本専攻研究者：喜屋武享

研究課題：青少年の社会経済的不利と健康の関係に対する学校・地域の集合的効力の同時的修飾効果

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究(C)（代表者：高倉実）

研究概要：学校および地域レベルの集合的効力が、青少年の社会経済的不利と健康指標との関係に、どのような介在的役割を果たすのかを検討する。

本専攻研究者：喜屋武享

研究課題：運動発達の見える化を可能にする簡便な幼児の運動能力測定法の開発と効果検証

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究(C)（代表者：香村恵介）

研究概要：幼児の「運動発達の見える化」をすることがより身近になることを目指して、簡便な幼児の運動能力測定法、評価・管理・共有システムを開発し、その効果を検討する。

## 地方公共団体・神戸大学など

本専攻研究者：北野幸子

研究代表者：北野幸子

研究課題：兵庫県における未就園児の育ちと学びを支える子ども子育て支援の実態に関する比較調査

研究資金：文部科学省 令和4年度幼児教育の教育課題に対応した指導方法等充実調査研究 再委託研究（委託先、リベルタス・コンサルティング）

研究概要：兵庫県の幼稚園、保育所、こども園、地域子育て支援拠点を対象に行われている子育て支援についてその実態と内容についての現状と課題について比較調査を実施した。

本専攻研究者：北野幸子

研究代表者：渡邊恵子（国立教育政策研究所）

研究課題：幼児期からの育ち・学びとのプロセスの質に関する研究

研究資金：国立教育政策研究所 プロジェクト研究

研究概要：海外における幼児教育の質に関する研究動向を検討した。保育実践の質評評価スケールを作成した。また、スケールを活用した園内研修の検討と提案をおこなった。

本専攻研究者：北野幸子

研究代表者：一般社団法人全国福祉サービス第三者評価調査者連絡会

研究課題：保育所等における第三者評価、自己評価の実施及び活用に関する調査研究

研究資金：厚生労働省 令和4年度子ども・子育て支援推進調査研究事業

研究概要：保育の質に関わる保育所等における第三者評価と自己評価等の国際比較を行い、日本のこれからの第三者評価と自己評価の在り方について考察した。

本専攻研究者：北野幸子

研究代表者：岩橋道世（保育科学研究会）

研究課題：コロナ禍における3歳未満児保育に関する研究～実態調査から見えてくるもの

研究資金：厚生労働省 2020年度日本保育協会保育科学研究所「指定研究」

研究概要：コロナ禍における3歳未満児保育の実態について全国調査を行い、その特徴を明らかにした。

本専攻研究者：北野幸子

研究代表者：北野幸子

研究課題：保育のICT環境に関する実態調査と保育者支援システム創りに関する研究

研究資金：令和4年度大学発アーバンイノベーション神戸研究助成

研究概要：神戸市内の全ての園種公私を含むすべての保育施設におけるICT環境の実態調査を行った。また各区拠点園へのポータブル・Wi-Fiと端末を貸出、地域の保育者の連携協働システムを開発した。保育者支援について資料提供、研修開発等を行った。

本専攻研究者：北野幸子

研究代表者：北野幸子

研究課題：乳幼児教育実践の質の維持・向上にかかわる保育者の専門性に関する研究

研究資金：神戸市こども家庭局事業費

研究概要：神戸市事業として乳幼児保育研究部会を立ち上げ、遠隔公開保育の方法の開発、実践事例の可視化と発信方法の開発等、保育の質の維持・向上にかかわる保育者の専門性についての検討をおこなっている。

本専攻研究者：北野幸子，岡部恭幸，渡邊隆信

研究代表者：北野幸子

位置測位システムを活用したリスク・マネジメントに関する実践的研究～園における保健関連データの収集と解析～

研究資金：神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究推進支援経費

研究概要：位置測位システムを活用し、園のリスク・マネジメントに寄与する保健関連データの収集と解析を試みた。

本専攻研究者：喜屋武享，内山愉太，原田和弘

研究代表者：喜屋武享（神戸大学）

研究課題：擬似人流データを用いた身体活動量の推定と地理的・社会経済的環境から見た地理的地域特性の解明：地域住民の健康増進に向けた活動量シュミレーションシステムの開発

研究資金：文部科学省 AI 等の活用を推進する研究データエコシステム構築事業

研究概要：本提案は「擬似人流データ」の公衆衛生学分野をはじめとする保健学でのユースケースを提案するものである。

本専攻研究者：喜屋武享

研究代表者：喜屋武享（神戸大学）

研究課題：幼児期から青年期までの健康・well-being の社会的決定要因の特定と学校保健活動促進要因の解明

研究資金：神戸大学 高等学術研究院テニュアトラック教員支援制度

研究概要：幼児期から青年期までの若年者の健康・well-being の社会的決定要因を明らかにするとともに学校長を含む教員のヘルスリテラシーと青少年の well-being や健康の増進を担う学校保健活動との関連を明らかにする。

本専攻研究者：喜屋武享

共同研究者：高倉実（琉球大学），宮城（琉球大学）

研究課題：若年者における健康の社会的決定要因とその経年変化に関する社会疫学研究

研究資金：琉球大学 令和4年度 先端医学研究支援事

研究概要：若年者の個人・集団レベルの健康の社会的決定要因と健康指標との関連性についての経年変化を可視化する。

本専攻研究者：赤木和重，大田美佐子，岡崎香奈，川地亜弥子，清野未恵子，稲原美苗

研究代表者：津田英二

研究課題：地域コンソーシアムによる障害者の生涯学習支援体制の構築

研究資金：文部科学省受託「地域における持続可能な学びの支援に関する実践研究」

研究概要：知的障害者に大学教育を開くことをめぐる理論的・実践的課題を明らかにし、大学教育プログラムを開発・実施する実践的なモデル開発研究、及び兵庫県内の障害者の生涯学習機会創出のモデル開発を行なう研究である。

本専攻研究者：寺村ゆかの，津田英二

研究代表者：津田英二

研究課題：子育て支援拠点プログラムモデル開発



研究資金：神戸市「神戸市地域子育て支援拠点事業補助金」

研究概要：2005年より運営している「のびやかスペースあーち」において、子育てに関わる多様な人々との出会いや交流を通して、そこで出会った利用者らが互いの立場を理解し互いに学び合うこと、そしてそこから生まれる新たな価値観を共有するためのプログラムモデルの開発を行う。

本専攻研究者：津田英二，寺村ゆかの

研究代表者：津田英二

研究課題：子どもの居場所づくりプログラムモデル開発

研究資金：神戸市「神戸市子どもの居場所づくり補助金」

研究概要：2005年より運営している「のびやかスペースあーち」において、社会参加機会の少ない子どもたちを中心に、多様な人たちのエンパワメントの場として活用できるプログラムモデルの開発を行う。

### (3) 産学官共同研究等

研究代表者（本専攻教員）：北野幸子

研究課題：誕生からの育ちと学びの連続性を踏まえた幼児教育の質の向上を目指す保育実践研究

研究資金：令和4年度福井県私立幼稚園・認定こども園協会共同研究 寄付金

研究概要：誕生からの育ちと学びの連続性を踏まえた教育実践例の検討、環境構成の工夫、援助の質向上を図る工夫等について実態を明らかにした。なお本研究の共同研究が学会賞を受賞した。

### (3) 論文

**国際共著論文** Web of Science 収録誌掲載論文 \* (10%論文にはマークを付す)

Oura, H., Mochizuki, T., Chinn, C., Winchester, E., & Yamaguchi, E. (2022). Detecting cherry-picked evidence in texts: Challenges for undergraduate students. *Proceedings of International Conference of the Learning Sciences 2022*, 1257-1260.

Oura, H., Mochizuki, T., Chinn, C., & Yamaguchi, E. (in press). Developing undergraduate students' competence in reasoning about bodies of evidence. *Proceedings of International Conference of the Learning Sciences 2023*.

Lassila, E.T. & Ahn, R. (2022). Japanese Pre-Service Teachers' Learning Experience Using Moses' Student-Centered Pedagogical Framework. *International Journal of Teacher Leadership* 11(2), 1-14.

Yamamoto, T., Kamiyama, S., Tanaka, T., & Yamaguchi, E. (2022). Primary school students' difficulties in writing arguments: Identifying challenges and opportunities for science teaching. *Journal of Baltic Science Education*, 21(3), 445-461.

<https://doi.org/10.33225/jbse/22.21.445>

Lassila, E.T., Hyry-Beihammer, E.K., Kızıkan, O., Rocena, A., & Sumida, M. (accepted). Giftedness in inclusive classrooms: A cross-cultural examination of pre-service teachers' thinking in Finland, Austria, Turkey, the Philippines, and Japan. *Gifted Child Quarterly*.

Hiroto Enari, Hironori Seino, Takeharu Uno, Yoshiki Morimitsu, Masaaki Takiguchi, Katsuya Suzuki, Yamato Tsuji, Naoto Yamabata, Mieko Kiyono, Hisaaki Akaza, Shigeyuki Izumiyama, Toru Oi, Hiroshi Ebihara, Kiyomasa Miki, Musashi Kuramoto, Haruka S. Enari. Optimizing habitat connectivity among macaque populations in modern Japan., *Conservation Science and Practice* 4(11) 2022年9月28日.

Kyan A, Takakura M, Miyagi M. Associations between 24-h movement behaviors and self-rated health: a representative sample of school-aged children and adolescents in Okinawa, Japan. *Public Health*. 2022;213:117-123. doi:10.1016/J.PUHE.2022.10.012

Kyan A, Takakura M. Socio-economic inequalities in physical activity among Japanese adults during the COVID-19 pandemic. *Public Health*. 2022;207:7-13. doi:10.1016/j.puhe.2022.03.006

#### 査読付き論文

Takahashi, A., Yamaguchi, E., & Inagaki, S. (2022). Designing exhibition space to support early childhood education in science museums: The ComPaSS of the National Museum of Nature and Science in Japan. In L. Gómez, A. L. Martínez & J. Lees (Eds.), ICERI2022 Proceedings (pp.1414-1417). IATED Academy.

Sakamoto, M., Yamaguchi, E., Yamamoto, T., Tamai, R., & Matano, M. (2022). Redesign and evaluation of instruction for primary students' socioscientific decision-making toward consensus building. In G. S. Carvalho, A. S. Afonso & Z. Anastacio (Eds.), *Fostering scientific citizenship in an uncertain world (Proceedings of ESERA 2021)*, Part 8 (co-ed. A. Laherto & E. Rybska), (pp.569-577). Braga: CIEC, University of Minho.

Kobayashi, W., Aoki, R., Yago, K., Inagaki, S., Takeda, Y., Kusunoki, F., Mizoguchi, H., Sugimoto, M., Funaoi, H., & Yamaguchi, E. (2022). Satoyama forest management game: Can elementary school students learn the difference in management methods? In G. S. Carvalho, A. S. Afonso & Z. Anastacio (Eds.), *Fostering scientific citizenship in an uncertain world (Proceedings of ESERA 2021)*, Part 9 (co-ed. A. Zeyer & J. Dillon), (pp.775-780). Braga: CIEC, University of Minho.

高橋あおい・山口悦司・稲垣成哲 (2022) 「国立科学博物館の展示室「親と子のたんけんひろばコンパス」の理念は 展示にどのように反映されたのか」『科学教育研究』第46巻, 第4号, 384-369.  
俣野源晃・山口悦司・山本智一・神山真一・坂本美紀 (印刷中) 「適切かつ十分な証拠を利用するア

ーギュメント構成能力育成を目指した小学校理科授業デザインの開発と評価:証拠の認識的理解に着目して」『理科教育学研究』.

小林和奏・山口悦司・青木良太・武田義明・溝口博・楠房子・舟生日出男・杉本雅則・田中達也・稲垣成哲 (印刷中)「小学校理科授業における「里山管理ゲーム」の活用と評価」『科学教育研究』.

田中達也・山口悦司 (印刷中)「アーギュメント自己評価能力の向上を支援するための教授方略の開発と評価」『理科教育学研究』.

山下晃一, 清田夏代, 高野和子, 勝野正章 (2023)「英国における“学校分権型教員人事”の生成過程と今日的展開 —広域教員人事による集権の問題解決との相違を念頭に—」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第 16 巻第 2 号, pp. 41-55, 査読有り。

榎景子, 篠原岳司, 藤村祐子, 高橋哲, 山下晃一 (2023)「米国の公立学校教員人事をめぐる学校裁量の法的規定と運用実態 —学校分権型教員人事の存立要件に関する予備的考察—」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第 16 巻第 2 号, pp. 57-71, 査読有り。

松山七織, 長尾悠里, 山下晃一 (2022)「私立通信制高等学校における特別活動の意義に関する事例検討 —青年期の今日的状況と教師の役割の再定義を念頭に置いて—」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第 16 巻第 1 号, pp. 59-71, 査読有り。

手代木英明・ラッシラ, エルッキ T. ・鈴木誠 (受理)日本とフィンランドの理科教科書比較研究—小学校生物領域における学びの構成と問いの比較を通して—. 日本生物教育.

松山聖奈・北野幸子 (2022)「社会経済的背景を踏まえた子どもと家庭の支援に関する保育施設の役割—ソーシャルワーク機能に着目して—」. 保育ソーシャルワーク学研究第 8 号. pp. 15-28. (2022 年 12 月 25 日発行)

藤掛絢子・北野幸子 (2023)「幼少期における自然の中での音とかかわる遊びに関する大学生の認識」, 『ノートルダム清心女子大学紀要人間生活学・児童学・食品栄養学編』, 47 (1), pp. 81-93. 査読あり

中谷奈津子・木曾陽子・吉田直哉・鶴宏史・関川芳孝 (2022)「子ども家庭支援に関する情報共有を支える組織的要因 : 生活困難家庭を積極的に支援する保育所等へのインタビュー調査から」『社会福祉学』63 (3), 41-54.

木曾陽子・中谷奈津子・吉田直哉 (2023)「保育所等における生活困難家庭支援のための介入プロセス —積極的に支援を行う園に対するインタビュー調査より—」『保育学研究』60 (2), 317-329.

鶴宏史・中谷奈津子・木曾陽子・吉田直哉・関川芳孝 (2023) 「保育所・認定こども園での生活困難家庭への支援における保育者の姿勢—保育者へのインタビューの分析を通して—」『学校教育センター紀要』8. 印刷中.

木下孝司 (2022) 子どもの自己発達と時間—「待てない社会」での対話を通して 子ども学、10, 83-102.

稲原美苗 (2022) 「コロナ禍でみえてきたもの——ニューノーマルと障害者についての哲学的考察」, 『法と哲学—特集:COVID-19 という問題』, 第8号, 信山社, pp. 107-32.

稲原美苗, 三井規裕 (2022) 「哲学カフェ企画運営から大学生が得た学びの検討 —立場や考え方の異なる他者との対話実践—」, 『思考と対話』, 第4巻, pp. 68-74.

村上旬平, 米倉裕希子, 高橋 綾, 稲原美苗, 新家一輝, 竹中菜苗, 森崎志麻, 秋山茂久 (2023) 「障害者歯科における多職種による親への心理的サポートプログラムの試み」, 『障害者歯科』, 第44巻, 第1号, pp. 52-61.

INAHARA, Minae (2023) “A Dialogue between the Body Schema and the Body Image: A Case of Mild Athetoid Cerebral Palsy”, *PHILOSOPHY & CULTURAL EMBODIMENT*, Vol13.No. 1, (オンライン)

Kyan A, Takakura M, Kamiya Y, Kinjo N, Nakasone T. Socioeconomic inequalities in toothbrushing behaviours in young children: a children’ s lifestyle survey in a representative population of A city, Okinawa prefecture, Japan. *Eur Arch Paediatr Dent.* 2022;23(6):969-977. doi:10.1007/S40368-022-00751-5/FIGURES/2

Ishihara T, Kyan A. A narrative review of the relationship between early-life physical activity and later-life cognitive function. *J Phys Fit Sport Med.* 2022;11(3):137-147. doi:10.7600/jpfs. 11. 137

井上太一, 猪原風希, 津田英二 (2022) 障害者の文化芸術活動におけるエンパワメントの過程～「思うようにならなさ」をめぐる表現者と支援者の葛藤の共振～, 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 16(1), pp. 83-94

赤木和重, 川地亜弥子, 津田英二, 河南勝, 佐藤知子, 殿垣亮子, 柴田眞砂子, 黒川陽司 (2022) 知的障害青年の大学教育プログラムはなにをもたらしたか:教育専門職養成大学における3年間の実践を通して～, 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 16(2), pp. 87-95

査読無し論文

川地亜弥子 (2022) 「みんなのねがいで学校をつくろう」『クレスコ』(253)14-17。

川地亜弥子 (2022) 「1930年代の生活綴方における知の創出：子どもの生活と表現にねざす教育論を目指して」『日本の科学者』(57)4-9。

川地亜弥子 (2022) 「9・10歳の節と学校の役割」『教育』(923)91-97。

Shorb, P., Kenklies, K., Yamasaki, Y. Sakuma H., and Kawaji, A. (2023) Review Seminar of Educational Progressivism, Cultural Encounters and Reform in Japan (I): Record of Speeches, Bulletin of Educational Sciences, 26, in press.

Shorb, P., Kenklies, K., Yamasaki, Y. Kuno, H., and Kawaji, A. (2023) Review Seminar of Educational Progressivism, Cultural Encounters and Reform in Japan (II): Record of Discussion, Bulletin of Educational Sciences, in press.

俣野源晃・山口悦司・渡辺桜・置塩佳奈 (2022) 「アーギュメントにおける証拠の十分性に関する小学生の認知的理解の事例的検討」『日本科学教育学会研究会研究報告』第37巻, 第4号, 61-64.

口羽駿平・山口悦司・俣野源晃・坂本美紀 (2022) 「アーギュメント構成能力における持続性の検討2)」『日本科学教育学会研究会研究報告』第37巻, 第4号, 143-146.

口羽駿平・山口悦司・坂本美紀・山本智一・原愛佳・近江戸伸子・俣野源晃・澁野哲 (2023) 「科学技術の社会問題としてのゲノム編集を題材とした小学生向け教育プログラムの開発」第37巻, 第5号, 75-78.

武田義明・溝口博・楠房子・舟生日出男・杉本雅則・山口悦司・稲垣成哲 (2023) 「生物多様性の実感的学習を可能とするSDGsを志向した「里山管理ゲーム」の成果と展望」『日本科学教育学会研究会研究報告』第37巻, 第5号, 97-102.

田中達也・山口悦司・小林和奏・青木良太・武田義明・溝口博・楠房子・舟生日出男・杉本雅則・稲垣成哲 (2023) 「「里山管理ゲーム」を活用した小学校理科授業のデザイン」『日本科学教育学会研究会研究報告』第37巻, 第5号, 103-106.

小林和奏・山口悦司・青木良太・武田義明・溝口博・楠房子・舟生日出男・杉本雅則・田中達也・稲垣成哲 (2023) 「「里山管理ゲーム」を活用した小学校理科授業の評価：シカ駆除の必要性に関する知識獲得過程の相互行為分析」『日本科学教育学会研究会研究報告』第37巻, 第5号, 107-110.

山下晃一 (2022) 「あらためて教育経営学の学問的特質・得失を考えるために」『日本教育経営学会

紀要』第64号、pp.114-119、招待論文、査読なし。

岡部恭幸 (2023) 「数学的な見方・考え方を成長させる算数・数学のデジタル教科書の活用」 学習情報研究291号 2023.3月 公益財団法人 学習情報研究センター 44-45

岡部恭幸 (2023) 「児童が感じる算数の『難しさ』を考える」奈良女子大学附属小学校学習研究会 『学習研究』505号 16-21

岩橋道世・平山猛・隈崎哲也・菊地義行・只野裕子・福澤紀子・永田久史・田和由里子・田口侑平・東口房正・栳沢幸苗・坂崎隆浩・齋藤奈緒美・矢藤誠慈郎・北野幸子 (2023) 「コロナ禍における3歳未満児保育に関する研究～実態調査から見えてくるもの～」 『保育科学研究』第12巻、pp.16-38。

中谷奈津子 (2023) 「子どもの貧困における保育の役割と課題：2000年以降の海外文献レビューをもとに」 『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』16(2), 101-109.

木曾陽子・中谷奈津子・吉田直哉・関川芳孝・鶴宏史 (2023) 「保育所等における生活困難家庭を抱える家庭との連携—子どもへの積極的支援を行う保育所等へのインタビュー調査から—」 『社会問題研究』. 72. 印刷中.

吉田直哉・中谷奈津子・木曾陽子・鶴宏史・関川芳孝 (2023) 「管理職によって抱かれる子ども家庭支援を支えるポリシー：認定こども園でのインタビューにおける語りから」 『社会問題研究』72. 印刷中.

目黒強 (2022) 「児童文学における〈子ども理解〉の動向」 日本子ども社会学会編 『子ども社会研究』第28号, pp.21-31

目黒強 (2022) 「明治・大正年間における『図書館雑誌』にみる課外読み物の選書論」 神戸大学大学院人間発達環境学研究科編 『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第16巻第1号, pp.95-104

Kyan A, Takakura M. Impact of COVID-19 pandemic on the socioeconomic inequality of health behavior among Japanese adolescents: a two-year-repeated cross-sectional survey. *medRxiv*. Published online August 17, 2022:2022.08.11.22278499. doi:10.1101/2022.08.11.22278499

松岡広路 (2022) 「当事者性の交差を生むESDプラットフォーム創成実践の方法と課題」 日本社会教育学会 『社会教育学研究』58巻, p56-57

松岡広路 (2022) 「SDGsの学習論～当事者性の交差を生むプラットフォームづくりをめざして」 『月刊 兵庫教育』

津田英二 (2022) 「発達障害 空気を読まずに、言いたい放題」『こころの元気』16(4), pp. 48-49

津田英二 (2022) 「学校や企業内の「橋渡し」役が、これからのダイバーシティ社会を推進する」『HR ONLINE』ダイヤモンド社 (<https://diamond.jp/articles/-/304494>)

津田英二 (2022) 「いまとこれから、大学と企業ができる“インクルージョン”は何か？」『HR ONLINE』ダイヤモンド社 (<https://diamond.jp/articles/-/307722>)

津田英二 (2022) 「コロナ禍での韓国スタディツアーで、学生と教員の私が気づいたこと」『HR ONLINE』ダイヤモンド社 (<https://diamond.jp/articles/-/311589>)

津田英二 (2023) 「孤独と向き合っ自分を知った大学生と、これからの社会のありかた」『HR ONLINE』ダイヤモンド社 (<https://diamond.jp/articles/-/316142>)

#### (4) 著書

##### 単著

川地亜弥子 (2022) 『子どもとつくるわくわく実践：ねがいひろがる教育・保育・療育』全障研出版部。

##### 編著

川地亜弥子・田中耕治編著 (2023) 『時代を拓いた教師たちⅢ』日本標準。

川地亜弥子編著 (2022) 『学習者に「意味深さ」が生じるしかけとその評価：日英における学びの場づくり』科研費最終成果報告書。

北野幸子 (監修) (2022 春・秋号) 『これからの幼児教育』ベネッセ総合教育研究所。

幼稚園・保育所の運営研究会 (渡邊秀則・北野幸子・草山充・佐藤暁子・大竹節子) 編 (2022) 『幼稚園・保育所の運営トラブル解決事例集』第一法規。

編集委員会 (秋田喜代美・大方美香・大澤力・大日向雅美・大豆生田啓友・北野幸子・小林紀子・汐見稔幸・砂上史子・増田まゆみ・無藤隆・師岡章・矢藤誠慈郎) 編 (2022 年度 月刊誌) 『保育ナビ』フレーベル館。

最新 保育士養成講座 総括編纂委員会 (秋田喜代美・岩田力・柏女霊峰・北野幸子・山縣文治) 編 (2023) 『第5巻社会的養護と障害児保育』全国社会福祉協議会。

##### 分担執筆

川地亜弥子 (2022) 「指導技術を身につけるには？」後藤さゆり，平岡さつき，藤井佳世編著『スタ

ディスキルズ 教育実習』実教出版, 70-73。

川地亜弥子 (2022) 「学級経営力とは？」後藤さゆり, 平岡さつき, 藤井佳世編著『スタディスキルズ 教育実習』実教出版, 62-65。

川地亜弥子 (2022) 「7歳の発達の質的転換と発達保障」白石正久, 白石恵理子編著『新版 教育と保育のための発達診断 上 発達診断の基礎理論』全障研出版部, 104-118。

川地亜弥子 (2022) 「学校で子供の自己表現を育み、読み合うことの意義：パンデミック下における生活綴方・作文教育」日本作文の会編『やっぱり学校っていいな：コロナ禍の2年・子どもたちの生活と表現』本の泉社, 16-23。

川地亜弥子 (2022) 「KUPI で読み合うこと」神戸大学国際人間科学部・神戸大学大学院人間発達環境学研究科編『神戸大学・学ぶ楽しみ発見プログラム:知的障害青年のための大学教育の創造』108-109。

川地亜弥子 (2023) 「はじめに」「指定討論 生活綴方の立場から」瀬川千裕編、川地亜弥子・石田智敬・松下佳代・森本和寿・若松大輔・遠藤貴広著『ライティング（書くこと）の評価はどうあるべきか：「ループリック評価」の批判的検討』（神戸大学大学院人間発達環境学研究科 2022 年度学術 Weeks シンポジウム 報告書）, 1, 48-50。

山口悦司 (2022. 7) 「認識的認知」一般社団法人日本理科教育学会編著『理論と実践をつなぐ理科教育学研究の展開』東洋館出版社, 136-141。

渡邊隆信「子どもはどのような関係のなかで育つのか？—「教育関係」について—」, 國崎大恩, 藤川信夫編 (2022) 『実践につながる教育原理』北樹出版, pp. 38-51。

岡部恭幸 (2023). 二澤善紀編『中等数学科教育の理論と実践』、ミネルバ書房, 121-131, 173-180。

北野幸子 (2022) 「位置測位システムを活用した幼児理解の深化と根拠に基づくカリキュラム・マネジメントによる実践の充実方法に関する調査研究」、文部科学省教育課程課・幼児教育課『令和4年 幼稚園教育年鑑 2022年 12月号 (初等教育資料 増刊)』東洋館出版。

北野幸子 (2022) 「アメリカ」, 秋田喜代美・古賀松香編著『世界の保育の質評価：制度に学び、対話をひらく』明石書店。

北野幸子 (2022) 「アメリカの保育の専門職化と質評価」小玉亮子・一見真理子監修『幼児教育史研究の新地平〈下巻〉—幼児教育の現代史—』萌林書林。



北野幸子 (2022) 「働きやすくやりがいを高める環境づくりとは～それぞれの立場からできることを考える～」 全国社会福祉協議会・全国保育士会編『保育士会だより』2022年5月号 No. 308, 2-5。

北野幸子 (2023) 「行政との連携：研修講師養成に向けた視点から」 那須信樹編『保育者のためのキャリア形成マネジメントブック』みらい。

北野幸子 (2023) 「海外における幼児教育の質に関する研究動向」 渡邊恵子 「「幼児期からの育ち・学びとのプロセスの質に関する研究<報告書>」, 国立教育政策研究所。

北野幸子・神戸市乳幼児保育研究会 (印刷中) 『乳幼児教育実践の質の維持・向上にかかわる保育者の専門性に関する研究』令和4年度神戸市子ども家庭局共同研究報告書 (研究代表者：北野幸子)。

北野幸子 (印刷中) 「兵庫県における未就園児の育ちと学びを支える子ども子育て支援の実態に関する比較調査」リベルタスコンサルティング「令和4年度幼児教育施設の機能を生かした幼児の学び強化事業 (家庭との連携等に関する調査研究)」報告書。

大橋毅彦・岡泰正・勅使河原君江・廣田生馬・多田羅珠希 (2022) 『開館30年特別展 竹中郁と小磯良平 詩人と画家の回想録 図録』神戸市立小磯記念美術館, 21-23

稲原美苗 (2022) 「コロナ禍の変化と対話～哲学とデザインの関係性」, 梶谷真司 (編) 『共創のためのコラボレーション (UTCP Uehiro Booklet 15)』, 東京大学大学院総合文化研究科・教養学部附属共生のための国際哲学研究センター (UTCP), pp. 31-4.

## 総説・書評など

川地亜弥子 (2023) 「特集にあたって (特集 子どもの発達保障と遊び)」『障害者問題研究』50(4), 1。

川地亜弥子 (2023) 「図書紹介 山崎洋子『イギリス新教育運動の生起と展開——教師の自律性と専門職化の歴史』」『教育新世界』47, 印刷中。

大豆生田啓友・矢藤誠慈郎・北野幸子 (2022) 「変革への一步を踏み出すためにリーダーに必要な資質とは」『保育ナビ』2022年4月号, 14-19。

北野幸子 (2022年度連載) 「保育領域の専門性の確立を目指して～保育の質をめぐる国内外の動向を探る③⑦～④⑧」保育システム研究所『遊育』。

編集委員会 (秋田喜代美・大方美香・大澤力・大日向雅美・大豆生田啓友・北野幸子・小林紀子・汐見稔幸・砂上史子・増田まゆみ・無藤隆・師岡章・矢藤誠慈郎) (2022) 「編集委員会報告 地域別持続可能な園になるために 倉橋惣藏の保育論から考える現代の「新と真」」『保育ナビ』2022年11月

号, フレーベル館, 36-41

浅田留美子・北野幸子 (2023) 「大阪府のコロナ対応に学ぶ リーダーシップと対話の力」『保育ナビ』2023年1月号, 4-9。

編集委員会 (秋田喜代美・大方美香・大澤力・大日向雅美・大豆生田啓友・北野幸子・小林紀子・汐見稔幸・砂上史子・増田まゆみ・無藤隆・師岡章・矢藤誠慈郎) (2023) 「編集委員会報告 地域別持続可能な園になるために 中学・高校教育からみえる、幼児教育の重要性」『保育ナビ』3月号, フレーベル館, 36-41。

津田英二 (2022) 「大槻宏樹『「依存」の思想—「生きる」ための支点』早稲田大学出版部, 2020年」『社会教育学研究』58, pp. 134-135

#### (5) シンポジウム開催など

新教育に関する国際シンポジウム (2022年10月15日, 神戸大学), コーディネータ・司会 川地亜弥子。

第70回全国作文教育研究大会 (2022年8月6, 7, 8日, 大阪府堺市) 実行委員長 川地亜弥子。  
教育目標・評価学会第33回年次大会 (2022年12月3, 4日, 神戸大学) 実行委員長 渡邊隆信, 事務局長 川地亜弥子。同 公開シンポジウム「現代の教育における資質・能力の育成とその評価」司会・コーディネータ 渡邊隆信, 川地亜弥子, 話題提供者 俣野源晃 (附属小学校教諭・博士課程前期課程院生)。

教育系講座・子ども教育学科共催国際シンポジウム「Finding ways to future development of progressive practice: Curriculum, assessment and teacher education in the UK」(2023年2月7日, 神戸大学), コーディネータ・司会 川地亜弥子, 指定討論 渡邊隆信, 資料作成協力 山下晃一。

日本保育学会第75回大会, 日本保育学会・OMEP日本に員会・日本保育学会大会実行委員会共同企画国際シンポジウム「ゼロ歳からの子どもの権利条約-ウェルビーイングに向けて」(含: OMEP (世界幼児教育・保育機構総裁講演) (2022年5月, 日本保育学会, Web開催), 北野幸子 (企画・指定討論)。

OMEP (世界幼児教育・保育機構) 日本委員会 会員交流会担当理事企画 会員交流会「国内外の保育におけるESDの動向」(2022年10月1日, Web開催) 北野幸子 (会員交流会担当理事・企画)。

神戸大学大学院人間発達環境学研究科教育連携推進室・乳幼児教育学研究室, 大阪府私立幼稚園連盟教育研究所共催 乳幼児教育学セミナー3「誕生からの社会情動 (非認知) 的力の育ちと保育者の専門性を考える」(2023年3月21日開催, 於: 神戸大学), 北野幸子 (企画, 司会進行)。

神戸大学大学院人間発達環境学研究科乳幼児教育学研究室主催 乳幼児教育セミナー4「日本とシンガポールの乳幼児教育」(2023年3月22日) シンガポール保育者教育協会, 会長, 事務局長, 会員計20名と本学乳幼児教育学研究室と交流, 北野幸子(企画・情報提供)。

神戸大学大学院人間発達環境学研究科教育連携推進室・乳幼児教育学研究室, 神戸大学附属幼稚園、環太平洋乳幼児教育学会日本支部共催 乳幼児教育学セミナー5「幼児教育と小学校教育の架け橋期の教育を考える」(2023年3月25日) 北野幸子(企画)。

神戸大学大学院人間発達環境学研究科教育連携推進室・乳幼児教育学研究室共催 乳幼児教育学セミナー6「保育者の専門性と保育領域の専門職化に関する研究会」(2023年3月26日) 北野幸子(企画)

勅使河原君江 学術 Weeks シンポジウム, (2022年12月10日開催)「感受することからはじめる子供の造形活動とは-福来四郎の指導による目の不自由な子供の粘土作品を感じよう-」院生1名, 研究生1名, 福来四郎アートコミュニケーションプロジェクトメンバーと共に福来に関する研究報告と作品に触る鑑賞活動を行い, 視覚だけに頼らない作品感受について意見交換を行った。

勅使河原君江 国立国際美術館ワークショップ(2022年11月20日開催)「50個の『・(てん)』から絵をかこう」美術館の展覧会関連事業として作品制作を通して参加者の鑑賞を深めるワークショップを行った。

勅使河原君江(大会実行員長) 第45回美術科教育学会兵庫大会(2023年3月26日, 27日開催) 共催: 神戸大学12周年記念事業 神戸大学よりオンラインライブ配信にて, 建築家 安藤忠雄氏講演会、4件の大会企画シンポジウム、42件の口頭研究発表を開催した。

勅使河原君江 学術講演(2023年1月25日開催)「子どもを育む美術館」兵庫県立美術館学芸員 遊免寛子氏, 松上仁子氏を講師として迎え, 勅使河原と共に子供が育つ場としての美術館のあり方について講演を行った。

木下孝司・射場美恵子・服部敬子・西川由紀子 2023 ラウンドテーブル「幼児期の「集団の発達」をいかにとらえるのか-一個の発達心理学を超えていくための最初の一步」 日本発達心理学会第34回大会

松岡広路・清野未恵子・津田英二・稲原美苗・喜屋武享 日本福祉教育・ボランティア学習学会第28回こうべ大会「響き合う ふくしと学びと SDGs~今、改めて、つながりを問う」を主催し, SDGs や ESD と, ふくしや学習論との関連について考究した。

稲原美苗 シンポジウム「当事者「家族」のための哲学対話 ~家族の「普通」を問い直す~」2023年2月23日(オンライン・科研費主催)

喜屋武享「アクティブ・レッスン・プログラムによる身体活動の促進と認知機能・学力向上」  
第30回日本運動生理学会大会シンポジウム III「子どもの身体活動と認知／非認知能力」 2022年8月25日

日韓交流セミナー「障害者の文化芸術活動と生涯学習」神戸大学百年記念館，2022年12月10日

#### (6) 受賞

受賞者：ラッシラ エルッキ・タピオ

賞名：奨励賞（日本科学教育学会）

業績名 スーパーサイエンスハイスクール（SSH）における日本型才能伸長：

「教育資本（Educational capital）」からの分析．科学研究研究，Vol. 45, No.4, pp. 375-383

受賞者：杉山聡理，鳥山朋代，佐々木光江，中瀬未来，舘岡篤弥，北野幸子

受賞名：幼児教育実践学会 研究発表賞

受賞題目：あそびをつなぐ「わくわくコーディネーター」による実践～「子ども」「保育者」「家庭」を繋ぐ組織マネジメントの在り方について～

受賞年月：2022年8月

受賞者：喜屋武享

受賞名：第13回奨励賞

受賞年月：2023年1月

受賞者：喜屋武享，田中茂穂，高倉実，Olds Timothy、Schranz Natasha，田中千晶

受賞名：奨励賞

受賞題目：Validity of Japanese version of a two-item 60-minute moderate-to-vigorous physical activity screening tool for compliance with WHO physical activity recommendations

受賞年月：2022年5月

#### (7) 教育系の総括と課題

新型コロナウイルス感染による制限が緩和され、国際的研究活動が拡大されたこと、全国規模の研究活動が幅広く実施されたなどの成果がみられる。外部研究資金の獲得については、各研究分野に専門特化した多くの科学研究費による研究がすすめられており、さらには国や地域の事業研究等、公的に寄与しうる研究や社会に開かれた研究が着実に進められている。特に、教育実践現場に寄与する研究成果の還元については、国際シンポジウム等を多数実施することができた。コロナ禍を経て、今後さらなる国際交流や国際共同研究と、地域に根差した研究の両側面からの発展が期待される。

（人間発達専攻長 木下孝司）

#### 7.7.2. 人間環境学専攻

(1) 研究プロジェクト（専攻研究者が代表者で、研究費総額200万円以上）

<自然環境論>

研究代表者（本専攻教員）：蘆田弘樹

共同研究者：蓮沼誠久（神戸大学）

研究課題：電気エネルギーを利用し大気 CO<sub>2</sub> を固定するバイオプロセスの研究開発 CO<sub>2</sub> 取込み・濃縮機構の付与

研究資金：NEDO ムーンショット型研究開発事業／地球環境再生に向けた持続可能な資源循環を実現，2020-2022 年度，総額（直接経費）4,282 万円

研究概要：微生物への CO<sub>2</sub> 取込み・濃縮機構を導入し，CO<sub>2</sub> 資源化のための宿主生物を創製する。

研究代表者（本専攻教員）：青木茂樹

研究分担者：中野敏行（名古屋大学），連携研究者：高橋覚（本専攻教員）

研究課題：気球搭載型エマルジョン望遠鏡による宇宙ガンマ線未解決課題の解明

研究資金：科学研究費補助金・基盤（S），2017-2021 年度，総額（直接経費）15,390 万円

研究概要：気球搭載型のエマルジョン望遠鏡を開発し，天体などからのガンマ線観測を行う。

研究代表者（本専攻教員）：高橋覚

研究分担者：青木茂樹（本専攻教員）

研究課題：多段シフターによる時間分解原子核乾板検出器の実現と宇宙ガンマ線観測への展開

研究資金：科学研究費補助金・基盤（A），2021-2023 年度，総額（直接経費）3,270 万円

研究概要：本来時間情報を持たない原子核乾板に多段シフターという手法で各飛跡に秒以下の精度で時間情報を付与することで，宇宙ガンマ線観測などへの展開を図る。

研究代表者（本専攻教員）：丑丸敦史

共同研究者：石井博（富山大学），岡本朋子（岐阜大学）

研究課題：複雑な花形態が適応的になる生態学的条件の解明：種間比較・群集間比較を通じた検討

研究資金：科学研究費補助金・基盤（B），2019-2022 年度，総額（直接経費）1,703 万円

研究概要：複雑な形態を持つ花の進化を説明する新たな仮説の検証を行う。

研究代表者（本専攻教員）：丑丸敦史

共同研究者：源利文（本専攻教員），佐藤真行（本専攻教員），石井弘明（本学農学研究科）研究課題：里地里山の生物多様性向上に向けた整備及び生態系サービスの評価に係る調査研究

研究資金：神戸市・受託研究，2022 年度，総額（直接経費：600 万円）

研究概要：神戸市の放棄された里地里山の管理導入による生物多様性再生の検証および市民への波及効果について調査を行う。

研究代表者（本専攻教員）：近江戸伸子

共同研究者：Stefan Wanke（Technische Universität Dresden）

研究課題：Accessing complementary hortensia germplasms to enable floricultural genomics

ゲノミクス情報を付与した日独アジサイ遺伝資源コレクションの統合化

研究資金：二国間交流事業共同研究，2023-2024 年度，総額（直接経費） 380 万円

研究概要：ドイツと日本で観賞用植物として人気の高い園芸植物アジサイについて，形態とゲノミクス情報を包括する世界最大のデータベースをドイツ・ドレスデン工科大学との共同研究により構築し，原産地としてアジア，ヨーロッパ，北南米など広く世界をカバーしたアジサイの遺伝資源植物コレクションを作製する。

研究代表者（本専攻教員）：小谷野由紀

研究課題：流速場と拡散ダイナミクスの相乗的な効果による拡散促進現象

研究資金：科学研究費補助金・若手研究，2020-2023 年度，総額（直接経費）320 万円

研究概要：攪拌における移流と拡散の協働現象に関して，一般的な定式化を試みた。

研究代表者（本専攻教員）：佐藤春実

研究課題：低波数ラマン分光法を利用した高分子の分子間相互作用の直接観察

研究資金：科学研究費補助金・基盤（B），2020-2022 年度，総額（直接経費）1,400 万円

研究概要：低波数領域のスペクトルから高分子の分子間相互作用の直接観察を目指す。

研究代表者（本専攻教員）：佐藤春実

研究課題：テラヘルツおよび低波数ラマン分光法による高分子の高次構造解析と分子間相互作用の直接観察

研究資金：NEDO ムーンショット型研究開発事業／地球環境再生に向けた持続可能な資源循環を実現／非可食バイオマス为原料とした海洋分解可能なマルチロック型バイオポリマーの研究開発，2020-2024 年度，総額（直接経費）4,409 万円

研究概要：テラヘルツおよび低波数領域のラマンスペクトルより高分子の海洋分解機構を解明する。

研究代表者（本専攻教員）：高見泰興

共同研究者：小笠原道生（千葉大学）

研究課題：比較ゲノミクスと進化発生学から紐解く機械的生殖隔離の強化と種分化

研究資金：文部科学省・科学研究費補助金（基盤研究 B）

研究概要：種の多様化を促進する交尾器形態の分化を，個体発生とその遺伝基盤の側面から明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：源利文

共同分担者：山中裕樹（龍谷大学）

研究課題：DNA メチル化をマーカーとする環境 DNA エピジェネティクス

研究資金：科学研究費基金・挑戦的研究（萌芽），2022-2023 年度，総額（直接経費）500 万円

研究概要：環境 DNA 分析に DNA のメチル化に代表されるエピジェネティックな修飾状態の違いの分析を取り入れるための手法を開発する。

研究代表者（本専攻教員）：源利文

共同分担者：山中裕樹（龍谷大学）

研究課題：環境 DNA 分析による繁殖レジームの多種同時分析系の開発

研究資金：科学研究費補助金・基盤（B），2020-2022 年度，総額（直接経費）1,340 万円

研究概要：環境 DNA 分析によって魚類の繁殖レジームを網羅的に分析するための手法を開発する。

研究代表者（本専攻教員）：源利文

共同分担者：駒井智幸（千葉県立中央博物館），中野智之（京都大学）

研究課題：無脊椎動物における調査方法の開発と実践，ならびに基盤データの整備

研究資金：環境研究総合推進費・戦略的研究開発課題（SII-7），2020-2022 年度，総額（直接経費）3,215 万円

研究概要：深海域における無脊椎動物の多様性を推定するための手法として環境 DNA 分析を適用するための手法を開発する。

研究代表者（本専攻教員）：源利文

共同研究者：丑丸敦史，佐藤真行，（本専攻教員），清野未恵子（人間発達専攻教員）

研究課題：生物多様性に関する市民意識の把握と市民参加型の多様性調査手法の開発

研究資金：大学発アーバンイノベーション神戸，2021-2022 年度，総額（直接経費）227 万円

研究概要：生物多様性保全とそれにとまなう問題に関する市民の意識を探るとともに，環境 DNA 分析を利用した市民参加型の多様性調査手法を開発する。

#### <数理環境論>

研究代表者（本専攻教員）：長坂耕作

研究課題：代数曲面の近似・変形・補間の各操作に適する数値・数式融合計算の開発と検証

研究資金：科学研究費補助金・基盤（C），2019-2023 年度，総額（直接経費）330 万円

研究概要：代数的な性質を用いた CG や CAD 等のために必要となる基盤的な計算アルゴリズムを開発し，その適用可能性を検証する。

#### <生活環境論>

研究代表者（本専攻教員）：平山洋介

共同研究者：なし

研究課題：超高齢・持ち家社会における住宅相続の増大と階層化

研究資金：科学研究費補助金・基盤（B），2018-2022 年度，総額（直接経費）480 万円

研究概要：増大する住宅相続の実態とそれが住宅事情の構造に与えるインパクトを理論的・実証的に解明する。

研究代表者（本専攻教員）：平山洋介

共同研究者：佐藤岩夫（東京大学），祐成保志（東京大学），川田菜穂子（大分大学）

研究課題：住宅セーフティネットの再構築に関する実態・制度・比較分析

研究資金：科学研究費補助金・基盤 (B)，2021-2023 年度，総額（直接経費）610 万円

研究概要：住宅セーフティネットに関する政策実践の実態を実証的に解明すると同時に，その制度構造に理論を組み立て，さらに，日本での実態・制度の特性を国際比較のなかで明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：平山洋介

共同研究者：なし

研究課題：超高齢社会における「家族住宅不動産」の蓄積と階層化

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的研究（萌芽），2021-2023 年度，総額（直接経費）480 万円

研究概要：住宅資産の階層論を世帯単位ではなく，複数世代を含む「家族」を単位として解明するアプローチの理論構築とそれにもとづく実証分析

研究代表者（本専攻教員）：井上真理

共同分担者：小泉智（茨城大学），兒玉隆之（京都橘大学），中西康雅（三重大学），山田由佳子（大阪教育大学），武内俊次（京都工芸繊維大学），金田理子（神戸大学附属中等教育学校）

研究課題：持続可能な材料（繊維・糸）とテキスタイル製品を直結させるための感性評価の体系化

研究資金：科学研究費補助金・基盤 (B)，2022-2025 年度，総額（直接経費）1,350 万円

研究概要：繊維製品を使用する際に心地よいと感じる布を繊維・糸の特性から理論的に設計する評価システムを開発し，体系化することを目指す。

研究代表者（本専攻教員）：佐藤真行

共同分担者：丑丸敦史（本専攻教員），源利文（本専攻教員），内山愉太（本専攻教員）

研究課題：都市化と人口構造のもとでの生態系サービス評価と保全政策に関する学際的研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤 (B)，2022-2025 年度，総額（直接経費）1,270 万円

研究概要：都市生態系の評価と保全に関する研究を行う。

研究代表者（本専攻教員）：福田博也

共同研究者：兵頭政光（高知大学），村田機械株式会社

研究課題：嚥下動作検出のためのウェアラブルセンサの開発

研究資金：産官学連携共同研究経費，2021-2022 年度，総額（直接経費）200 万円

研究概要：介護施設での食事介助における嚥下動作モニタリングのためのウェアラブルセンサを開発する。

研究代表者（本専攻教員）：大野朋子

共同研究者：大形徹（立命館大学）

研究課題：伝統的文化を背景とした植物利用が地域性の形成と地域環境に与える影響に関する研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤 (C)，2018-2022 年度，総額（直接経費）330 万円

研究概要：宗教や伝統工芸など文化的背景を持ちながら利用される植物の栽培，維持，逃げ出しが地



域景観と自然環境に与える影響を明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：大野朋子

共同研究者：田畑智博（本専攻教員）

研究課題：植物利用の変遷および地域差異から探る持続的人文景観要素の解明と現代的地域性の担保

研究資金：科学研究費補助金・基盤（C），2021-2023 年度，総額（直接経費） 320 万円

研究概要：祭祀植物から捉えた人文景観形成の要素とライフスタイルの変化時期やその程度などを総合して検証し，持続的人文景観要素の解明，現代的地域性の担保と展開を論考する。

研究代表者（本専攻教員）：大野朋子

共同研究者：田畑智博（本専攻教員），村山留美子（本専攻教員）

研究課題：コロナ（COVID-19）感染症発生後の都市公園に対する意識・行動変化と課題からみる公園と街路樹空間を生かした新たな緑生都市への展開

研究資金：大学発アーバンイノベーション神戸，2022-2023 年度，総額（直接経費） 250 万円

研究概要：コロナ禍での都市公園に対する利用者意識，行動変容について継続調査を行うことで公園への役割に加え，都市の緑地に対する課題を明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：村山留美子

共同研究者： 稲原美苗（神戸大学），藤長愛一郎（大阪産業大学），内山巖雄（公益財団法人 ルイ・パストゥール医学研究センター）

研究課題： COVID-19 流行は市民のリスク観をどのように変えるのか？：合意形成の観点から

研究資金： 科学研究費補助金・基盤（B），2021-2023 年度，総額（直接経費）1,230 万円

研究概要： 新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の世界的流行が，日本社会全体の「リスク観」に与えた影響を明らかにする

研究代表者（本専攻教員）：内山愉太

共同研究者： 徳山美津恵（関西大学），香坂玲（名古屋大学）

研究課題： 里山・里海のマネジメントを促す地域圏の解明：当事者意識の向上と都市地域連携

研究資金： 科学研究費補助金・基盤（C），2020-2022 年度，総額（直接経費）290 万円

研究概要：環境保全やコミュニティの維持・形成等の地域の多様な側面に関わる観光資源としての里山・里海について，少子高齢化の状況下で管理を行うモデルを開発する。

研究代表者（本専攻教員）：湯浅正洋

研究課題：エネルギー代謝変動による妊娠期潜在性ビオチン欠乏症と胎児奇形の関連解明とその予防

研究資金：科学研究費補助金・若手研究，2021-2023 年度，総額（直接経費）350 万円

研究概要：妊娠期における潜在性ビオチン欠乏症とエネルギー代謝変動・胎児奇形発症頻度との関連を明らかにし，妊娠期における潜在性ビオチン欠乏症の予防法の提案を目指す。

<社会環境論>

研究代表者（本専攻教員）：阿部紀恵

研究課題：グローバル法としての国際環境法の諸原則の比較研究

研究資金：科学研究費補助金・研究活動スタートアップ，2021-2022年度，総額（直接経費）240万円

研究概要：国際貿易法における国際環境法の諸原則の発展の在り方を明らかにし，他分野と比較・検討することを通じて，諸原則をグローバル法として位置付ける新たな理論を構築する。

研究代表者（本専攻教員）：井口克郎

共同研究者：浅野慎一（摂南大学），阿部紀恵（本専攻教員），岩佐卓也（専修大学），太田和宏（本専攻教員），岡田章宏（本学名誉教授），澤宗則（本専攻教員），橋本直人（本専攻教員），原将也（本専攻教員），加戸友佳子（本専攻研究員），洪シネ（本専攻教博士後期課程修了）

研究課題：国連「健康権」枠組みに基づく新型コロナウイルスへの各国対応の評価と理論的再構成

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的研究（萌芽），2021-2023年度，総額（直接経費）：320万円

研究概要：新型コロナウイルス（COVID-19）の世界的流行に対する各国の動向について，国際人権規約第1規約（社会権規約）12条に規定される「健康権」（right to health）の枠組みから検討する。

研究代表者（本専攻教員）：太田和宏

研究資金：科学研究費補助金・基盤（C），2022-2025年度，総額（直接経費）310万円

研究概要：フィリピンにおける民主主義の実態を事例として実態調査を踏まえながら，民主主義の原理そのものを再検討し，各社会に固有の社会編成と関連した民主主義制度や民主主義価値観が機能しているのではないかという問題を考察する。

研究代表者（本専攻教員）：太田和宏

共同研究者 Karl Ian U Chen Chua (Ateneo de Manila University)

研究課題：歴史の記憶と忘却：日本軍事占領をめぐるフィリピン人の“過去消化”のありかた

研究資金：JFE21世紀財団アジア歴史研究助成，2022年度，総額（直接経費）150万円

研究概要：日本軍占領期の経験に対するフィリピン人の認識の在り方を実証的に検討する中で，フィリピン社会の歴史認識の在り方を考察する。それは単に社会集団として「記憶」するだけでなく，その記憶をどのように消化していくのか，また「忘却」していくのかという関連から検討を加え，過去のみならず未来に向けた社会共存の知恵としてそれを論ずる。

研究代表者（本専攻教員）：澤 宗則

共同研究者：

研究課題：南アジア系移民のエスニック戦略とトランスナショナルな領域化の比較考察

研究資金：科学研究費補助金・基盤（C），2020-2023年度，総額（直接経費）240万円

研究概要：南アジア系移民のエスニック戦略とトランスナショナルな領域化のプロセスを比較する

ことにより、南アジア系移民社会の特質を明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：原 将也

研究課題：アフリカにおける多民族社会成立の解明—地方行政における伝統的権威の裁量に着目して

研究資金：科学研究費補助金・若手研究，2019-2022 年度，総額（直接経費）310 万円

研究概要：植民地期以降現在までのアフリカにおいて，間接統治のもと権力が強化された伝統的権威に着目し，多民族社会が成立する要因を実証的に解明する。

## (2) 国際共同研究

### <自然環境論>

研究代表者（本専攻教員）：蘆田弘樹

共同研究者：Antoine Danchin (Institut Cochin, Université Paris Descartes, France)

研究課題：光合成 CO<sub>2</sub> 固定酵素の分子進化

研究資金：一般財源

研究概要：光合成において CO<sub>2</sub> 固定を触媒する RuBisCO の進化的起源を解析した。

研究代表者（本専攻教員）：近江戸伸子

共同研究者：Stefan Wanke (Technische Universität Dresden)

研究課題：Accessing complementary hortensia germplasm to enable floricultural genomics

ゲノムクス情報を付与した日独アジサイ遺伝資源コレクションの統合化

研究資金：二国間交流事業共同研究，2023-2024 年度，総額（直接経費）380 万円

研究概要：ドイツと日本で観賞用植物として人気の高い園芸植物アジサイについて，形態とゲノムクス情報を包括する世界最大のデータベースをドイツ・ドレスデン工科大学との共同研究により構築し，原産地としてアジア，ヨーロッパ，北南米など広く世界をカバーしたアジサイの遺伝資源植物コレクションを作製する。

研究代表者（本専攻教員）：近江戸伸子

共同研究者：Astari Dwirant, Sri Widiyanti Rahayu Hilia (Department of Biology, Faculty of Mathematics and Natural Sciences, Universitas, Indonesia)

研究課題：Chromosomes Inner and outer structure study using high-resolution electron microscopy

高感度電子顕微鏡を用いた染色内部ならびに外部構造研究

研究資金：寄付金

研究概要：植物染色体の同調化の開発，遺伝子可視化法と併用して染色体構造について明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：近江戸伸子

共同研究者：Misa Hayashida (NRC-NANO, National Research Council, Canada)

研究課題：3D observation of chromosome scaffold structure using electron tomography

電子トモグラフィーを用いた染色体スキャホールド構造の 3D 観察

研究概要：染色体を構成するクロマチン軸構造について、位相差トモグラフィーを用いて明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：近江戸伸子

共同研究者：Andreas Houben, Bhanu Prakash Potlapalli (Leibniz Institute of Plant Genetics and Crop Plant Research, Germany)

研究課題：Development of a CRISPR-FISH/EM method suitable for the detection of specific DNA sequences at high resolution by transmission electron microscopy.

透過型電子顕微鏡による特定 DNA 配列の高解像度検出に適した CRISPR-FISH/EM 法の開発

研究資金：招へい外国人研究者

研究概要：電子顕微鏡法 (EM) によって構造的に保存されたクロマチンの DNA をイメージングするための CRISPR イメージングツールセットを開発する。

研究代表者（本専攻教員）：佐藤春実

共同研究者：Sergei G. Kazarian (Imperial college London, UK)

研究課題：ATR-FTIR イメージング法を用いたポリマーブレンドの相分離と結晶化挙動の解析

研究資金：一般財源

研究概要：ATR-FTIR イメージング法を用いてポリマーブレンドの相分離に伴う分子間相互作用の変化を可視化する。(国際共著論文参照)

研究代表者（本専攻教員）：佐藤春実

共同研究者：Mateusz Z. Brela, Marek J. Wojcik (Jagiellonian University)

研究課題：Poly(4-vinylphenol)における水素結合ネットワークに関する研究

研究資金：一般財源

研究概要：計算と実験値を比較することで、Poly(4-vinylphenol) における水素結合ネットワークについて、水素結合の強さや数などについて詳細に調べた。

研究代表者（本専攻教員）：源利文

共同研究者：金子 聡 (代表：長崎大学), 佐藤 綾人 (名古屋大学), 矢口貴志 (千葉大学), Ahmed Fahal (University of Khartoum, Sudan)

研究課題：早期・潜在性真菌腫診断に関する研究：バイオマーカーの探索・POC 診断と臨床疫学プラットフォームの開発

研究資金：医療分野国際科学技術共同研究開発推進事業（アフリカにおける顧みられない熱帯病 (NTDs) 対策のための国際共同研究プログラム)

研究概要：顧みられない熱帯病のひとつであるマイセトーマの原因菌の自然界における分布を解明するとともに、簡易な診断法を開発し、疫学研究を行うためのプラットフォームを開発する。

<数理環境論>

研究代表者（本専攻教員）：ESCOLAR Emerson Gaw

共同研究者：Mickaël Buchet (Graz University of Technology), Hideto Asashiba (Shizuoka University), Ken Nakashima (Okayama University), Michio Yoshiwaki (Osaka Central Advanced Mathematical Institute)

研究課題：位相的データ解析におけるマルチパラメータ・パーシステンスの研究

研究資金：一般財源

研究概要：複数のパラメータを持つデータの位相的データ解析に向けて、区間分解論などを用いて理論を整備しアルゴリズムの開発を行った。

研究代表者（本専攻教員）：ESCOLAR Emerson Gaw

共同研究者：Mitsuru Igami (Yale University), Yasuaki Hiraoka (Kyoto University)

研究課題：企業の技術革新の位相的データ解析

研究資金：一般財源

研究概要：位相的データ解析を用いて企業の技術空間を可視化して、技術革新との関係を、既存の手法と比べながら更に詳しく調べた。

<生活環境論>

研究代表者（本専攻教員）：平山洋介

共同研究者：Misa Izuhara (University of Bristol)

研究課題：超高齢社会の孤立と住宅条件に関する国際比較分析

研究資金：各自調達

研究概要：先進諸国に共通して重要な課題となっている高齢者の孤立の回避について、居住条件から解明するアプローチの理論構築とそれにもとづく西洋・東洋の比較分析

### (3) 教員の受賞

受賞者：蘆田弘樹

受賞名：神戸大学学長表彰（財務貢献）

受賞対象：研究費獲得

受賞日：令和4年10月20日

受賞理由：教育活動を通して大学の発展に貢献した評価されたため。

受賞者：湯浅正洋

受賞名：日本家政学会第74回大会若手研究者ポスター賞

受賞対象：ポスター発表「乾燥させた新タマネギ葉の品質に及ぼす長期保存の影響 ―水分活性、色調、抗酸化能および呈味特性に着目して―」

受賞日：令和4年6月18日

受賞理由：日本家政学会第74回大会において優秀なポスター発表を行ったと評価されたため。

受賞者：阿部 紀恵

受賞名： The 13<sup>th</sup> Annual Conference of the Japan Chapter of the Asian Society of International Law Best Paper Award

受賞対象： Climate Change Litigations as New Standard Legal Methods for Limiting Global Warming? Challenges in a Successful Coalition between Human Rights and Environment toward Sustainable Development

受賞日： 令和4年7月9日

受賞理由： アジア国際法学会日本支部第13回大会の公募報告者の提出したペーパーのうち最も優れた内容であると認められたため。

#### (4) 国際共著論文 (海外との研究)

##### < 自然環境論 >

Ohshima H. et al. (NINJA Collaboration) (2022) “Measurements of protons and charged pions emitted from  $\nu_{\mu}$  charged-current interactions on iron at a mean neutrino energy of 1.49 GeV using a nuclear emulsion detector”, *Phys. Rev. D*, 106, 032016, <https://doi.org/10.1103/PhysRevD.106.032016>

Abe K et al. (T2K Collaboration) (2022) “Scintillator ageing of the T2K near detectors from 2010 to 2021” *JINST* 17, P10028, <https://doi.org/10.1088/1748-0221/17/10/P10028>

Hayashida M, Sartsanga C, Phengchat R, Malac M, Harada K, Akashi T, Fukui K, Ohmido N (2022) Higher-order structure of barley chromosomes observed by electron tomography. *Micron*. 14:160:103328. doi: 10.1016/j.micron.2022.103328

Ohmido N, Dwiranti A, Kato S, Fukui K (2022) Applications of image analysis in plant chromosome and chromatin structure study. *Quantitative Biology*, 10:226-238 doi: <https://doi.org/10.15302/j-qb-021-0285>

Kitahata H, Koyano Y, Löffler RJG, Gorecki J. (2022) Complexity and bifurcations in the motion of a self-propelled rectangle confined in a circular water chamber. *Phys Chem Chem Phys*, 24, 20326-20335. <https://doi.org/10.1039/D2CP02456J>.

Löffler RJG, Rolinski T, Kitahata H, Koyano Y, Gorecki J. (2023) New types of complex motion of a simple camphor boat. *Phys Chem Chem Phys*. <https://doi.org/10.1039/d2cp05707g>.

Brela M Z, Didovets Y, Boczar M, Sato H, Nakajima T, Wojcik MJ (2022) The hydrogen bond interaction dynamics in polyvinylphenol: Studied by Born-Oppenheimer molecular dynamics. *Chem. Phys. Lett.*, 805:139976. doi:10.1016/j.cplett.2022.139976.

Lu H, Sato H, Kazarian SG (2022) Effect of Tm of blend components on the isothermal melt-crystallization process of PHB/PLLA blends investigated using spectroscopic imaging and DSC. *Polymer*, 248: 124820. doi:10.1016/j.polymer.2022.124820.

Sota T, Takami Y, Ikeda H, Liang H, Karagyan G, Scholtz K, Hori M (2022) Global dispersal and diversification in ground beetles of the subfamily Carabinae. *Molecular Phylogenetics and Evolution* 167, 107335.

Nishimura T, Nagata N, Terada K, Xia T, Kubota K, Sota T, Takami Y (2022) Reproductive character displacement in genital morphology in Ohomopterus ground beetles. *American Naturalist* 199, E76–E90.

Nagata Y, Nishino H, Kuroda K, Shinohara T, Satomi D, Terada K, Nishimura T, Kuroda T, Inoue Y, Park YH, Takami Y (2022) Reproductive phenology and female mating frequency of the praying mantid *Tenodera angustipennis* in western Japan. *Ecological Entomology* 47, 423–431.

Xia T, Nishimura T, Nagata N, Kubota K, Sota T, Takami Y (2023) Reproductive isolation via divergent genital morphology due to cascade reinforcement in *Ohomopterus* ground beetles. *Journal of Evolutionary Biology* 36, 169–182.

Nishimura T, Terada K, Xia T, Takami Y (2023) Relationships between reproductive character displacement in genital morphology and the population-level cost of interspecific mating: implications for the Templeton effect. *Biological Journal of the Linnean Society* 138, 14–26.

Kobayashi Y, Bruce HS, Terada K, Hirayama A, Oosawa Y, Niikura K, Takami Y (2023) Paranotal lobes are appendicular in origin: elucidation by micro-CT analysis of the thoracic muscular system in the larvae of *Carabus insulicola* (Insecta, Coleoptera). *Proceedings of the Arthropodan Embryological Society of Japan* 54, in press.

#### <生活環境論>

Islam I, Islam AHM S, Sato M (2022) “Nexus between Climatic Extremes and Household Expenditure in Rural Bangladesh: A Nationally Representative Panel Data Analysis” , *Asia-Pacific Journal of Regional Science*. <https://doi.org/10.1007/s41685-022-00266-3>

Islam S, Samret, S, Isla, AHM S, Sat, M (2022), “Climate change, climatic extremes and households’ food consumption in Bangladesh: A longitudinal data analysis” , *Environmental Challenges*, Vol.7, 100495, <https://doi.org/10.1016/j.envc.2022.100495>.

Quevedo JMD, Lukman KM, Ulumuddin Y I, Uchiyama Y, Kohsaka R (2023). Applying the DPSIR framework to qualitatively assess the globally important mangrove ecosystems of Indonesia: A review towards evidence-based policymaking approaches. *Marine Policy*, 147, 105354.  
<https://doi.org/10.1016/j.marpol.2022.105354>

Rifai H, Quevedo JMD, Lukman KM, Sondak CF, Risandi J, Hernawan UE, Uchiyama Y, Ambo-Rappe R, Kohsaka R (2022). Potential of seagrass habitat restorations as nature-based solutions: Practical and scientific implications in Indonesia. *Ambio*, 52, 546-555.  
<https://doi.org/10.1007/s13280-022-01811-2>

Kovács B, Uchiyama Y, Miyake Y, Quevedo JMD, Kohsaka R (2022). Capturing landscape values in peri-urban Satoyama forests: Diversity of visitors' perceptions and implications for future value assessments. *Trees, Forests and People*, 10, 100339.  
<https://doi.org/10.1016/j.tfp.2022.100339>

#### (5) 著書

##### 単著

源利文 (2022) 『環境 DNA 入門 漂う遺伝子は何を語るか』 岩波書店 全 120 頁

津久井進・市川英恵・出口俊一・吉田維一・関本龍志・井口克郎・藤原柄彦著 (2022) 『まもられなかった人たち 検証「借上復興公営住宅」の強制退去策』 兵庫県震災復興研究センター編, クリエイツかもがわ, 全 126 頁

松下冽・山根健至編(2023) 『新自由主義の呪縛と深層暴力 - グローバルな市民社会の構想に向けて』 ミネルヴァ書房

##### 分担執筆

蔡 佩宜, 田畑智博 (2023) 「日本における災害廃棄物の広域処理受け入れに関する課題—地域住民の意識調査から—」 北川秀樹(編) 『東アジアの環境政策と課題』 日本評論社, 57-78

#### (6) WoS 論文 (10%論文には, 文頭に\*を付す)

##### <自然環境論>

Oda M, Aoki S, Azuma T, Kato T, Nagahara S, Takahashi S, Yamada K, Yamamoto T, and Yamashita M (2022) First demonstration of a roller-driven timestamp mechanism for long-duration observations with high time resolution using large-area emulsion films. *Prog. Theor. Exp. Phys* 2022, 113H03, <https://doi.org/10.1093/ptep/ptac143>

Nakata T, Ishii R, Yaida YA and Ushimaru A (2022) Horizontal orientation facilitates pollen



transfer and rain damage avoidance in actinomorphic flowers of *Platycodon grandiflorous*. *Plant Biology* 24:798-805

Hirayama GH and Ushimaru A (2022) Habitat preference influences response to changing agricultural landscapes in two long-horned bee. *Journal of Apicultural Research* xx:xx. (online)

Ushimaru A, Seo N, Sakagami K and Funamoto (2023) Sexual dimorphism in specialist pollinated dioecious species with complex flowers. *American Journal of Botany* xx:xx-xx. (accepted)

Hayashida M, Sartsanga C, Phengchat R, Malac M, Harada K, Akashi T, Fukui K, Ohmido N Higher-order structure of barley chromosomes observed by electron tomography. *Micron*. 2022 14:160:103328. doi: 10.1016/j.micron.2022.103328

Kubota, K, Sakai, K, Ohkushi, K, Higuchi, T, Shirai, K, Minami, M (2022) Salinity, oxygen isotope, hydrogen isotope, and radiocarbon of coastal seawater of North Japan. *Geochemical Journal* 56, 240-249.

Ohmido N, Dwiranti A, Kato S, Fukui K Applications of image analysis in plant chromosome and chromatin structure study. *Quantitative Biology* 2022 10:226-238 doi: <https://doi.org/10.15302/j-qb-021-0285>

Ishikawa H, Koyano Y, Kitahata H, Sumino Y (2022) Pairing-induced motion of source and inert particles driven by surface tension. *Phys Rev E*, 106, 024604.

Koyano Y, Kitahata H (2022) Anomalous diffusion and transport by a reciprocal convective flow. *Phys Rev E*, 106, 024102.

Kitahata H, Koyano Y (2022) Self-propelled motion of the camphor float with n-fold rotational symmetry. *Front Phys*, 10, 858791.

Brela M Z, Didovets Y, Boczar M, Sato H, Nakajima T, Wojcik MJ (2022) The hydrogen bond interaction dynamics in polyvinylphenol: Studied by Born-Oppenheimer molecular dynamics. *Chem. Phys. Lett.*, 805:139976. doi:10.1016/j.cplett.2022.139976.

Lu H, Sato H, Kazarian SG (2022) Effect of Tm of blend components on the isothermal melt-crystallization process of PHB/PLLA blends investigated using spectroscopic imaging and DSC. *Polymer*, 248: 124820. doi:10.1016/j.polymer.2022.124820.

Asano H, Ueno N, Ozaki Y, Sato H (2022) Temperature-dependent structural variations of water and supercooled water and spectral analysis of Raman spectra of water in the OH stretching band region and low-frequency region studied by two-dimensional correlation Raman Spectroscopy. *J. Raman Spectrosc.*, 53:1669–1678. doi:10.1002/jrs.6444.

Yamahira, K., Fujimoto, S., Takami, Y. (2022) Earth and life evolve together from something ancestral – reply to Britz et al. *Biology Letters* 18, 20220010.

Terada, K., Takahashi, S., Takami, Y. (2023) Functional, genetic, and structural constraints on the exaggeration and diversification of male genital morphology in *Ohomopterus* ground beetles. *Entomological Science* 26, e12538.

Shimada J, Takaoka Y, Ueda T, Tani A, Sugahara T, Tsunashima K, Yamada H, Hirai T (2023) Proton conduction in tetra-*n*-butylammonium bromide semicathrate hydrate. *Solid State Ionics*, 393, 116188.

Kebukawa Y, Asano S, Tani A, Yoda I, Kobayashi K (2022) Gamma-ray-induced amino acid formation in aqueous small bodies in the early solar system. *ACS Central Science*, 8, 1664–1671.

Miwa Y, Nagahama T, Sato H, Tani A, Takeya K (2022) Intermolecular interaction of tetrabutylammonium and tetrabutylphosphonium salt hydrates by low-frequency Raman observation. *Molecules*, 27, 4743.

Azuma S, Shimada J, Tsunashima K, Sugahara T, Tani A, Hirai T (2022) Equilibrium phase relations and dissociation enthalpies of tri-*n*-butylalkenylphosphonium bromide semicathrate hydrates. *Journal of Chemical & Engineering Data*, 67, 1415–1420.

Takahara T, Fukui K, Hiramatsu D, Doi H, Fujii M, Minamoto T (2023) Development of primer–probe sets for environmental DNA-based monitoring of pond smelt *Hypomesus nipponensis* and Japanese icefish *Salangichthys microdon*. *Landscape and Ecological Engineering* 19. 11–19.

Nishizawa R, Nakao R, Ushimaru A, Minamoto T (2023) Development of environmental DNA detection assays for snakes in paddy fields in Japan. *Landscape and Ecological Engineering* 19: 3–10.

Wu L, Wu Q, Inagawa T, Okitsu J, Sakamoto S, Minamoto, T (2023) Estimating the spawning activity of fish species using nuclear and mitochondrial environmental DNA concentrations and their

ratios. *Freshwater Biology* 68: 103-114.

Jo T\*, Sato M\*, Minamoto T\*, Ushimaru A\* (2022) Valuing the cultural services from urban blue space ecosystems in Japanese megacities during the COVID-19 pandemic. *People and Nature* 4: 1176-1189. (\*equal contribution)

Wakiya R, Itakura H, Hirae T, Igari T, Manabe M, Matsuya N, Miyata K, Sakata MK, Minamoto T (2022) Slower growth of farmed eels stocked into rivers with higher wild eel density. *Journal of Fish Biology* 101: 613-627.

Sakata MK, Sato M, Sato, MO, Watanabe T, Mitsuishi H, Hikitsuchi T, Kobayashi J, Minamoto T (2022) Detection and persistence of environmental DNA (eDNA) of the different developmental stages of a vector mosquito, *Culex pipiens pallens*. *PLoS ONE* 17: e0272653.

Wu L, Yamamoto Y, Yamaguchi S, Minamoto T (2022) Spatiotemporal changes in environmental DNA concentrations caused by fish spawning activity. *Ecological Indicators* 142: 109213.

Minamoto T (2022) Environmental DNA analysis for macro-organisms: Species distribution and more. *DNA Research* 29: dsac018.

#### <生活環境論>

Kitai K, Ueda T, Yamauchi R, Mizushima Y, Murata S, Nakano H, Inoue M, Nagano H, Kodama T (2022) Effectiveness of Sensory Compensation Approach for Hand Sensory Motor Dysfunction Following Central Cervical Spinal Cord Injury, *International Journal of Physical Medicine and Rehabilitation* 10, 694

Islam, I., Islam, AHM S., Sato M. (2022) “Nexus between Climatic Extremes and Household Expenditure in Rural Bangladesh: A Nationally Representative Panel Data Analysis”, *Asia-Pacific Journal of Regional Science*. <https://doi.org/10.1007/s41685-022-00266-3>

Islam, S., Samreth, S., Islam, AHM S., Sato, M. (2022), “Climate change, climatic extremes and households’ food consumption in Bangladesh: A longitudinal data analysis”, *Environmental Challenges*, Vol. 7, 100495, <https://doi.org/10.1016/j.envc.2022.100495>.

Jo, T., Sato, M., Minamoto, T., Ushimaru, A. (2022), “Valuing the cultural services from urban blue space ecosystems in Japanese megacities during the COVID-19 pandemic”, *People and Nature*, vol. 4, pp.1176-1189. <https://doi.org/10.1002/pan3.10366>.

Kawanami F and Tabata T (2023) Model Analysis of the Impact of Increased Time at Home on Energy Consumption: A Japanese Case Study during the COVID-19 Lock Down. *Journal of Sustainable Development of Energy, Water and Environment Systems* 11:1080412.

Lien T-C, Tabata T (2022) Regional incidence risk of heat stroke in elderly individuals considering population, household structure, and local industrial sector. *Science of the Total Environment* 853:158548.

Matsumoto R and Tabata T (2022) Impact and Challenges of Reducing Petroleum Consumption for Decarbonization. *Applied Sciences* 12:3738.

Zhou J and Tabata T (2022) Economic, societal, and environmental evaluation of woody biomass heat utilization: A case study in Kobe, Japan. *Renewable Energy* 188, 256-268.

Yuasa M, Kawabeta K, Uemura M, Koba K, Sawamura H, Watanabe T (2022) Dietary High-Dose Biotin Intake Activates Fat Oxidation and Hepatic Carnitine Palmitoyltransferase in Rat. *Journal of Nutritional Science and Vitaminology* 68 (4), 250-259.

Kawabeta K, Yuasa M, Sugano M, Koba K (2022) Antihypertensive Effect of Dietary  $\beta$ -Conglycinin in the Spontaneously Hypertensive Rat (SHR). *Metabolites* 12 (5), 422.

Quevedo JMD, Lukman KM, Ulumuddin YI, Uchiyama Y, Kohsaka R (2023) Applying the DPSIR framework to qualitatively assess the globally important mangrove ecosystems of Indonesia: A review towards evidence-based policymaking approaches. *Marine Policy*, 147, 105354.  
<https://doi.org/10.1016/j.marpol.2022.105354>

Rifai H, Quevedo J M D, Lukman KM, Sondak CF, Risandi J, Hernawan UE, Uchiyama Y, Ambo-Rappe R, Kohsaka R (2022) Potential of seagrass habitat restorations as nature-based solutions: Practical and scientific implications in Indonesia. *Ambio*, 52, 546-555.  
<https://doi.org/10.1007/s13280-022-01811-2>

Kovács B, Uchiyama Y, Miyake Y, Quevedo J M D, Kohsaka R (2022) Capturing landscape values in peri-urban Satoyama forests: Diversity of visitors' perceptions and implications for future value assessments. *Trees, Forests and People*, 10, 100339.  
<https://doi.org/10.1016/j.tfp.2022.100339>

Uchiyama Y, Kohsaka R (2022) Examining who benefited from green infrastructure during the coronavirus pandemic in 2020: Considering the issues of access to green areas from

socioeconomic and environmental perspectives. *Journal of Environmental Management*, 322, 116044. <https://doi.org/10.1016/j.jenvman.2022.116044>

Kohsaka R, Uchiyama Y (2022) Use of the Forest Environment Transfer Tax for forest data development and exchange: evidence from all 47 prefectures in Japan. *Forest Science and Technology*, 18(4), 201-212. <https://doi.org/10.1080/21580103.2022.2133017>

Uchiyama Y, Kohsaka R (2022) Visiting Peri-Urban Forestlands and Mountains during the COVID-19 Pandemic: Empirical Analysis on Effects of Land Use and Awareness of Visitors. *Land*, 11(8), 1194. <https://doi.org/10.3390/land11081194>

Quevedo JMD, Uchiyama Y, Kohsaka R (2022) Understanding rural and urban perceptions of seagrass ecosystem services for their blue carbon conservation strategies in the Philippines. *Ecological Research*, 1-20. <https://doi.org/10.1111/1440-1703.12325>

Lukman KM, Uchiyama Y, Quevedo JMD, Kohsaka R (2022) Tourism impacts on small island ecosystems: public perceptions from Karimunjawa Island, Indonesia. *Journal of Coastal Conservation*, 26(3), 14. <https://doi.org/10.1007/s11852-022-00852-9>

Uchiyama Y, Takatori C, Kohsaka R (2022) Designing participatory green area management and biodiversity conservation strategies in the era of population shrinkage: empirical analysis of multi-generational perceptions on Satoyama rare species in central Japan. *Landscape and Ecological Engineering*, 18(3), 321-339. <https://doi.org/10.1007/s11355-022-00501-1>

#### (7) その他論文

##### <自然環境論>

Mori, K, et al. (2022) A broadband x-ray imaging spectroscopy in the 2030s: the FORCE mission. *Proceedings of the SPIE*, 12181, 1218122

佐賀達矢, 野中健一, Van Itterbeeck Joost (2022) 高校生への昆虫食に対する意識と試食を伴う講義の効果, *E-journal GEO*. 17(2): 350-362

橋本操, 林日佳里, 佐賀達矢, 野中健一, Donnavan Kruger (印刷中) 高校の教科横断的授業における原風景地図の活用-環境および文化的多様性の相互理解のために-, 環境教育.

Okanishi M, Kohtsuka H, Wu Q, Shinji J, Shibata N, Tamada T, Nakano T, Minamoto T (2023) Development of two new sets of PCR primers for eDNA metabarcoding of brittle stars (Echinodermata, Ophiuroidea). *Mebarcoding and Metagenomics* 7: e94298.

Nakagawa H, Fukushima K, Sakai M, Wu L, Minamoto T (2022) Relationships between the eDNA concentration obtained from metabarcoding and stream fish abundance estimated by the removal method under field conditions. *Environmental DNA* 4: 1369-1380.

Asai T, Sugiyama M, Omatsu T, Yoshikawa M, Minamoto T (2022) Isolation of extended-spectrum beta-lactamase-producing *Escherichia coli* from Japanese red fox (*Vulpes vulpes japonica*). *MicrobiologyOpen* 11: e1317.

赤塚真依子, ムチェブエ エドウィン, 高山百合子, 織田幸伸, 源利文 (2022) 環境 DNA を活用した藻場モニタリングにおける流れの影響について. 土木学会論文集 B2(海岸工学) 78, I\_865—I\_870.

小出水規行, 源利文, 白子智康, 中村匡聡 (2022) 農業水路における環境 DNA 調査の適用性と環境 DNA の拡散距離. 農業農村工学会誌 90, 11-14.

源利文 (2022) 生息地土壌の環境 DNA 分析による侵略的外来アリの分布状況把握, ペストコントロール 198: 20-25.

#### < 数理環境論 >

長坂耕作 (2022) 数学的思考力と順序並び替え問題の自動生成. 数式処理 28(2). 95-108.

Kuwamura M, Izuhara H, Ei S-I (2022) Oscillations and Bifurcation Structure of Reaction-Diffusion Model for Cell Polarity Formation, *J. Math. Biol.* 84, article no.22.

Asashiba H, Buchet M, Escolar EG, Nakashima K, Yoshiwaki M (2022) On Interval Decomposability of 2D Persistence Modules. *Computational Geometry, Vols 105-106*, 101879.  
<https://doi.org/10.1016/j.comgeo.2022.101879>.

Buchet M, Escolar EG (2022). Realizations of Indecomposable Persistence Modules of Arbitrarily Large Dimensions. *Journal of Computational Geometry*, 13(1).  
<https://doi.org/10.20382/jocg.v13i1a12>

#### < 生活環境論 >

平山 洋介 (2023) 「家族住宅資産の階層化について」, 日本建築学会計画系論文集, 88 (805) : 1071-1080 審査付き

平山 洋介 (2022) 「慎ましい住宅・土地所有」について, 区画・再開発通信(638) : 1-2

平山 洋介 (2022) 「自治体と公営住宅」, ガバナンス / ぎょうせい 編 (259) : 35-37

平山 洋介 (2022) 「続・これが本当に住まいのセーフティネットなのか」, 住宅会議 115(6) : 48-52

平山 洋介 (2022) 「大災害と公営住宅」, 住宅会議 = Housing council (115) : 10-14

林岳, 國井大輔, 佐藤真行 (2022) 「コロナ禍を通じた都市緑地のレクリエーション機能に対する嗜好変化とグリーンインフラ整備に向けた示唆」, 『環境経済・政策研究』, 第 15 卷, 第 2 号, 15(2), pp. 38-41 .

Sato M, Kinoshita S, Ida T (2023) “Subjective Risk Valuation and Behavioral Change: Evidence from COVID-19 in the U. K. and Japan,” Kyoto University Graduate School Discussion Paper Series No. E-22-011.

佐藤真行, 木下信, 依田高典 (2023) 「日本と英国における COVID-19 に対する主観的リスク評価と行動変容」, 京都大学大学院経済学研究科ディスカッションペーパーシリーズ, No. J-22-002.

Kinoshita S, Sato M, Ida T (2022) “Bayesian Probability Revision and Infection Prevention Behavior in Japan: A Quantitative Analysis of the First Wave of COVID-19 “, Kyoto University Discussion Paper Series, No. E-22-004.

藤長 愛一郎, 村山 留美子, 岸川 洋紀, 内山 巖雄, 菅野 幸雄, 島田 久也, 引地 勲 (2022) 福島県伊達市における空間線量率の観測データを用いた長期被ばく線量の推定, リスク学研究. 32(2) : pp181-192

藤長 愛一郎, 岸川 洋紀, 村山 留美子 (2022) 新型コロナウイルスの感染リスクに基づく感染対策の評価, リスク学研究. 31(3) : 249-259

Yuasa M, Ueno M, Kawabeta K, Morikawa M, Uemura M, Matsuzawa T, Tominaga T (2022) Taste characteristics, volatile components, sensory properties, and antioxidant activity of fresh onion (*Allium cepa* L.) leaves. *Bulletin of the National Research Centre* 46, 270.

湯浅正洋, 竹内昌平, 山下絵美, 澤村弘美, 島田良子, 坂本薫, 富永美穂子 (2022) 牡蠣生産地の若年者における牡蠣類の特徴の認知度調査, 日本家政学会誌, 73 (11) : 665-673.

前川隆嗣, 香西彩加, 湯浅正洋, 榎原周平, 根來宗孝, 渡邊敏明 (2022) 店舗提供のうどんだしの呈味特性についての科学的評価, 微量栄養素研究: 39, 25-31.

本郷涼子, 湯浅正洋, 片山実悟, 田中麻以, 安井佳世, 世羅至子 (2022) 造血細胞移植後の患者に対する生野菜・生果物の提供ならびに患者食の追加加熱殺菌の妥当性の検討, 日本病態栄養学会誌, 25 (4) : 283-291.

湯浅正洋 (2022) 凍結乾燥と調理, 分子調理, 10: 9-12.

井上真理 (2023) ヒューマンインターフェースとしての繊維製品のものづくりシステムの構築, 繊維学会誌, 79(3) : 印刷中

#### <社会環境論>

阿部紀恵 (2022) 「気候変動訴訟の世界的動向」 国際法学会エキスパートコメント No. 2022-6

阿部紀恵 (2022) 「国際環境法の諸原則の一般的妥当の法理—人権条約による包摂が示す現代的展開— (一)」 『法学論叢』 191 巻 2 号 (査読付き)

阿部紀恵 (2022) 「国際環境法の諸原則の一般的妥当の法理—人権条約による包摂が示す現代的展開— (二)」 『法学論叢』 191 巻 4 号 (査読付き)

阿部紀恵 (2023) 「国際法における人権保障と気候変動問題」 法学館憲法研究所 オピニオン

井口克郎 (2022) 「人々が平和に生きるための社会保障運動」 『社会保障』 No. 502, 中央社会保障推進協議会編, あけび書房, 46~51 頁

太田和宏 (2023) 「フェルディナンド・ボンボン・マルコス大統領の誕生—フィリピン政治と民主主義」 『アジア・アフリカ研究』 第 63 巻 1 号

太田和宏 (2022) 「ヨルゴス・カリス著『LIMITS—脱成長から生まれる自由』(大月書店)を読む」 『図書新聞』 (第 3575 号)

澤 宗則 (2023) 「インド・ネパール料理店の立地戦略—神戸市の南アジア系エスニック・レストランの比較考察」 『移民研究』 第 19 号

橋本直人 (2022) 「マックス・ウェーバーと〈意味〉の地平 : 科学主義とシュタムラー法哲学とのほざまで」 『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』 第 16 巻第 1 号

(人間環境学専攻長 近江戸伸子)

## 8. 産官学共同・地域連携による教育・研究活動

### 8.1. 産官学共同プロジェクト

(1) 大学における障害のある人の超短時間雇用の有効性の検討—インクルーシブシティ KOBE を目指して—

連携担当者 : 麻田美紀 (しごとサポート東部), 青木剛 (しごとサポート西部), 石倉賢 (神戸市障害福祉局)



研究資金：令和4年度大学発アーバンイノベーション神戸（若手研究者の研究活動経費助成制度）（代表：山本健太）

研究概要：神戸市内における障害のある人を対象に週に1回1時間だけ研究室で雇用し月額収入や活動量、精神的健康について検討する。また、学生や附属学校園とも連携し多様な雇用スタイルの創出の第一歩を生み出す。

（人間発達専攻 山本健太）

(2) 公立小学校内における「校内フリースペース」の開発と展開

研究資金：地域中核イノベーション事業に係る地域連携事業（代表者：赤木和重）

研究概要：公立小学校における不登校などの子どもに対して、校内フリースペースを設置することで、再包摂の試みを行うとともに、学校の再定義を試みる。

（人間発達専攻 赤木和重）

(3) 神戸市内の放課後等デイサービスの支援力向上を目的とした実践型研修プログラム開発

共同研究者：石本雄真（鳥取大学）、榊原久直（神戸松蔭女子学院大学）

研究資金：令和3年度大学発アーバンイノベーション神戸（若手研究者の研究活動経費助成制度）（代表者：山根隆宏）

研究概要：神戸市内の児童発達支援事業所及び放課後等デイサービス事業所の研修ニーズを把握し、特に障害児の感情調整支援と家族支援に特化した実践型研修プログラムを開発し、その効果を検証する。

（人間発達専攻 山根隆宏）

(4) 不安低減を目的とした発達支援プログラムの実施と効果検証

共同研究者：石本雄真（鳥取大学）、株式会社凸凹ベース

研究資金：産学共同研究（代表：山根隆宏）

研究概要：発達障害児の不安低減を目的とした発達支援プログラムを実施し、その効果検証と、効果に関わる要因について解明する。

（人間発達専攻 山根隆宏）

(5) 「ダンスとピアノ・デュオの競演：踊る牧神」

共同研究者：青柳いづみこ（ピアニスト／文筆家／大阪音楽大学名誉教授／兵庫県養父市芸術監督）、藤井快哉（大阪音楽大学教授／ピアニスト）

研究資金：主催（株）The Music Center Japan

研究概要：2023年1月18日、兵庫県立芸術文化センター神戸女学院小ホールにて、最新作『パレード』および『牧神とニンフの午後』再演を実施した。関西音楽新聞、Chacott Web Magazine DANCE CUBE などにも掲載された。

（人間発達専攻 関典子）

(6) BGM のグルーブ感と歩行パラメータの関係および音楽グルーブの健康行動への利用可能性の検討

共同研究者：松本茂雄，森角香奈子，樫尾一郎，高橋紗恵子（ともに株式会社 USEN コンテンツプロデュース統括部）

研究資金：株式会社 USEN 共同研究費

研究概要：ウォーキング時に聴取する音楽の持つ特性が各種歩行パラメータに与える影響について、行動実験により検討する。特に、歩行速度を速くしやすい曲想と遅くしやすい曲想があるという先行研究の追試と、その結果が「グルーブ」と呼ばれる性質と関連するかについて検討する。

（人間発達専攻 岡野真裕）

(7) 運動・スポーツが子どもの社会性に与える影響とその神経基盤—fNIRS ハイパースキャニング研究—

共同研究者：高岸治人，寿秋露，丹波夏希，橋本紳之亮

研究資金：公益財団法人明治安田厚生事業団 第38回若手研究者のための健康科学研究助成

研究概要：運動・スポーツが子どもの社会性の発達に与える影響とその神経基盤を検討する。

（人間発達専攻 石原暢）

(8) 歩行中の心拍・運動リズム間位相同期を促進するシステムの開発

研究資金：公益財団法人カインズデジタルイノベーション財団

研究概要：心拍・運動リズム間位相同期の歩行安定化に対する効果と位相同期の応用方法を特定する。

（人間発達専攻 木伏紅緒）

(9) ウェルビーイングの実現に資する社会的つながりの新たな推定・評価方法の確立に関する研究  
共同研究者：谷口隆晴・原田和弘・近藤徳彦

研究資金：大学発アーバンイノベーション神戸・大学研究者提案型（複合領域・民間企業連携区分）

研究概要：社会的つながりを定量的に評価する手法を開発する。

（人間発達専攻 増本康平）

(10) 着圧ソックス・パンツ・サポーター等の商品開発

研究資金：コア・テクノロジー株式会社，丸紅インテックス株式会社，河村繊維株式会社

研究概要：着圧ソックス・パンツ・サポーター等の効果を筋活動の側面から評価する。

（人間発達専攻 木伏紅緒）

(11) ジオスゲニンを含有するトゲドコロ芋の最適加工条件の検討

共同研究者：京都グレインシステム株式会社

研究概要：トゲドコロ芋の商品化に向けて現在，最適な粉末化加工を行っていただき，企業（食品・製薬等）に販売促進を行っている最中である。

（人間発達専攻 佐藤幸治）

(12) 遊歩道へのアクセスが都市在住高齢者の健康変化へ及ぼす影響

共同研究者：増本康平

研究資金：公益財団法人大林財団・研究助成

研究概要：遊歩道へのアクセスが良好であることは、高齢者の健康変化に望ましい影響を及ぼしているのかを明らかにする。

(人間発達専攻 原田和弘)

(13) 地域コミュニティを対象としたeスポーツの展開

共同研究者：岡田修一・近藤徳彦・原田和弘・石原暢

研究資金：西日本電信電話株式会社

研究概要：地域コミュニティの住民を対象としeスポーツ体験がコミュニケーション活性や気分に及ぼす影響を明らかにする。

(人間発達専攻 増本康平)

(14) 兵庫県における未就園児の育ちと学びを支える子ども子育て支援の実態に関する比較調査

研究資金：文部科学省 令和4年度幼児教育の教育課題に対応した指導方法等充実調査研究 再委託研究（委託先，リベルタス・コンサルティング）

研究概要：兵庫県の幼稚園，保育所，こども園，地域子育て支援拠点を対象に行われている子育て支援についてその実態と内容についての現状と課題について比較調査を実施した。

(人間発達専攻 北野幸子)

(15) 幼児期からの育ち・学びとのプロセスの質に関する研究

研究代表者：渡邊恵子（国立教育政策研究所）

研究資金：国立教育政策研究所 プロジェクト研究

研究概要：海外における幼児教育の質に関する研究動向を検討した。保育実践の質評価スケールを作成した。また，スケールを活用した園内研修の検討と提案をおこなった。

(人間発達専攻 北野幸子)

(16) 保育所等における第三者評価，自己評価の実施及び活用に関する調査研究

本専攻研究者：北野幸子

研究代表者：一般社団法人全国福祉サービス第三者評価調査者連絡会

研究資金：厚生労働省 令和4年度子ども・子育て支援推進調査研究事業

研究概要：保育の質に関わる保育所等における第三者評価と自己評価等の国際比較を行い，日本のこれからの第三者評価と自己評価の在り方について考察した。

(人間発達専攻 北野幸子)

(17) コロナ禍における3歳未満児保育に関する研究～実態調査から見えてくるもの

本専攻研究者：北野幸子

研究代表者：岩橋道世（保育科学研究会）

研究資金：厚生労働省 2020 年度日本保育協会保育科学研究所「指定研究」

研究概要：コロナ禍における 3 歳未満児保育の実態について全国調査を行い、その特徴を明らかにした。

（人間発達専攻 北野幸子）

（18）保育の ICT 環境に関する実態調査と保育者支援システム創りに関する研究

本専攻研究者：北野幸子

研究代表者：北野幸子

研究資金：令和 4 年度大学発アーバンイノベーション神戸研究助成

研究概要：神戸市内の全ての園種公私を含むすべての保育施設における ICT 環境の実態調査を行った。また各区拠点園へのポータブル・Wi-Fi と端末を貸出，地域の保育者の連携協働システムを開発した。保育者支援について資料提供，研修開発等を行った。

（人間発達専攻 北野幸子）

（19）擬似人流データを用いた身体活動量の推定と地理的・社会経済的環境から見た地理的地域特性の解明：地域住民の健康増進に向けた活動量シュミレーションシステムの開発

本専攻研究者：喜屋武享，内山愉太，原田和弘

研究代表者：喜屋武享

研究資金：文部科学省 AI 等の活用を推進する研究データエコシステム構築事業

研究概要：本提案は「擬似人流データ」の公衆衛生学分野をはじめとする保健学でのユースケースを提案するものである。

（人間発達専攻 喜屋武享）

（20）地域コンソーシアムによる障害者の生涯学習支援体制の構築

本専攻研究者：津田英二・赤木和重・大田美佐子・岡崎香奈・川地亜弥子・清野未恵子・稲原美苗

研究代表者：津田英二

研究資金：文部科学省委託「地域における持続可能な学びの支援に関する実践研究」

研究概要：知的障害者に大学教育を開くことをめぐる理論的・実践的課題を明らかにし，大学教育プログラムを開発・実施する実践的なモデル開発研究，及び兵庫県内の障害者の生涯学習機会創出のモデル開発を行なう研究である。

（人間発達専攻 津田英二）

（21）積水化学工業株式会社との共同研究

高分子材料の構造物性評価に関する研究

テラヘルツ分光法およびラマン分光法を用いて，高分子材料の物性特性に関して，特に構造と物性の相関に関する研究を行った。

（人間環境学専攻 佐藤春実）

(22) 三菱ケミカル株式会社との共同研究

生分解性高分子の構造物性に関する研究

生分解性高分子のテラヘルツスペクトルおよび低波数領域を含むラマンスペクトルを測定し、それらのスペクトル変化から、構造と物性の関係について調べた。

(人間環境学専攻 佐藤春実)

(23) スカイワークスフィルターソリューションズジャパン株式会社

基盤材料の評価に関する研究

加工プロセスを経た基板材料の評価技術として STEM を用い、基板内での面内ダメージの分布の把握に取り組んだ。

(人間環境学専攻 谷篤史)

(24) 岡山県からの受託研究

環境 DNA 分析による特別天然記念物オオサンショウウオ, チュウゴクオオサンショウウオ生息状況調査

岡山県内に生息する天然記念物のオオサンショウウオの保全のため、県内の河川において環境 DNA 調査を実施し、オオサンショウウオの分布および、外来種であるチュウゴクオオサンショウウオや在来種と外来種の交雑種の生息の可能性について調べた。

(人間環境学専攻 源利文)

(25) 中国四国地方環境事務所からの受託研究

アユモドキ分布状況調査

岡山県内に生息する天然記念物のアユモドキの保全のため、県内の河川において環境 DNA 調査を実施し、アユモドキの分布域について調べた。

(人間環境学専攻 源利文)

(26) Studio Phones

Kobe Studio Seminar

Studio Phones と数理情報環境論が中心となって産学連携で実施する少人数と分野横断などをコンセプトとするセミナー活動である。2022 年度は、オンラインにて 2 回、学外にて 2 回、学内にて 1 回の講演等のセッションを実施した。

(人間環境学専攻 長坂耕作)

(27) ダイキン工業株式会社との共同研究

撥水剤の実用耐久性評価

繊維の力学特性に関する装置・手法を用いた撥剤処理生地への力学負荷試験を行い、撥水性に与える要因について調査・研究を行った。

(人間環境学専攻 井上真理)

(28) 株式会社 colourloop との共同研究

廃棄繊維を使用した再生糸及び生地 of 物理特性の評価及び数値化

廃棄繊維を使用した再生糸及び生地 of 物理特性と表面特性を測定し、風合い評価及び風合いの客観評価に関する研究を行った。

(人間環境学専攻 井上真理)

(29) 有限会社デノボストラクチャーの 9-jour ブランド事業委託研究

9-jour ブランドの天然染色で染色をしたデニム製品の評価

天然染色により染色された布の肌触り・風合い(柔らかさ, なめらかさ, ふっくら感)を数値化に関する研究を行った。

(人間環境学専攻 井上真理)

(30) 小泉製麻株式会社との共同研究

プラスチック容器の環境負荷計算に関する研究

ライフサイクルアセスメント(LCA)手法を用いて、プラスチック容器など包装容器に関する環境負荷の計算と比較に関する研究を行った。

(人間環境学専攻 田畑智博)

(31) 村田機械株式会社, 高知大学との共同研究

導電糸を用いたニットセンサによる人間計測に関する研究開発

スマートテキスタイルとしてのニットセンサの機械-電気特性を理論的・実験的に明らかにし、人間計測における「指先センサ」「回旋センサ」「嚙下センサ」などの開発に取り組んだ。得られた研究成果は、特許として共同出願の手続きを行っている。

(人間環境学専攻 福田博也)

(32) 農事組合法人アグリファーム

日本におけるキャッサバ栽培技術に関する研究

2020 年より農事組合法人アグリファーム(群馬県邑楽郡邑楽町)と高崎経済大学と連携し、日本における熱帯作物キャッサバの栽培実践の定量的な把握に取り組んでいる。日本でのキャッサバ栽培の先例はほとんどなく、現在の実践を把握して分析することで、日本におけるキャッサバの栽培技術の確立につながることを期待できる。

(人間環境学専攻 原 将也)

## 8.2. 地域連携プロジェクト

(1) 健康ビッグデータを活用した県民の健康づくり事業(地域特性に応じた媒体作成, 市町向け研修の実施)

協働実施者: 兵庫県

プロジェクト概要: National Data Base から抽出した特定健診時のデータを用い、兵庫県の市区町ごとで、メタボリックシンドロームに関わる指標(生理指標, 生活習慣等)について継時的な傾向を

分析し、これに基づいた媒体を作成するためのプログラムを開発し市区町向けの研修を実施した。

(人間発達専攻 加藤佳子)

(2) 薄井憲二バレエ・コレクション第30回企画展「人形たちの饗宴Ⅱ～人形を動かす魔法とは?～」

共同研究者：古後奈緒子（大阪大学准教授）

研究資金：兵庫県立芸術文化センター

研究概要：2020年に実施した第24回企画展「人形たちの饗宴Ⅰ」の続編として、兵庫県立芸術文化センターロビー（2階）展示室ポッケにて開催（2023年1月17日～3月5日）。アンティークプリント・プログラム・台本・楽譜・写真・葉書など約50点を展示。

(人間発達専攻 関典子)

(3) 乳幼児教育実践の質の維持・向上にかかわる保育者の専門性に関する研究

研究代表者：北野幸子

研究資金：神戸市こども家庭局事業費

研究概要：神戸市事業として乳幼児保育研究部会を立ち上げ、遠隔公開保育の方法の開発、実践事例の可視化と発信方法の開発等、保育の質の維持・向上にかかわる保育者の専門性についての検討をおこなっている。

(人間発達専攻 北野幸子)

(4) 誕生からの育ちと学びの連続性を踏まえた幼児教育の質の向上を目指す保育実践研究

研究資金：令和4年度福井県私立幼稚園・認定こども園協会共同研究 寄付金

研究概要：誕生からの育ちと学びの連続性を踏まえた教育実践例の検討、環境構成の工夫、援助の質向上を図る工夫等について実態を明らかにした。なお本研究の共同研究が学会賞を受賞した。

(人間発達専攻 北野幸子)

(5) 子育て支援拠点プログラムモデル開発

本専攻研究者：寺村ゆかの、津田英二

研究代表者：津田英二

研究資金：神戸市「神戸市地域子育て支援拠点事業補助金」

研究概要：2005年より運営している「のびやかスペースあーち」において、子育てに関わる多様な人々との出会いや交流を通して、そこで出会った利用者らが互いの立場を理解し互いに学び合うこと、そしてそこから生まれる新たな価値観を共有するためのプログラムモデルの開発を行う。

(人間発達専攻 津田英二)

(6) 子どもの居場所づくりプログラムモデル開発

本専攻研究者：津田英二、寺村ゆかの

研究代表者：津田英二

研究資金：神戸市「神戸市子どもの居場所づくり補助金」

研究概要：2005年より運営している「のびやかスペースあーち」において、社会参加機会の少ない子どもたちを中心に、多様な人たちのエンパワメントの場として活用できるプログラムモデルの開発を行う。

(人間発達専攻 津田英二)

## 9. 社会的活動・震災復興支援

### 9.1. 災害地への支援活動

#### 東日本大震災復興支援 岩手県大船渡市赤崎町

2011(平成23)年3月11日に津波によって大きな被害を受けた岩手県大船渡市への復興支援を続けて、12年になる。コロナウィルスの感染リスクを避けるため、昨年度同様、今年度も、オンライン・電話・手紙を活用した住民との交流が主な活動となったが、2023年3月8日～12日にかけて、ようやく、ESDプラットフォームWILL(ヒューマン・コミュニティ創成研究センター支援組織)のメンバー20名で、岩手県大船渡市赤崎町を訪問することができた。3月11日の慰霊式典の準備・運営補助をはじめ、災害公営住宅・高台移転団地への友愛訪問のほか、今後の復興支援計画についても地域住民とともに協議することができた。2023年度は、いよいよ、再始動の年になりそうである。

現在、大船渡市では、防災集団移転、災害公営住宅移転、防潮堤建設が終わり、復興道路も完成した。ハードの整備はほぼ終わったといっていよいであろう。教育・福祉・医療の仕組みも徐々に正常に戻りつつある。しかし、コロナ禍での自粛のせいもあり、津波によって失われた人・町の活力は、いまだ回復していない。むしろ、漸減的な活力の低下が見て取れる。公民館活動の減少、地域自治会の弱体化、婦人会などの地縁組織の解体、人口減少を引き金とする学校の統廃合、さらには、地域祭りや各種地域行事の中止、および、同地域の復興の目玉で会った「赤崎復興市」の中止など、あまりいい話はない。

新型コロナウイルス禍がようやく落ち着きを見せ始めてきた現在、2023年度こそは、地域の活性化に資する活動を、地域住民が主体的に進められるべく、応援をしていきたいと考えている。被災地支援ワークキャンプや被災地スタディツアーを実施する予定である。

また、このボランティアプログラムは、経済的には、本学ヒューマン・コミュニティ創成研究センターおよび都市安全研究センターの運営基金及び神戸大学基金によって支えられているが、本学の朴木佳緒留名誉教授、稲原美苗准教授、井口克郎准教授をはじめ、他学の志を同じくする研究者仲間やESDプラットフォームWILL会員に支えられて具体化を見ている。この場を借りて感謝する次第である。

(人間発達専攻 松岡広路)

## 10. 附属施設

### 10.1. 発達支援インスティテュート

#### 10.1.1. 発達支援インスティテュート運営委員会

本委員会は近藤徳彦発達支援インスティテュート長(研究科長)、松岡ヒューマン・コミュニティ創成研究センター長、伊藤俊樹心理教育相談室長、源利文サイエンスショップ室長、北野幸子教育連携推進室長、片桐恵子アクティブエイジング研究センター長(令和4年10月まで)、長ヶ原誠アクテ



イブエイジング研究センター長（令和4年11月から）及び佐藤春実先副研究科長で構成される。また、春名正基事務部長、藤村さとみ総務係長も出席した。

令和4年度も本委員会を毎月1回程度のペースで開催し、研究科としての研究基盤の強化を図ると同時に、毎回各室・センターの活動報告を定例化し相互の連携を強めた。特に、新型コロナウイルス感染症の影響が続く中での各センター・室の取り組み方法に関して情報共有を継続的に行った。

なお、本委員会での主な検討事項は以下のとおりである。

	検討事項
第1回（4月22日）	1. センター・室等の活動における外部へのアピールの仕方等について
第2回（5月27日）	1. SPARC（令和4年度大学教育再生戦略推進費 地域活性化人材育成事業「研究力の国際化加速事業」）について 2. 健康長寿に関する生涯ウェルビーイング推進研究拠点作りの構想について
第3回（6月24日）	1. ウェルビーイング先端研究センター（全学センター）設置構想について
第4回（7月22日）	1. 学則第9条（研究科等の附属施設）に規定する組織の評価について
第5回（9月15日）	（情報共有）1. 学則第9条（研究科等の附属施設）に規定する組織の評価について
第6回（11月25日）	1. 部局内センターについて 2. （その他）事業計画について
第7回（12月23日）	1. 部局内センターについて 2. （その他）ウェルビーイング先端研究センター・ウェルビーイング推進本部設立に伴うキックオフシンポジウムについて
第8回（2月24日）	1. 発達支援インスティテュートに係る評価結果について 2. 部局内センターについて

（発達支援インスティテュート長 近藤徳彦）

### 10.1.2. 心理教育相談室

心理教育相談室は、市民を対象とし、地域に開かれた相談室である。臨床心理学や心理療法に関する知見を生かして、地域の人々の心の健康に貢献することを目的としている。同時に、当相談室は、本研究科人間発達専攻臨床心理学コースが臨床心理士養成第I種指定校としての認可を維持するために必要な実習機関であり、コース所属の学生たちの臨床訓練の場として機能する目的を有している。平成12年度に総合人間科学研究科の附属施設として設立され、平成17年度からは同研究科附属発達支援インスティテュートの一部門に位置づけられた。心理教育上のさまざまな問題について、臨床心理学の立場から専門的な援助を提供する活動を行っている。年間を通じて開室し（年末年始、夏季の休室期間を除く）、カウンセリング、プレイ・セラピーなどの心理療法を中心に、必要に応じて心理テストを実施するなどの心理臨床実践を行っている。相談は有料である。相談内容は、幼児期・児童期に家庭や学校でみられる発達教育上の問題、青年期のアイデンティティ形成に絡む課題、成人期のメンタルヘルス、熟年期の家族関係や生き方に関することなど、多岐にわたっている。また、平成

30 年度より本学研究科人間発達専攻博士課程前期課程こころ系講座臨床心理学コースにおいて、国家資格である公認心理師の養成が始まり、心理教育相談室はその実習の一部を引き受けている。心理教育相談室に所属する臨床相談員が実習指導者となり、公認心理師のカリキュラムに指定された実習時間（450 時間以上、そのうち心理に関する支援を要する者等を対象とした心理的支援等 270 時間以上）の一端を担う役割をしている。なお、心理教育相談室における研修生の面接担当時間の確保等、今後公認心理師カリキュラムに対応するための対策が重要な課題の一つとなってくるものと思われる。

相談室の組織構成、ならびに相談システムについては以下のとおりである。心理教育相談室は、心理教育相談室運営委員会により管理運営される。委員会の構成員は、運営委員会委員長の相談室長をはじめ、副相談室長、ほか 2 名の委員からなる。また、本年度の相談室スタッフは、教員 6 名（臨床心理学コース担当、臨床心理士、公認心理師）、博士後期課程こころ系 A 講座院生 2 名、前期課程臨床心理学コース院生 24 名（M1：12 名、M2：11 名）、事務補佐員 1 名である。今年度の相談室の運営そのものは、コロナの影響を受けず、4 月 1 日から現在に至るまで開室中である。相談室は、ウイルス感染対策として、体温の計測、消毒の徹底、相談室の椅子のソーシャルディスタンスの確保、窓を開けることによる換気、テーブルにアクリル板を立てて飛沫感染を防止するなどを行い、密をさける努力をしている。

新規の相談申込みは、基本的に電話受付によって行われている。この受付業務も、臨床心理学コースの授業「臨床心理基礎実習」の一環となっており、修士課程 1 年（M1）の学生たちが相談室スタッフの一員として交代で臨んでいる。受付時間は、月曜日の午後 1 時～2 時 45 分、火曜日～金曜日の午後 1 時～6 時（いずれも祝日は除く）である（年末年始、夏季のお盆期間は閉室）。毎年 30 件弱の新規相談申込みがあり、受理面接、インテークカンファレンスを経て面接受理、担当者、継続面接の形式等が決定される。

年間相談件数は、平成 22 年度以降おおむね 800 から 1000 件程度で推移しているが、最近ではコロナの影響のため減少しているが、地域住民の心の健康に貢献する心理相談機関として、ならびに、臨床心理士養成に関わる実習機関として適切な活動している。なお、詳細な面接受付件数、面接受理数、面接回数等は年次報告資料編に掲載するとおりである。平成 22 年度より心理教育相談室は、年 1 回『神戸大学大学院発達支援インスティテュート心理教育相談室紀要』を発刊しており、院生たちに心理臨床の実践研究をまとめる場を提供している。今年度第 12 号は、事例研究論文 4 篇、相談室活動報告、相談員・研修生生活動報告から構成される。なお、掲載された 4 篇の事例研究論文の題目は以下の通りである。・博士課程後期課程 2 年鈴木田英里「娘のことよりも自分自身のこれからについて考えたい母親との面接」・博士課程後期課程 1 年生田邦紘「知能検査から息子の特性を理解したい 40 代の母親の心理面接」・博士課程前期課程 2 年江村聡史「自身の思いを主張的な意高校生男子との面接—対人関係や社会適応への不安を抱えて—」・博士課程前期課程 2 年津田真由「母親に存在を認めてもらえなかった 40 代女性との面接」

また、平成 28 年度から、発達支援インスティテュート HC センターとの共同で「サテライト施設のびやかスペース・あーち」において、一般の子育て中の保護者を対象とした「心理教育相談室子育て支援セミナー」を開催しているが、今年度はコロナの影響のため開催を取りやめた。

[研究活動]

今年度、研究推進支援経費を頂いて「遠隔心理支援（オンライン・カウンセリング）の問題点の克服及び限界に関する質的研究～実践者へのインタビューを通して～」を新たに行っている。

（心理教育相談室長 伊藤俊樹）

### 10.1.3. ヒューマン・コミュニティ創成研究センター

#### (1)多文化・子どもコミュニティ支援部門

1) 小学校における学校包括的身体活動促進プログラムの健康・well-being への効果検証

国連児童基金（UNICEF）は子ども・青少年の well-being を精神的幸福度（生活満足度、自殺率）、身体的健康（死亡率、過体重／肥満）、スキル（数学・読解力、社会的スキル）の3側面から捉え、世界の実態を継続的にモニタリングしてきた（「イノチェンティレポートカード」、UNICEF）。これによれば日本の子供のウェルビーイングにはパラドックスが生じている。すなわち、世界と比較して多くの子どもが身体的な健康を享受できているにも関わらず、精神的幸福度が低い。子どものメンタルヘルスの問題は兼ねてから指摘されてきたことだが、COVID-19 の蔓延がこれに拍車をかけている。国立生育医療研究センターは、COVID-19 禍、小学5年生～中学生の約10人に1人が中等度以上のうつ症状を有することを報告している（国立成育医療研究センター、2022）。これらの状況から、子どものヘルスプロモーションが重要課題であることがわかる。

子ども・青少年が1日の大半を過ごす学校は、彼らの人格や価値観にも大きく影響するために、後の人生においても重要なコミュニティである。数多ある学校改革の1つとして、現在、小学校における体育専科教諭の配置事業が展開されている。これは、主として体育授業の質改善を企図した政策であるが、実態はそれにとどまらず、学校環境の整備やイベント企画による身体活動機会の充実、地域・家庭との連携による運動の促進など多岐に渡り、ヘルスプロモーション戦略の1つともいえる取り組みである。

部門長である喜屋武は、このことに着目し、以下の要領にてその評価研究を実施した。

研究デザイン：体育専科が配置されない学校を比較対照群とした準実験デザイン。

対象の設定：対象学年は第5学年。2022年度に体育専科が配置される小学校（以下、配置校）5校に対して比較対照学校5校を選定した。

評価項目：身体活動量、身長体重等の体格指標、体力運動能力（新体力テスト）、をはじめとする身体的健康。主観的身体健康度、主観的精神幸福度をはじめとする精神的健康。全国学力テスト、県独自の標準化統一テスト等の学力指標。

成果報告：2023年3月11日に大阪産業大学梅田サテライトキャンパスにて行われた第37回日本体力医学会近畿地方会にて成果報告（口頭・ポスター発表）を行なった。

（担当 喜屋武亨）

#### (2)ジェンダー・コミュニティ支援部門

2020年2月頃から続いていた新型コロナウイルスの感染拡大について、ようやく収束の兆しが見えてきた。2022年度は少しずつ対面での行事が増え、コロナ禍以前に戻れるかと考えていたが、な

かなか元に戻らないようだ。さらに、2022年2月下旬に勃発したロシアによるウクライナへの軍事侵攻も未だに続いている。このことから分かるように、国際的にジェンダーや民族における分断や格差の問題が深刻化している。そこで、異なる意見を持ち、異なる立場にいる人々が共生できるコミュニティのあり方を考え直す必要性が出てきた。このような課題に向き合い、共に考えようとする一つの試みが「対話実践」である。本部門は、一人一人が日常生活の中で抱えている問題を共に考える探究のコミュニティ（一般的に「哲学カフェ」と呼ばれている）を創成する試みをしてきた。それらの課題を「マジョリティ」の立場ではなく、むしろ「マイノリティ」の立場から捉え直そうとする臨床哲学的な実践を行い、多様な側面から一人一人の「語り」の地平を拓き、全ての支援には欠かせない「生きづらさ」の哲学を探究する。男女間の格差やセクシャリティに関する差異、障害の有無、世代間や文化間違いを踏まえて「生きづらさ」について考える上で、社会の様々な場所で潜在的に問題となっていることを、社会の中で生きている人々との対話を通して掘り起こし、問いを作り、ゆっくりじっくり考えること、つまり、哲学プラクティスに取り組んでいる。2022年度にジェンダー・コミュニティ支援部門が実践した4つの活動について報告する。

#### 1. 「ジェンダーや身体の多様性について考えるメルロ＝ポンティ現象学研究会」

2022年度、当該研究会を計3回（5/8, 7/3, 9/10）開催した。コロナ禍の昨年度と同様、全ての研究会をZoomによるオンライン開催となった。（オンラインで開催を続けているため、一般の方々や関東や九州からの参加者がいた。）メルロ＝ポンティ研究者である松葉祥一氏（同志社大学）を招き、主に、『意識と言語の獲得』（フランス語の原文も使った）を輪読しながら、ジェンダー、ケア、子ども、親子関係、障害、身体、表現などをテーマに、参加者全員で対話をした。現象学的アプローチを用いた質的研究の意義についても議論を重ねた。本学の学生、院生、教員、他大学の院生や教員の方々、そして一般の方々も参加し、ジェンダーや現象学を中心に掘り下げて議論を続けてきた。メルロ＝ポンティの哲学書の読解に並行して、子育て支援、医療、ケア、福祉などの実践者や専門家たちと対話をする中で、それぞれの「生きられた経験」を考察した。さらに、私たちの経験、身体の動き方、感情などを詳細に記述する現象学的アプローチを行うことで、マイノリティ当事者や子どもの社会的・心理的な状態の理解と支援のあり方について考えた。

#### 2. HC Café ～哲学対話の時間～ オンライン哲学カフェ

昨年度と同様の理由（新型コロナウイルス感染拡大の影響）で、2022年度も神戸大学大学院人間発達環境学研究科ヒューマン・コミュニティ創成研究センターのサテライト施設「のびやかスペースあーち」での対面哲学カフェを一度も開催できなかった。その代わりにオンラインでの哲学カフェを3回開催した。今年度も鳥取大学教育支援・国際交流推進機構・入学センターの三井規裕氏と一緒に実践を続けている。なお、本プロジェクトは、本学部GSPの研修型プログラム（国内フィールド学修・哲学カフェの企画・運営プログラム）として学生を受け入れてきた（秋募集6名の学生を迎えた）。学生に主体的で開かれた学びの場を提供し、ジェンダーやマイノリティに関する問題を多角的に考える場を共に作り出すのと同時に、哲学カフェのファシリテーションスキルを習得できる学びの場としても機能している。本年度は、特に、対面での開催とは異なるオンラインの対話の場をデザインするために工夫した。（来年度もオンラインで続ける予定である。）

2022年度は、哲学カフェを3回開催した。開催日、テーマ、参加人数を下記の表にまとめておく。

開催日	テーマ（問い）	参加人数（スタッフ）
2022年8月21日	孤独とはなにか？	9（2）
2022年12月3日	安全とは何か？	15（3）
2023年2月4日	なぜ大学で学ぶのか？	19（7）

HC Caféのプロジェクトの哲学カフェは、事前登録をすれば、誰でも参加でき、日常生活の中にあふれている（普段あまり深く考えない）問いについて、立ち止まって考えてみようという試みであり、異世代間交流をしながらジェンダーを考えるグローバルな視野を持てるように市民の学びの場を構築している。本年度も哲学カフェをオンラインで開催したおかげで、参加者の年齢・職業・地域などの層が広がった。2023年2月4日の「なぜ大学で学ぶのか？」の回には、GSPの哲学カフェの企画・運営プログラムの一環として学生たちも参加した。

今年度は、2023年3月25日・26日に公立鳥取環境大学と鳥取大学にて、GSPの学生たち（6名）と一緒に企画・運営をし、大学進学研修会に参加した鳥取県内の進路多様校に通う高校生たち（25日〔公立鳥取環境大学〕10名・26日〔鳥取大学〕30名）に対してキャリアデザインについて主体的に考える対話を実践した。大学で学ぶことの意義やジェンダー問題、それに加えて地方における学びの格差問題などについて深く考える機会を与えた。学生たち6名にとっても、ファシリテーションの重要性やコミュニティ形成のための対話の意義について学べた良い機会になった。（本実践は科研費の研究・本部門研究の一環として開催し、三井規裕氏（鳥取大学教育支援・国際交流推進機構入学センター准教授）、岩田直樹氏（公立鳥取大学人間形成教育センター・アドミッションセンター特任教授）、尾室真郷氏（鳥取大学教育支援・国際交流推進機構入学センター特任教授）と研究打ち合わせも行った。）

### 3 オンライン・シンポジウム：当事者「家族」のための哲学対話 ～家族の「普通」を問い直す～

2023年2月23日にオンライン・シンポジウム「当事者「家族」のための哲学対話 ～家族の「普通」を問い直す～」を開催した（主催：科研費，共催：本部門）。登壇者に、足高聖子氏（神戸大学附属特別支援学校PTA・保護者）、高木佑透氏（『僕とオトウト』映画監督）、尾崎絢子氏（はなこ哲学カフェ主宰）の3名が発表した池田喬氏（明治大学文学部）、稲原美苗（本部門）が司会を務め、参加者が質問・対話しやすい環境を創り出した。

2021度のオンライン・シンポジウム「定時制高等学校の役割と可能性～哲学プラクティスの視点から～」、2020年度の「不登校と哲学プラクティス」に引き続き、本シンポジウムでは、「家族とは何なのか？」「家族と共に暮らすということとはどのような経験なのか？」という問いに焦点を当てて、障害のある家族と暮らしてきた当事者たち、乳幼児の母親たちと哲学対話をしてきた実践者に講演をしていただいた。それぞれの経験から問題にアプローチし、家族やジェンダー規範をめぐる「当たり前」の問い直しを試みた。その後、哲学プラクティスの専門家や当事者性のある参加者たちと共に考える対話の時間を持った。このシンポジウムに34名が事前登録し、当日の参加者は27名だった。

### 4 神戸市職員や大学教員、そして支援団体などとのLGBTQ+当事者のための政策研究ネットワーク

2021年9月、神戸市役所（区役所）に勤務している「職員による都市政策研究プログラム研究メンバー：グループ2」から依頼があり、「誰もが住みやすい社会的包摂都市の実現～LGBTQ+の支援施策の検討を通して～」というプロジェクトの研究協力者となった。神戸大学でジェンダー問題を研究している教員3名（青山薫氏、ロニー・アレキサンダー氏、工藤晴子氏）と一緒に本ネットワークに参加している。神戸市が誰にとっても住みやすい多様性のある包摂都市となるために、市職員の有志やNPO法人の支援者、ジェンダー学の研究者などがネットワークを形成し、LGBTQ+当事者やその家族のための施策に着目し、既存のパートナーシップ制度の検討を通じ、神戸市においてLGBTQ+市民も包括し得る新しいパートナーシップ制度の提案を行うことを目的としていた。2022年度も本プロジェクトは継続され、2022年7月に神戸市の幹部役員へのプレゼンテーションを開催し、パートナーシップ条例などの改善策の必要性をアピールできた。2023年1月末日で報告書が完成した。そのタイミングで、神戸市役所のプロジェクトから、個人、支援団体（NPO法人）へと活動が移行しており、月に一度のペースでミーティングを開催している。本ネットワークでの哲学カフェの導入を考えており、ジェンダー問題を市民一人一人の問題として取り上げて、哲学対話の場を提供する企画案が出されている。本ネットワークにおけるさらなる進展が期待できる。

（担当 稲原美苗）

### （3）社会教育・サービ斯拉ーニング支援部門

2017年4月のヒューマン・コミュニティ創成研究センター（以下、HCセンター）の組織変更によって、新たに「社会教育・サービ斯拉ーニング支援部門」が創設され、6年になる。この部門は、文字通り、学校教育以外のノンフォーマルな教育（社会教育）の教育原理・方法の探究と、ノンフォーマル教育だからこそ開拓性・斬新性・柔軟性・実索性を学校教育と連動させる「サービ斯拉ーニング」の在り方の探究を、実践研究のターゲットにおく部門である。

一般に、社会教育は、学校教育以外の組織的な教育活動と理解されるが、本部門では、制度化されていない幅広い教育的な活動（インフォーマル・エデュケーション）を視野に入れ、「いかに新しい教育が立ち現れるのか？」を問いとする実践的な研究も課題とする。すなわち、社会的活動のなかで「教育らしきもの＝学び」が立ち現れ、ノンフォーマル教育として輪郭をもち、その過程で制度化された教育（フォーマル教育）としての学校教育と連動して教育的効果が高まっていく、という教育生成の流れを、全体構図とする。

それゆえ、HCセンターの他の部門のキーワードでもある、「ボランティア」「エンパワメント」「インクルージョン」「アンラーニング」「対話」「共生」「ネットワーキング」「ソーシャルアクション」「持続可能な開発」など、が総合化されたフィールドがターゲットとなる。教育生成の全体の流れを意識したうえで、多様な領域を視野にいれながら、各キーワードを基盤とした実践・研究の連環的様態を探究することが、本部門の使命である。

現在は、こうした全体構図を否が応でも意識することになる「ESD（持続可能な開発のための教育）」およびSDGs運動をターゲットに、HCセンターの他部門との連携・協力のなかで研究的実践を展開している。ESDは、持続可能な開発という理想を実現するうえで生起する、さまざまな社会的課題間の葛藤・矛盾を教材とする新しい教育である。SDGs運動の萌芽期に合って「ESDがいかに立ち現れるか」を問いとしてモデル実践を組み立て、ESD実践の理論化を図ることを目標としている。

具体的には、以下の5つの実践フィールド研究を実施している。

### 1. ESD ネットワーキング支援事業

国連大学認証組織（RCE 兵庫-神戸：「ESD 推進ネットひょうご神戸」）の組織化・企画創出の過程におけるアクションリサーチ（参与観察・関与観察など）を主とする。「自然共生地域支援部門」「インクルーシヴ社会支援部門」「国際開発実践支援部門」などのHCセンターの他の部門及び発達支援インスティテュート「サイエンスショップ」と連携しつつ、環境系・福祉系・国際開発系・まちづくり系などの多様な市民・企業・行政組織が互いの活動ベクトルを接近・交差させる過程や、協働的活動のコーディネート の在り方、及び、その過程での学習プロセスの特徴を解明する。

新型コロナウイルスの影響を受けたものの、本年度は、対面交流型の事業を行うこともできた。日本福祉教育・ボランティア学習学会研究大会（11月26, 27日、於：神戸大学鶴甲第2キャンパス）の実行委員会をリードしてくれたのが、本組織である。月一回の実行委員会の企画運営、大会当日のマネジメント、テーマ別研究での素材提供、課題別研究の企画運営などを通して、全国の会員に大きな感動とインパクトを与えることができた。

※「(5) 自然共生地域支援部門」参照

### 2. ESD プラットフォーム WILL 支援事業

HCセンターが主催・支援する高校生・大学・若手社会人を中心とするESD関連事業の人的・物的資源の流動化を促進する時空間づくり、すなわち、プラットフォーム創成の過程を、参加者自らが主体となって実験的・研究的に推進する事業である。「社会保障・ソーシャルアクション支援部門」が所管する「大船渡ESDプロジェクト」、 「障害共生支援部門」の「あーち」関連事業、「自然共生地域支援部門」の農村レジリエンスプログラム、あるいは、「国際開発支援部門」のPEPUPの活動、さらには、RCE兵庫-神戸の各団体のSD関連活動をネットワーク化し、だれでも、気軽にESDに触れられるとともに、そのなかで、自己・社会変容の契機を得る空間の実践方法とその理論を、参加者と研究者などの関係者が協力して探求しようとするアクションリサーチである。

ESDが立ち現れる、すなわち、持続可能性をめぐる学習が生まれることが期待される本事業で、これまでに発見されてきた学習理論「当事者性学習論」は、現在、関係学会でその有効性・妥当性が検討・協議されている。

※「(5) 自然共生地域支援部門」「(7) 社会保障・ソーシャルアクション支援部門」参照。

### 3. ESD フォーマル教育推進事業（フォーマル教育×ノンフォーマル教育）

神戸大学のフォーマルカリキュラムとして2006年に設立されたESDサブコースのカリキュラム・授業内容を実験的にデザインすることを主とするアクションリサーチである。

第1学年に配当される「ESD基礎」「ESDボランティア論」は、上記のノンフォーマルなESD事業との連動の中でデザインされている。ESDが立ち現れるサービスラーニングの在り方、および、その教育がESDを推進する実践者育成に及ぼす効果を、比較的自由度の高い高等教育において探究することをめざしている。他の部門の教員とともに、ESD総合コーディネータの協力の元、学習者の学びのプロセスをデータ化し実践モデルの再構築をめざしている。

#### 4. ESD 社会教育・生涯学習支援促進事業

これまでも神戸市・尼崎市・堺市・岸和田市などの生涯学習に関する施策に ESD を位置づける活動を行ってきた。あるいは、兵庫県嬉野台生涯教育センター生涯大学やいなみ野学園（高齢者大学校）のカリキュラムの変更のなかで ESD を位置づけるために指導助言を行ってきた。

今年度は、特に、加西市社会教育施設あり方検討委員会（委員長；松岡広路）において、ESD・社会教育事業の推進に関する計画づくりに参与した。この成果は、『加西市公民館・オークタウン加西の発展のための基本計画』（2023年3月31日）としてまとめられ公開された。

#### 5. 研究・学会活動

部門研究員の協力を得て、日本社会教育学会、日本福祉教育・ボランティア学習学会などでの学会活動の推進・支援を試みてきた。学会員等の定期的な公開研究会（月1回）をはじめ、両学会の理事・課題別研究の世話人・幹事を務める協力研究員が増えてきた。また、研究発表や学会誌投稿も積極的に行われ、2022年度実績は、研究発表：9本、投稿論文（査読付き）3本となった。さらに、今年度は上記のように日本福祉教育・ボランティア学習学会第28回研究大会を本学において開催した。

以上の5つの活動を通して、ESDとしての教育の形成過程の研究、すなわち、教育哲学論、学習論、主体論、方法論の各視座から ESD とは何かを探究する研究を行っている。

（担当 松岡広路）

#### (4) インクルーシヴ社会支援部門

A. 2005年度よりヒューマン・コミュニティ創成研究センターのサテライト施設として開設している「のびやかスペースあーち」において、「子育て支援をきっかけにした共に生きるまちづくり」の実践を継続して行った。火曜日から土曜日まで開館し、隔月で連絡協議会を開催して多方面の機関と連携しながら運営を行った。今年度は、新型コロナ感染拡大防止のための規制を段階的に緩和し、年度末には以前の機能を回復するための取り組みに着手した。

「よる・あーち」は、2006年度より実施している「あーち居場所づくり」を基盤として、2016年秋から開始した「のびやかスペースあーち」の基幹プログラムである。神戸市の「子どもの居場所づくり事業」の助成を受け、灘区連合婦人会との連携で、学習支援、子ども食堂、遊び、交流の4つの活動を柱とする複合的な場づくりである。毎週金曜日の夜に実施し、住民や学生が集う。さまざまな困難（主に社会性の問題、学力の問題、障害の問題など）をもつ子どもや家庭の支援を関心の中心に置き、その他にも障害のある青年や成人など、多様な課題を抱える人たちが、市民や学生と相互に学び合う状況を創出している。新型コロナ感染拡大防止のために時間短縮と人数制限を課してきた影響で、活動が大きく弱体化してきたが、年度末になって規制緩和を行い機能回復に着手することができた。

B. 文部科学省受託により、知的障害者に大学教育を開く実践研究を行った。10月～2月に特別の課程として週3日の授業を展開し、知的障害者19名を受講生として受け入れた。その成果に基づき報告書『神戸大学・学ぶ楽しみ発見プログラム』を編集・刊行した。また、同じ文部科学省受託により、兵庫県全域で障害者の生涯学習推進のための情報収集や整理・発信、ネットワーク形成を行い、11



月 25 日には、文部科学省、兵庫県教育委員会との共催で、近畿ブロック「共に学び、生きる共生社会コンファレンス」を実施し、本部機能を担った。

C. 学内の交流ルームに 2008 年度に設置されたカフェ・アゴラの運営に携わり、障害者雇用及び実習のモデル開発を継続した。9 月には、附属特別支援学校の美術の授業を題材としたギャラリー展示「ぬくもり、こだわり、とりどり。」を、博物館学芸員課程の学内実習として実施した。

D. 交流協定を締結している韓国ナザレ大学との交流を継続し、12 月 10 日に神戸大学百年記念館六甲ホールにて日韓交流セミナー「文化芸術活動と生涯学習」を実施した。

E. 障害児の放課後保障の観点から 2008 年度から開始したインクルーシブな学童保育の支援を継続して行った。

F. 知的障害者のセルフ・アドボカシーグループの支援として、新聞編集支援を継続的に実施した。ほぼ毎月 1 回の編集活動を支援し、12 月に第 25 号「フレンド新聞」を発行した。

(担当 津田英二)

## (5) 自然共生地域支援部門

本部門では、自然と共生する地域社会の実現を目的として農村部等をフィールドにアクションリサーチ型の研究を行っている。本年度は主に以下の 5 つの内容を中心に研究・実践に取り組んだ。

### 1) 地縁型・テーマ型コミュニティを基盤とした獣害対策の推進

#### ・ 獣がい対策を進めるテーマ型コミュニティの創成支援

野生動物による農作物食害および生活被害は「獣害問題」と呼ばれ、全国各地で様々な対策を講じている。本部門では、NPO 法人里地里山問題研究所と連携し、野生動物を「害」と考えず、被害軽減のみならず地域住民の生きがいを創出する対策(=獣がい対策)を全国に発信している。兵庫県丹波篠山市畑地区では、人里に慣れた野生動物と地域住民との棲み分けを目標に、放棄柿を早期収穫し野生動物の集落への出没を防ぐ取り組みが 9 年前から行われている(さる×はた合戦)。この取り組みは都市農村交流や、地域住民の獣害対策に関する情報共有の場としても活用されている。さらに、当該地区では、イノシシやシカの被害防除を目的に設置された集落柵の点検補修作業を地域外の人材で補う可能性を模索するため新たに「さく×はた合戦」を展開している。これは、野生動物の集落への出没を防ぐ集落柵の点検作業に地域外人材が参加して行うもので、2023 年 3 月 12 日に実施した。このようにして獣害対策をめぐる関係人口の創出に寄与する実践研究を行なった。

#### ・ 高校生らによる獣害問題への理解促進と実践者の育成

昨年度に引き続き丹波篠山市にある県立東雲高等学校および鳳鳴高等学校の高校生を交えて「獣がい対策」実践塾を実施し、シカ・イノシシ・サルの対策それぞれについて学び、高校生らが獣害問題に関わる仕組みを考案した。6/19, 7/24, 8/21, 10/16, 11/5, 1/15 の 6 回の研修会を経て、2022/2/5 に開催された第 5 回獣がいフォーラムで成果を発表した。参加者の学年は 1 年～2 年生で、担当の先生方からも好評のプログラムであった。

また、兵庫県立東雲高等学校では、丹波篠山市内の野生動物とその問題に関する授業とワークショップを行った。

・ 邑久光明園獣害対策支援

岡山県瀬戸内市にあるハンセン病療養所「邑久光明園」において、イノシシやシカの出没が増加し、入居者の方々の穏やかで安全な暮らしが阻害されている。そこで、NPO 法人里地里山問題研究所及び ESD プラットフォーム WILL と連携し、ハンセン病療養所の獣害軽減のための対策支援に取り組み始めた。今年度は、長期的な対策計画を立案し施設側の承諾を得た。

2) 自然を生かした子育て・子育て拠点施設の運営支援

兵庫県丹波篠山市の「おとわの森子育てママフィールド～petit prix (以下、プティプリ)」は、旧味間認定こども園おとわ園舎を活用して平成 28 年 7 月に設立された地域子育て支援施設である。当施設の周囲には、子どもたちのために地域住民がボランティアに整備を行ってきた森林がある。こうした自然を生かした子育て拠点としての可能性も期待されている。そこで、自然環境を生かした子育て・子育ての環境づくりのための学びの場として「ツキイチ勉強会」を 4 年前からコーディネートしている。勉強会の目的は 1) プティプリの新規利用者層の開拓、2) 子育て中の親の興味関心を広げること意識した学びの場づくりである。テーマや講師についてはスタッフの意見を聞きながら選定しているが、リピーターとなる参加者がみられるほか、テーマによっては新規の参加もあり、この勉強会を通じた子育て世代を対象とした学びの場が継続できている。

■ 2022 年度ツキイチ勉強会のラインナップ

日	タイトル	講師	参加人数
6/17	プラスチックをめぐる問題	丸谷一耕 (NPO 法人木野環境)	10 名
7/25	障がいを持って生きるとは	多田千景・駿介	8 名
8/7	音羽の森探検	金坂尚人 (六甲道児童館)	11 名
9/9	多様な性について考える	稲原美苗 (神戸大学人間発達環境学研究科)	8 名
10/21	ミュージックセラピー	和泉裕子 (NPO 法人あんだんて KOBE)	7 組
11/27	持ち前を發揮できる職場づくり	西浦享昌 (株式会社エクセディ)	11 名
12/16	色々な国籍の人々と暮らすまち	野村由紀子 (NPO 法人篠山国際理解センター)	3 名
1/30	災害時の困りごとをあらためて考えよう	東末真紀	4 名
2/17	有機農業のすすめ	酒井菊代 (篠山自然派)	7 名
3/15	子どもの身体と健やかな育ち	喜屋武亨 (神戸大学人間発達環境学研究科)	10 名

3) フリースクールにおける ESD 推進手法の検討

神戸市西区の公立フリースクールである神出学園は、平成 29 年 3 月にユネスコスクールとして認

定され、ESD を推進する様々な取り組みを行っている。今年度は、施設内の水の流れとビオトープに生息する水生生物の調査に関する指導助言を行った。学園全体で行った ESD 活動報告会では、このプロジェクトを通じて、想像していたものよりも多くの生き物が学園内に生息していることや、ビオトープを通して園内の水が綺麗に保たれていることに驚き、発見があったとの感想をえた。

#### 4) 市町村の環境政策立案支援

丹波篠山市の農都環境アドバイザーとして丹波篠山市の環境政策の立案を支援したほか、加古川市の環境審議会でも ESD の観点から、環境政策づくりへの助言をおこなった。

#### 5) 市民を対象とした ESD や SDGs の研修会支援

丹波篠山市の岡野小学校 5 年生を対象に、ESD の一環として森林教育を行なった。校歌にも出てくる盃山への山登りを通して、森林に生息する植物や昆虫などの生き物に関する学びを促進した。

(担当 清野未恵子)

### (6)ヘルスプロモーション・健康行動支援部門

#### 1. 地域におけるヘルスプロモーション・健康行動支援活動

##### ① 健康あーち 子育て支援を通じたヘルスプロモーション・健康行動支援事業を行った。

【目的】乳幼児の保護者を対象とし、食生活を中心に健康について話し合いを行い、話し合いの中から課題を見つけたり、悩みの解決方法を考えたりしながら、子どもとその保護者の健康増進を旨とするを目的として事業を展開した。

【場所】神戸市灘区民ホール 3 階 のびやかスペースあーち

Zoom および SNS を活用したリモート事業

神戸大学大学院人間発達環境学研究所実習観察園

【開催日とテーマ】 下記のテーマで全 10 回の健康あーちを開催した。

回	開催日	テーマ
1	5 月 7 日	オリエンテーション ZOOM
2	5 月 13 日	夏野菜の種まき 実習観察園
3	6 月 18 日	Family based cognitive behavioral therapy parent program 1
4	7 月 16 日	Family based cognitive behavioral therapy parent program 2
5	7 月 22 日	夏野菜の収穫 実習観察園
6	8 月 27 日	ジャガイモの植え付け 実習観察園 酷暑のため中止
7	10 月 29 日	野菜について
8	11 月 19 日	食生活支援プログラム 1
9	12 月 23 日	カンキツの収穫体験 実習観察園
10	2 月 18 日	食生活支援プログラム 2
11	3 月 11 日	まとめ ZOOM

プログラムは、企画会議で保護者およびスタッフと話し合い前年度の振り返りを経て作成、実施した。保護者より子どもの気になる発達が話題となり、野上慶子氏によるFCBTペアレントプログラムが実施された。

4回の実習観察園での活動を計画し、夏野菜や柑橘などに親しんだ。しかし酷暑のため当初予定していたジャガイモの種芋の入手も困難となり、健康への影響にも配慮し8月の観察園での実習は中止した。またLINEによる交流もひきつづき活発化しており、実習観察園での取り組み後には、それぞれの感想を述べたり、実習観察園で収穫したものを実際に調理したものについて、写真でアップしたりと情報交換が活発に行われていた。

さらに野菜のおやつ作りの紹介「野菜で作るおやつ ～親子で楽しく作りましょう～」を通して野菜を身近に感じ、親子で調理する意欲を高めることを目的として、保護者対象に講話を行った。トマト、ジャガイモを用いて親子で一緒に作ることができる簡単なおやつ3品を紹介した。

また永野和美氏（大阪公立大学）、黒川通典氏（摂南大学）、黒川浩美氏（大阪青山大学）、黒田久恵氏（甲子園大学）から専門的な支援を得ながら実施した。結果的に、のべ100名の参加があった。なお全11回のうち2回はzoomにより運営企画会議を実施した。

② 健康ビッグデータを活用した県民の健康づくり事業（地域特性に応じた媒体作成、市町向け研修の実施）：レセプト情報・特定健診等の情報データベース（National Data Base: NDB）を活用し、兵庫県民の特定健診データを分析、視覚化するシステム「ひょうご健康づくり支援システム」が開発された。そしてNDBに格納されていた2013年～2019年分の県民の特定健診データを、集計・分析した資料（地域カルテ）が作成、公表されている。このシステムにより、兵庫県に住所地情報を有する医療保険加入者の特定健診の結果を地域別に把握することが可能となった。この分析結果や他の調査結果を活用することで、兵庫県内の地域差・地域特性を検討し、地域の実情に応じた啓発媒体や保健指導者用プログラムを作成し、保険者である市町が国民健康保険被保険者の健康づくりを支援することをめざす取り組みを実施。具体的には以下の4つの事業を行った。

1. NDBを分析し市町の特徴を検討するためのツールを開発し
2. 神戸市、播磨町、南あわじ市とともにそれぞれの地域の健康課題を分析し、見出された課題に対応した健康教育啓発媒体を作成
3. 昨年度の調査から心の健康に関する健康教育の実施が十分ではないことが明らかになったことを踏まえ、心の健康のためのweb教材を作成
4. 特定保健指導の指導者を対象とした研修のための媒体を作成

③ 特定健診・保健指導者向け研修プログラムの開発と実践：兵庫県の特定保健指導の指導者や関係者を対象とし、ヘルスプロモーション・行動変容に関わる理論や実践に関して、動画による研修を行った。（令和4年6月27日～令和5年2月28日：視聴可能期間）

④ 特定保健指導を行っている専門職（保健師、管理栄養士など）を対象に「特定保健指導行動変容支援のための研修」を行った。（加古川市 2月9日）

## 2. 国際的な事業

①心の健康のための国際プログラムの開発をめざした研究活動：心の支援にあたる支援者を対象とした心の健康に関する国際調査を行うために、オーストリアに研究拠点を築き、海外での研究を進めている。渡航が可能となった9月より、オーストリアでの現地調査に向けた調整を開始、12月に調査のための協定を締結、1月より調査を開始。

(担当 加藤佳子)

### (7) 社会保障・ソーシャルアクション支援部門

◇東日本大震災津波跡地・高台移転先におけるまちづくり支援

2012年11月以後、継続的に、学生・院生及び教職員が赤崎地区公民館（2012年5月1日に、本研究科と連携協定と締結）に赴き、支援活動をしてきた。本年は、3月11日に合わせて学生・教員、これまで活動に携わってきたOB・OGらが3年ぶりにまとまって現地を訪問し、慰霊のつどいの運営などの活動を行った。コロナ禍における地域の変化や、今後のまちづくりや復興のあり方について、支援・研究活動等を行った。

◇社会保障裁判等における市民支援

2013年の国による生活保護基準引き下げの違憲性を問う「新生存権裁判・いのちのとりで全国裁判アクション」や、神戸市・西宮市が阪神・淡路大震災被災者に対し、借上復興公営住宅からの転居を求めて訴訟を起こしている問題について、市民・被災者の人権保障に寄与するための支援を行った。借上復興公営住宅問題については、今年度書籍を刊行した。

(担当 井口克郎)

#### 10.1.4. のびやかスペースあーち

##### 1. 沿革

のびやかスペースあーち（以下「あーち」）は、本研究科のヒューマン・コミュニティ創成研究センターの附属サテライト施設である。開設当初より「子育て支援を契機とした共生のまちづくり」の拠点を目指し、様々な取組（プログラム等の提供）をおこなうとともに、実践的研究の場や学生・院生の実践の場（研究フィールド）を提供してきた。

- ・2005（平成17）年9月 神戸市との連携の下、灘区役所旧庁舎（灘消防署2階）において運営開始
- ・2007（平成19）年4月 地域子育て支援拠点事業を神戸市より委託（現在に至る）
- ・2007（平成19）年度 「ユニバーサルまちづくり賞」（兵庫県より）
- ・2009（平成21）年度 「市民福祉奨励賞＜児童福祉＞」（神戸市より）
- ・2010（平成22）年度 「学長表彰」（神戸大学より）
- ・2015（平成27）年度 「ひょうご子育て応援賞」（兵庫県より）
- ・2016（平成28）年10月 神戸市から委託された「子どもの居場所づくり事業」を灘区民ホールにて先行実施
- ・2017（平成29）年4月 灘区民ホール（3階）に移転して運営継続

##### 2. 取り組みの概要

「あーち」の中核事業は、神戸市から委託されている「A. 地域子育て支援拠点事業」と「B. 子どもの居場所づくり事業（学習支援・子ども食堂）」である。なお、「子ども食堂」は「灘区連合婦人会」との協働事業である。

#### A. 地域子育て支援拠点事業

本事業は、地域に暮らす子育て中の親子の交流促進や育児相談等を通して、子育ての孤立感や負担感などの低減・解消を図るなど、地域の子育て家庭を支える国の補助金事業（第2社会福祉事業）である。2007年度の交付開始当初は、全国で約4,400箇所、2021年度現在、全国で7,856箇所となっている。「あーち」では本事業の委託を受け、基本4事業（① 交流の場の提供・交流促進 ② 子育てに関する相談・援助 ③ 地域の子育て関連情報提供 ④ 子育て・子育て支援に関する講習等）を週5日（1日6時間）実施している。

#### B. 子どもの居場所づくり事業

本事業の背景には「子どもの貧困対策の推進に関する法律（2003年成立）」があり、貧困対策のうちの一つとして位置づく国事業である。各地域の実情に応じた多様な取り組みが可能だが、「子ども食堂」「学習支援」が主流である。「あーち」では、それまでの「居場所づくり」実践を発展させて「子どもの居場所づくり事業」を取り込み「よる・あーち」とし、週1回（金曜日17:00～21:00）実施している。地域の未就学児・小学生・中学生・高校生や青年、保護者、市民ボランティア、大学生・院生（他大学含む）が参加する。子ども・青年たちは学習支援を受けたり（講師は市民ボランティア・大学生らが担当）、ボランティア・保護者と夕食を共にしたり（調理は「灘区連合婦人会」の登録会員50名がシフト制で担当）、遊びのプログラムを楽しんだりする。

### 3. 2022年度の取り組みの概要

#### 【新型コロナウイルス感染拡大の影響と対策】

本年度も新型コロナウイルスの感染拡大防止として、以下のような対策を取った。

- ・各制限（利用時間・利用者数・利用方法（予約制）・プログラムの一部休止やプログラム内での制限）を設けて運営を継続
- ・日々、館内の清掃並びにおもちゃ・備品の消毒を徹底 事務作業の整理と効率化
- ・開館時は、常時の換気や午前・午後の室内の清掃・消毒、利用者が使用した備品・おもちゃの洗浄・消毒の徹底
- ・スタッフの健康管理とマスク着用 利用者にもマスク着用（小学生以上）、「健康おたずね表」への記載、手洗いなどを依頼（利用者は協力的でありトラブル等はなし）
- ・「健康あーち（後述）」についてはオンラインでも実施

#### 【2022年度における主な利用・運営状況】

##### <年間利用者数>

コロナ禍により上記の多様な制約があったが、「あーち」の年間利用者数（表1参照）は、昨年度の利用者数に比して若干の回復の兆しがみられ、2月末現在で、6,467人（延べ）である。内訳は子ども2,943人・おとな3,524人であり、年間の利用者数を開館日数の214日で割ると1日平均、約30人（昨年度は21人）の利用となる。

##### <プログラム開催状況>

本年度のプログラム開催状況を集計（2月末現在）すると、教員・一般ボランティアが主催するプログラムの実施回数（延べ数）は159回、大学の正規教育プログラム（GSP等）の実実施回数（延べ数）は37回である。

<学部生・院生による研究利用>

学部生・院生が卒業研究・修士研究の場として「あーち」を活用した実績については、ヒューマン・コミュニティ創成研究センターの教員のゼミ生に限っても、これまで、卒業論文10編・修士論文14編・博士論文3編が提出されている（2006～2019年度）。

<授業・実習の場としての活用>

2012年より園田学園女子大学人間健康学部人間看護学科の4年次生（経験値統合実習）、3年次生（育成連携支援実習）などを継続的に受け入れていたが、本年度は4年次生の実習のみを受け入れた。また「トライやるウィーク」の活動の場として、灘区・東灘区の中学生6名を受け入れた。

<運営に必要な会議等>

- ・「あーち 連絡協議会（隔月に1回）」

本会議は、大学の「のびやかスペースあーち運営委員会」とは別に、日常的に「あーち」のプログラム等にかかわっているメンバーが参加する。本年度は教員・スタッフ、灘区まちづくり課、市民ボランティアなどが参加した。

- ・「あーち通信編集会議（毎月1回）」

プログラム予定表、学生やスタッフによる絵本の紹介、利用者が担当する取材記事・コラム等を掲載する月刊広報誌を編集するための会議である。本年度も毎月1回開催した。この通信は、利用者に配布されるだけでなく、灘区役所、灘区社会福祉協議会、灘区内各児童館、連携先の産婦人科クリニックにも配布・設置している。また、「あーち」のホームページ上で順次掲載されている。なお、2023年3月号が211号となる。

表1 年間および月別利用者数：延べ数（2022年4月～2023年2月）

		ふらっと		こらぼ+ゆーす		Zoom/実習観察園		一日の利用者数		
月	開館日数	子ども	おとな	子ども	おとな	子ども	おとな	子ども	おとな	合計
4	21	209	201	19	74	0	0	228	275	503
5	18	183	182	15	64	6	8	204	254	458
6	22	222	231	21	83	0	0	243	314	557
7	21	197	193	18	74	6	4	221	271	492
8	16	235	228	18	44	0	0	253	272	525
9	21	238	252	12	45	0	0	250	297	547
10	21	287	295	11	58	0	0	298	353	651
11	20	286	287	14	71	0	0	300	358	658
12	18	278	287	36	79	6	4	320	370	690
1	18	287	292	21	67	0	0	308	359	667
2	18	292	303	26	98	0	0	318	401	719
合計	214	2714	2751	211	757	18	16	2943	3524	6467

#### 4. 2022年度の取り組みの詳細（教員・職員が中心に進めている主な活動を中心に）

##### 【ドロップイン・サービス（神戸市委託「地域子育て支援拠点事業」）】

地域子育て支援拠点事業を神戸市との連携によって引き続き実施した。乳幼児とその保護者が安心して多様な人との交流を深めながら、社会的なつながりや活動に関わることができる場である。一昨年度より感染拡大予防として室内清掃、備品・おもちゃの洗浄・消毒を徹底するため、午前2時間・午後2時間の利用を「予約制」とし、それぞれの利用者数を5組（10人）程度に制限を設けた。地域の感染状況の改善を見ながら7月からは午後を「予約無し」とし、利用者数も10組（20人）程度に緩和した。感染に不安を持つ利用者は「午前」の利用、他の利用者と積極的に交流したい利用者は「午後」を中心に利用できるため、この仕組みは利用者に好評であった。

##### 【子育て相談事業（神戸市委託「地域子育て支援拠点事業」）】

上記ドロップインの場に、助産師・保健師・保育士などの資格を持つ相談員を配置し、保護者からの相談に応じた。灘区のまちづくり課から派遣されている地域活動支援コーディネーター（週1回）も子育て相談に応じた。相談内容として多かったものは、子どもの生活に関する相談、発育・発達に関する相談、離乳食・幼児食に関する相談、育児不安に関する相談、地域資源に関する相談であった（※この相談内容に関する分類・集計結果は毎年神戸市に報告している）。

##### 【よる・あーち】

学習支援、子ども食堂、居場所づくりなどを並行して実施する複合プログラムであり、毎週1回、夕方から夜にかけて実施している。多様な年齢や属性の人たちが大勢集まり、相互に学び合う場を形成している。昨年度に引き続き、本年度も時間を短縮および人数制限（子どもの日と青年の日に分ける）等の工夫を実施した。1月以降は感染状況が改善したため、子どもの日と青年の日を合同に戻した。その結果、院生・学部生、そして子どもや青年、保護者、市民ボランティアらは相互交流を深めることができた。

##### <学習支援（神戸市委託「神戸市子どもの居場所づくり事業」）>

神戸市の委託を受け、「よる・あーち」プログラムの一環として実施している。学習面、社会性面等の困難さのある児童・生徒・青年が参加している。支援者は学生を中心に構成され、学習支援を契機とした支援者の学びにも焦点を置いた取り組みを行った。卒業生や地域住民、保護者も支援に加わり、参加型研究のフィールドにもなっている。

##### <子ども食堂（神戸市委託「神戸市子どもの居場所づくり事業」）>

神戸市の委託を受け、灘区連合婦人会と連携して実施している。「よる・あーち」プログラムの一環として位置づく。本年度は感染予防の観点から、この場での会食を見合わせ、弁当を持ち帰ってもらうよう工夫した（但し1月以降、必要のある子ども等は食堂で弁当を食べることができるように配慮した）。

##### <居場所づくり>

「よる・あーち」プログラムの一環として実施している多様な人びとの間の関わりを促進する実践である。障害のある子どもの十分な参加をテーマとして活動を構成し、さまざまな年齢や属性の人たちが遊びや会話を通してエンパワーした。「都市型中間施設」概念に基づくモデル開発実践プログラムとしても位置づけている。



#### 【健康あーち（食育等のプログラム）】

健康に関する子育て中の親子の疑問や悩みに対応しながら、食生活や子育ての方法を考えるセミナーと交流会である。参加者である親たちが主体となり運営できるよう、教員や学生らが支援している。本年度は、対面で8回実施（うち3回は実習観察園での活動）と、Zoomを利用したリモート開催が、計2回実施された。

#### 【灘区役所 家庭支援課や公立保育所等との情報交換】

奇数月に開催される「子育て連絡会」に職員が出席，灘区家庭支援課・まちづくり課，やはた桜保育所（地域子育て支援担当）灘区社会福祉協議会，おやこふらっとひろば灘との情報交換をおこなった。

#### 【地域の医療機関との協働実践】

長年，近隣の産婦人科の医師や助産師が日常的に「あーち」の広報を行うことで，生まれてまもない乳児がいる家庭の利用促進を図っている。また，他市で歯科医院を開業している歯学博士が，「だいいじなお口のはなし」というテーマで「あーち通信」の連載コラムを担当した。

### 5. 2022年度に実施したプログラムの概要

本年度に実施できたプログラムのみを以下に掲載する（※コロナ禍以前に実施していたプログラムに関しては，過年度の年次報告を参照されたい）。また，開催できたプログラムの回数やプログラムにかかわったボランティアの人数を表2に示す。表2には，大学の授業・実習などもプログラムとして掲載しているが，毎日提供されているドロップインおよび諸会議は掲載していない。なお，「よる・あーち」の利用者数（子ども・おとな・保護者），これにかかわった一般ボランティア・学生ボランティアおよびスタッフの人数は表2にも含まれているが，別途，表3にも人数の内訳を示す。

#### 【子どもとその保護者を主な対象にしたプログラム】

- ・ふらっと：地域子育て支援拠点事業（ドロップイン・サービス）週5日
- ・ふらっとで遊ぼう！：職員（保育士）がドロップイン・サービスの利用者に対し，見守り・相談と親子遊び（ショートプログラム）を提供 月2回
- ・ベビーマッサージ：元利用者である母親がリーダーとなって実施 講座と交流プログラム 月2回
- ・おもちゃ病院：地域住民の有志によるグループが壊れたおもちゃなどを修理する 月1回
- ・リフレッシュ YOGA：「あーち」利用者による産後の母親の体調改善をめざすプログラム 月1回
- ・あらかると音楽あそび：手づくり紙芝居や絵本に音をつけて，一緒に音楽遊びを楽しむ 月1回
- ・おはなしの国：ストーリーテラーによる絵本の読み聞かせ 月1回

#### 【発達障害のある子どもの保護者を対象にしたプログラム】

- ・パパママほっと：おもに自閉症の子どもを持つ保護者のための，語らいと情報交換の場 月1回

表2 プログラム数およびボランティア数：延べ数（2022年4月～2023年2月）

2022 月	開館 日数	プログラム数				スタッフ・ボランティア数			学生
		一般 のプ ログ ラム	大学の授 業および 実習等	プログ ラム 総数	プログラ ム数1日 平均	スタッフ	一般	合計	
4	21	10	2	12	0.57	38	11	49	16
5	18	14	2	16	0.89	43	17	60	48
6	22	14	2	16	0.73	45	13	58	37
7	21	17	3	20	0.95	53	13	66	46
8	16	9	2	11	0.69	29	13	42	10
9	21	13	2	15	0.71	40	10	50	13
10	21	11	1	12	0.57	38	13	51	15
11	20	15	1	16	0.80	49	7	56	13
12	18	16	1	17	0.94	55	10	65	15
1	18	12	1	13	0.72	44	5	49	8
2	18	15	0	15	0.83	44	15	59	13
合計	214	146	17	163	0.76	478	127	605	234

表3 「よる・あーち」利用数・ボランティア数：延べ数（2022年4月～2023年2月）

2022 年	利用者							ボランティア				スタッフ		合計 (人)	
	未就 学	小学 生	中学 生	高校 生	保 護 者	お と な	小 計	一 般	学 部 生	院 生/ 研 究 生	小 計	教 職 員	灘 区 婦 人 会		小 計
合計	9	79	29	54	199	365	462	86	171	46	303	168	96	264	1302

## 6. 2022年度の見学・視察数

大学のサテライト施設として、社会的責任や地域貢献を果たし、アクション・リサーチの成果を社会に対してモデル提示したり発信したりする手段として、見学者やメディア取材の受け入れをおこなっている。機関・組織別に以下に整理（個人の見学者に関しては省略）。

### 【「よる・あーち」見学・視察者】

灘区社会福祉協議会・灘ボランティアセンター 8名 木の芽福祉会 2名

こうべ市民福祉交流センター 2名 親和女子高校 4名 夜間中学ネット 1名 他 個人 多数

### 【その他の見学・視察者】

神戸市こども家庭局幼保振興課 2名 神戸市こども家庭局こども青年課 2名

神戸市教育委員会 2名 兵庫県教育委員会社会教育課 1名 灘区保健師 1名  
 原田中学校教員 1名 住吉中学校教員 2名 園田学園女子大学 5名 神戸大学大学院院生 1名  
 灘区保育サービスコーディネーター 1名 NPO 法人エイブルアート JAPAN 1名 他 個人

## 7. 2022年度の連携・協力先

「あーち」の運営にあたって、本年度に連携・協力を得た組織や団体名をその内容とともに以下の表4に整理（個人の協力者に関しては省略）。

表4 連携・協力関係にある組織・団体等とその内容

組織・団体名等	連携・協力の内容
神戸市市民参画推進局	運営協力
神戸市子ども家庭支援部こども青少年課	運営協力
灘区こども家庭支援課	運営協力／情報交換
灘区民ホール	運営協力／情報交換
神戸市灘区まちづくり推進部	地域活動支援コーディネーターの派遣・なだ桜まつり協力
灘消防署	消防訓練（区民ホールでの訓練に参加）
やはた桜保育所（地域子育て支援担当）	情報交換
灘区地域コーディネーター（元幼稚園教諭）	ふらっと相談員
灘区社会福祉協議会	ボランティアコーディネート／情報交換
灘区内児童館（10か所）	情報交換
おやこふらっとひろば灘	情報交換
灘区連合婦人会	「よる・あーち（子ども食堂）」の調理担当
社会福祉法人たんぽぽ	博物館実習
学童保育つむぎ	居場所づくり
カフェ「アゴラ」	居場所づくり
社会福祉法人かがやき神戸	居場所づくり
亀田マタニティ・レディース・クリニック	広報協力／情報交換
おもちゃ病院（地域の有志）	「おもちゃ病院」の実施
神戸大学医学部保健学科地域連携センター	情報交換

（のびやかスペースあーち運営委員会委員長 相澤直樹）

### 10.1.5. サイエンスショップ

#### 1. 概要と運営体制

サイエンスショップは、(a) 地域社会における広義の科学教育や科学コミュニケーションを含む市民の科学に関わる諸活動への支援、および (b) 神戸大学学生の科学に関わる活動等への支援を行うことを目的とする。(a)については、科学者等の専門家と市民の対話と協働を通じて、環境問題など科学に関わる課題への市民の取組や、社会における科学技術の進展とそれに関する政策形成過程な

どへの市民の参画を促す仕組づくりと実践を目指しており、実践研究として行われている。

令和4年度は、研究科専任教員（室長，副室長，ほか室員1名）と、学術研究員2名（非常勤職員），事務補佐員4名（非常勤職員）の体制で運営された（学術研究員および事務補佐員については、次項に記すグローバルサイエンスキャンパス事業に係る業務担当者を含む）。

## 2. 令和4年度の主な取組

### (1) グローバルサイエンスキャンパス ROOT プログラムの運営

サイエンスショップは、神戸大学を実施機関，兵庫県立大学，関西学院大学，甲南大学を共同機関として4大学の連携で実施する，高校生等を対象とした科学技術人材育成プログラムの事務局として事業運営の中核的役割を担っている。この教育プログラムは，国立研究開発法人 科学技術振興機構（JST）の次世代人材育成事業の一環である「グローバルサイエンスキャンパス（GSC）」の企画として同機構の支援を受けて実施されている。平成29年度から令和2年度の間，「根源を問い革新を生む国際的科学技術人材育成挑戦プログラム」（英語名：Research-Oriented On-site Training Program for innovative scientists in the future）としてJSTの支援（第Ⅰ期）を受けた後，令和3-6年度の期間がGSCとして採択となり（第Ⅱ期），「“越える”力を育む国際的科学技術人材育成プログラム」（英語名：Research-Oriented On-site Training Program for young scientists to go beyond the boundaries）を実施している（企画の実施責任者を神戸大学学長，実施主担当者をサイエンスショップ副室長が務めている）。プログラムの略称は，第Ⅰ期，第Ⅱ期を通じて「ROOTプログラム」としている。

第Ⅱ期において，神戸大学では大学教育推進機構等が主体となり，人間発達環境学研究科を含む全学の幅広い部局・組織の参画のもとで企画が進められている。その企画立案，実施等について審議するために，大学教育推進機構に「グローバルサイエンスキャンパス委員会」が設置されている。また，地域の幅広い連携のもとで人材育成を推進するために，兵庫県および周辺府県等の教育委員会や，兵庫県下の先端的研究機関（高輝度光科学研究センター，理化学研究所計算科学研究機構，同生命機能科学研究センター，兵庫県立人と自然の博物館，兵庫県立大学西はりま天文台）や，公益財団法人兵庫工業会などが連携機関として協力し，実施機関である神戸大学，共同機関を含めてGSCひょうご神戸コンソーシアムが形成されている。

このプログラムでは，毎年，科学技術分野で優れた潜在的資質や高い意欲をもつ受講生を募集し，50名程度を選抜して受け入れる。大学教員による講義・実習，先端的研究機関の見学などを含む約半年間の「基礎ステージ」を経て，受講生が研究課題提案を策定し，評価を受けて選抜された20名程度が，約1年間，大学等において研究を行なう「実践ステージ」に取り組む。科学的課題設定力・探究力を培うプログラムと並行して，科学英語，海外研修など国際性を高めるプログラムも展開される。

令和4年度は，新型コロナウイルス感染症の影響が収束に向かう中で，前年度のオンライン形式から対面を中心とする活動に移行したが，遠隔地の受講生等に配慮してオンラインも併用するハイブリッド形式でプログラムを実施した。令和3年度に基礎ステージ生から選抜された第5期実践ステージ生20名が研究に取り組んだほか，第Ⅰ期最終年度（令和2年度）に選抜された第4期実践ステージ生2名が，引き続き研究活動を進めた。

また、5月から6月にかけて第5期基礎ステージ生の募集を行い、114名の応募者（所属学校所在地：兵庫県、大阪府、京都府、奈良県、和歌山県、徳島県、岡山県、愛媛県、東京都、神奈川県、山形県、長崎県）から59名を選抜、それらの受講生が基礎ステージを受講した。令和5年1月には、その中から実践ステージ受講生候補者22名が選抜され、令和5年度の研究活動に向け、大学教員の指導・助言のもとで研究計画の具体化などを進めている。

令和4年度には、第4期実践ステージ生がリジェネロン国際科学技術フェア（Regeneron ISEF（International Science and Engineering Fair）2022、令和4年5月開催）に日本代表の一人として出場（オンライン）し、物理学・天文学部門優秀賞4等を受賞した（また、この成果により文部科学大臣表彰を受けた）。この他、第5期実践ステージ生がJSEC2022（第20回 高校生・高専生科学技術チャレンジ）において優秀賞受賞、第70回日本生態学会高校生ポスター部門において最優秀賞受賞など、受講生が様々な科学コンテスト等で優秀な成績を収め、優れた科学技術人材の発掘・育成の形ある成果が見られる。

なお、神戸大学ではROOTプログラムの実績・成果も踏まえて、令和4年10月に「高大接続卓越グローバル人材育成センター」が設置され、同プログラムを含む高校生を対象とした取組、入学者の特別選抜、入学後の教育を一貫して体系的に企画・推進する体制が整備された。

## (2) 地域社会における市民の科学活動および科学コミュニケーション支援

市民による科学コミュニケーション活動への支援として、伊丹市を中心にサイエンスカフェの開催に取り組む市民グループ「サイエンスカフェ伊丹」によるサイエンスカフェ開催に協力した（年度内に11回：サイエンスカフェ開催支援のリストについては年次報告書資料編に掲載する）。

また、千種川流域圏で活動するグループ「千種川圏域清流づくり委員会」による河川環境モニタリング「千種川一斉水温調査」（8月）に、教員1名と学生4名が参加・協力を行った。

この他、淡路島でコミュニティづくりに取り組むNPO法人ソーシャルデザインセンター淡路や、兵庫県西部の佐用川でオオサンショウウオの保全・調査活動に取り組む「佐用川のオオサンショウウオを守る会」の活動に、参加・協力を行った。

これらは、令和4年度神戸大学地域連携事業（課題名：持続可能な社会づくりをめざすプラットフォームづくり活動への支援事業）、事業主体：発達支援インスティテュート）の一環として学内の支援も受けて取組を進めた。

この他、平成19年度以降実施している、市民が科学者とともにIPCC（Intergovernmental Panel on Climate Change：気候変動に関する政府間パネル）の報告書を読み解く会「市民のための、IPCCレポートを根掘り葉掘り読む会」を16回開催した（第2期、第129-130回および第3期、第1-14回）。

## (3) 科学教育への支援

グローバルサイエンスキャンパスROOTプログラムについては、項目(1)に記したが、それ以外の取組について以下に記載する。

令和4年11月に、兵庫県生物学会と共同で「高校生私の科学研究発表会2022」を神戸大学百年記念館六甲ホールにおいて開催した（オンラインの発表・参加も受け入れた）。兵庫県、大阪府、徳島

県の高等学校 15 校から生徒 111 名，教員 26 名，本学関係者 12 名を含む 160 名の参加者があり，活発な発表，交流が行われた。口頭発表とポスター発表を併せて 44 件の発表があり，優れた研究に対して，サイエンスショップより優秀賞を授与した。

また，サイエンスショップが窓口となり，神戸大学共催として，兵庫「咲いテク」事業推進委員会主催の高校生の科学研究発表・交流会 “5-th Science Conference in Hyogo”（英語による発表，令和 4 年 7 月，神戸大学百年記念館六甲ホール）および「第 15 回サイエンスフェア in 兵庫」（日本語による発表，令和 5 年 1 月，神戸大学統合研究拠点および兵庫県立大学，甲南大学のキャンパス，理化学研究所計算科学研究センター）が開催された。

この他，サイエンスショップに関わる教員は，様々な形で高等学校の科学教育活動への支援も行っている。

（新型コロナウイルス感染症の影響により，鶴甲小学校 PTA の要請を受けて平成 19 年度以降開催してきた「理科実験教室」，およびサイエンスショップ研究員による市民を対象とした「つるかぶと科学教室」の開催は見合わせた。）

#### (4) 学部・大学院教育

本年度も，国際人間科学部のグローバルスタディーズプログラム（GSP）の国内フィールドとして学生を受け入れた（前期 3 名，後期 2 名）。学生は，フィールドワークとして，千種川流域圏の市民による環境調査「千種川一斉水温調査」への参加・協力，市民グループが開催するサイエンスカフェ等の科学コミュニケーションイベント，高校生の科学研究発表会等，サイエンスショップに関わる諸活動に参加した。

また，大学院人間発達環境学研究科の授業「サイエンスコミュニケーション演習」の活動として，大学院生の企画・運営により，SDGs ワークショップ「住み続けられるまちデータでみる都道府県の特徴と課題」を開催した（令和 4 年 7 月）。

このように，サイエンスショップは，大学・大学院におけるアクティブ・ラーニング／サービス・ラーニングの場やそれを促す仕組みとしても機能している。

表 神戸大学サイエンスショップ 令和 4 年度の主な取組

市民科学活動・科学コミュニケーション支援
<ul style="list-style-type: none"> <li>・サイエンスカフェ開催支援（11 件）</li> <li>・市民と研究者が協力して気候変動に関する IPCC レポートを精読する会「市民のための，IPCC レポートを根掘り葉掘り読む会」の定期開催（16 回） 他</li> </ul>
地域の科学教育支援
<ul style="list-style-type: none"> <li>・グローバルサイエンスキャンパス ROOT プログラムの運営</li> <li>・兵庫「咲いテク」事業推進委員会主催 “Science Conference in Hyogo” および「サイエンスフェア in 兵庫」開催協力 他</li> </ul>
大学教育・学生の活動
<ul style="list-style-type: none"> <li>・国際人間科学部グローバルスタディーズプログラム国内フィールド 『『市民の科学』プログラム：サイエンスショップ』提供</li> </ul>

<p>・大学院人間発達環境学研究科「サイエンスコミュニケーション演習」へのフィールド提供 他</p>
<p>研究会等の主催</p>
<p>・「高校生・私の科学研究発表会 2022／兵庫県生物学会 2022 研究発表会」開催（主催：神戸大学サイエンスショップ，兵庫県生物学会）</p>

(サイエンスショップ室長 源利文，副室長 伊藤真之)

#### 10.1.6. 教育連携推進室

教育連携推進室では、教育連携部門，研究開発部門，拠点形成部門において、それぞれ以下の活動を行った。

##### 1. 教育連携部門

教育連携部門については、各所と協力し、研修の提供や学術指導による連携を実施した。また、研修開発にかかわる共同研究を実施した。以下対象ごとに報告する。

###### (1) 神戸市教育委員会

神戸市立の幼稚園・保育所・小学校及び私立の幼稚園・保育園・こども園等の教員・保育士を対象に、幼小接続期教育をテーマとして「つばめセミナー」（研修講座）を開催した。開催形態は、ハイブリッド（集合型、オンライン型の複合型研修）で実施した。

###### つばめセミナー①

日時：6月6日

講師：神戸大学大学院人間発達環境学研究科 北野幸子

テーマ：要領・指針の改定を踏まえた園での子どもの育ちや学びの姿をベースとした小学校教育のために」

###### つばめセミナー②

日時：9月5日

講師：神戸大学大学院人間発達環境学研究科 岡部恭幸

神戸大学附属幼稚園 浅原麻美

テーマ：「幼小接続期における数・量・形の認識の発達と教育」

###### つばめセミナー③

日時：10月14日

講師：神戸大学大学院人間発達環境学研究科 山根隆宏

テーマ：「幼児期から児童期にかけての特別な支援ニーズのある子どもへの感情調整支援の基礎」

###### つばめセミナー④

日時：12月15日

講師：神戸大学大学院人間発達環境学研究科 目黒強

テーマ：「絵本の選書と読み聞かせ」

#### つばめセミナー⑤

日時：1月23日

講師：神戸大学大学院人間発達環境学研究科 渡邊隆信

神戸大学附属幼稚園 田中孝尚 副園長

テーマ：接続期における道德性の育ちを考える

#### (2) 舞鶴市

学術指導契約をむすび、「乳幼児教育の質の向上と保育者研修・育成」について、研修の実施と、同市の研修や実践研究への助言指導、園の実践、中学校家庭科教育津男への助言指導を行った。また、同市の乳幼児教育センターの運営について共同参画した。

#### (3) 川西市

学術指導契約をむすび「今求められる乳幼児教育について」の学術指導を行った。また川西市教育委員会主催夏季職員研修について、企画実施を連携して行った。

#### (4) 全国福祉サービス第三者評価調査者連絡会

学術指導契約をむすび、厚生労働省、子ども子育て支援推進調査研究事業にかかわる学術指導を行った。また、同調査にかかわる研究報告書の執筆を行った。さらには、同事業研修として配信される、報告書の内容についての研修映像を作成した。

#### (5) 岡山県立大学

学術指導契約をむすび、保育に関する専門知識と技能の活用について実践的に学び、保育者としての力量を形成・向上するための方法についての助言指導を行った。また、同大学記念シンポジウムにおいて在校生・卒業生・地域の行政担当者・地域の保育専門職を対象の研修会において「現場発、地域主体の連携共同～保育の質の維持・向上をめざして～」について話題提供を行った。

#### (6) 白藤学園

学術指導契約をむすび、同法人の乳幼児教育推進体制の強化にかかわる助言指導を行った。遠隔による会議や、提供資料の分析等を行った。

#### (7) ベルサンテスタッフ

学術指導契約をむすび、兵庫県教育委員会において兵庫県下の中・高生の職場体験等にあたり配布する、乳幼児教育の仕事とかかわる資料の監修を行った。同資料は、教育人材不足が指摘されている今日、その改善を図るために、兵庫県教育委員会に加えて、兵庫県こども政策課、兵庫県私立幼稚園協会、兵庫県保育協会と教育連携推進室が連携し、案を作成したものである。

#### (8) ベネッセ教育総合研究所

学術指導契約をむすび、同研究所が日本全国のすべての保育施設に無料配布している機関冊子「こ



れからの幼児教育」についての監修を行った。

## 2. 研究開発部門

研究開発部門については、高度教員養成プログラムを実施するとともに、7回のセミナーと神戸大学附属学校園や地域の学校及び教育施設等をフィールドとした教育実践のアクション・リサーチを含む理論的・実践的研究の推進に寄与した。本年度の認定証発行は5名であった。その他、研究開発を以下の各所と行った。

### (1) 神戸市こども家庭局

2018年から継続している神戸市こども家庭局との共同研究の契約を継続し、本年度は「乳幼児教育実践の質の維持・向上にかかわる保育者の専門性に関する研究～乳幼児の主体性の尊重を再考する～」をテーマとして、実施した。神戸市内の9区の、各5園から5名、計45名のプロジェクト会議メンバー及び神戸市こども家庭局と神戸市教育委員会のメンバーとともに、プロジェクト会議を年二回(5月18日、1月19日)、本学大会議室にて開催した。また神戸市全体会を3月7日に神戸市中央区役所において開催した(なお全体会の様子は、雑誌『遊育』2023年3月号参照)。参加者は140名を超えた。(なお、参加希望者が多数であったため、各園1名以内と制限した)。本年度の連携研究の成果が報告され、パネルディスカッション「子どもの幸せを希って ～今、大切にしたいこと～」が開催された。なお、同共同研究による公開保育の実施園数は34、のべ参加人数は746名(公立保育園361名、私立保育園・こども園303人、幼稚園26人、その他(含む本学院生・学部生)56人)であり、大きな規模で、市内の教育連携が図られた。

### (2) チャイルドネット・リサーチ・アジア

チャイルド・リサーチ・ネット・アジアの子ども学研究ネットワークの8か国による国際比較共同研究「アジア諸国にみる「ハッピー&レジリエントな子どもをどう育むか」日本のカントリーレポート」に参加した。

### (3) その他科研等

財務的には、現在多くの科研等の採択を獲得してきているが、今後もさらに継続して大型競争的資金の獲得に向けた申請及び申請の準備をする予定である。

#### 1) 国際共同研究

①研究代表：山口悦司

共同研究者(海外)：Clark Chinn (Rutgers University), Eowyn Winchester (Rutgers University)

共同研究者：望月俊男(専修大学), 大浦弘樹(東京理科大学)

研究課題：高度情報化社会に求められる科学関連情報評価能力の育成手法と実践モデルの開発(課題番号20K20829)

研究資金：2020～2022年度・挑戦的研究(萌芽)

研究概要：高度情報化社会に求められる科学関連情報評価能力の育成手法と実践モデルに関する基礎研究を行っている。

②本専攻研究者：北野幸子(共同研究者)

研究代表者：榊原洋一 (CRN所長、お茶の水女子大学名誉教授)

共同研究者(海外) ; Prof. Aminah binti Ayob (Sultan Idris Education University, Malaysia), Dr. Christine Chen (Association for Early Childhood Educators, Singapore), Prof. Sasilak Khayankij (Chulalongkorn University, Thailand), Dr. Poh Tin Tan (Tan Specialist Child and Family Clinic, Malaysia), Dean Dr. Sofia Hartati (State University of Jakarta, Indonesia), Fasli Jalal (Professor, State University of Jakarta, Indonesia) , Dr. Thelma Rabago Mingoa (De La Salle University, Philippine) , Dr. Lee-Fong Wong (National Taipei University of Education, Taiwan) , Dr. Felix Hung (National Taipei University of Education, Taiwan) Mazlina Che Mustafa (Sultan Idris Education University, Malaysia), Dr. Sirithida Chinsangthip (Chulalongkorn University, Thailand) , Dr. Anita Chu (National Taipei University of Education, Taiwan) , Sri Indah Pujiastuti (State University of Jakarta, Indonesia), Dr. Jiaxiong Zhu (East China Normal University, China) , Dr. Nianli Zhou (East China Normal University, China)

共同研究者(国内)：星三和子(十文字女子大学)、佐藤朝美(愛知淑徳大学)、深見俊崇(島根大学)

研究課題:Exploring Factors Nourishing Happy and Resilient Children among Asian Countries

研究資金：Child Research Net Asia、ベネッセ教育研究所研究資金

研究概要：本研究では、コロナ禍での子どものウェルビーイングについて2021年に8か国の5歳児、7歳児の子どもの対象に調査した。その結果の比較分析を続けている。本年度は、8か国共通で、コロナ禍という困難な状況の中で、子どものウェルビーイングに「レジリエンス」の育成が重要であることが明らかになった。日本を含む複数の国で、レジリエンスの向上に「母親の養育態度」や「園(保育者)のサポート」などが関連していることも明らかになった。

## 2) 国内共同研究等

①本専攻研究者：山口悦司、坂本美紀、増本康平、木村哲也、佐藤幸治

研究代表者：山口悦司

研究課題：高度情報化社会に求められる科学関連情報評価能力の育成手法と実践モデルの開発(課題番号20K20829)

研究資金：2020～2022年度・挑戦的研究(萌芽)

研究概要：高度情報化社会に求められる科学関連情報評価能力の育成手法と実践モデルに関する基礎研究を行っている。

②本専攻研究者：坂本美紀、山口悦司

研究代表者：坂本美紀

研究課題：市民の科学への参加・支援を加速化するオープンサイエンス・リテラシー教育モデル開発(課題番号：18K18646)

研究資金：平成30～2022年度 挑戦的研究(萌芽)

研究概要：市民の科学への参加・支援を加速化するオープンサイエンス・リテラシー教育モデルを開発している。

③本専攻研究者：山口悦司

研究代表者：武田義明(神戸大学)

研究課題：生物多様性の実感的学習を可能とするSDGsを志向した里山環境保全教育プログラム（課題番号：19H01734）

研究資金：2019～2022年度 基盤研究（B）（一般）

研究概要：生物多様性の実感的学習を可能とするSDGsを志向した里山環境保全教育プログラムを開発している。

④本専攻研究者：坂本美紀，山口悦司

研究代表者：坂本美紀

研究課題：市民の科学への参加・支援を加速化するオープンサイエンス・リテラシーの教師教育（課題番号：20H01744）

研究資金：2020～2022年度 基盤研究（B）（一般）

研究概要：市民の科学への参加・支援を加速化するオープンサイエンス・リテラシーの教師教育プログラムを開発している。

⑤本専攻研究者：山口悦司

研究代表者：望月俊男（専修大学）

研究課題：一見矛盾する事実から真実を導き出す能力を育む協調学習環境の開発と実践的評価（課題番号：20H01729）

研究資金：2020～2022年度・基盤研究（B）（一般）

研究概要：一見矛盾する事実から真実を導き出す能力を育む協調学習環境の開発と実践的評価に取り組んでいる。

⑥本専攻研究者：山口悦司

研究代表者：稲垣成哲（立教大学）

研究課題：科学系博物館におけるユニバーサルデザイン手法の開発と実践モデルの提案（課題番号：18H03660）

研究資金：2018～2022年度 基盤研究（A）（一般）

研究概要：科学系博物館におけるユニバーサルデザイン手法の開発と実践モデルの提案に取り組んでいる。

⑦本専攻研究者：坂本美紀，山口悦司

研究代表者：坂本美紀

研究課題：意思決定エージェントとしての市民を育成する変革的リスクリテラシーの指導法と評価法（課題番号：22K18625）

研究資金：2022～2024年度 挑戦的研究（萌芽）

研究概要：意思決定エージェントとしての市民を育成する変革的リスクリテラシーの指導法と評価法の開発に取り組んでいる。

⑧本専攻研究者：渡邊隆信

研究代表者：宮本健市郎（関西学院大学）

研究課題：新教育運動期における自然保護運動の昂揚と環境教育の起源に関する比較史的 研究

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究（C）

研究概要：本研究の目的は、新教育を主張した人物の思想、または新教育を実施した学校 において、

自然保護のための教育がどのような形で構想され、実施されたのかを確認し、それが人間中心（子ども中心）の教育を超える視点があったかどうかを考察する。

⑨本専攻研究者：北野幸子

研究代表者：三村真弓（広島大学）

研究課題：音楽科固有の資質・能力の基礎となる音楽的感覚及び音楽能力育成カリキュラムと指導法

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要：音楽的感覚及び音楽能力育成カリキュラムと指導法について開発した。

⑩本専攻研究者：北野幸子

研究代表者：寺見陽子（神戸松蔭女子学院大学）

研究課題：家庭養育と乳児保育の質の向上を促す家庭と乳児保育の連携プログラムの開発

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要：0-3歳児を中心とした家庭と園の連携に関するプログラムの国内外の実態調査を行った。

⑪本専攻研究者：北野幸子

研究代表者：藤掛絢子（ノートルダム清心女子大学）

研究課題：実習との往還を図った音楽表現領域における保育者養成教育プログラムと評価の開発

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要：保育領域「表現」の特に音楽表現に関して、学内の講義・演習と園での実習との往還的養成教育のプログラム開発とその評価方法の開発を行った。

⑫本専攻研究者：北野幸子

研究代表者：北野幸子

研究課題：兵庫県における未就園児の育ちと学びを支える子ども子育て支援の実態に関する比較調査

研究資金：文部科学省 令和4年度幼児教育の教育課題に対応した指導方法等充実調査研究 再委託研究（委託先、リベルタス・コンサルティング）

研究概要：兵庫県の幼稚園、保育所、こども園、地域子育て支援拠点を対象に行われている子育て支援についてその実態と内容の現状と課題について比較調査を実施した。

⑬本専攻研究者：北野幸子

研究代表者：渡邊恵子（国立教育政策研究所）

研究課題：幼児期からの育ち・学びとのプロセスの質に関する研究

研究資金：国立教育政策研究所 プロジェクト研究

研究概要：海外における幼児教育の質に関する研究動向を検討した。保育実践の質評評価スケールを作成した。また、スケールを活用した園内研修の検討と提案をおこなった。

⑭本専攻研究者：北野幸子

研究代表者：一般社団法人全国福祉サービス第三者評価調査者連絡会

研究課題：保育所等における第三者評価、自己評価の実施及び活用に関する調査研究

研究資金：厚生労働省 令和4年度子ども・子育て支援推進調査研究事業

研究概要：保育の質に関わる保育所等における第三者評価と自己評価等の国際比較を行い、日本のこれからの第三者評価と自己評価の在り方について考察した。

⑮本専攻研究者：北野幸子

研究代表者：岩橋道世（保育科学研究会）

研究課題：コロナ禍における3歳未満児保育に関する研究～実態調査から見えるもの

研究資金：厚生労働省 2020年度日本保育協会保育科学研究所「指定研究」

研究概要：コロナ禍における3歳未満児保育の実態について全国調査を行い、その特徴を明らかにした。

⑩本専攻研究者：北野幸子

研究代表者：北野幸子

研究課題：保育のICT環境に関する実態調査と保育者支援システム創りに関する研究

研究資金：令和4年度大学発アーバンイノベーション神戸研究助成

研究概要：神戸市内の全ての園種公私を含むすべての保育施設におけるICT環境の実態調査を行った。また各区拠点園へのポータブル・Wi-Fiと端末を貸出、地域の保育者の連携協働システムを開発した。保育者支援について資料提供、研修開発等を行った。

⑪本専攻研究者：北野幸子

研究代表者：北野幸子

研究課題：乳幼児教育実践の質の維持・向上にかかわる保育者の専門性に関する研究

研究資金：神戸市こども家庭局事業費

研究概要：神戸市事業として乳幼児保育研究部会を立ち上げ、遠隔公開保育の方法の開発、実践事例の可視化と発信方法の開発等、保育の質の維持・向上にかかわる保育者の専門性についての検討をおこなっている。

⑫本専攻研究者：北野幸子、岡部恭幸、渡邊隆信

研究代表者：北野幸子

位置測位システムを活用したリスク・マネジメントに関する実践的研究～園における保健関連データの収集と解析～

研究資金：神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究推進支援経費

研究概要：位置測位システムを活用し、園のリスク・マネジメントに寄与する保健関連データの収集と解析を試みた。

⑬研究代表者（本専攻教員）：北野幸子

研究課題：誕生からの育ちと学びの連続性を踏まえた幼児教育の質の向上を目指す保育実践研究

研究資金：令和4年度福井県私立幼稚園・認定こども園協会共同研究 寄付金

研究概要：誕生からの育ちと学びの連続性を踏まえた教育実践例の検討、環境構成の工夫、援助の質向上を図る工夫等について実態を明らかにした。

### 3. 拠点形成部門

拠点形成部門については、国内外の拠点形成を目指して、調査活動に従事する予定であったが、予定されていた渡航や、協議はコロナ感染症拡大の影響により、規模を縮小して実施せざるを得なかった。本年度実施した事業は、以下のとおりである。

- (1) シンガポール保育者協会（The Association for Early Childhood Educators (Singapore)）

3月22日に、教育連携推進室と本学乳幼児教育学研究室主催で「シンガポールと日本の幼児教育の対話」についてのセミナーを実施した。シンガポール保育者協会の会長と、同行したシンガポール教育省幼児教育担当者、マレーシア教育省幼児教育担当者、シンガポールの幼稚園長等、計20名が参加した。セミナーののち、同協会会長と、シンガポール行政担当者、マレーシア行政担当者と意見交換を行った。

#### (2) 環太平洋乳幼児教育学会日本支部2023年研究科

3月25日に、教育連携推進室と本学乳幼児教育学研究室、神戸大学附属幼稚園、環太平洋乳幼児教育学会日本支部の共催で、研究会を開催した。テーマは、「幼児教育と小学校教育の架け橋期の教育を考える」であった。文部科学省の横山真貴子専門官、文部科学省の「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会」の無藤隆委員長（白梅学園名誉教授）、中山昌樹同委員会委員（あかみ幼稚園長）、さらには、松寄洋子教授（明治学院大学）等を迎え、記念講演、基調講演、シンポジウムを本学附属幼稚園にて開催した。なお、参加者は先着100名としたが、本学関係者等を含め約120名の参加で開催した。

#### 4. その他

なお、その他、本年度連携推進室の主催・共催により企画・運営したシンポジウム等は以下のとおりである。

(1) 神戸大学大学院人間発達環境学研究科教育連携推進室、乳幼児教育学研究室、大阪府私立幼稚園連盟教育研究所第26次プロジェクト共催、乳幼児教育セミナー3

日時：3月21日

テーマ：社会情動（非認知）的力の育ちと保育者の専門性を考える

(2) 神戸大学大学院人間発達環境学研究科教育連携推進室・乳幼児教育学研究室主催、乳幼児教育セミナー6

日時：3月26日

テーマ：保育者の専門性と保育領域の専門職化に関する研究会

講話：保育者の身体的・状況的専門性について：古賀松香教授（京都教育大学）

指定討論：無藤隆名誉教授（白梅学園大学）

（教育連携推進室長 北野幸子）

#### 10.1.7. アクティブエイジング研究センター

##### 1. 運営体制

運営委員

教員：片桐恵子，増本康平，原田和弘，近藤徳彦，長ヶ原誠，平山洋介，井上真理，田畑智博，近江戸伸子，木村哲也，岡崎香奈，石原暢、木伏紅緒

## 2. 研究プロジェクトの推進

### (1) プロジェクト内容：メンバーと内容

令和4年度は以下の12件の研究プロジェクトが実施された。

#### 「鶴甲いきいきまちづくり-アクティブエイジングを目指して」

メンバー：原田和弘，増本康平，岡田修一，近藤徳彦，長ヶ原誠，片桐恵子，学外研究者

期間：2010年度～2025年度

内容：オールドニュータウンである鶴甲地区を対象に，多世代が心身ともに健やかで将来の希望に満ちた，安全に暮らせるまちづくりを支援するものである。アカデミック・サロン（大学内で行うイベント）を鶴甲地区の住民の学びと活動の場の基礎とし，大学をコミュニティの中心に位置付け，このサロンを通して，住民同士のネットワークを形成するとともに，サロンの継続に必要なファシリテーターを養成し，住民が企画・運営するコミュニティ活動を支援する。

#### 「サードエイジのサクセスフル・エイジング・モデル構築プロジェクト」

メンバー：片桐恵子，学外研究者2名

期間：2015年度～2023年度

内容：これまでの高齢者とは異なる新しいシニア層である，団塊世代以降の人のライフスタイルや志向を把握し，サードエイジ期（定年後から元気な時期）のサクセスフル・エイジング・モデルを構築する。

#### 「生涯学習・多世代交流プロジェクト」

メンバー：片桐恵子，学外研究者2名，海外研究者1名，大学院生1名

期間：2018年度～2023年度

内容：生涯学習を行うシニアの現状を明らかにし，学習を促進疎外する要因とそのもたらす効果をライフコース的な視点から明らかにする。さらに生涯学習を異世代交流の機会をとらえて，その効果も検討する。アイルランドとの国際比較研究を実施しながら検索する。

#### 「高齢者の身体システム機能維持・向上への学際的プロジェクト」

メンバー：木村哲也，佐藤幸治，学外研究者

期間：2015年度～2022年度

内容：高齢者の身体システム機能の維持・向上に対して，基礎研究及びその成果に基づいた社会実装を，応用生理学，運動生理・生化学，バイオメカニクス，生体工学の各観点を統合して学際的に実施する。現在取り組み中の具体的課題は，立位バランス神経制御則の解明や高齢者の筋機能の向上である。

#### 「関西ワールドマスターズゲームズ2027レガシー創造支援研究」

メンバー：長ヶ原誠，岡田修一，近藤徳彦，片桐恵子，増本康平，学外研究者3名

期間：2015年度～2027年度

内容：2022 年に関西広域で開催が決定した生涯スポーツの国際大会がもたらすレガシー（遺産）創造に向けた振興事業アクションリサーチの展開と効果検証のモニタリング評価を実施し、成人・中高年者を対象とした参加型のスポーツメガイイベント開催が個人と地域の活性化に及ぼす影響過程を検証する。

「活動的な生活習慣と健康増進プロジェクト」

メンバー：原田和弘，近藤徳彦，学内・学外研究員

期間：2017 年度～2025 年度

内容：高齢者において、活動的な生活習慣が形成・維持されるプロセスには、どのような要因が関わっているのかを学際的な観点から明らかにする。また、その知見に基づき、活動的な生活習慣の効果的な支援方法を開発する。

「アクティブライフ評価と健康寿命の延伸・認知症予防対策」

メンバー：近藤徳彦，増本康平，木村哲也，佐藤幸治，原田和弘，学内研究員

期間：2017 年度～2022 年度

内容：中年期までの活動的な生活習慣（＝アクティブライフ）が、健康寿命の延伸や認知症発症を防ぐ効果があるかどうか注目が集まっている。本研究では幅広い年代のアクティブライフを、経年的に、かつ、正確に測定し、アクティブライフと健康・認知症に関するデータの構築を目指す。これにより健康寿命の延伸や認知症予防に効果的な生活習慣対策を検討する。

「エンド・オブ・ライフにおける感情調整の機序と役割」

メンバー：増本康平，佐藤幸治，原田和弘，学外研究者

期間：2019 年度～2022 年度

内容：身体，認知機能が低下し自立した生活が困難となっても，社会的つながりを維持し，幸せな生活をおくるために重要な機能として，近年，感情調整が注目されている。本研究では，感情調整機能の加齢による変化について遺伝的，心理的，文化的側面から検討する。

「高齢者の自律支援に最適化された情報提示方法の確立」

メンバー：増本康平(代表者)，原田和弘，学外研究者 1 名

期間：2019 年度～2022 年度

内容：高齢者の意思決定支援を実現するコア技術として，IoT，ビッグデータ，AI が期待されている。これらは選択のための合理的，客観的なデータを提示する上で重要であるが，そのようなデータ情報の提示のあり方についての議論はほとんどなされていない。高齢者の自由意志を阻害しない，かつ，高齢者が後悔しない判断を支援するための，高齢者の意思決定時の認知バイアスを考慮した情報提示のあり方を確立するのが本研究の目的である。

「高齢者のソーシャルサポート授受と ICT：コロナ禍での活用と有効性の東アジア比較」

メンバー：片桐恵子，竹内真澄，学外研究者 1 名



期間：2021 年度～2025 年度

内容：コロナ禍での活動や人との交流の制限は高齢者の心身に大きなストレスを与えている。しかしコロナ禍において従来のようなソーシャル・サポートを得ることは難しい。ICT を活用したソーシャル・サポートが代替として想定されるが、その現状や有効性は明らかではない。デジタル化が進み、日本に似た家族規範を持つ韓国と香港において、高齢者の ICT の利用と効果について精査し、日本での ICT 活用にも有効な施策について提言する。

「習慣的運動が子どもの社会性に与える影響：実行機能とオキシトシンの役割に着目して」

メンバー：石原 暢（代表者）

期間：2021 年度～2024 年度

内容：過去 20 年に渡る電子メディアの急速な普及は、子どもの運動不足を引き起こすだけでなく、対面での交流機会を減少させ、社会性の発達に悪影響を及ぼしていることが危惧されている。加えて、日本の子どもの社会性は世界的に見て低い水準であることが報告されており、子どもの社会性の発達支援に資する研究は、日本が率先して行うべき課題である。習慣的運動は社会性とポジティブに関わることが示唆されているものの、その因果の方向と生理学的メカニズムは不明である。そこで本研究は、縦断的研究デザインを用い、習慣的運動が子どもの社会性に与える影響を、実行機能と唾液オキシトシンの役割に着目して明らかにする。

「幼少期の運動習慣が中高齢期の認知機能を維持・増進させる神経機構とその個人差の解明」

メンバー：石原 暢（代表者）

期間：2021 年度～2023 年度

内容：幼少期の習慣的運動は認知機能の発達を促し、その効果は中高齢期にまで継続されることが示唆されている。しかし、その基盤となる神経機構と個人差は検討されておらず、どのような場合に幼少期の習慣的運動が中高齢期の認知機能の維持・増進に貢献するのかは未解明である。本研究では、子どもを対象とした 2 年間の前向き縦断研究と中高齢者を対象とした後ろ向き横断研究により、幼少期の習慣的運動が中高齢期の認知機能を維持・増進させる背景にある脳の構造・機能的変化およびその個人差を明らかにする。

### 3. 地域貢献活動によるアクションリサーチ

【2022 年度春 健康体操教室】：延べ 124 名

【2022 年度春 園芸教室】：延べ 78 名

【2022 年度春 いきいきウォーキング】：延べ 140 名

【2022 年度秋 健康体操教室】：延べ 97 名

【2022 年度秋 園芸教室】：延べ 108 名

【2022 年度秋 いきいきウォーキング】：延べ 146 名

以上の地域貢献活動によるプロジェクトを通じたアクションリサーチの結果は、国際学術雑誌に採択

されており，現在も投稿中である。住民のネットワークの拡充や well-being の向上に役立っていることを科学的エビデンスに基づき示したものとして評価されている。

(センター長 長ヶ原誠)

## 10.2. 実習観察園の運営利用状況

### ○実習観察園施設および概略図

実習観察園の概略は図1の通りで，前年と変わりはない。灰色で示した部分は，自然環境論コースの教員が研究のために設置したビニルハウスである。

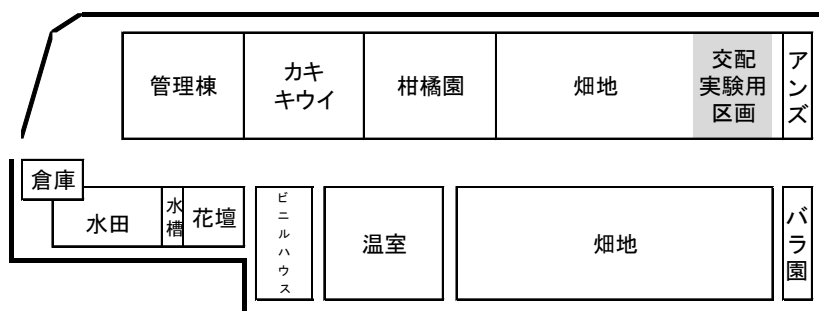


図1 施設・作付概要

### ○作付面積および作付植物

作付面積および作付作物はそれぞれ表1および表2に示した通りである。

表1 作付面積 (m<sup>2</sup>)

種別	面積	備考
畑地	352	教材・実習用
果樹園	255	教材・実習用
水田	70	実習・研究用
バラ園	35	園内美化・実習用
花壇	25	園内美化・実習用
計	735	全体

表2 作付植物

種類	植物
野菜	コマツナ、ホウレンソウ、キャベツ、キュウリ
	カボチャ、スイカ、トマト、オクラ、ピーマン
マメ・穀類	イチゴ、ナス、ダイコン、カブ、タマネギ、ニンジン
	ダイズ、ラッカセイ、ソラマメ、インゲンマメ
果樹	ジャガイモ、サツマイモ、トウモロコシ、イネ
	なつみかん、ハッサク、温州みかん、スタチユズ、キンカン、カキ(富有、サエフジ)、ブドウスモモ、キウイ、ウメ
花卉	ベゴニア、マリーゴールド、ペチュニア、サルビア
	キンセンカ、バーベナ、トレニア、デモルフォセカ
	マツバボタン、スベリヒユ、ヒマワリ、アサガオ
	ハボタン、チューリップ、ナデシコ、バラ その他





## 2) ツユクサの栽培実験

人間発達環境学研究科の D2 の「博士論文研究」の研究（指導教員：丑丸敦史）として、人間発達環境学研究科の施設である実習観察園に設置した温室内で栽培したツユクサを対象にした研究を行った。里山および都市部の水田に生育するツユクサ集団から種子を採取し、発芽させた実生を温室内のポットに植え付け（4-5 月）、結実期（10 月中旬）まで温室内での生長および開花の調査を行った。この研究では研究補助として、国際人間科学部の学生数名の協力があつた。本研究の成果は、2023 年に行われた日本生態学会第 70 回全国大会（オンライン、3 月 17 日）において「在来一年生草本ツユクサの形質進化の検証-多様な都市環境に着目して-」というタイトルで発表した。

利用者：大学院生 1 名、協力学部学生 1 名

## 3) スミレとその変種の栽培実験

人間発達環境学研究科の B4 の「卒業論文研究」の研究（指導教員：丑丸敦史）として、国内で採取したスミレと海岸型変種アナマスミレとアツバスミレの植物体の栽培を温室脇で行い、開花の様子を観察した。一部の個体は野外へ運び送粉者の観察を行った後、また温室脇に戻した。本研究成果は、2023 年に行われた日本生態学会第 70 回全国大会（オンライン、3 月 17 日）において「海浜植物の形態的特徴-スミレとその変種の比較-」というタイトルで発表した。

利用者：学部生 1 名、協力大学院生 1 名

## 4) ハマヒルガオの栽培実験

研究として、伊豆諸島および千葉県・茨城県・静岡県の海岸において採取した地下茎から発芽したハマヒルガオ植物体の栽培を観察園ガラス温室内で行い、成長・開花の様子を観察した。ハマヒルガオの生育は非常に芳しくなく、開花個体は非常に限られた。本研究では研究補助として、学部生 1 名の協力があつた。

利用者：丑丸敦史、協力大学院生 1 名

## 5) アジサイの栽培実験

神戸市立森林植物園との共同研究としてアジサイ 29 種について、挿し木実験を行った。卒業研究の「アジサイの形態とタンデムリピート解析」研究のための DNA 採集ならびに核単離用の植物体をガラス温室内で育成した。

利用者：近江戸伸子、協力学部生 1 名、大学院生 2 名

## 6) ツユクサならびにケツユクサのサンプリング植物体の栽培実験

関西ならびに関東の里山および都市部の水田でサンプリングした温室内で栽培したツユクサならびにケツユクサを対象にした卒業研究の「ツユクサの倍数化による形態の変化」研究を行った。ケツユクサ植物体についてコルヒチン処理実験、気孔サイズ測定実験を行った。

利用者：近江戸伸子、協力学部生 1 名、大学院生 1 名

## ○他機関の利用

以下の2つについて取り組んだ。

- 1) 鶴甲いきいきまちづくりプロジェクト 連続講座 2022「園芸教室」の開催
- 2) 健康あーち HCセンター ヘルスプロモーション・健康行動支援部門

#### 1) 鶴甲いきいきまちづくりプロジェクト 園芸教室の開催

高齢化が進行している地域コミュニティにおいて、多世代が心身ともに健やかで希望に満ちた、安全な暮らしができるまちづくりは急務であり、住民が主体的に、多世代の交流を促進し、その中で課題を見つけ、学び、活動していく生涯学習の実践の場づくりが大事である。地域社会のこのような現状に対し、本研究科がもつ人的・物的・空間的リソースを活用して、どのような支援が可能か検討する、「鶴甲いきいきまちづくりプロジェクト」を立ち上げた。当実習観察園で2014年から開催されてきた園芸教室はその一環の活動である。

80歳代までの多世代が参加し、参加者（春27名、秋27名）がグループに分かれ、それぞれのグループ毎に野菜や花の栽培を楽しんだ(図3, 4)。

春の園芸教室 5月7日（土）、6月11日（土）、7月9日（土）

秋の園芸教室 9月10日（土）、10月8日（土）、11月12日（土）、12月10日（土）



図3 2022年6月11日開催  
野菜づくり



図4 2022年12月10日開催  
玄関前のハボタン花壇の定植

#### 2) 健康あーち HCセンター ヘルスプロモーション・健康行動支援部門

HCセンター、ヘルスプロモーション・健康行動支援部門の活動の一環として、健康あーちに参加している地域の子ども（6名）とその保護者（4名）を中心に、野菜や草花の育て方について学び、種まきや苗の植え付け、収穫体験などを行った。また管理栄養学科の学生（3名）や人間発達環境学研究科の学生（1名）も参加し、子どもや保護者との交流を行いながら、食体験を深めた。大阪青山学院大学の教員（1名）、甲子園大学の教員（1名）、本学教員（1名）が活動の引率を行った。

5月13日 夏野菜を育てる（種まき）

7月22日 夏野菜を育てる（収穫）

12月23日 柑橘の収穫

来年度は地域や学校等の要請等も積極的に受け入れ、授業ならびに研究で、利活用を図る予定である。

（実習観察園運営委員長 近江戸伸子）